高知県香南市発掘調査報告書　第５集

北地遺跡（きたじ）

－北地南線農道整備事業に伴う発掘調査報告書－

2011.3

香南市教育委員会

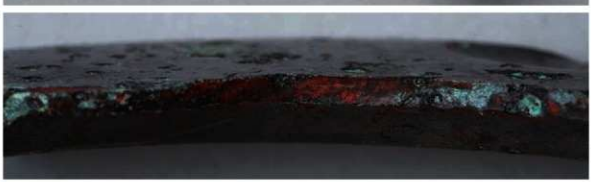
北地遺跡（きたじ）

－北地南線農道整備事業に伴う発掘調査報告書－

2011.3

香南市教育委員会

裏面



断面

表面

赤色顔料の残る破鏡（ST1 出土　青銅鏡）

A区の遺構

弥生時代中期初頭～前半の集落
Ⅱ様式の竪穴住居

序

香南市は、平成18年3月に5町村が合併し5年目をむかえました。それぞれ旧自治体では地域の特性から行政の方策に隔たりが多く、合併後はそれらを解消することに重点をおきながら進めてまいりました。今後の文化財行政におきましては、地域の特徴を持った数多くの文化財を地域づくりに活用できるような政策を講じていければと考えております。

平成21年4月に開設しました香南市文化財センターでは、遺跡の発掘調査や整理作業を行うとともに、市内で発掘した数多くの土器等の遺物や民具を展示し一般に公開しております。また、イベント等を開催し広く市内外の方々に香南市の歴史や文化に触れていただきながら、地域の観光やまちづくりに寄与し、地域になくてはならない施設となることを目標においております。

この文化財センター開設後4冊目となる本書の北地遺跡は、野市町西野の物部川左岸に位置し、周辺は物部川の恵みを受けて古くから農業が盛んに行われてきました。香南市で最も遺跡が集中した地域ですが、近年宅地化が進み、それに伴って記録保存のための発掘調査も多く行われております。

本遺跡は、弥生時代の集落跡や奈良時代から平安時代前半の役所跡であり、中でも弥生時代前期末から中期前半にかけての竪穴住居が確認されたのは、県内でもほとんど例が無く大変貴重な資料であると聞きます。

本書は、香南市の歴史を広く知っていただくとともに、埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただきますことを願って刊行するものです。文化財保護の資料として広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、高知県教育委員会、高知県埋蔵文化財センターをはじめ多数の方々のご協力をいただいたことに心からお礼申し上げます。

平成23年3月

高知県香南市教育委員会
教育長　別役　朋之

例　　言

1．本書は、野市町（現香南市）教育委員会が平成15年度に実施した野市町北地南線農道整備事業に伴う記録保存のための緊急発掘調査報告書である。

2．北地遺跡は、高知県香南市野市町下井551－1番地他に所在する。

3．試掘調査は平成15年４月21日から５月30日にかけて実施し、発掘調査は平成15年７月１日から９月30日にかけて実施した。

4．調査対象面積　1,300 ㎡
　試掘調査面積　100 ㎡
　発掘調査面積　1,000 ㎡

5．試掘調査・発掘調査時（平成15年度）の調査体制は以下のとおりである。
　事務担当　北村　暢敏（野市町教育委員会　生涯学習課　主幹）
　調査員　更谷　大介（㈶野市町開発公社　埋蔵文化財調査員）

6．北地遺跡の整理作業及び報告書作成作業は、平成20年度まで更谷大介（香南市教育委員会生涯学習課 嘱託）と溝渕真紀（同）が担当して、遺物の整理・点検作業を行った。平成21・22年度の報告書作成作業は、松村信博（香南市文化財センター主任調査員）と宮地啓介（香南市文化財センター調査員）が20年度までの成果を引き継ぎ、分担して行った。

7．報告書刊行時（平成22年度）の香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係の体制は以下のとおりである。

課　長	吉田　豊	臨時職員	水田　紀子
係　長	山本　八也	〃	小松　経子
主任調査員	松村　信博	〃	宮本　幸子
主　監	竹中　ちか	〃	齋藤　美幸
調査員	宮地　啓介		

8．本書の執筆分担は、第Ⅰ～Ⅱ章・Ⅲ章第１・２節・Ⅴ章を松村が担当、第Ⅲ章第３節と第４節については、出土遺物についての説明・記述を松村が、遺構についての説明・記述を宮地が担当、編集作業、遺物観察表作成、遺物写真撮影については松村が行った。現場写真は更谷大介による。

　なお、巻頭の青銅鏡（破鏡）写真については、高知県歴史民俗資料館岡本桂典氏より提供していただいた。

9．発掘現場作業員は下記の方々である。精力的に作業に従事された方々に対し、記して敬意を表す。（敬称略）

　佐野宜重・櫃尾俊喜・土居豊・清藤勝秀・河村みさ子・安丸秀美

10．重機による表土剥ぎ、排土運搬、埋め戻しについては（株）共運工業の便宜、助力を得た。

11. 平成21・22年度の報告書作成に関する整理作業については、作業ごとに以下のメンバーで分担して行った。

注記・接合等　水田紀子・小松経子

遺物実測　小松経子・宮本幸子・齋藤美幸・福島賀代子・水田紀子・伊野広高・山本八也・松村信博

トレース　齋藤美幸・小松経子・宮本幸子・宮地啓介・松村信博

遺構の原図作成　宮地啓介

12. 下記の方々には現地での調査、報告書作成過程を通じて貴重なご助言・ご教示をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略・所属は2010年度）

古市晃（神戸大学）・岡本桂典（高知県歴史民俗資料館）・出原恵三・吉成承三・池澤俊幸・久家隆芳・島内洋二（以上高知県埋蔵文化財センター）・浜田恵子（高知市教育委員会）・安井敏夫（高知県越知町立横倉山自然の森博物館）

また、出土した青銅鏡については、自然科学分析及び保存処理を（株）吉田生物研究所に依頼し、報文を頂き、Ⅳ章自然科学分析として本報告書に掲載した。

13. 出土遺物、写真その他図面類の関係資料は香南市文化財センター（香南市香我美町山北1553－1）で保管している。遺跡番号は、03-NKである。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の経緯及び方法
第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　試掘調査 …… 3
第３節　調査区の設定と調査の方法 …… 7

第Ⅱ章　位置と環境
第１節　位置と自然環境 …… 9
第２節　歴史的環境 …… 10

第Ⅲ章　調査の成果
第１節　基本層序 …… 18
第２節　調査区の概要と遺構配置 …… 23
第３節　弥生時代の遺構と遺物 …… 31
第４節　古代以降の遺構と遺物 …… 117
遺物観察表 …… 133

第Ⅳ章　自然科学分析
野市町北地遺跡出土金属製品の成分分析結果　（株）吉田生物研究所 …… 163

第Ⅴ章　まとめ　－北地遺跡　集落の変遷－ …… 165

図　版　目　次

第１図　高知県の行政区画と北地遺跡の位置 …… 1
第２図　北地南線農道整備工事対象地位置図（S=1/5,000） …… 2
第３図　試掘TR1 推積状況（S=1/50） …… 3
第４図　農道予定地と試掘トレンチ位置図 …… 4
第５図　調査区とグリッドの設定及び公共座標 …… 8
第６図　北地遺跡周辺の地形（旧野市町域・深淵北遺跡報告書より） …… 9
第７図　北地遺跡と高知平野東半の遺跡（S=1/50,000） …… 13
第８図　北地遺跡周辺の地形と遺跡 …… 15
第９図　北地遺跡セクション図１（S=1/60） …… 19

第10図　北地遺跡セクション図２（S=1/60）…… 21
第11図　北地遺跡セクション図３（S=1/60）…… 22
第12図　北地遺跡調査区遺構全体図（S=1/400）…… 23
第13図　Ａ区遺構配置図（S=1/200）…… 25
第14図　Ｂ区遺構配置図（S=1/200）…… 26
第15図　Ｃ区南遺構配置図（S=1/200）…… 27
第16図　Ｃ区中央遺構配置図（S=1/200）…… 28
第17図　Ｃ区北遺構配置図（S=1/200）…… 29
第18図　Ｄ区遺構配置図（S=1/200）…… 30
第19図　弥生時代の主な遺構（ST・SK・SD・P）…… 31
第20図　ST1 平面･セクション図（S=1/40）出土遺物１ 弥生土器（S=1/4）青銅鏡（S=1/2）…… 33
第21図　ST1 出土遺物２ 弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/4･1/2）…… 34
第22図　ST2 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/2）…… 35
第23図　ST3 平面･エレベーション図（S=1/40）…… 36
第24図　ST3 出土遺物 弥生土器（S=1/4）…… 37
第25図　ST4 及び周辺遺構平面図（S=1/60）出土遺物１ 弥生土器（S=1/4）…… 38
第26図　ST4 出土遺物２ 石器類（S=1/3･2/3）…… 39
第27図　ST5 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/2･2/3）　40
第28図　ST6 平面･エレベーション図（S=1/60）…… 41
第29図　ST6 出土遺物１ 弥生土器（S=1/4）…… 42
第30図　ST6 出土遺物２ 石器類（S=1/2･1/3）…… 43
第31図　ST7 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物１ 弥生土器（S=1/4）…… 45
第32図　ST7 出土遺物２ 弥生土器（S=1/4）…… 46
第33図　ST7 出土遺物３ 弥生土器（S=1/4）…… 47
第34図　ST7 出土遺物４ 弥生土器（S=1/4）…… 48
第35図　ST7 出土遺物５ 弥生土器（S=1/4）…… 49
第36図　ST7 出土遺物６ 弥生土器（S=1/4）…… 50
第37図　ST7 出土遺物７ 弥生土器（S=1/4）…… 51
第38図　ST7 出土遺物８ 弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/2･1/4）…… 52
第39図　ST8 平面･エレベーション図（S=1/60）出土遺物 弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/3）…… 54
第40図　ST9 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4）…… 55
第41図　ST10 平面･エレベーション図（S=1/60）出土遺物 弥生土器（S=1/4）…… 56
第42図　ST10 出土遺物　石器類（S=1/2･1/3）…… 57
第43図　ST11 平面･エレベーション図（S=1/60）…… 58
第44図　ST11 出土遺物 弥生土器･土師器（S=1/4）…… 59
第45図　ST11 出土遺物 石器類（S=2/3）…… 60
第46図　SK2･3 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 石器類（S=1/2･1/3）…… 62
第47図　SK4･SX1 平面･エレベーション図（S=1/40）SK4出土遺物 弥生土器（S=1/4）…… 63
第48図　SK5～7 平面･エレベーション図（S=1/40）…… 63
第49図　SK8～10 平面･エレベーション図（S=1/40）SK8 出土遺物 弥生土器（S=1/4）…… 64

第50図　SK11 平面･エレベーション図 遺物出土状況（1/20）完掘（S=1/40）及び出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 66
第51図　SK15～22 平面･エレベーション図（S=1/40）SK19出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 67
第52図　SK23･24 平面･エレベーション図（S=1/40） …… 68
第53図　SK25 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 69
第54図　SK26～33 平面･エレベーション図（S=1/40） …… 70
第55図　SK35及び周辺遺構 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 71
第56図　SK37 平面･エレベーション図（S=1/40） …… 72
第57図　SK38 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 石器類（S=1/2） …… 72
第58図　SK39･40 平面･エレベーション図（S=1/40） …… 72
第59図　SK41 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 石器類（S=1/2） …… 73
第60図　SK43･44及び周辺遺構 平面･エレベーション図（S=1/40） …… 73
第61図　SK45 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 石器類（S=1/4） …… 74
第62図　SK46～49 平面･エレベーション図（S=1/40） …… 75
第63図　SK50 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 76
第64図　SK51～58 平面･エレベーション図（S=1/40） …… 78
第65図　SK61 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 78
第66図　SK68 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 79
第67図　SK62･63･65･66･67･69 平面･エレベーション図（S=1/40） …… 80
第68図　SK70 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物1 弥生土器（S=1/4） …… 82
第69図　SK70 出土遺物2 石器類（S=1/3） …… 83
第70図　SK71･72･73A･73B･74･77 平面･エレベーション図（S=1/40） …… 83
第71図　SK75 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 石器類（S=1/2） …… 84
第72図　SK78 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 石器類（S=1/3） …… 84
第73図　SK81 平面･エレベーション図（S=1/40） …… 85
第74図　SK82 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 85
第75図　SK83～87 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 87
第76図　グリッドN-3　土器8～10出土地点 平面・エレベーション図（S=1/40） …… 88
第77図　土器棺墓（土器9・10）出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 89
第78図　SD3･SD3-2（石列）平面･セクション図（S=1/40） …… 90
第79図　SD3-2（石列）及び上層包含層出土遺物1 弥生土器（S=1/4）石器類（S=2/3･1/3） …… 91
第80図　SD3-2（石列）及び上層包含層出土遺物2 石器類（S=1/4･1/3） …… 92
第81図　SD58･59 平面･エレベーション図（S=1/40） …… 94
第82図　SD59 出土遺物 磨製石斧未製品（S=1/3） …… 94
第83図　ピット出土遺物1 弥生土器（S=1/4・1/2） …… 96
第84図　ピット出土遺物2 弥生土器（S=1/4） …… 97
第85図　P429 遺物出土状況 平面･エレベーション図（S=1/20）出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 98
第86図　ピット出土遺物3 石器類（S=1/3・1/2） …… 98
第87図　遺構配置図（SX1～11）及びSX2～4 平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物 弥生土器（S=1/4） …… 107

第88図　土器集中地点（土器５～７）出土遺物 弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/3） 108
第89図　古代以降の溝から出土した弥生時代の遺物 弥生土器（S=1/4・1/2）石器類（S=1/3·1/4） 110
第90図　包含層出土遺物－弥生時代－1 弥生土器（S=1/4） 111
第91図　包含層出土遺物－弥生時代－2 磨製石鏃（S=2/3） 112
第92図　包含層出土遺物－弥生時代－3 石包丁（S=1/2） 113
第93図　包含層出土遺物－弥生時代－4 磨製石斧基部（S=1/3） 114
第94図　包含層出土遺物－弥生時代－5 スクレイパー類（S=1/2） 115
第95図　包含層出土遺物－弥生時代－6 敲石・磨製石斧未製品（S=1/3） 116
第96図　古代以降の主な遺構及び遺物出土地点位置図 117
第97図　SB1 平面·エレベーション図（S=1/80） 118
第98図　SB2 平面·エレベーション図（S=1/80）出土遺物 土師器·須恵器·軽石（S=1/3） 118
第99図　SB3 平面·エレベーション図（S=1/80）出土遺物 土師器·須恵器（S=1/3） 119
第100図　SB4 平面·エレベーション図（S=1/80）出土遺物 須恵器（S=1/3）弥生土器（S=1/4） 120
第101図　SB5 平面·エレベーション図（S=1/80） 121
第102図　SK42 平面·エレベーション図（S=1/40）出土遺物 白磁（S=1/3） 121
第103図　SK76 平面·エレベーション図（S=1/40）出土遺物 土師器（S=1/3）弥生土器（S=1/4） 122
第104図　SK100·101 平面·エレベーション図（S=1/40） 122
第105図　SK100 出土遺物 砥石（S=1/3） 122
第106図　SD溝・溝状遺構配置図（弥生時代の遺構も含） 124
第107図　遺構（SD·P）出土遺物－古代以降－土師器·須恵器·白磁·瓦質土器（S=1/3） 131
第108図　包含層出土遺物－古代以降－土師器・須恵器（S=1/3） 132
第109図　物部川下流左岸段丘上の遺跡 166
第110図　磨製石斧未製品 167
第111図　祭祀に用いられたと考えられる陰陽石 168
第112図　弥生時代の主な遺構の時期ごとの地点分布 169
第113図　高知県出土の弥生時代の鏡 171
第114図　墨書実測図 173
第115図　墨書赤外線写真と墨書須恵器底面画像 174
第116図　北地遺跡周辺の弥生時代集落居住域（推定）の変遷 178

表　目　次

表１　北地遺跡と高知平野東半・物部川下流域の遺跡 12
表２　ピット計測表 99
表３　ピット出土遺物 104
表４　溝及び溝状遺構（SD）出土遺物 105
表５　遺物観察表（土器）１～19 135
表６　遺物観察表（石器）１～７ 154

写真図版目次

巻頭図版１　　赤色顔料の残る破鏡（ST1 出土　青銅鏡）
巻頭図版２　　弥生時代中期初頭～前半の集落　Ⅱ様式の竪穴住居

図版１　北地遺跡全景（上空から）
図版２　調査前の景観と調査風景
図版３　試掘調査で検出された遺構とＣ区北端の状況
図版４　Ｃ区北半の遺構とSK2
図版５　Ｄ区 SK11の調査
図版６　Ｄ区の景観 遺構完掘状況
図版７　ST1とＣ区北半の遺構
図版８　ST1 遺物出土状況と床面遺構
図版９　Ｃ区 遺構完掘状況と周辺の景観

図版10　Ｃ区 遺構完掘状況（SD23・SD-H・ SB4）
図版11　Ｃ区 弥生土器出土状況
図版12　Ｂ区の土坑（SK50とSK70）
図版13　Ａ区 西端の調査
図版14　Ａ区 西端遺構完掘（ST9･11）
図版15　Ａ区 ST10
図版16　Ｂ区 遺構完掘状況
図版17　Ｂ区と周辺の景観
図版18　Ｃ区 竪穴住居完掘（ST2･3･8）
図版19　Ｃ区 竪穴住居（ST7）
図版20　Ｃ区の遺構
図版21　ST1･2 出土遺物
図版22　ST3･4 出土遺物
図版23　ST5･6 出土遺物
図版24　ST7 出土遺物（1）
図版25　ST7 出土遺物（2）
図版26　ST7 出土遺物（3）
図版27　ST7 出土遺物（4）
図版28　ST7 出土遺物（5）
図版29　ST7 出土遺物（6）
図版30　ST7 出土遺物（7）
図版31　ST8･9 出土遺物
図版32　ST10･11 出土遺物
図版33　ST11 出土遺物

図版34　SK4･8･11･19･25･35 出土遺物
図版35　SK50･68･70 出土遺物
図版36　SK3･70･78･82･85･87 出土遺物
図版37　土器９･10（土器棺）
図版38　SD3･SD3-2（検出された石列）及び上面包含層　P149･174
図版39　遺構出土遺物（ピット出土遺物）
図版40　遺構出土遺物（ピット出土遺物）
図版41　包含層出土遺物（弥生土器）
図版42　包含層出土遺物（石器類）
図版43　墨書土器（447･457）
図版44　古代～中世　出土遺物

第Ⅰ章　調査の経緯及び方法

第１節　調査の経緯

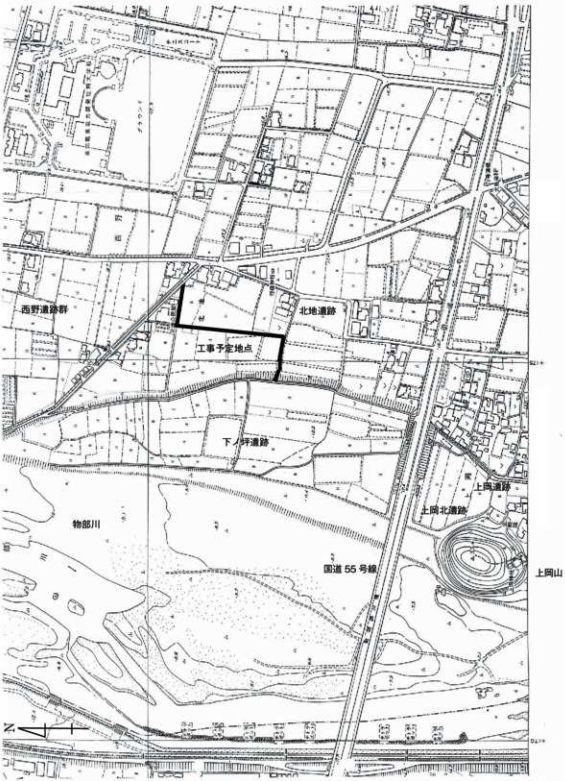
本調査は高知県香美郡野市町（現香南市野市町）北地南線農道整備事業に伴う記録保存のための緊急発掘調査である。

平成 15 年度に、野市町下井 551 － 1 番地他に所在する北地遺跡包蔵地内で、北地南線農道整備事業が計画された。事前に事業区域内の埋蔵文化財の有無を確認し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、野市町（現香南市）教育委員会が主体となって試掘確認調査を行う。調査は平成 15 年 4 月 21 日から実施、調査に際しては、高知県教育委員会文化財課と財高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得た。

12 ヶ所の試掘トレンチを設定、調査の結果、弥生時代及び古代（奈良・平安時代）の遺構・遺物を検出した。工事施工予定地全域に埋蔵文化財が遺存しており、工事施工による遺跡への影響が考えられるため、事前の発掘調査による記録保存を行うこととなった。

試掘調査期間は平成 15 年 4 月 21 日から 5 月 30 日にかけてであり、調査面積は約 100㎡である。試掘調査の結果を受けて本発掘調査の範囲を確定、平成 15 年 7 月 1 日から 9 月 30 日にかけて、工事対象面積約 1,300㎡のうち、約 1,000㎡について本発掘調査を実施した。

第１図　高知県の行政区画と北地遺跡の位置

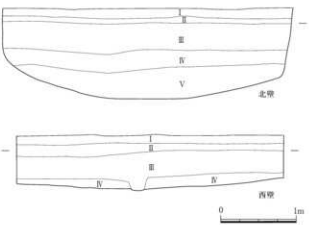


第２図　北地南線農道整備工事対象地位置図（S=1/5,000）

第２節　試掘調査

調査対象地内に 12 箇所の試掘トレンチを設定、調査区の北側 TR1 から TR5 まで調査した後、南側の TR6 ～ 8 から南北方向の農道予定地を南から北に向かって（TR9 ～ 12）順次確認調査を進めていった。設定したトレンチの位置は第４図のとおりである。基本層序は第３図に示したとおりであり、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が灰茶色シルト質土、Ⅲ層が黒褐色シルト質土、Ⅳ層が茶黒褐色シルト質土、Ⅴ層が明黄色シルト質土、Ⅵ層が明黄色シルト質土に１cm ～人頭大の礫を含む層となっており、一部削平されているものの、調査対象地全域が同様の堆積状況を示している。

なお、試掘調査の時点で出土した遺物の中で、図示可能な遺物については、本報告第Ⅲ章遺構と遺物の項でまとめて記述することとし、ここでは試掘トレンチの位置と基本層序、出土遺物などの概要のみを報告する。



第３図　試掘 TR1 堆積状況（S ＝ 1/50）

DL=17.0m

試掘トレンチの概要

TR1

調査区の北側、東西線の東端に位置する。

トレンチ南側にピットを検出したが遺物は認められない。弥生土器と土師器の小片がⅠ層から 10 点、Ⅱ層から 34 点出土、須恵器は合計６点確認され、小片だが赤彩土師器が出土している。近世以降の磁器も２点出土している。

TR2

調査区の北側、東西線の TR1 西側に位置する。

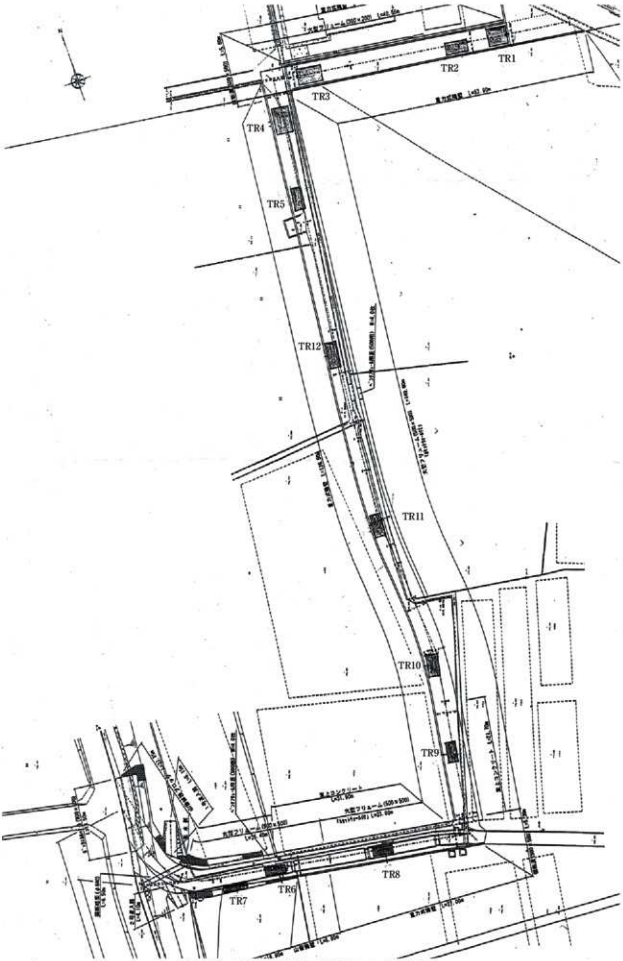
遺構は、柱穴と溝状の遺構が確認でき、柱穴の底より土師器高坏が出土した。Ⅱ・Ⅲ層から弥生・土師器小片 60 点、土師器 11 点、須恵器３点など古代の遺物も一定量含んでいる。赤彩土師器と製塩土器小破片２点も確認された。製塩土器と把握可能な土器片は、今回の調査においてこのトレンチ以外には確認できていない。緑色岩の磨製石斧基部も１点出土している。

遺構として P96、弥生土器細片６点が出土。詳細な時期の特定はできない。

TR3

調査区の北側、東西線の西端に位置する。

遺構は、柱穴と溝状の遺構が確認でき、土坑には切り合い関係が認められる。土坑内から弥生土器（田村式・第Ⅱ様式）が出土している。表土～Ⅲ層にかけて弥生・土師器小片が 45 点、土師器２点、



第４図　農道予定地と試掘トレンチ位置図

須恵器5点出土している。円盤状高台と輪高台の資料が確認されている。

遺構としてSK12から土器片20点、SK14上から土器小片1点が出土、これらの遺構は古代の掘立柱建物を構成する柱穴である。

TR4

調査区南北線の北端に位置する。

遺構は石列状遺構や土坑・溝が確認でき、壺棺・甕棺も出土している。石列状の遺構内には、弥生前期末～中期初頭に位置付けることができる土器が認められる。また、石列状遺構の南側には磨製石斧や弥生土器が出土している。

壺棺・甕棺は弥生時代後期後半で、壺棺内には高坏が認められる。Ⅲ層より弥生土器を中心とする土器片が約300点出土している。土師器も混在する。土師器と特定できるもの10点、須恵器5点など古代の遺物も確認されるものの、量は少ない。備前擂鉢も1点出土している。

TR5

調査区、南北線のTR4南側に位置する。

遺構は竪穴住居跡（ST1）を検出している。Ⅲ層（黒褐色シルト質土）からは、弥生土器や土師器の細片約40点が出土した。

TR6

調査区の南側、東西線の西端に位置する。Ⅴ層より上にあたる層は後世に削平されており、遺構・遺物とも確認できなかった。

TR7

調査区の南側、東西線のTR6南側に位置する。

柱穴跡だと思われる遺構を検出した。Ⅲ層（黒褐色シルト質土）からは、弥生土器や土師器の細片が出土、弥生土器の底部が1点確認されている。

TR8

調査区の南側、東西線のTR6東側に位置する。

Ⅱ層までは埋め立て土となっているが、Ⅲ層（黒褐色シルト質土）以下の層は残存している。Ⅲ層からは、弥生土器や土師器の細片が出土した。

TR9

調査区、南北線の南端に位置する。

性格不明遺構を検出した。Ⅲ層（黒褐色シルト質土）からは、土器小片23点、磁器・陶器2点が出土した。

TR10

調査区、南北線のTR9北側に位置する。

遺構は、溝・性格不明遺構を検出した。溝にサブトレンチを入れて断面の調査を行い、溝底部より石包丁が出土した。弥生土器・土師器小片が約60点出土している。

TR11

調査区、南北線のTR10北側に位置する。

遺構検出面まで掘削し、精査は本発掘調査で行う。Ⅲ層（黒褐色シルト質土）から弥生土器・土師器約70点が出土、弥生前期末、中期の貼付口縁、円盤状高台（糸切底）など異なる時期の資料

が混在する。

TR12

調査区、南北線の TR11 北側に位置する。

遺構検出面まで掘削し、精査は本発掘調査で行う。Ⅲ層（黒褐色シルト質土）からは、弥生土器や土師器の細片が出土した。

試掘調査のまとめ

試掘調査の結果、農道が整備されるほぼすべての範囲に遺構・遺物を確認することができた。

検出された土器の時期は大きく分けて「弥生時代前期末～中期前半」・「弥生時代後期前半～中葉」・「奈良時代～平安時代のはじめ」の３つの時期である。TR4 で検出された弥生前期末～中期初頭の石列状遺構、同トレンチで確認された弥生時代後期前半～中葉の壺棺・甕棺、TR2 で確認された奈良時代の土師器（高坏）が出土した柱穴など、各時期の遺構が確認されている。

本遺跡は、平成６・７・８年度に発掘調査を行った下ノ坪遺跡の東に隣接した自然堤防上に立地しており、二つの遺跡間には深い関係があると考えられる。

下ノ坪遺跡は弥生時代後期前半に盛行している。しかし、弥生時代後期３期を待たずに突然消滅する。これは弥生時代の拠点的集落田村遺跡と同様の現象である。

下ノ坪遺跡の遺物包含層や竪穴住居の埋土には、砂礫・砂・シルトなどの堆積がみられ、田村遺跡でも同様の状況が確認されている。このことは、後期Ⅱの段階で、物部川水系で大規模な洪水が発生したことを示している。これ以降、下ノ坪遺跡は廃絶し、その後古墳時代まで空白となっている。弥生時代前期末ごろは、自然堤防上の本遺跡付近に集落を形成していたと考えられる。その後、弥生時代後期初頭から後期Ⅱ期までの間、下ノ坪遺跡付近で集落を営んでいたと思われ、洪水（氾濫）が起こった時、下ノ坪遺跡の集落は廃絶、人々は一段高い場所に避難し、集落を営んだと考えることができる。

（以上、更谷大介氏のまとめより）

第３節　調査区の設定と調査の方法

調査対象地全域にＡ～Ｄ区の４調査区を設定した。これらの４つの調査区は工事対象区域の農道の形に即して設定した便宜的なものである。農道は東西方向に走る部分と、南北方向に走る部分があり、それぞれ東西線・南北線と仮称する。東西線は北側と南側に分かれており、南北線は一時退避所の設置により広がった部分を境に南北に分けることができる。調査区の呼称は南から北に向かって順番にＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区と設定、南側の東西線がＡ区、南側の南北線がＢ区、北側の南北線がＣ区、北側の東西線がＤ区にあたる。（第５図）

調査に際しては、農道の方向に合わせて任意の座標軸を決め、４ｍグリッドを設定して調査を進めた。設定したグリッドは、北西端の測量杭を用いて、その杭番号を４ｍグリッドの呼称とする。杭番号は東西方向をアルファベットで、南北方向をアラビア数字で示す。東西方向は、東から西に向かってＺ・Ｙ・Ｘ・・・とＺからアルファベットの逆順にグリッドを設定、西端グリッド（Ａ区）はＨとなる。また、南北方向は、北から南に向かって１から38までのグリッドを設定し、調査地点の位置関係を示す。調査対象地全体の北東端がＺ-１、南西端がＨ-38である。

測量杭の設定　　北→南　１～38　　東→西　Ｚ～Ｈ

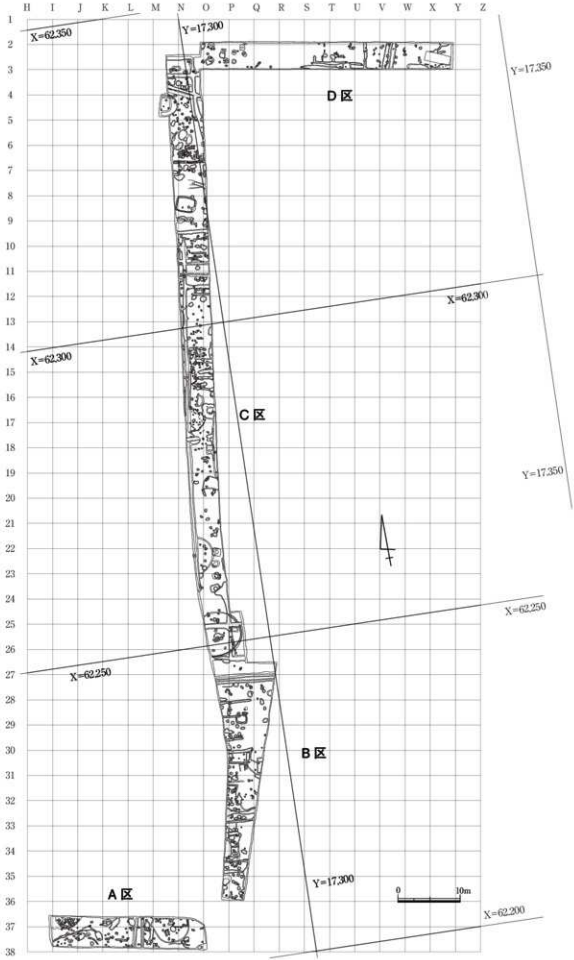
調査区の範囲

Ａ区　西（Ｈ）→東（Ｎ）、北（36）→南（38）の範囲。幅約５ｍ、総延長約24ｍ。調査面積は約120㎡。
Ｂ区　北（26）→南（36）、西（Ｏ）→東（Ｑ）の範囲。北端幅約10ｍ、南端幅3.8ｍ、総延長約38ｍ。調査面積は約260㎡。
Ｃ区　北（２）→南（26）、西（Ｍ）→東（Ｐ）の範囲。幅約4.1～5.1ｍ、総延長約100ｍ、南端拡張部のみ幅約６ｍ（長さ８ｍ）。調査面積は約460㎡。
Ｄ区　西（Ｏ）→東（Ｙ）、北（１）→南（２）の範囲。幅約4.1～4.2ｍ、総延長約40ｍ。調査面積は約160㎡。

各調査区の調査面積合計は約1,000㎡となる。

調査の手順としては、耕作土、包含層直上まで重機を用いて堆積土を除去した後、包含層掘削、遺構検出、遺構埋土掘削を手作業で進めた。平面実測及び土層断面図については、縮尺20分の１を基本とし、状況に応じて10分の１等、他の縮尺を用いて実測を行った。

第５図に示す公共座標は世界測地系に即した座標である。グリッドの座標軸は、公共座標の座標軸から約10度東に傾いている。



第５図　調査区とグリッドの設定及び公共座標

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　位置と自然環境

北地遺跡は、高知県香南市野市町下井 551 － 1 番地他に所在する。物部川の段丘面上面に立地し、物部川に接する下段には下ノ坪遺跡と上岡北遺跡、上岡遺跡が、同じ段丘面の北隣には西野遺跡群が、さらに北側には深渕遺跡があるなど、周辺一帯の物部川段丘面に遺跡が分布している。

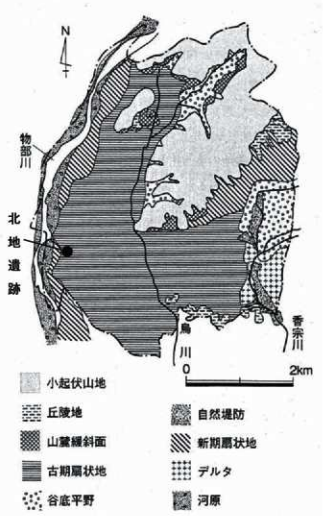
昭和 40 年代から一帯に遺物が散布することが知られており、遺跡の南端を走る南国バイパス建設の際にはまとまった土器の出土が報告されている。[1] 土器の採取できる地点を中心に、南北約 350 m、東西約 400 m、約 9 ヘクタールの範囲が「北地遺跡」として埋蔵文化財包蔵地として指定されている。

近年の開発に伴って、北地遺跡の東側一帯も何箇所か試掘調査が行われているが、東側には今のところ、遺跡は確認されていない。

行政区画的には、高知平野東端の香南市[2]に属している。野市台地の東端に当たり、物部川段丘上にあたる。段丘の下段また、遺跡の南から三宝山にかけて、仏像構造線が走っている。遺跡周辺の地質構造帯は四万十帯北帯であり、砂岩や泥岩を中心にした岩石層を示すが、北側になる秩父帯南帯のチャートや石灰岩、物部川上流域の三波川帯の緑色岩類も河川の作用により運ばれてきている。[3] 出土する石器には用途に応じた多様な石材が認められる。

北地遺跡の南西には、このエリアのランドマークだったと考えられる「上岡山」がある。物部川対岸の旧三島村（現南国市久枝）には、高知空港の滑走路になる際、取り除かれて現在はなくなった通称「命山」という標高 28 m の小丘陵（室岡山）があった。[4]

物部川は土佐３大河川の一つであり、総延長 71km、流域面積 468 平方キロメートル、高知平野の東半分、通称香長平野をつくった河川である。遺跡は現河口まで約 2 km の地点の左岸にあり、物部川



第６図　北地遺跡周辺の地形（旧野市町域・深渕北遺跡報告書より）

の下流域 にあたる。現在は国道55号線と旧国道55号線である県道364号線が遺跡をはさんで東西方向に走っている。南1kmの場所に赤岡町と南国市を結ぶ旧街道である「下街道（しもがいどう）」が主要交通路として機能しており、物部川左岸の渡し場付近には宿もあり、昭和初期までは、にぎわっていたようだ。[3]

(1) 「下井南国バイパス」「下井ラノ丸」「西野ルノ丸」など出土した土器は、現在、野市図書館地下倉庫に保管されている。
廣田典夫『原始編　第二章　弥生時代　第一節』『野市町史　上巻』平成4年　野市町史編纂委員会
(2) 香南市は平成18年3月、赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村が合併して誕生した。2010年7月現在、面積126.49km²、人口約34,000人。
(3) 『四国地方－日本の地質8』共立出版　1991年
(4) 『高知県の地名』平凡社　1983年
(5) 『香南市文化財めぐり　吉川町を歴史探訪』香南市教育委員会　2009年
谷合卓氏（香南市文化財保護審議委員）の御教示による。

第2節　歴史的環境

－香南市域　物部川下流域から香宗川下流域にかけての遺跡－

物部川下流域の左岸（香南市側）では、川沿いの河岸段丘上に遺跡が集まっている。特に北地遺跡周辺には弥生時代前期末から近世にかけての遺跡が集中している。弥生時代に集落が拡大、弥生時代から古墳時代にかけて、この周辺で発掘調査により調査された竪穴住居は96棟にのぼる（2010年4月現在）。それ以降においても、奈良～平安前期の官衙関連遺跡である深渕遺跡・下ノ坪遺跡、近世の石積み堤防が確認された上岡北遺跡など注目される遺跡が多い。

旧石器～縄文時代

深渕遺跡で縄文晩期の土器片が出土しているものの、縄文時代以前の遺跡は少ない。複数の集落が確認されはじめるのは、今から約2,400年前、弥生時代前期末になってからである。香南市全体を見渡しても、現段階で縄文時代の遺跡は4遺跡で、遺構が確認されたのは晩期の十万遺跡のみである。[1] また、香南市内から旧石器は確認されていない。香南市に隣接する南国市や香美市では国分川水系を中心に奥谷南遺跡、高間ヶ原遺跡、新改西谷遺跡など旧石器時代遺跡の存在が知られている。[2] 香南市に続く物部川水系にも佐野楠目山遺跡など、新たに確認される旧石器時代の遺跡も現れはじめた。[3]

弥生時代

前期前半西見当Ⅰ式段階の土器と遺構が検出された徳王子大崎遺跡は注目される。[4] 香南市域で、はじめて確認された弥生時代前期前半にさかのぼる集落遺跡である。香南市域でも高知平野の他地域同様、前期末～中期初頭と後期後半～古墳時代初頭の2時期に遺跡数の増加が認められる。また、同時に直後の時期の遺跡数減小も顕著である。

・前期末～中期初頭

市内全域で集落が確認され始める時期である。土器が出土したのは、当遺跡に近接した上岡遺跡[5]、下ノ坪遺跡[6]、西野遺跡群[7]、香宗川流域の下分遠崎遺跡[8]、十万遺跡、拝原遺跡[9]などであり、物部川対岸の弥生時代を通じて機能した拠点的集落田村遺跡群からの分村でできた集落だといわれている。香南市内の弥生遺跡は、同時期の田村遺跡群との関連を抜きにしては語れない。[10]

・中期前半～中葉

北地遺跡、下分遠崎遺跡、十万遺跡などいくつかの集落は、前期末から集落が継続する。下分遠崎遺跡からは、大量の土器とともに木製品や種子、獣骨・魚骨など大量の自然遺物が出土している。当時の生活復元のための大きな手がかりを提供した。この時期は、田村遺跡群でも遺構がきわめて少なくなる時期で、遺構、特に竪穴住居はほとんど見つかっていない。

・中期後半

香南市域で、この時期明確にまとまった遺物が出土したといえる遺跡は現段階では確認できていない。これに対して、田村遺跡群は集落が拡大していく時期にあたり、土器の出土量も増加してくる。

・中期末～後期初頭にかけて

仏像構造線周辺の山麓部に形成された高地性集落（本村遺跡[11]、笹ヶ峰、鬼ヶ岩屋、龍河洞など）が確認されている。後期初頭になると下ノ坪遺跡など平野部にも新たに集落が形成される。

本村遺跡では竪穴住居７棟や段状遺構など、当地域において中期末から後期の初めにかけての短期間機能した丘陵上のムラの様子が明らかになった。瀬戸内の影響が強い凹線土器の割合が高く、ガラス製の勾玉も出土している。

・後期前半～中葉

下ノ坪遺跡が盛行し、集落は周辺へと広がっていく。田村遺跡群の集落最盛期とも重なる。このころになると鉄器の普及も進み、遺跡からの出土量も増加する。青銅器の受容も特徴的で、西野遺跡群出土の銅矛の再加工品、時期は異なるが兎田八幡宮伝世の絵画銅剣（中期中葉）など、遺跡周辺には特異な青銅器が存在する。銘々器である小型鉢が増加する後期中葉（Ⅴ－４期）の標識遺跡である深渕遺跡[12]や下ノ坪遺跡には、直径７～８ｍ大の大型住居が出現する。ガラス玉など威信財も出土しており、他の住居との明確な違いが認められる。

・庄内期（弥生時代終末～古墳時代初頭）

弥生時代終末から古墳時代にかけて、集落が増加し、他地域からの土器の持ち込みが目立つようになる。鉄器の普及はさらに加速し、土器のタタキ目顕在化が顕著となる。庄内式土器はじめ各地の搬入土器が、江見遺跡、兎田柳ヶ本遺跡、西野遺跡群、東野土居遺跡など、当該期の遺跡から出土している。大半は集落遺跡だが、兎田柳ヶ本遺跡からは平野部に形成された周溝を持つ墓域が検出されている。[13]

古墳時代

香我美町拝原遺跡から４世紀の住居跡が確認されているが、４世紀から６世紀前半にかけての集落は、このエリア（物部川下流域左岸川沿い段丘上）では見つかっていない。６世紀の後半になって、深渕遺跡や下ノ坪遺跡では竈を持つ竪穴住居が出現する。

香南市域でみつかった古墳の大半は後期古墳だが、市内で最古の古墳である徳王子天皇古墳は５世紀代の中期古墳だとされる。周辺では大崎山古墳、大谷古墳、溝渕山１号（竹ノ内）古墳などの

例がある。6世紀後半代の古墳であり、周辺で集落が確認されはじめる時期とも連動している。（深渕遺跡・下ノ坪遺跡・西野遺跡群・東野土居遺跡）

7世紀末～8世紀初めの須恵器窯・徳王子窯跡が知られている。この地域には礎石の存在を根拠に、古代寺院の存在の可能性が追求されてきたが、近年の発掘調査で、8世紀初めの瓦頭が出土（東野土居遺跡）、古代寺院があった可能性が高まっている。[34]

古代（奈良～平安前期）

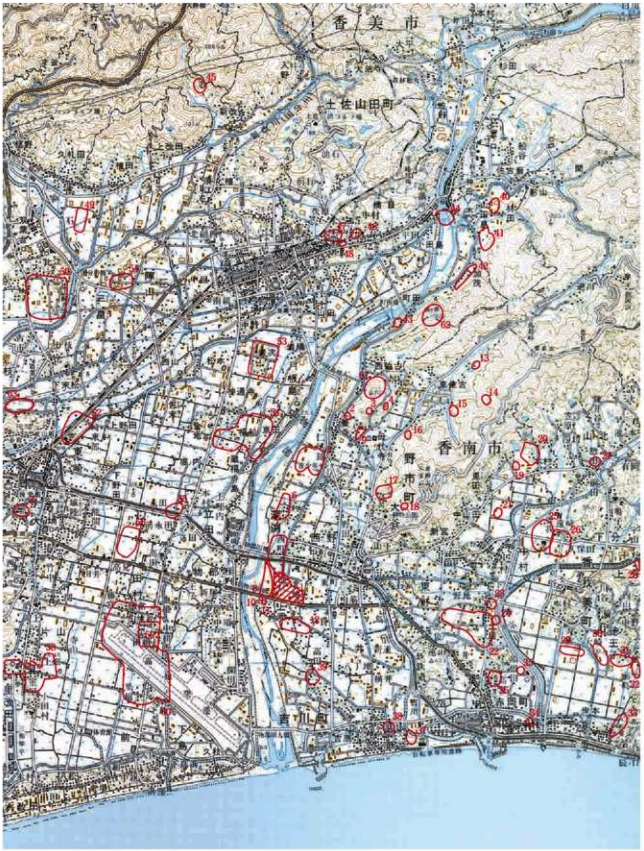
8世紀には、下ノ坪遺跡や深渕遺跡など官衙的な性格を持つ遺跡の存在が知られるようになってくる。香南市域においても、8世紀から9世紀にかけて香宗川流域の曽我遺跡や十万遺跡など官衙関連遺跡（郷家だと想定されている）が確認されるようになる。深渕遺跡からは二彩陶器や緑釉陶器、曽我遺跡からは近江産や洛北産を中心に総数45点以上の緑釉陶器が出土している。曽我遺跡は高知県で最も多くの緑釉陶器を出土した遺跡である。[35]

古代の役人の存在を直接想起できる革帯装飾具が出土した遺跡だけでも、深渕遺跡（銅製蛇尾）、下ノ坪遺跡（石製丸鞆）、十万遺跡（石製丸鞆）、東野土居遺跡（石製丸鞆・2009年の試掘調査時に出土）と4遺跡にのぼる。石製丸鞆が確認されたのは、県内では物部川と香宗川に挟まれたこの地域だけである。

これらの郡衙や郷家に関すると考えられる遺跡群の中でも、特に注目されるのは、下ノ坪遺跡で

表1　北地遺跡と高知平野東半・物部川下流域の遺跡

番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代
1	北地遺跡	弥生～古代	22	東野土居遺跡	古墳～近世	43	町田堰東遺跡	縄文～中世
2	父養寺古墳	古墳	23	香宗城跡	中世	44	山田堰	近世～
3	日吉山古墳群	古墳	24	宝鏡寺跡	中世	45	新改西谷遺跡	旧石器・古代・中世
4	亀山窯跡	古代	25	曽我遺跡	弥生～中世	46	ひびのき遺跡	弥生・古墳
5	深渕北遺跡	弥生・古代・中世	26	下分遠崎遺跡	弥生	47	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世
6	深渕遺跡	縄文～中世	27	岡ノ芝遺跡	古墳～中世	48	伏原大塚古墳	古墳～中世
7	西野遺跡群	弥生～古代	28	十万遺跡	縄文～中世	49	白猪田遺跡	古墳・古代
8	下ノ坪遺跡	弥生～古代	29	花宴遺跡	弥生～古墳	50	土佐国府跡	弥生～中世
9	母代寺土居屋敷遺跡	弥生・古代・中世	30	徳王子大崎遺跡	弥生・古墳・中世	51	三畠遺跡	弥生～古代
10	上岡北遺跡	弥生・近世	31	徳王子広本遺跡	弥生～中世	52	東崎遺跡	弥生～中世
11	上岡遺跡	弥生・古代	32	徳王子前島遺跡	弥生～中世	53	大領遺跡	古墳～中世
12	高田遺跡	平安	33	クノ丸遺跡	弥生～近世	54	岩村遺跡群	弥生～中世
13	小山谷古墳	古墳	34	江見遺跡	古墳	55	寺ノ前遺跡	弥生～中世
14	鬼ヶ岩屋洞穴遺跡	弥生	35	大東遺跡	古墳～近現代	56	修理田遺跡	弥生～古代
15	アゴデン白岩窯跡	古代・中世	36	須留田城跡	中世	57	大篠小学校校庭遺跡	弥生
16	竹ノ内山古墳	古墳	37	住吉砂丘遺跡	弥生	58	里改田遺跡	弥生～中世
17	大谷城跡	中世	38	南中曽遺跡	弥生・古墳	59	田村城跡	中世
18	大谷古墳	古墳	39	野口遺跡	弥生～中世	60	田村遺跡群	縄文～近現代
19	大崎山古墳	古墳	40	林田シタノヂ遺跡	縄文～中世	61	前ノ山城跡	中世
20	本村遺跡	弥生	41	林田遺跡	弥生～中世	62	鳥ヶ森城跡	中世
21	蒐田柳ヶ本遺跡	弥生・古墳	42	加茂遺跡	古墳～中世	63	祈年遺跡	縄文～近世



第７図　北地遺跡と高知平野東半の遺跡（S＝1/50,000）

ある。長岡京・太宰府以外に出土例のない四仙騎獣八稜鏡や赤彩土師器、製塩土器、硯類など大量の出土遺物とともに、一辺 20 m近い大型の建物群も確認され、郡衙関連の川津ではないかと遺跡の性格についても検討が進められている。

古代から中世へ

9 世紀後半から 10 世紀になると、今まで盛行していた遺跡が地点を変えたり、規模が縮小されたりするなど、律令制の崩壊過程に入ったことが、遺跡の上にも反映されるようになる。深渕遺跡（7 ～ 9 世紀）の官衙的機能は、北方にある深渕北遺跡[16]（9 ～ 12 世紀）へと移り、官衙関連の建物群が検出された下ノ坪遺跡からも、10 世紀後半以降の遺物はほとんど確認されていない。

律令制の崩壊は大きく進み、10 世紀から 11 世紀にかけて古代から中世への転換期となる。この時期、この物部川左岸段丘上の北地遺跡周辺で確認される遺跡や遺物出土量は少なくなる。

中世

11 世紀後半から 12 世紀には、土佐でも各地で荘園が成立、香南市域でも大忍荘・夜須荘・吉原荘・須留田別府・香宗我部保などが次々に成立するようになる。この時期には、曽我遺跡や深渕北遺跡、母代寺土居屋敷遺跡などの調査例がある。深渕北遺跡は、古代末から中世前期にかけて機能した川津であり、白磁など日宋貿易にかかわる遺物や布目瓦が出土している。院政期の寺院建立に対応した瓦需要の増加に応え、亀山窯などで生産された瓦の積み出し港としての役割も担っていたと考えられている。亀山窯に近い母代寺土居屋敷遺跡からは、屋敷跡と大量の瓦と土器による廃絶儀礼がのこる井戸が確認されている。[17] 出土した遺物から、亀山窯の瓦工人に関する屋敷である可能性が高い。

遺跡北方には、夜須行宗が源希義救援に駆け付けたものの、希義討死を聞き引き返したと伝えられる野々宮の森がある。12 世紀末には、中原秋家が地頭として着任、その子孫は香宗我部氏として中世を通じて勢力を拡大していく。戦国期、長宗我部元親の弟、親康が香宗我部を継ぎ、兄の片腕となって土佐、四国制覇へと向かう。15 世紀から 16 世紀にかけて、土佐全域で 700 箇所以上の山城が築かれるが、香南市域でも 43 箇所の中世城郭が確認されている。

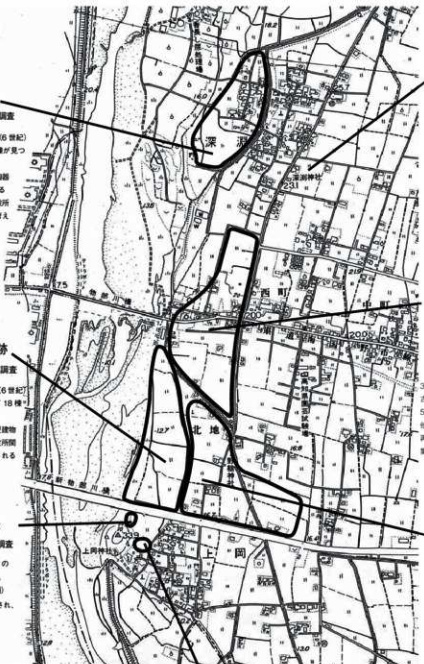
野市台地から香宗川流域、さらに東の夜須川流域は中世の石造物が多く残されている地域である。五輪塔や線刻地蔵などは文献資料の少ない中世の景観復元の手がかりとなり得るものであり、地域にとって貴重な石造物である。

近世

近世に入ると、野市台地の開墾が、土佐藩家老野中兼山によって進められ、17 世紀半ば過ぎには野市台地の開発がほぼ終了する。開墾によって得られた耕作地は野市台地だけで合計 702 町歩に達する。これ以降、近世郷村として野市町は発展する。幕末には、市内で大石弥太郎（円）・新宮馬之助・安岡嘉助など郷士を中心に人材を輩出するその背景には近世前期以降の野市台地の開拓をきっかけとした郷士階層の隆盛があった。

近世の遺構で注目されるのは、北地遺跡の南、上岡北遺跡で発掘された石積みの堤防である。[18] 堤防の上面からは 18 世紀後半から 19 世紀にかけての陶磁器が出土している。しかし、堤防内からの時期判定可能な出土遺物は皆無であり、遺物から、この堤防状遺構の時期を特定することはできない。この堤防の時期は石積み当時の絵図面と堤防の形態をもとに、野中兼山の時期に比定されている。

遺構の歴史的意義を確認した上で、当時の野市町教育委員会は迅速に施設建設計画の設計変更を行った。上岡北遺跡の堤防は、先人の残した歴史を伝える貴重な文化財として、現地でそのまま埋め戻され、大切に保存されている。



第８図　　北地遺跡周辺の地形と遺跡

参考・引用文献

『野市町史　上巻』野市町史編纂委員会　1992 年
『夜須町史　上巻』夜須町史編纂委員会　1984 年
『香我美町史　上巻』香我美町史編纂委員会　1985 年
『香我美町史　下巻』香我美町史編纂委員会　1993 年
『吉川村史』吉川村史編纂委員会　1999 年
『赤岡町史　改訂版』赤岡町史編纂委員会　2008 年
⑴『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会　1988 年
十万遺跡からは縄文時代晩期中葉の貯蔵穴が確認されている。他には手結遺跡から有舌尖頭器（草創期）が、拝原遺跡から宿毛式・松ノ木式・片粕式（後期）の土器片が出土している。
⑵『奥谷南遺跡Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター　2001 年
⑶ 松村信博・山崎真治「高知県出土の後期旧石器時代新出資料と細石刃文化期の遺跡」
（『第 17 回　中四国旧石器談話会資料』2000 年）
⑷『徳王子大崎遺跡現地説明会資料』㈶高知県埋蔵文化財センター　2008 年
⑸『上岡遺跡』野市町教育委員会　2005 年
⑹『下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会　1998 年
『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会　1998 年
『下ノ坪遺跡Ⅲ』野市町教育委員会　2000 年
⑺『西野遺跡群第２次調査概要報告書』香南市教育委員会　2006 年
⑻『下分遠崎遺跡発掘調査報告書⑴』香我美町教育委員会　1989 年
『下分遠崎遺跡』㈶高知県埋蔵文化財センター　1993 年
『下分遠崎遺跡Ⅳ』香南市教育委員会　2010 年
⑼『拝原遺跡』香我美町教育委員会　1993 年
⑽ 出原恵三『南国土佐から問う弥生時代像　田村遺跡』　新泉社　2009 年
⑾『本村遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1993 年
⑿『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989 年
⒀『兎田柳ヶ本遺跡』香南市教育委員会　2010 年
⒁ 恒石真生・谷合卓『伝・香宗城礎石は古代寺院礎石の転用と鑑定』　野市町文化財保護審議会　2005 年
2010 年度香南市東野土居遺跡の発掘調査で８世紀の瓦頭が出土した。予想されていた寺院の存在を示す資料である。
⒂『曽我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989 年
⒃『深淵北遺跡』　野市町教育委員会　1996 年
⒄『母代寺土居屋敷遺跡』　香南市教育委員会　2010 年
⒅『上岡北遺跡』香南市教育委員会　2008 年

第Ⅲ章　調査の成果

今回の調査では、大別して弥生時代前期末～中期中葉、後期前半～中葉、古代（奈良～平安）、古代末～中世の各期の遺構が確認されている。南から北へ、A～Dの４つの調査区を設定したが、この設定は農道の形に即した便宜的なものである。本報告では、弥生時代と古代以降に分けて遺構・遺物の報告を行いたい。

ただし、検出面は１面であり、すべての時期の遺構が重なっている。細片のみ出土する遺構も多く、少量の出土遺物のみでは形成時期が特定できない遺構もある。出土遺物と遺構の形態・方向、周辺の遺構との関連など可能な限り時期特定を行っていきたい。出土遺物の中で、土器は図示した資料（394 点）のみ観察表にまとめて提示し、それ以外の出土資料については文章中あるいは表中にまとめて報告する。石器については、出土資料のうち 123 点（S1 ～ S123）について、器種･石材･法量（長さ・幅・厚さ・重量）を示した計測表を作成、その中で必要と考えられるもの 70 点については図示して報告することとする。

土器・石器以外の遺物としては、青銅鏡の破鏡が１点出土しており（ST1）注目される。

B 区の遺構と周辺の景観

第１節　基本層序

調査区全体を通じた基本層序は以下の通りである。Ⅰ層が表土、Ⅱ・Ⅲ層が遺物包含層であり、Ⅳ層上面が遺構面である。地表面から遺構検出面までの深さは40㎝前後、包含層の厚さは10～30㎝程度である。

Ⅰ層　表土・基盤層　　灰色シルト層
Ⅱ層　黒褐色シルト層
Ⅲ層　茶灰色シルト層
Ⅳ層　黄灰色シルト層～黄灰色（あるいは黄橙色）シルトに１～10㎝大の礫を含む

第９図～11図に調査区全体の堆積状況を示した。第９図がＡ区の西壁、北壁、第10図がＤ区の北壁、Ｃ区の西壁、第11図がＢ区からＣ区にかけての西壁の堆積状況である。いずれも60分の１のスケールで示した。セクションポイントは第２節第12図中に示す。標高の基準となるデータラインは、17.0ｍである。

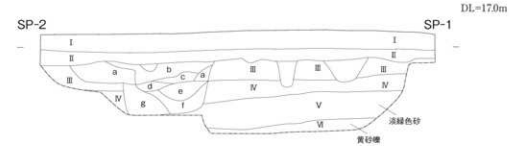
Ａ区のセクション図で、①が西壁、②が北壁の堆積状況を示している。Ⅰ～Ⅳ層は基本層序と同様である。ａ～ｊの土層は以下の通りである。

ａ　灰色粘砂土　ST9溝埋土
ｂ　茶灰色シルトに黄灰色シルトが混じる
ｃ　Ⅱ層に１～５センチ大の礫が混じる
ｄ　濃茶灰色シルト
ｅ　黒褐色シルトに黄灰色シルトが混じる
ｆ　黄灰色シルトに灰色粘土が混じる
ｇ　Ⅲ層にⅣ層が混じる
ｈ　灰色粘土
ｉ　黄灰色シルト～砂質土に１～３㎝大の礫
ｊ　Ⅲ層にⅡ層が混じる

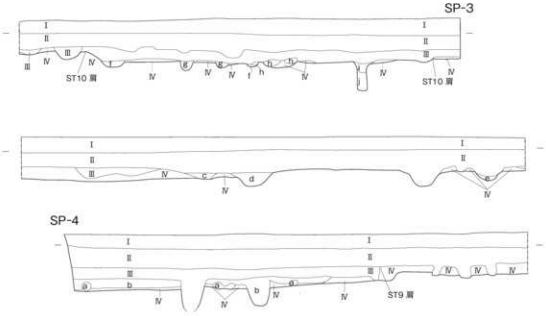
Ｄ区のセクションは、第10図の③に示したものである。北壁であり、Ⅳ層上面までがセクション図に示されており、それ以外の層はない。

第10図の④・⑤と第11図の⑥・⑦は南北方向に延びるＢＣ区の堆積状況を北から南に向かって記録したセクション図で、北（Ｃ区）④→⑤→⑥→⑦　南（Ｂ区）の順番になっている。Ⅰ～Ⅳの基本層序は他の地点と同様で、それ以外の層は、以下の通りである。

A区西端
北壁の堆積状況



①A区　西壁セクション図

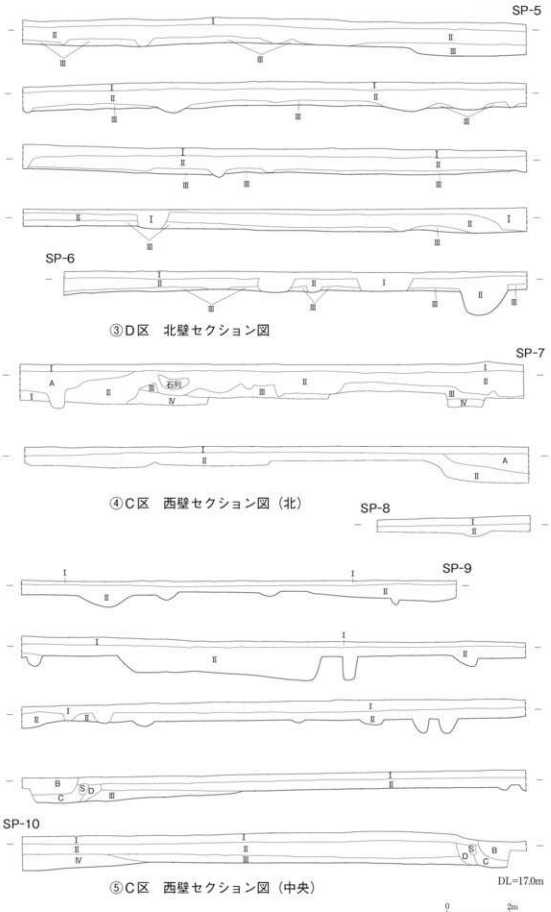


②A区　北壁セクション図

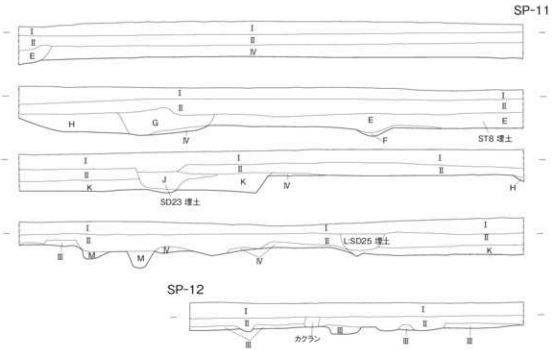
第９図　北地遺跡セクション図１（S=1/60）

A　黒色シルト
B　灰色シルト
C　橙色礫～シルト層（山土）
D　灰色シルトに黒色シルトが混じる
E　黄灰色シルト　ST8 埋土
F　黒灰シルトに黒色シルトが混じる
G　黒灰シルト
H　黒色シルト　　SD-H 埋土
J　濃黒色シルト　SD-23 埋土
K　茶灰色シルト～砂質土
L　濃黒色シルト　SD-25 埋土
M　濃黒色シルト
N　灰黒色シルト
O　灰茶色シルト
P　灰色シルト

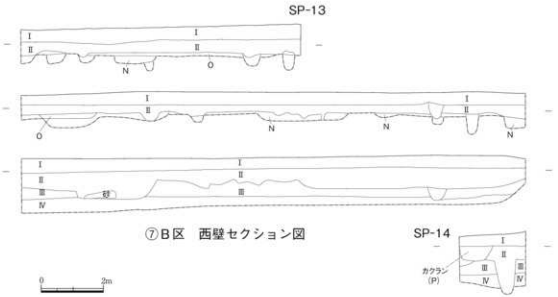
調査区　セクション（SD3-2　東壁）



第 10 図　北地遺跡セクション図２（S=1/60）



⑥C区　西壁セクション図（南）



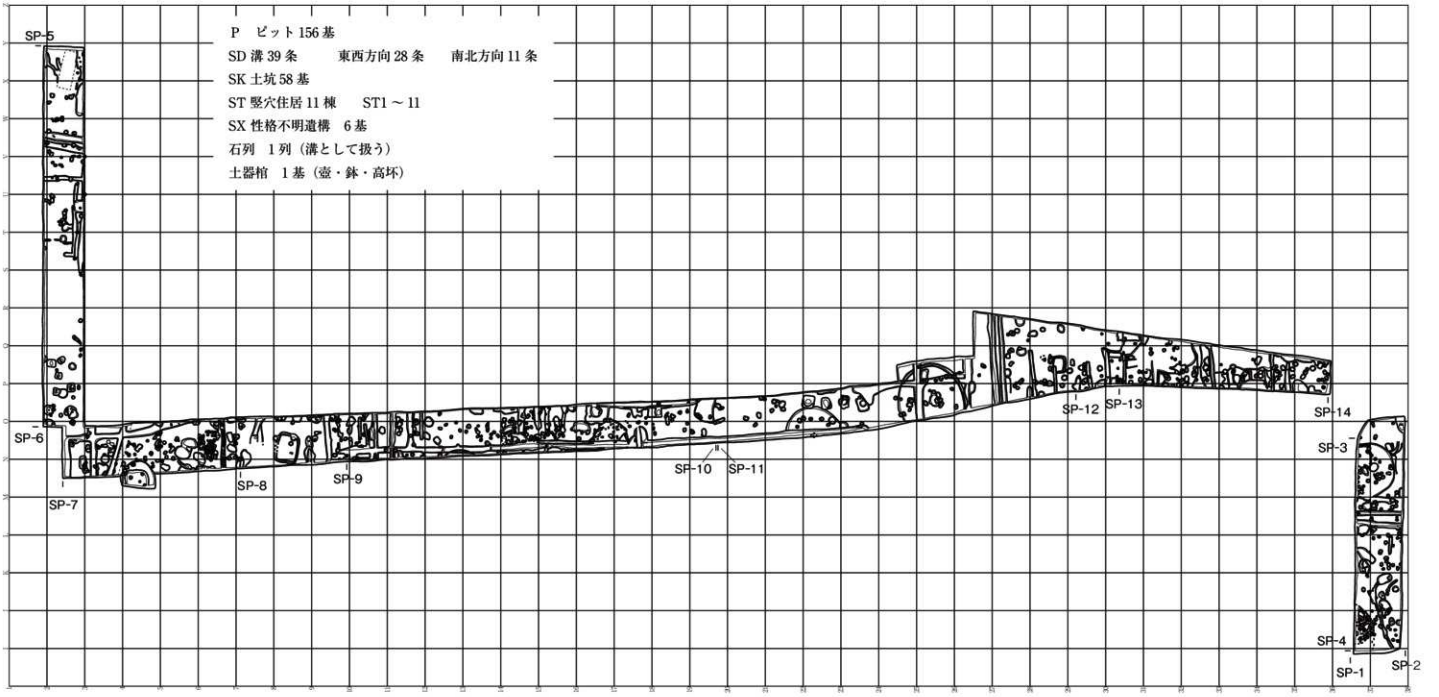
⑦B区　西壁セクション図

第11図　北地遺跡セクション図3（S=1/60）

DL=17.0m

第２節　調査区の概要と遺構配置

※全調査区を通じて、検出された遺構の中で、遺物が出土したものは以下の通りである。



第 12 図　北地遺跡調査区遺構全体図（S=1/400）

0　20m

1　A区の概要

調査区南端の東西線に設定した調査区で、総延長 24 m、調査面積約 120㎡である。

遺物が出土した遺構

P　ピット 15 基

SD 溝 4 条　　東西方向 1 条　　南北方向 3 条

SK 土坑 5 基

ST 竪穴住居 3 棟　ST9・10・11

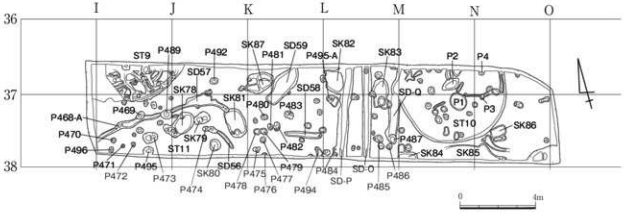
SB 掘立柱建物 1 棟

土器集中地点 3 箇所

A区からは、弥生時代前期末～中期中葉にかけての遺物と、弥生時代後期前半の遺物、糸切り底の土師器、近世陶磁器が確認されている。包含層出土遺物は細片も含めて約 1,700 点、遺構出土遺物は 911 点、合計約 2,600 点の遺物が出土している。

第 13 図がA区の遺構配置図である。

弥生時代中期初頭の竪穴住居（ST11）と中期前半の竪穴住居（ST10）が確認されている。県内でも極めて例の少ない時期の竪穴住居として注目される遺構である。ST9 は出土遺物は少ないが、弥生時代後期前半の竪穴住居だと考えられる。中近世の遺物も確認されたが、中近世だと時期の特定できる遺構はない。古代の遺物は、少ないが、遺構は確認されている。



第 13 図　A区遺構配置図（S=1/200）

2　B区の概要

調査区の南側、南北線の待避所拡張部から南に設定した調査区で、総延長約38 m、調査面積240㎡である。

遺物が出土した遺構

P　ピット23基

SD 溝９条　　東西方向７条　　南北方向２条

SK 土坑 13 基

ST 竪穴住居２棟　ST4・5

SB 掘立柱建物１棟

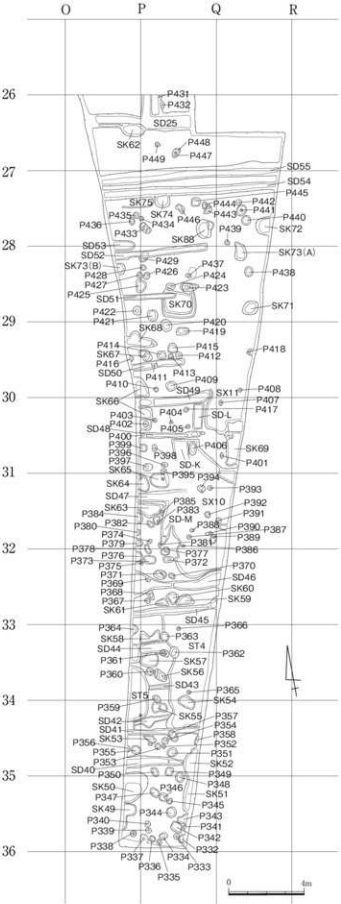
土器集中地点１箇所

B区からは、弥生時代中期初頭から中葉にかけてと後期前半、６世紀代と８～９世紀、奈良～平安時代前期、近世の遺物が確認されている。包含層出土遺物は細片も含めて 1,090 点、遺構出土遺物は 1,340 点、合計約 2,400 点の遺物が出土している。

６世紀代の遺物は今回の調査でほとんど出土していないが、B区から甑の角状把手部分の小破片が確認されている。東西方向並びに南北方向に直交する溝は、正確な時期特定はできないが、出土遺物からも古代に機能していた溝だと考えられており、形成時から一定期間の当遺跡内での地割り・土地利用を考える上でも重要な遺構である。

ST4・5は弥生時代中期中葉の竪穴住居である。ST4では石器製作が行われていたと考えられている。

東西方向の溝（SD55）から、墨書土器（須恵器・坏）が出土している。



第 14 図　B 区遺構配置図（S=1/200）

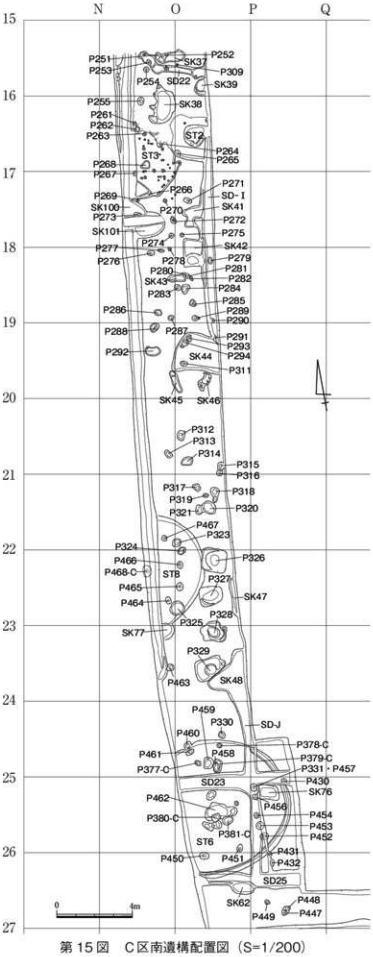
3　C区の概要

調査区中央から北半にかけて、南北線の待避所より北の区間に設定した調査区で、総延長約 100 m、調査面積 480㎡である。

遺物が出土した遺構
P　ピット 89 基
SD 溝 20 条　　東西方向 17 条
南北方向 3 条
SK 土坑 33 基
ST　竪穴住居 6 棟　ST2・3・8
　ST1（青銅鏡出土）ST6　ST7（旧 SK1）
SX　性格不明遺構 1 基
石列　1 列　（溝）
甕棺　1 基
壺棺　1 基

C区からは弥生時代前期末～中期中葉、後期後半、古代（奈良～平安前期）中世（11・12 ～ 14 世紀）近世の遺物が出土している。包含層出土遺物は細片も含めて 1,880 点、遺構出土遺物は 6,600 点とまとまった遺物を出土する遺構が多い。合計約 8,500 点の遺物が出土している。特に弥生時代後期前半の竪穴住居 ST7 には遺物が集中、1,500 点を超える土器が出土した。

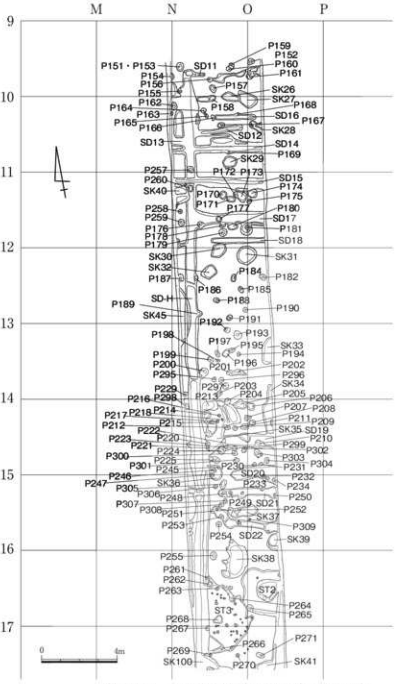
C区の南には弥生中期中葉の竪穴住居（ST6·8）、中央から北半にかけては、中期初頭の竪穴住居（ST3）と溝・土坑など遺構が、北半には後期前半の竪穴住居（ST1·2·7）が点在している。C区南端からは 9 世紀



第 15 図　C区南遺構配置図（S=1/200）

はじめの方形ピットを持つ大型掘立柱建物が確認されている。周辺の包含層からは赤彩土師器片も出土している。

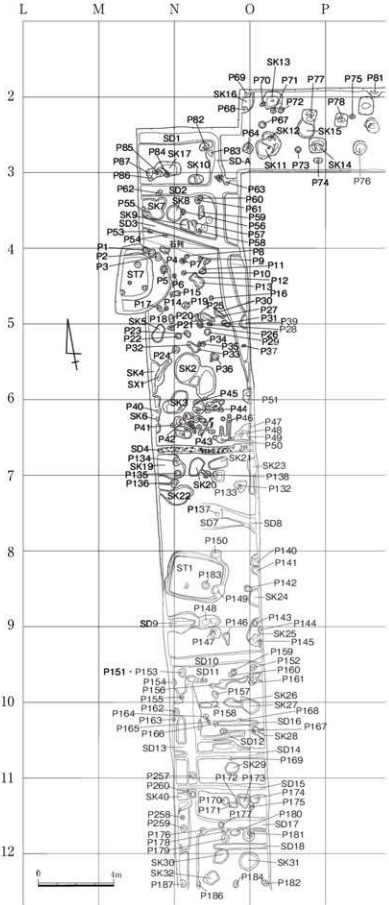
検出された溝はB区と同様、直交し、計画的に設定された地割りであることがわかる。これと異なる方向の溝も確認されている。これらの溝については、出土遺物と遺構の切り合い関係から弥生時代前期末～中期初頭の溝だと考えている。検出された際に石列状遺構として調査が進められた礫列も、並行して走るこの溝の最終埋積時に投棄された礫が検出されたものだと理解している。



第16図　C区中央遺構配置図（S=1/200）

後期前半の竪穴住居（ST7）に近接した地点から、土器棺墓（土器9･10）が確認されている。

C区以外でも同様であるが、小規模なピットも多く検出されており、建物もさらに多く復元可能だと考えられる。調査範囲の制約もあり、調査データをまとめて提示した上で、今後の検討課題としておきたい。



第 17 図　C区北遺構配置図（S=1/200）

4　D区の概要

調査区北端の東西線に設定した調査区で、総延長40 m、調査面積160㎡である。

遺物が出土した遺構

P　ピット29基

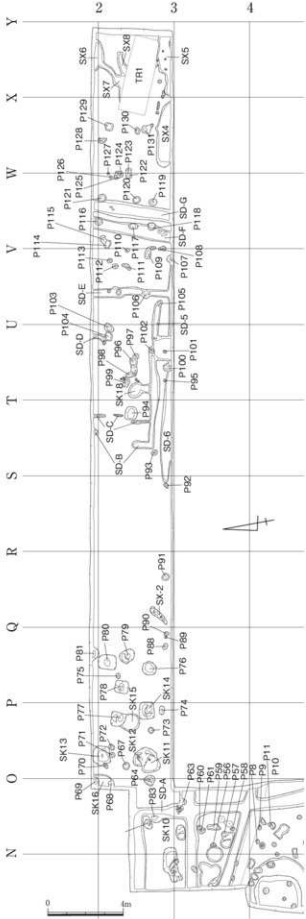
SD　溝6条　　東西方向3条
　　南北方向3条

SK　土坑7基

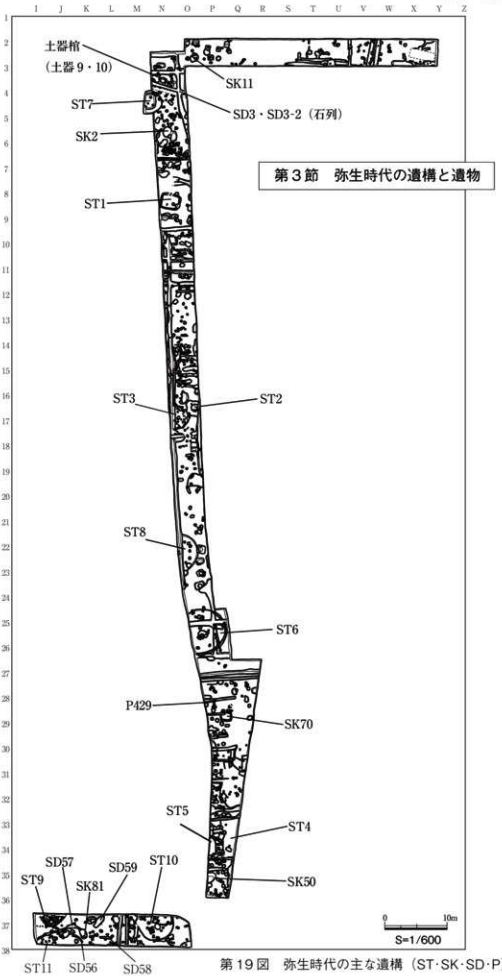
SX　性格不明遺構5基

D区からは弥生時代前期末～中期中葉と後期前半の遺物と古代、中世、近世の遺物が出土している。包含層中から280点、遺構中から375点、合計約650点で、他の調査区と較べ、古代の遺物の割合が高い。特に8～9世紀を中心とした時期の遺物が多く認められる。

調査区の西端には、弥生時代中期初頭の良好な一括資料が得られた土坑（SK11）がある。この土坑と切り合い関係のある8世紀中葉から後半にかけての掘立柱建物の存在など、8世紀の遺構・遺物には注目すべきものがあり、包含層から墨書土器が確認されている。東隣の下ノ坪遺跡と同様の性格を持つ建物群が形成されていたようだ。



第18図　D区遺構配置図（S=1/200）



第19図　弥生時代の主な遺構（ST･SK･SD･P）

1．竪穴建物（ST）

合計11棟の竪穴建物が確認されている。検出地点は、A区がST9～11、B区がST4・5、C区がST1～3、6～8であり、弥生時代中期前半から中葉にかけてと弥生時代後期前半の大きく2時期に分かれる。

ST1

調査区（C区）M8/N8グリッドに位置する。P149･150に切られる。検出高は16.82 mを測る。平面形態は隅丸長方形状を呈し、長径3.20 m、短径2.40 m、深さ24cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。床面からP183を検出している。主柱穴を構成するピットの可能性が考えられるが、遺構の一部を試掘TRで破壊されており、全体の形状は不明である。壁際から幅10～30cm、深さ2cmを測る壁溝を1条検出している。

出土遺物は、弥生土器片442点と石器類6点及び青銅鏡の破鏡1点である。土器は口縁部12点、文様が確認できる個体10点、底部11点が出土し、石器は打製石包丁1点、敲石2点、頁岩とサヌカイトの剥片が1点ずつ、石剣が1点確認されている。

図示し得た遺物は1の青銅鏡、2～19の土器18点と19～21の石器3点である。2～4が長頸壺であり、5・6が口縁が大きくラッパ状に開き口唇が凹状になった壺、7～9が甕口縁で、7は頸部でくの字状に強く屈曲する。10が頸胴界に列点文を施文する壺胴部、11～13は壺底部、14～17は甕底部で、18は台付鉢（土器）脚部である。19は簾状文状に刺突を連続させる文様のある土器片だが、これは他時期（弥生中期前半）の混入資料だと考えられる。11の底部はハケ調整で丁寧に仕上げられ、わずかにタタキ目の跡も確認できる。また、14の甕には内面ヘラケズリが確認される。

19の頁岩製の打製石包丁は、平坦剥離により側縁の一辺に刃部を形成するが、きわめて粗雑なつくりである。20は扁平な砂岩楕円礫の敲石であり、表裏面に敲打痕・擦痕、縁辺部には敲打による剥離痕が残る。21は全面に擦痕が残り、側縁に稜を形成する。折損により全体形状は不明だが、弥生時代の石剣の一部だと考えられる。

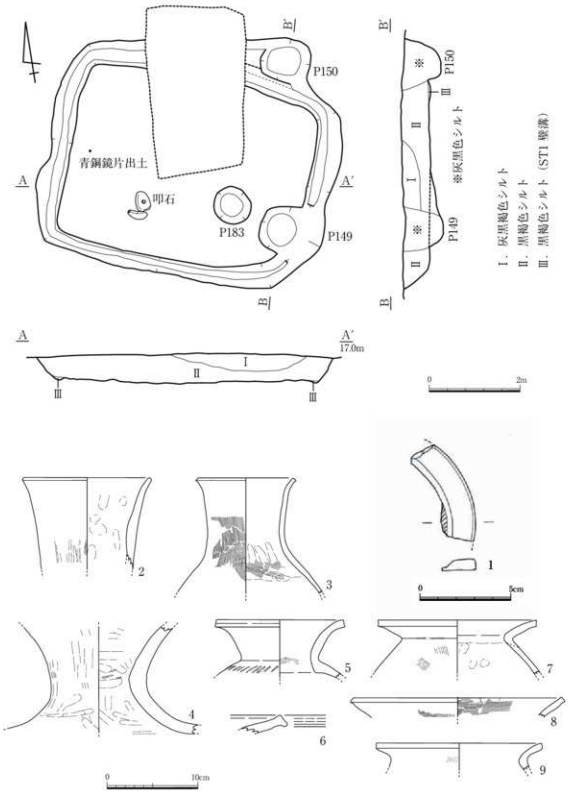
竪穴建物床面から出土した青銅鏡の破鏡（1）も注目される資料である。直径は復元すると10.2cmになると推定される。外区の厚さは0.6cm、内区の厚さは0.2cm、内区は僅かしか残っていないが、櫛目文が確認される。青銅鏡の正確な鏡式は不明だが、鋳あがりや色調から中国鏡であり、漢の時代に属するものである。

ST1の所属時期は弥生時代後期前半（後期Ⅱ期、Ⅴ－2・3期）である。

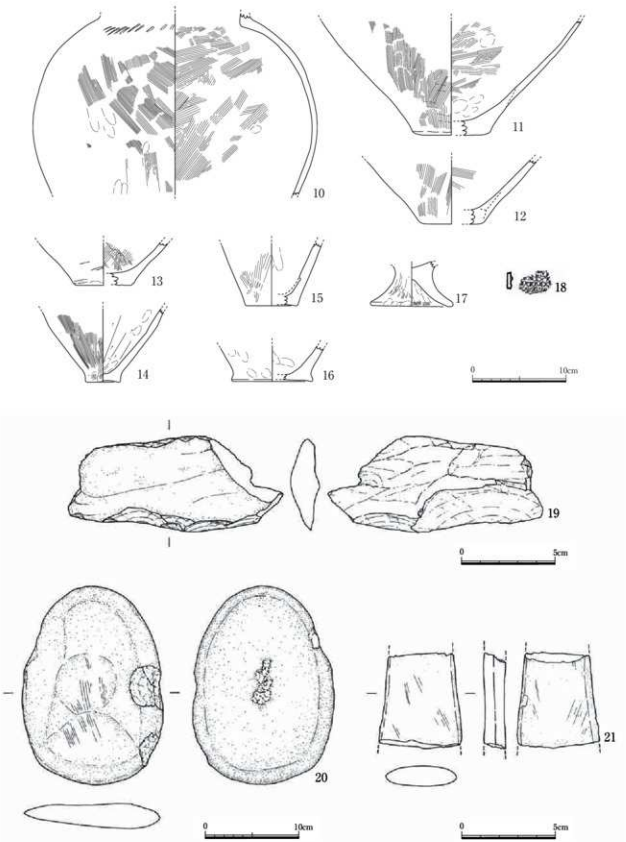
ST2

調査区（C区）N16/O16グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。ST3/SD-Iと切り合い関係にある。検出高は16.63 mを測る。平面形態は隅丸方形状を呈し、長径2.45 m、短径2.10 m（検出高）、深さ9cmを測る。床面から長径1.42 m（検出高）、短径1.19 m、深さ9cmを測る土坑状の落ち込みを検出している。またP265（径35cm、深さ20cm）は主柱穴を構成するピットの可能性が考えられるが、他のピットは小規模である。

出土遺物は細片も含めて約200点の弥生土器と1点の打製石包丁が出土している。



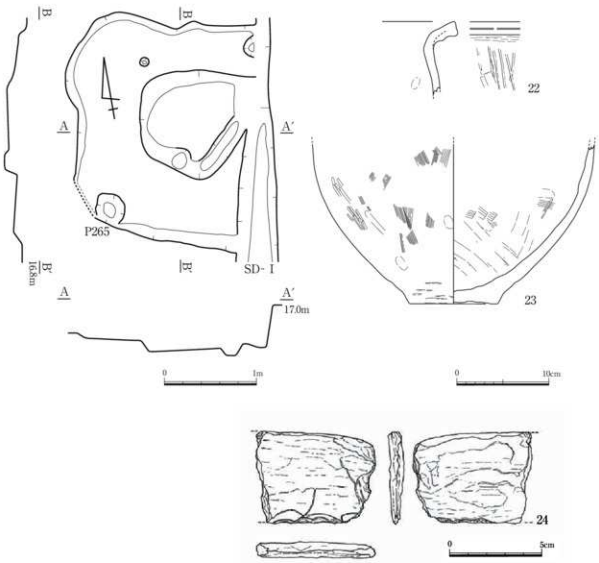
第 20 図　ST1 平面・セクション図（S＝1/ 40）出土遺物 1　弥生土器（S＝1/4）青銅鏡（S=1/2）



第21図　ST1 出土遺物２　弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/4・1/2）

出土遺物の中で図示した遺物は、22の鉢口縁と23の壺底部、24の石包丁である。22の口唇には凹線状の浅い沈線が巡っている。また、23は外面をヘラミガキにより丁寧に仕上げ、底面付近にはタタキ目がわずかに残る。24は緑色片岩製の打製石包丁で、直線的な刃部であり、片刃である。

遺構の所属時期は弥生後期前半（後期Ⅱ期、Ⅴ－２・３期）である。



第22図　ST2平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物　弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/2）

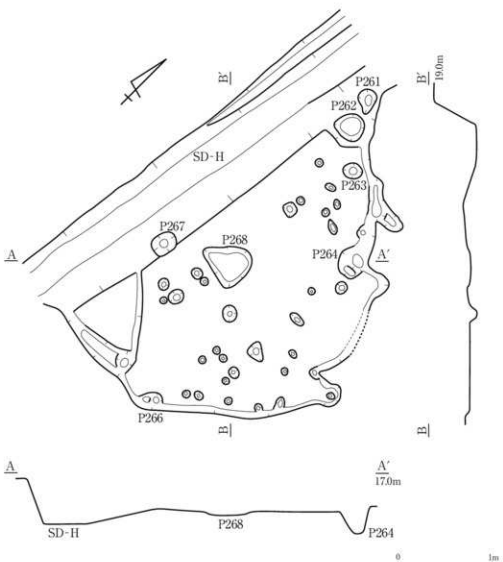
ST3

調査区（C区）N16･17グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。西側をSD-Hに切られる。検出高は16.62 mを測る。平面形態は不整長方形状を呈し、長径2.94 m（検出長）、短径2.50 m、深さ3㎝を測る。床面から小規模なピットを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

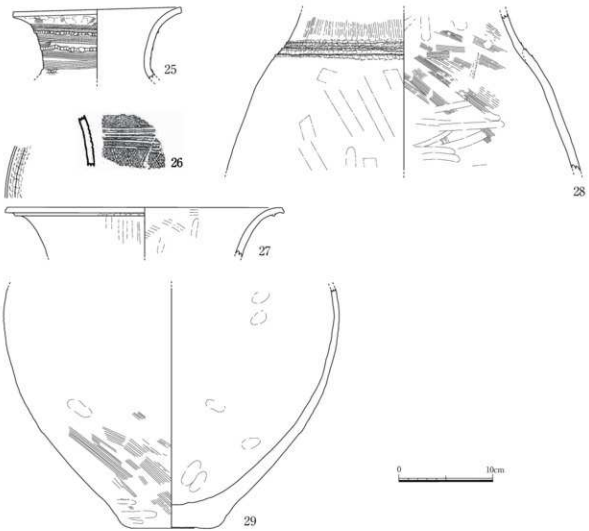
出土遺物は弥生土器21点と被熱赤変砂岩礫（S8）1点である。

図示できた遺物は、25～29の弥生土器5点である。25は扁平な断面四角形の刻目突帯で頸部を加飾、突帯間には5条1単位のクシ描沈線による直線文を施す。27は口縁部外面にミミズ腫れ状の微隆起帯を持つ口縁で、28は上胴部に27と同様の手法で3条のミミズ腫れ状の微隆起帯を持つ。

ST3の所属時期は、弥生中期初頭（中期Ⅰ－1期・Ⅱ様式古段階）である。



第23図　ST3平面・エレベーション図（S＝1/40）

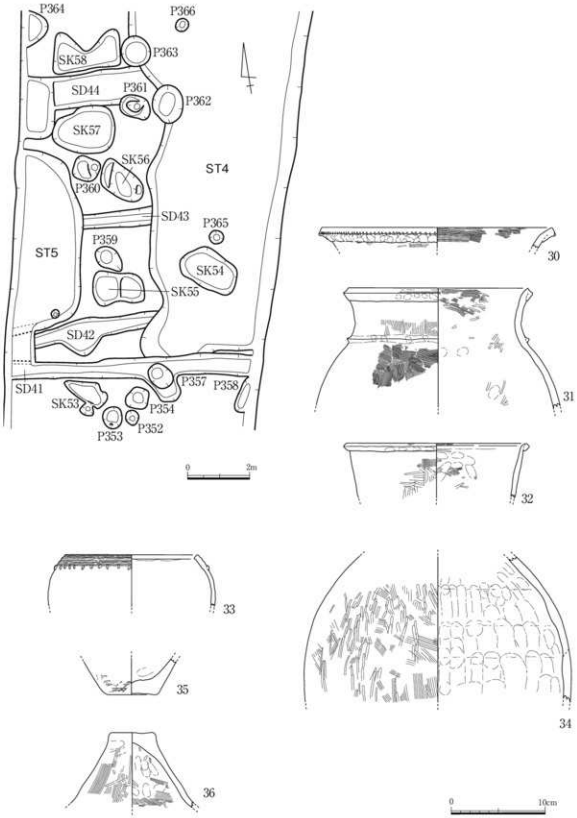


第 24 図　ST3 出土遺物　弥生土器（S=1/4）

ST4

調査区（C 区）P33 グリッド付近に位置する。平面形は周辺遺構との関係で明確に把握できない。南北方向 3.6 m の範囲に広がっている。東西方向は 1.8 m のみ検出され、東半は調査区外に延びている。壁の立ち上がりは確認できるが、周溝・柱穴は検出されておらず、竪穴住居ではなく、竪穴建物あるいは竪穴状遺構とした方が良いのかもしれない。検出面標高は 16.45 m、検出面から床面までの深さは 20㎝、床面から長径 0.97㎝、短径 0.57㎝の楕円形の土坑（SK54）が検出された以外に遺構は確認されていない。

出土遺物は、149 点の弥生土器と 7 点の石器類で、図示した遺物は 30 ～ 36（土器）と 37 ～ 42（石器類）である。

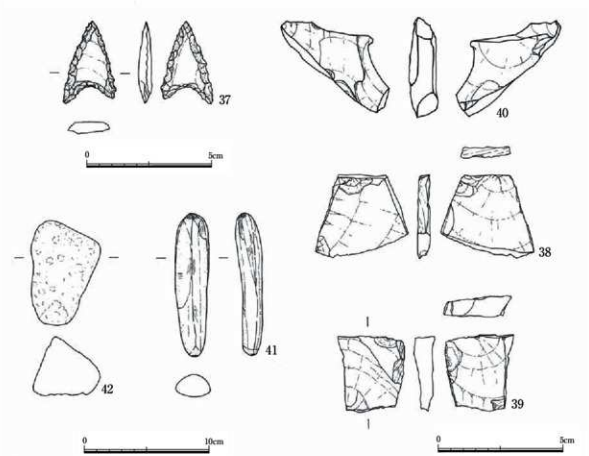


第 25 図　ST4 及び周辺遺構平面図（S=1/60）出土遺物 1　弥生土器（S=1/4）

弥生土器の中には、頸部下に断面三角形の突帯を持つ形態（31）や貼付口縁の鉢（32）など、下分遠崎遺跡の中期中葉の資料に類似例が認められるものがある。33は口唇が内傾、口縁部に3条の微隆起帯を持ち、直下に円形浮文を貼付する無頸壺である。同じ形態の無頸壺類似例は高知平野にほぼとんどなく、注目される。34の壺胴部は無文で、ヘラミガキにより丁寧に仕上げられている。36は、蓋の天井部周辺で、脚端部形状は不明である。

石器類としては、37の打製石鏃、38～40の剥片、41の小型棒状円礫、42の軽石が出土した。石鏃・剥片はいずれもサヌカイトで、剥片の背面と腹面の剥片剥離軸が異なっている。打面転移を繰り返しながら、剥片剥離行程が進行したことがわかる。石鏃製作を意図し、目的的剥片の獲得を目指した結果生じた剥片だと考えられる。石器製作がこの遺構内で行われていた可能性が高い。

遺物の所属時期は、弥生中期中葉（中期Ⅱ－1期・Ⅲ様式古段階）である。



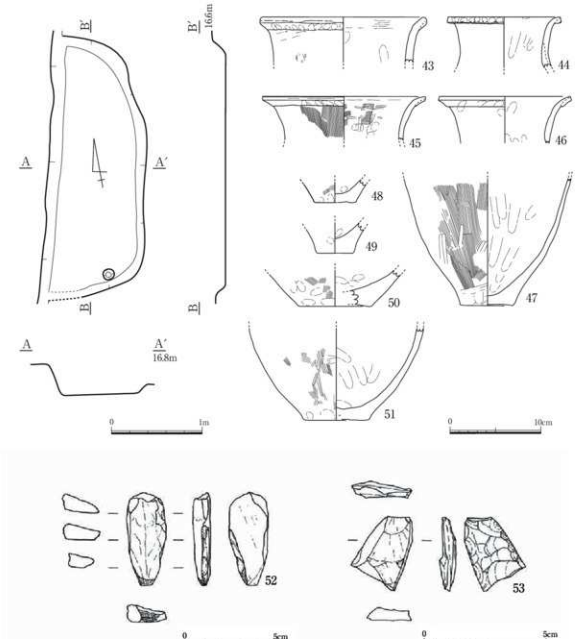
第26図　ST4出土遺物2　石器類（S=1/3・2/3）

ST5

調査区（B区）O33･34/P33･34 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。SD43 に切られる。検出高は 16.44 m を測る。平面形態は隅丸長方形状を呈し、長径 2.90 m、短径 0.93 m（検出長）、深さ 13㎝を測る。埋土は黒褐色シルトである。床面から小規模なピットを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

出土遺物は 115 点の弥生土器と 3 点の石器類である。

図示した遺物は 43 ～ 51（弥生土器）、52・53（石器類）である。43・50・51 が壺、44 ～ 49 が甕であり、口縁部が確認できる個体は全て貼付口縁で、文様が確認できる個体はない。



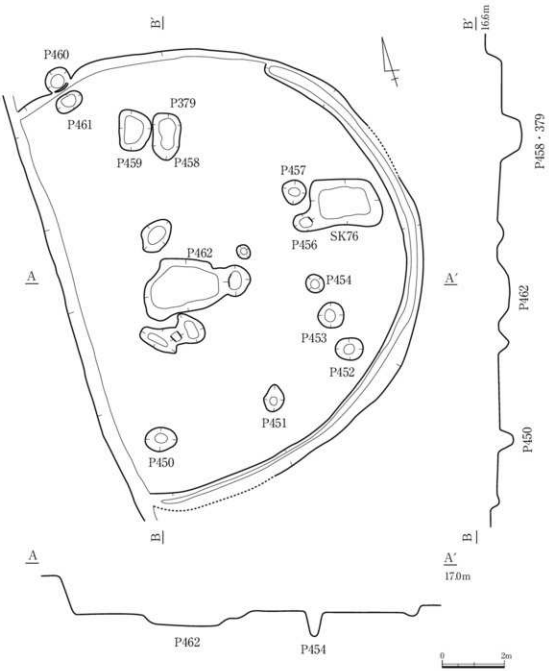
第 27 図　ST5 平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物　弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/2・2/3）

52は酸性凝灰質頁岩の磨製石斧で、小型の加工斧である。刃部周辺のみ研磨し、両刃の刃部を作り出している。53はサヌカイトの剥片である。

この遺構の所属時期は、弥生時代中期中葉（中期Ⅱ－1期、Ⅲ様式古段階）である。

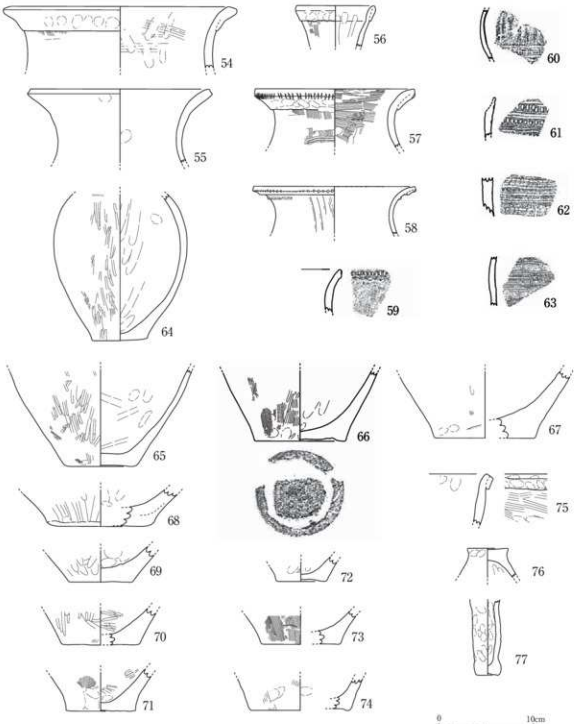
ST6

調査区（C区）O24～26/P24･25グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。SD-J･23･25に切られる。検出高は16.42mを測る。平面形態は楕円形状に近い円形状を呈し、長



第28図　ST6平面・エレベーション図（S=1/60）

径 5.53 m（検出長）、短径 6.95 m、深さ 15㎝を測る。埋土は茶灰色（砂質）シルトである。多数のピットを検出しているが、主柱穴を構成するピットは P450・451・454（453）・457・458 と考えられ、径 30 ～ 50㎝、深さ 19 ～ 47㎝を測る。P462 は中央ピットの可能性が考えられる。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 1.32 m、短径 0.87 m、深さ 19㎝を測る。ピット状遺構と切り合い関係にある。



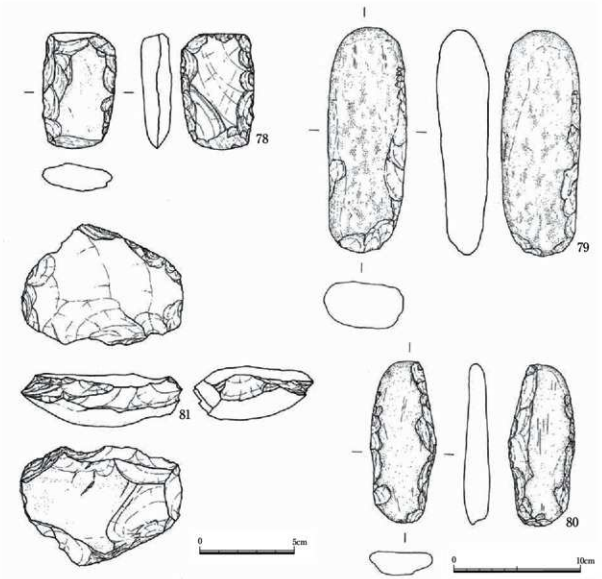
第 29 図　ST6 出土遺物 1　弥生土器（S=1/4）

北側を除く壁際から幅15～30㎝、深さ2～4㎝を測る壁溝を1条検出している。床面からSK76を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

出土遺物は、弥生土器が細片も含めて1150点、石器類14点、炭化物（炭状）が合計340ｇ、須恵器1点であり、須恵器は混入だと考えられる。

出土遺物の中で図示した遺物は、54～77の弥生土器と78～81の石器類4点である。弥生土器の中で、54～58・61～70が壺、59・60・71～74が甕、75が鉢、76が蓋、77が筒状の土製品である。

壺の占める割合が高く、全体の60%以上が壺である。壺形土器の口縁部の中で、54・56・57が貼付口縁、55が素口縁、58は貼付口縁で口縁部外面に微隆起帯のある器壁の薄い搬入土器である。62は5条1単位のクシ描沈線による簾状文と直線文が交互に施文されている。63は13条1単位のクシ描直線文の残る胴部片である。底部は斜め上方に直線的に立ち上がり、多くが平底であるが、



第30図　ST6出土遺物2　石器類（S=1/2・1/3）

中には 66・72・74 のように底面中央が凹み高台状になるものもある。特に 66 は、底面が周状に凹む特徴を持っている。77 は一端が閉じて袋状になった筒状の土製品だが、器種・用途は特定できない。

石器は、78 が磨製石斧（超塩基性岩）で 79・80 が石斧未製品（ともに御荷鉾緑色岩）、81 が石核（珪質頁岩）である。78 は磨製石斧だが、研磨は刃部に限定されている。側縁は通常の剥離および平坦剥離によって形成され、刃部は両刃である。79・80 はある程度の厚みを持つ扁平な棒状礫を素材とした御荷鉾緑色岩で、端部と側縁に直接打撃により成形加工を施した段階の磨製石斧の未製品である。81 の石核は、扁平な分割礫の剥離面に打面を設定、打面調整を加えた後、打面側から（ハードハンマーによる間接打撃により）剥片を剥離した後の残核である。遺構内及び今回の調査区域内から、この石核から剥離された剥片は出土していないが、目的的剥片は幅 3 ～ 4 ㎝前後の小型の横長剥片であると想定される。

遺構の所属時期は、弥生時代中期中葉（中期Ⅱ－１期、Ⅲ様式古段階）である。

ST7

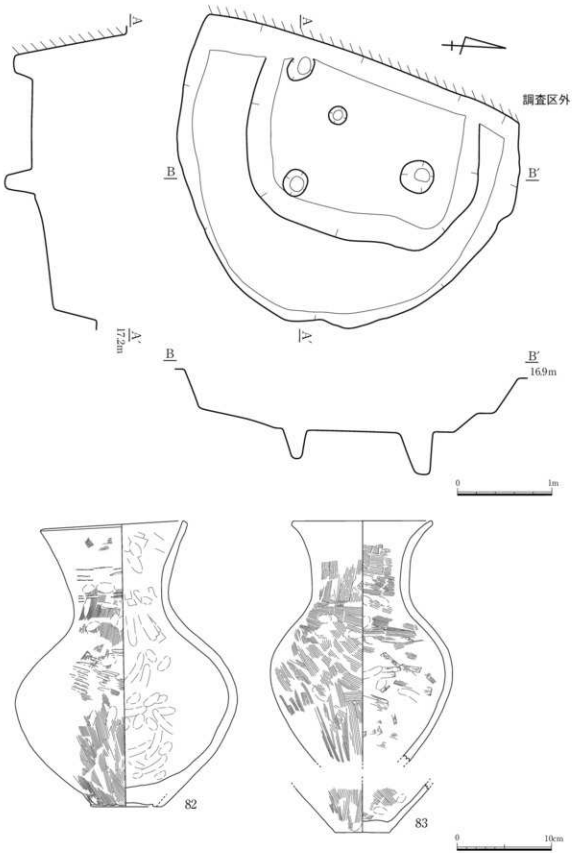
調査区（C 区）M3·4 グリッドに位置する。西側は調査区外のため、一部拡張して検出している。ST7 は P1・2・3・5 に切られている。（第 17 図参照）検出高は 16.84 m を測る。平面形態は楕円形状に近い円形状を呈し、長径 7.40 m、短径 5.33 m（検出長）、深さ 54（高床部）～ 68（低床部）㎝を測る。段部を有しており、高床部（ベッド状遺構）は壁際から約 15 ～ 90㎝の幅で検出している。低床部の平面形態は隅丸方形状を呈し、床面から主柱穴を構成すると考えられるピットを検出しており、径 28 ～ 35㎝、深さ 29 ～ 43㎝を測る。この部分の上面で遺物の集中を確認している。

調査時点では SK1 として調査開始、部分的に調査範囲を拡張した後で、竪穴住居であることを確認、遺構名を ST7 に変更する。

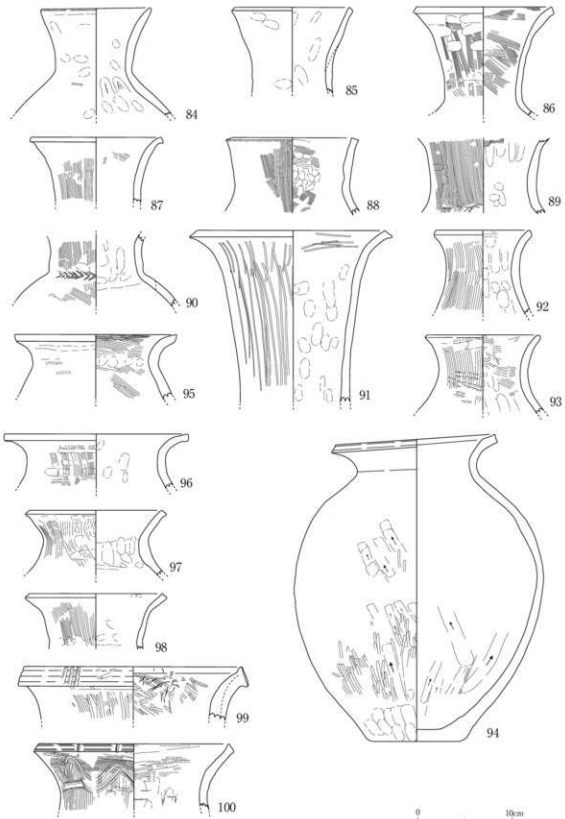
出土遺物は弥生土器 1,544 点（土器片点数）と土器量は多く、集中した出土状況を示す。その中で、弥生土器 118 点について図化した。これに対し石器は少なく合計 3 点の出土、図化したものは 200 の磨製石包丁、201 の台石（敲打痕わずかに残る）の 2 点のみである。

弥生土器は口縁部が確認できる個体が 145、底部が 53 と多いが、文様が認められる破片は 3 点のみと大半が無文の土器片で、後期前半（後期Ⅱ期・Ⅴ－２期）に属するものである。それ以外の時期の遺物としては、中期前半の混入資料が 7 点確認されている。

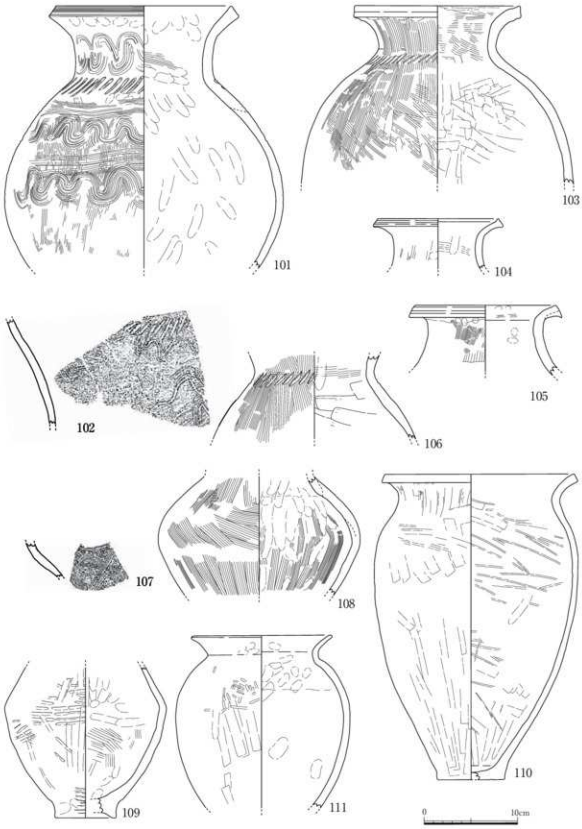
82 ～ 93 が長頸壺で、94 ～ 98 がラッパ状に大きく開く広口壺、99 ～ 105 が口唇を拡張し凹線あるいは偽凹線を施す特徴を持つ壺である。口縁部には刻目はなく、口縁外面の粘土帯貼付が確認できるものも、1 点（105）のみと例外的である。口縁が残る壺、あるいは頸部の形状で器形が確認できる壺 23 点中、長頸壺が 12 点と 50％を超え、短頸の広口壺 5 点（22％）、凹線または退化した凹線を持つ壺 6 点（26％）の割合となっている。口縁に凹線を持つ土器以外は、無文の土器が圧倒的に多い。無文の中で、頸部に暗文状の多段縦方向のヘラミガキを施す壺（91）、頸胴界に列点文を施す 101 ～ 103・106 や、90 のように羽状の文様を施文する物など、凹線文以外の文様を持つ土器もあるが、占める割合は 2 割以下である。その中で、101 は特異である。口縁には 3 条の凹線文を持ち、頸部にクシ描波状文、頸胴界に列点文上胴部から胴部中位にかけて、クシ描による直線文と波状文を多段に施文する。類似した文様ではあるが、102 の胴部片の文様は異なっている。



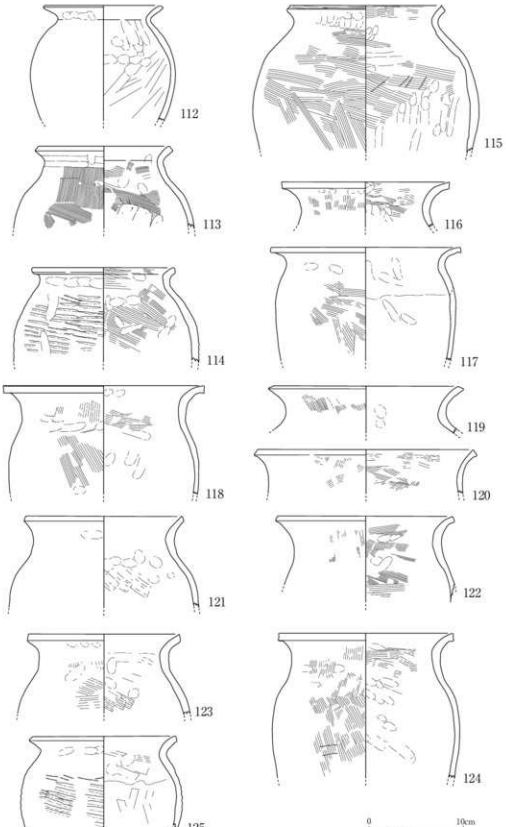
第 31 図　ST7 平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物 1　弥生土器（S=1/4）



第 32 図　ST7 出土遺物２　弥生土器（S=1/4）



第33図　ST7 出土遺物３　弥生土器（S=1/4）

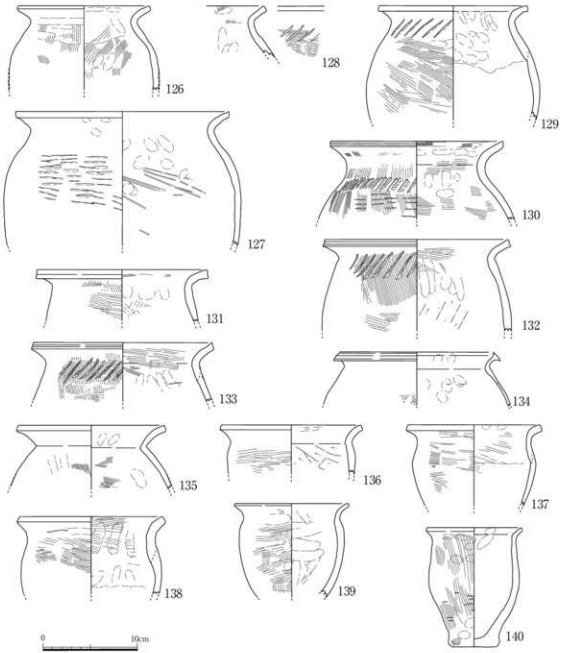


第34図　ST7 出土遺物 4　弥生土器（S=1/4）

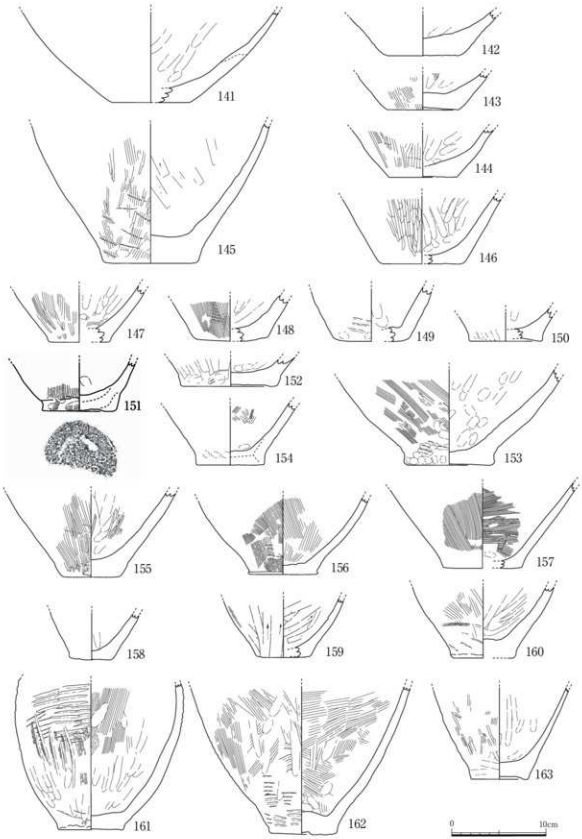
108・109 の中・小型の壺は、胴部中位から上胴部にかけて、やや屈曲気味に張り出した部位に最大径がある。

外面はハケ調整やヘラミガキにより丁寧に仕上げられているものが多いが、82、93、109 など成形調整痕であるタタキ目を観察できるものもある。

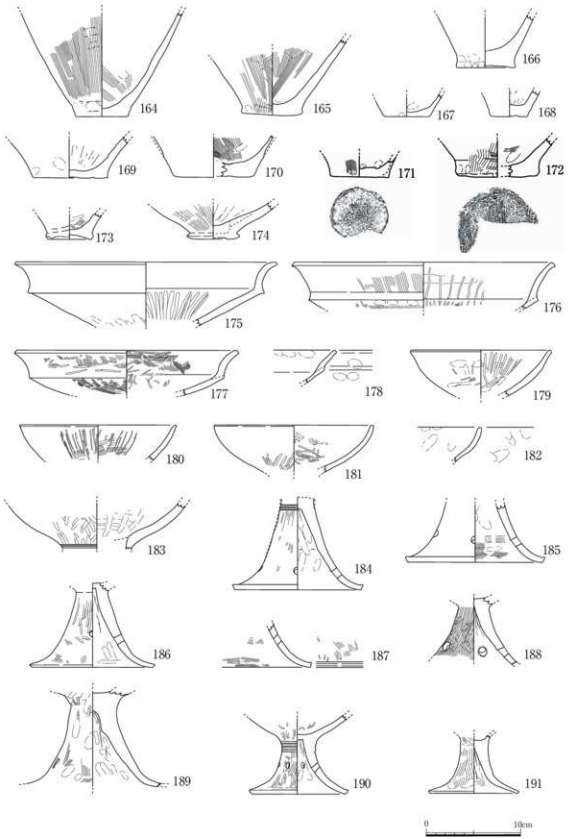
110 ～ 140 が口縁部の残る甕形土器である。頸部の屈曲は緩やかであり、135 のような、くの字状に稜をなして強く屈曲する甕は例外的である。口唇に凹線文を施文する甕は 134 のみである。器壁は 3 ～ 5 ㎜と薄く、口唇は上下に拡張する。また、口径 15㎝以下の小型の甕が、136 ～ 140 で、中でも 140 は口径 10㎝と特に小さい。



第 35 図　ST7 出土遺物 5　弥生土器（S=1/4）



第 36 図　ST7 出土遺物 6　弥生土器（S=1/4）



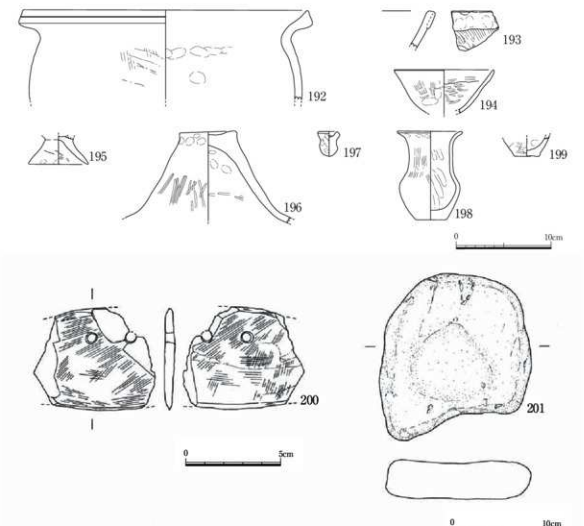
第 37 図　ST7 出土遺物 7　弥生土器（S=1/4）

141 ～ 174 が、壺あるいは甕の底部である。底径は、壺には底径が 7 ～ 10cm程度、甕には 4 ～ 6 cm程度のものが多い。底面は、中央部が凹み上げ底状や高台状になったものもあるが、全体の10%足らずで、大半は平底と捉えられるものである。

175 ～ 183 が高坏の坏部、184 ～ 191 が高坏の脚部、192･193 が鉢、194･195 が台付鉢、196 が蓋、197 ～ 199 が小型土器（ミニチュア土器）である。

高坏の坏部は一旦屈曲した後で大きく外反するタイプ（175 ～ 178）と椀状のタイプ（179 ～ 183）があり、脚部は透孔があるもの（184 ～ 188・190）とないもの（189・191）がある。脚部の透孔の数は、4 孔（184 ～ 186）、3 孔（188）、6 孔（190）の 3 タイプがある。脚端部は強いヨコナデにより面を成すものが多い。

192 は口唇を上下に拡張、口唇面はわずかに凹状になる。193 は貼付口縁の鉢、194 が鉢坏部（台付鉢？）、195 が台付鉢脚部である。196 の蓋は内外面ともヘラミガキで仕上げる。197 ～ 199 のミニチュア土器のうち、198 は長頸壺を模したものである。



第 38 図　ST7 出土遺物 8　弥生土器（S=1/4）石器（S=1/2・1/4）

土器に較べ出土量の少ない石器だが、200 が磨製石包丁、201 が砂岩の敲石である。200 の石包丁の石材は頁岩で、左右両端が欠けている。紐孔は 2 孔、全面に研磨痕が残り、両刃で背面にも研磨により面が形成される。201 は、中央部に敲打痕が残ることから、何らかの作業に使われた台石だと考えている。

遺構の所属時期は、弥生時代後期前半（後期Ⅱ期、Ⅴ－２・３期）である。

ST7 遺物出土状況

ST8

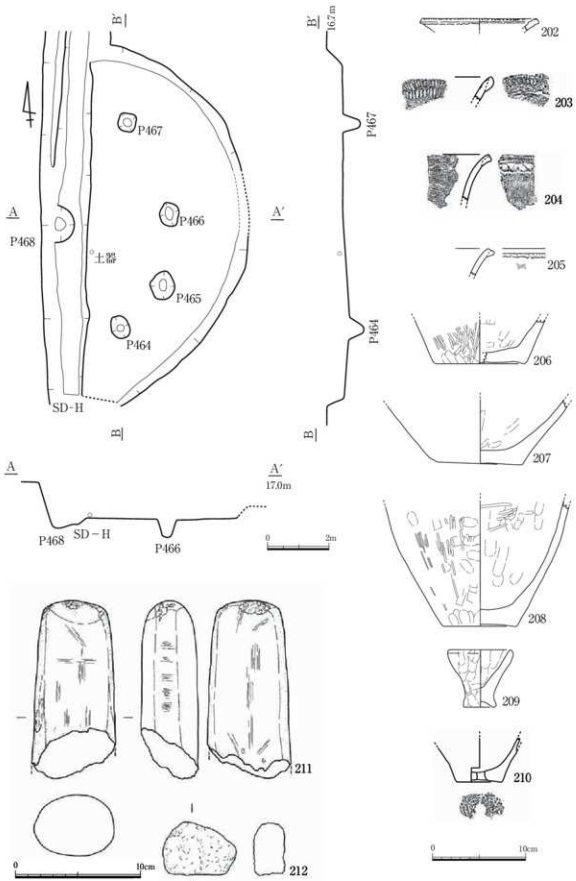
調査区（Ｃ区）N21･22/O21･22 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。SD－H/SK77/P326（SB3）に切られる。検出高は 16.54 m を測る。平面形態は円形状を呈し、長径 5.77 m（検出長）、短径 3.07 m（検出長）、深さ 25㎝を測る。埋土は茶灰色シルトである。主柱穴を構成するピットは P464 ～ 467 と考えられ、径 34 ～ 45㎝、深さ 25 ～ 29㎝を測る。P468 は中央ピットの可能性が考えられる。平面形態は円形状を呈し、長径 60㎝、短径 30㎝（検出長）、深さ 16㎝を測る。

出土した弥生土器は 140 点、石器類は 3 点（磨製石斧の基部、剥片、軽石）である。

図化した資料は、弥生土器（202 ～ 210）と御荷鉾緑色岩製磨製石斧（211）と軽石（212）の石器類 2 点である。202 ～ 205 は壺の口縁部で、206 ～ 208 は壺の底部、209 は小型の鉢、210 が底部に穿孔部を持つ甑である。202 の内面には微隆起帯を貼付し、口唇上端に刻目を巡らせる。203 ～ 205 は貼付口縁で、203 は外面に刻目、内面にはヘラ状原体により羽状の文様を施文する。209 は小型の鉢であり、底部は凹状で外縁が脚状に突出する。210 の甑は、焼成前穿孔であり、底面の孔径は 8 ㎜大である。

出土遺物は微隆起帯を持つ破片や貼付口縁の小片、御荷鉾緑色岩製磨製石斧の基部など、弥生中期の資料が多いのだが、小型鉢（209）には後期前半の可能性も残り、遺構の時期は現時点で弥生中期か後期前半いずれか、決めかねている。最終的な判断は、遺構の形状や、詳細な土器の検討を経てから再度行いたい。

遺構の時期は、弥生中期（中期Ⅰ・Ⅱ）あるいは後期前半（後期Ⅱ期、Ⅴ－３期）いずれかである。



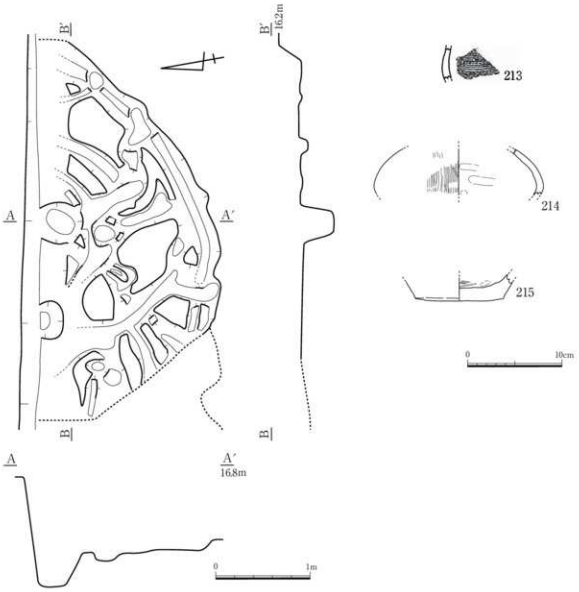
第 39 図　ST8 平面・エレベーション図（S=1/60）出土遺物　弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/3）

ST9

調査区（A区）I36･37/J36グリッドに位置する。西側は攪乱を受け、北側は調査区外のため未検出である。検出高は16.03 mを測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径4.00 m（検出長）、短径1.90 m（検出長）、深さ10～20cmを測る。埋土は茶灰色シルトである。壁際から幅20cm、深さ6cmを測る壁溝を1条検出しているが、床面は不整形状を呈し、主柱穴などの復元は困難である。出土遺物は弥生土器70点、石器類1点（砂岩の剥片･S38）で、うち図化したものは弥生土器3点（213～215）である。いずれも壺であり、213には竹管文と7条1単位のクシ描沈線が確認される。214は大きくソロバン状に張り出した胴部、215は平底の底部である。

出土した弥生土器片の大半が無文の資料である。213のクシ描沈線を有する弥生中期前半の資料は、混入資料だと考え、この遺構の所属時期は、214の時期・弥生後期前半（後期Ⅱ期、Ⅴ－3期）だと捉えておきたい。

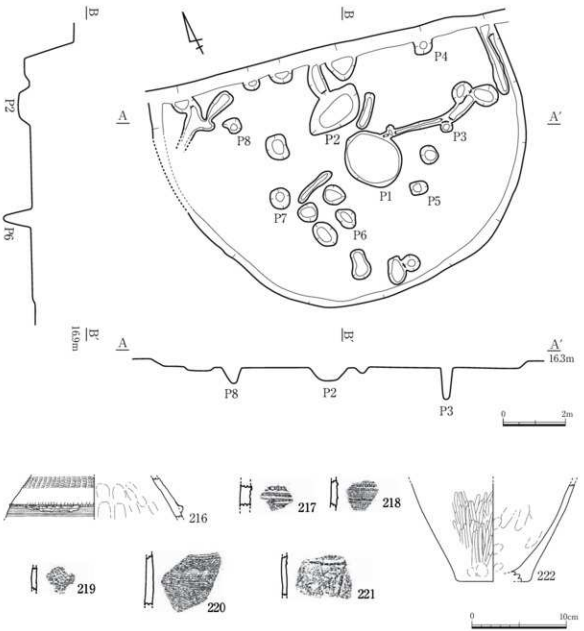
また、この遺構は近世以降の攪乱も受けており、陶器2点・磁器7点も出土している。



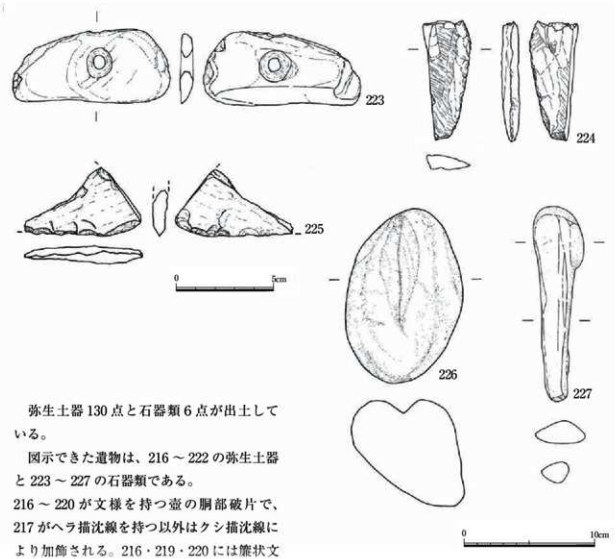
第40図　ST9平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物　弥生土器（S=1/4）

ST10

調査区（A区）M36･37/N36･37 グリッドに位置する。北側は調査区外のため未検出である。SD-Q に切られる。検出高は 16.11 m を測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径 5.70 m、短径 3.85 m（検出長）、深さ 8 ㎝を測る。埋土は茶灰色シルトである。主柱穴を構成するピットは P3 ～ 8 と考えられ、径 20 ～ 37㎝、深さ 25 ～ 51㎝を測る。P2 は中央ピットの可能性が考えられる。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 1.05 m、短径 0.70 m、深さ 21㎝を測る。溝状遺構と切り合い関係にある。東側の壁際から 5 ㎝ほど離れて幅 10 ～ 20㎝、深さ 3 ㎝を測る壁溝を部分的に 1 条検出している。



第 41 図　ST10 平面・エレベーション図（S=1/60）出土遺物　弥生土器（S=1/4）



第 42 図　ST10 出土遺物　石器類（S=1/2・1/3）

弥生土器 130 点と石器類 6 点が出土している。

図示できた遺物は、216 ～ 222 の弥生土器と 223 ～ 227 の石器類である。

216 ～ 220 が文様を持つ壺の胴部破片で、217 がヘラ描沈線を持つ以外はクシ描沈線により加飾される。216・219・220 には施状文が認められ、216 ～ 218 には幅狭の扁平で断面四角形の刻目粘土帯が貼付される。221 は甕で縦位と横位の微隆起帯を組み合わせて施文、222 は壺底部で外面は丁寧なヘラミガキで仕上げられている。

石器類は、223 の磨製石包丁（片刃で、紐孔は 1 孔、緑色岩系の層理が発達した石材）、224 の磨製石斧、225 の打製石器、226 と 227 の陰陽石である。図化していない資料だが、床面遺構である P2 からは、砂岩の剥片が 1 点出土している。226 の陰石と 227 の陽石と各々想定される自然石には、加工痕あるいは使用痕は全く認められない。床面直上の埋土がわずかに残る遺構から出土したこと、調査資料の中に類似する自然石がないこと、さらに形態の特殊性から、断定はできないものの「選択的に持ち込まれ、祭祀行為等に使用されたのではないか」と考えている。

遺構の所属時期は、弥生時代中期前半（中期Ⅰ－2 期、Ⅱ様式新段階）である。

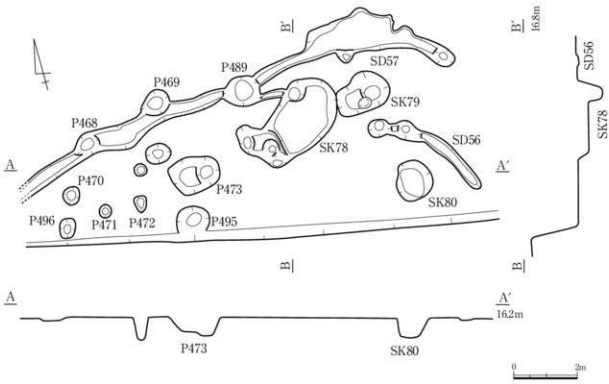
ST11

調査区（A区）I37/J37グリッドに位置する。南側は調査区外のため未検出である。SK78/SB5と切り合い関係にある。検出高は16.00 mを測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径7.07 m（検出長）、短径2.20 m（検出長）を測る。壁面の残存は確認できず、周溝状遺構（SD56）の検出をもって竪穴住居跡の可能性があるとしたと考えられる。周溝状遺構は、幅20～40cm、深さ5～7cmを測る。床面から小規模なピットを検出しているが、主柱穴の復元は困難である。なお北側に位置するSD57は拡張または別遺構（竪穴住居跡）の周溝の可能性が考えられる。

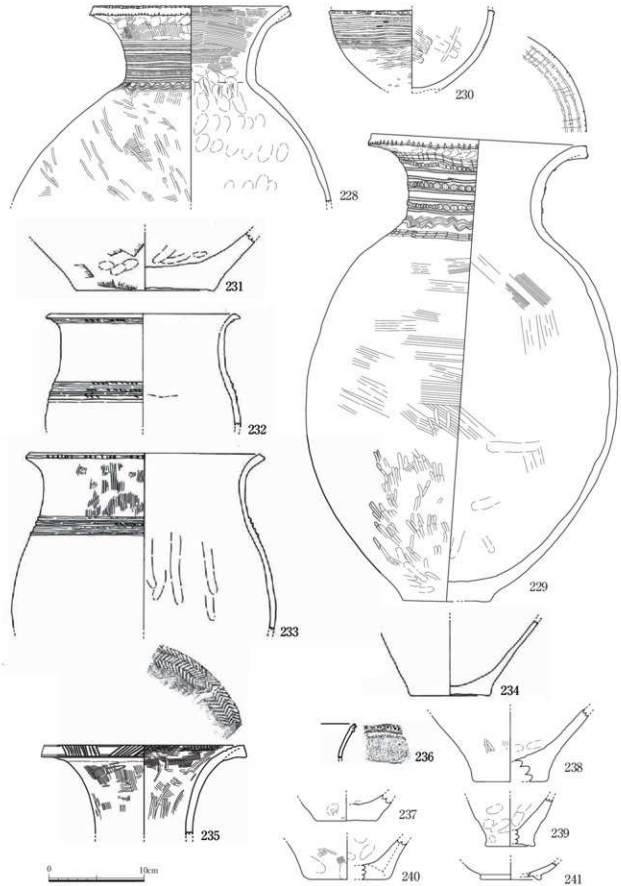
出土遺物は弥生土器196点、輪高台の土師器椀1点、炭化物（炭）5点、石器類2点が出土している。土師器椀は他時期の混入資料である。

図示した遺物は228～241の弥生土器と242のサヌカイト剥片である。

228は（土器1）で検出された土器で、クシ描沈線による直線文を頸部に波状文を頸胴界に施文、229は（土器4）頸部にクシ描簾状文・直線文を施文、クシ描沈線間に扁平な刻目粘土帯を貼付し、加飾する。また、口縁内面にも3条の扁平な粘土帯を貼付、刻目を施している。228と229ともにクシ描沈線の単位は2条であり、外面に粘土帯を貼付して成形した口唇には上下に刻目を持ち、胴部外面をヘラミガキで仕上げるなど共通点も多く、同時期（Ⅱ様式）の資料だと考えられる。これに対し、230の壺は球形に大きく張る胴部下半で中位が最大径、扁平な断面逆台形状の粘土帯を貼付し刻目を施す。粘土帯の下方に9条のヘラ描沈線による直線文を持つ。沈線下位には全体に横方向のヘラミガキが確認される。



第43図　ST11平面・エレベーション図（S=1/60）



第 44 図　ST11 出土遺物　弥生土器・土師器（S=1/4）

232・233は微隆起帯を持つ甕で、232は口縁部外面に1条と上胴部に3条の微隆起帯を、233は上胴部に4条の微隆起帯を貼付する。236の甕は、器壁が薄く胎土も異なる薄手式土器で、搬入土器である。

また、235は壺で口縁がラッパ状に大きく開き、口唇面に斜行する刻目を施文する。236は薄手土器の甕口縁、237～239は壺、240は甕でいずれも平底の底部である。底部には時期特定の難しい資料もあるが、時期が明らかな遺物の中で235のみが後期前半の土器であり、それ以外は前期末～中期初頭の遺物である。

242はサヌカイトの剥片で、末端辺に不規則な微細剥離が連続する。この連続する微細剥離は使用痕だと考えられる。

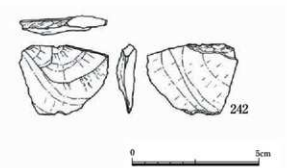
なお、出土遺物の状況、周溝と想定される溝状遺構の配置等を検討する中で、ST11の遺構の範囲だと考えた領域に2時期の竪穴住居が併存している可能性が生じてきた。弥生中期前半と後期前半の竪穴住居がこの位置で重なり合っている。残された遺構が、床面付近に限定されるなど遺構残存状況が良くないため、遺構の範囲の確定は困難である。報告段階では混乱を避けるため、章中ではST11として報告する。

簾状文の登場をⅡ様式新段階のメルクマールとして時期の判定を行ってきたが、この遺構に関しては、2条1単位のクシ描沈線と簾状文の共存する229は、Ⅱ様式古段階に位置付けたい。明らかに前段階（田村編年前期Ⅱ－b期）の資料だといえる230の多条化したヘラ描沈線を持つ壺と、若干の時期差があるかもしれないが、228・229のクシ描沈線を持つ土器をⅡ様式古段階だと捉えることで、これらの遺物の共時性を合理的に説明することができる。

2つの竪穴住居が重なっている可能性があり、遺構の所属時期として、弥生時代中期初頭と後期前半の2つの時期を想定している。

弥生時代中期初頭（中期Ⅰ－1、Ⅱ様式古段階）・（228～234、236～240を含む段階、関連遺構はP495・土器1、SD56、遺構内の土器集中地点は土器2・3）

弥生時代後期前半（後期Ⅱ期、Ⅴ－2期）・（235の壺を含む時期、遺構SD57、周辺での関連する土器集中地点は土器5・6）である。



第45図　ST11出土遺物　石器類（S=2/3）

2　土坑（SK）

全体で 87 基の土坑が検出されている。遺物が確認されたのは、そのうちの 58 基である。遺物の出土状況・遺構形態等により、明らかに古代以降だと特定できる遺構については、第 3 節古代以降の遺構と遺物の項で報告する。弥生時代であると確認できる遺構だけではなく、「土坑」については、遺物が出土せず時期の特定できない遺構もここで取り扱うこととする。古代以降の土坑も含まれている可能性がある。

遺物が出土した土坑の数

A区　5 基
B区　13 基
C区　33 基
D区　7 基

SK2

調査区（C区）N5 グリッドに位置する。検出高は 16.86 ～ 16.88 m を測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径 1.53 ～ 1.67 m、短径 0.93 ～ 1.42 m、深さ 13 ～ 15㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。全体の形状から土坑による切り合いと考えられる。

出土遺物は弥生土器 77 点と石器 2 点である。弥生土器はいずれも小片で、図示可能遺物はなかったが、櫛描直線文と微隆起帯の残る個体が出土しており、弥生中期前半に属する遺構だと考えられる。243 と 244 の磨製石包丁が出土している。

SK3

調査区（C区）M5・6/N5・6 グリッドに位置する。検出高は 16.90 m を測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 1.54 m、短径 0.86 m、深さ 15㎝を測る。断面形態は皿状を呈している。床面から長径 33㎝、短径 22㎝、深さ 1 ㎝を測るピット状の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。

出土遺物は土器片 6 点で土師器と弥生土器が混在し、糸切り底の土師器片も出土している。245 の扁平砂岩円礫を使用した敲石が出土している。弥生時代の遺構だと考えられる。

SK4

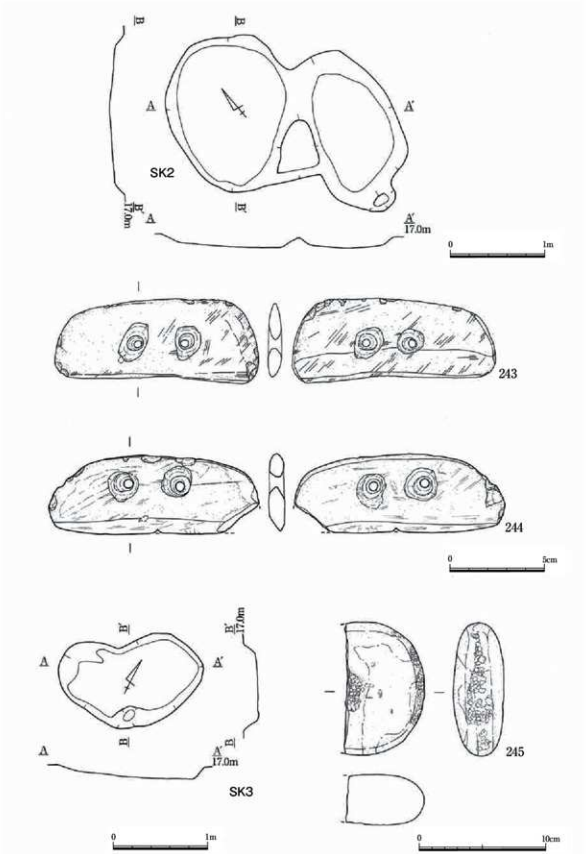
調査区（C区）M5 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。SX1 と切り合い関係にある。検出高は 16.89 m を測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 1.85 m、短径 0.48 m（検出長）、深さ 6 ㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルトである。

出土遺物は弥生土器 24 点で、図示し得た土器は 246・247 の 2 点である。246 は平底で外面全面にタタキ目を残す。遺構の時期は弥生後期前葉である。

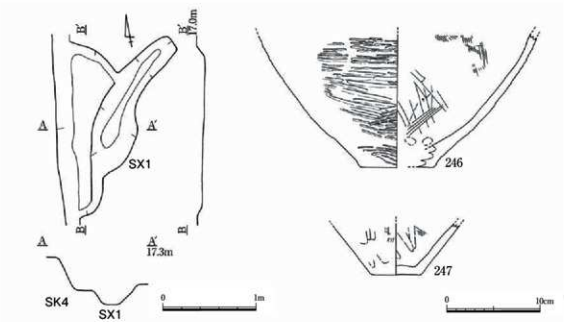
SK5

調査区（C区）M5 グリッドに位置する。検出高は 16.87 m を測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 1.00 m、短径 0.62 ～ 0.48 m、深さ 5 ㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。

出土遺物は細片のみで時期の特定はできない。



第46図　SK2・3平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物　石器類（S=1/2・1/3）



第 47 図　SK4・SX1 平面・エレベーション図（S=1/40）SK4 出土遺物　弥生土器（S=1/4）

SK6

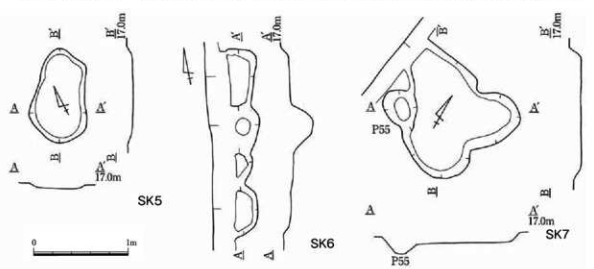
調査区（C区）M5･6 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。P40 と切り合い関係にある。検出高は 16.90 m を測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 2.00 m、短径 0.32 m（検出長）、深さ 10㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、小規模な段部を有する。埋土は黒褐色シルトである。

弥生土器が 9 点出土、無文で内面ヘラ削りが認められる個体もある。弥生後期前葉の遺構である。

SK7

調査区（C区）M3 グリッドに置する。西側は調査区外のため未検出である。P55 と切り合い関係にある。検出高は 16.78 m を測る。平面形態は不整形状を呈し、長径 1.50 m（検出長）、短径 1.28 m、深さ 9 ㎝を測る断面形態は皿状を呈する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。

弥生土器が 20 点、土師器が 5 点出土、糸切り底の個体も混じる。遺構の時期は特定できない。



第 48 図　SK5 ～ 7 平面・エレベーション図（S=1/40）

SK8

調査区（C区）M3/N3 グリッドに位置する。P56 と切り合い関係にある。検出高は 16.78 m を測る。平面形態は円形状を呈し、長径 1.40 m、短径 1.28 m、深さ 16cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

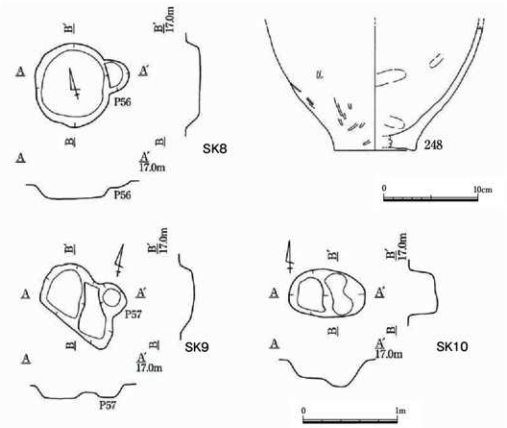
弥生土器が 2 点出土している。図示できた遺物は 248 の壺底部である。平底で無文、ヘラミガキで仕上げる点とチャート砂粒・小礫を多量に含む胎土の特徴から、遺構の所属時期は弥生時代後期前半である。

SK9

調査区（C区）N3 グリッドに位置する。P57 と切り合い関係にある。検出高は 16.76 m を測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 1.41 m、短径 1.06 m、深さ 14cmを測る。断面形態は台形状を呈し、東側に段部を有する。検出状態から SD3 と切り合いの可能性も考えられる。出土遺物はない。

SK10

調査区（C区）N3 グリッドに位置する。検出高は 16.87m を測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 1.32 m、短径 1.00 m、深さ 30cmを測る。断面形態は台形状を呈し、西側に段部を有する。出土遺物はない。



第 49 図　SK8～10 平面・エレベーション図（S=1/40）
SK8 出土遺物　弥生土器（S=1/4）

SK11

調査区（D区）O2グリッドに位置する。SK12（SB1）に切られている。検出高は16.81 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.00 m、短径0.90 m（検出長）、深さ21㎝を測る。断面形態は台形状を呈する。

249～251の弥生土器が出土している。249は器高43.8㎝と大型の壺形土器で、卵型の胴部から頸部は直立、口縁はラッパ状に開く。口唇は凹状で上下に刻目を持つ。上胴部の文様は6条1単位のクシ描原体による簾状文と3段の波状文である。胴部外面中位以下と口縁部・頸部内面はヘラミガキにより丁寧に仕上げられている。250は器高23.1㎝の甕形土器である。最大径は上胴部にある。頸胴界にはクサビ形の列点文を巡らせ、屈曲した後頸部は直立、口縁はラッパ状に開く。口唇は、ヨコナデにより面をなし、貼付口縁である。251は貼付した粘土帯に刻目を施し全周に巡らせる。器壁の厚さ5～6㎜で、胎土は微細粒砂を大量に含む搬入品で、県西部のいわゆる薄手土器である。249・250はほぼ完形であり、251は口縁部のみが確認されている。

遺構の時期は、弥生時代中期前半（中期Ⅰ－2期、Ⅱ様式新段階）である。

SK15

調査区（D区）O2グリッドに位置する。P77（SB2）を切る。検出高は16.80 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.79 m（検出長）、短径0.95 m、深さ12㎝を測る。断面形態は台形状を呈する。埋土は灰黒色シルトである。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

SK16

調査区（D区）N1･2/O1･2グリッドに位置する。北及び西側は調査区外のため未検出である。検出高は16.84 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.13 m（検出長）、短径0.60 m（検出長）、深さ8㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。床面からP68・69を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器3点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK17

調査区（C区）M2･3/N2･3グリッドに位置する。P84～87と切り合い関係にある。検出高は16.83 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.85 m、短径0.75 m、深さ18㎝を測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

SK18（D・古代の遺構）

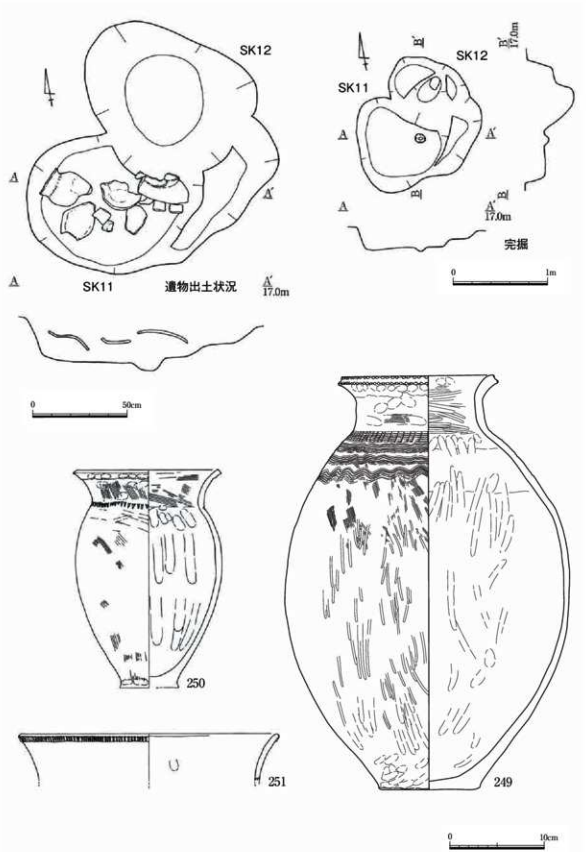
調査区（D区）T2グリッドに位置する。溝状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.70 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.92 m、短径0.72 m、深さ7㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。

須恵器3点が出土している。坏蓋、坏身口縁部の小片で、古代の資料ではあるが、詳細な時期は特定できない。

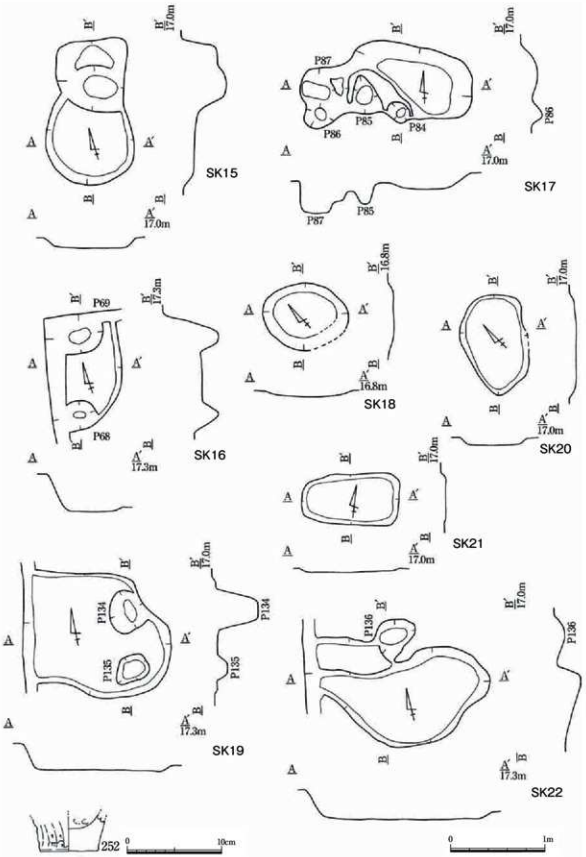
SK19

調査区（C区）M6･7/N6･7グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。検出高は16.88 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.45 m（検出長）、短径1.33 m、深さ3㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。床面からP134･135を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器24点が出土している。ヘラ描沈線のある小片、無文の素口縁、貼付口縁の小片が確認



第50図　SK11 平面･エレベーション図　遺物出土状況（S=1/20）完掘（S=1/40）
及び出土遺物　弥生土器（S=1/4）



第 51 図　SK15 ～ 22 平面・エレベーション図（S=1/40）SK19 出土遺物　弥生土器（S=1/4）

されている。252は甕底部で、外縁部と底面に砂粒の移動が認められる。前期中期の資料が混在、遺構形成時期は弥生時代だが、詳細な時期特定はできない。

SK20

調査区（C区）N6グリッドに位置する。小規模な溝状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.87 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.07 m、短径0.70 m、深さ6 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

SK21

調査区（C区）N6グリッドに位置する。検出高は16.85 mを測る。平面形態は隅丸方形状を呈し、長径1.04 m、短径0.54 m、深さ3 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

SK22

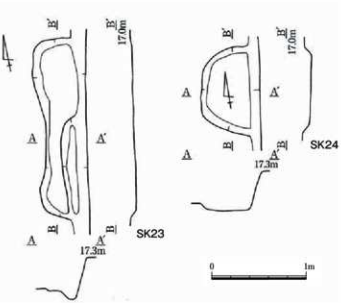
調査区（C区）M7/N7グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。北側は浅い溝状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.86 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.72 m（検出長）、短径1.00 m、深さ8～27cmを測る。断面形態は北側が落ち込む不整形状を呈する。

弥生土器9点が出土している。詳細な時期は特定できない。

SK23

調査区（C区）N6･7/O6･7グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.84 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.98 m、短径0.47 m（検出長）、深さ2 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。床面から長径1.13 m、短径0.15 m（検出長）、深さ7 cmを測る土坑状（東側未検出）の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

出土遺物はなく、時期の特定はできない。



第52図　SK23・24平面・エレベーション図（S=1/40）

SK24

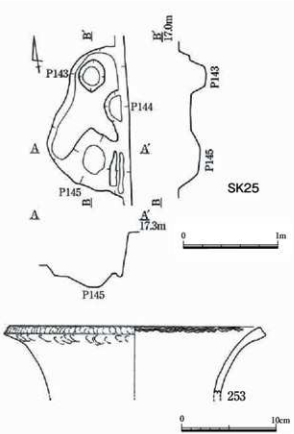
調査区（C区）N8/O8グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.82 mを測る。平面形態は方形状を呈し、長径0.98 m、短径0.54 m（検出長）、深さ9 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器2点が出土している。うち1点にクシ描沈線（波状文＋直線文）が確認されている。弥生時代中期前半に属する可能性があるが、出土点数が僅少であり、断定はできない。

SK25

調査区（C区）N9/O8･9グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.83 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.60 m、短径0.88 m（検出長）、深さ12㎝を測る。断面形態は台形状を呈する。床面からP143～145及び長径0.60 m、短径0.08 m（検出長）、深さ5㎝を測る溝状（東側未検出）の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

口縁部内面に4条のクシ描波状文を持つ壺（253）が出土している。遺構の所属時期は弥生時代中期である。



第53図　SK25平面･エレベーション図（S=1/40）
出土遺物　弥生土器（S=1/4）

SK26

調査区（C区）N9/O8･9グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.83 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.60 m、短径0.88 m（検出長）、深さ12㎝を測る。断面形態は台形状を呈する。床面からP143～145及び長径0.60 m、短径0.08 m（検出長）、深さ5㎝を測る溝状（東側未検出）の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器1点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK27

調査区（C区）N9･10/O9･10グリッドに位置する。SK26と切り合い関係にある。検出高は16.77 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.13 m、短径0.74 m、深さ2㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

SK28

調査区（C区）O10グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.80 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径0.75 m（検出長）、短径0.40 m、深さ5㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。床面から小規模なピットを検出しているが、本遺構との関係は不明である。弥生土器1点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK29

調査区（C区）N10グリッドに位置する。検出高は16.76 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.77 m、短径0.59 m、深さ5㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器12点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK30

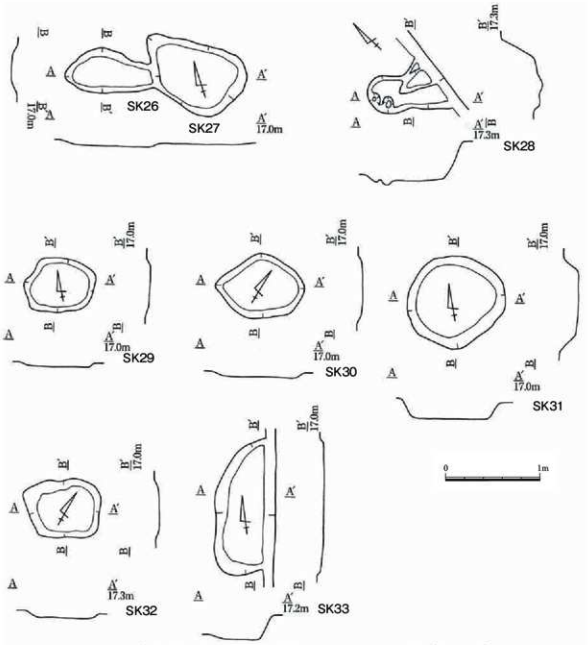
調査区（C区）N11･12グリッドに位置する。検出高は16.76 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.97 m、短径0.70 m、深さ5㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器8点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK31

調査区（C区）N11･12/O11･12グリッドに位置する。検出高は16.76 mを測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径1.05 m、短径1.00 m、深さ21㎝を測る。断面形態は台形状を呈する。

弥生土器6点が出土している。うち1点は口縁部であり、外面にミミズ腫れ状の微隆起帯の貼付が確認される。弥生時代中期前半の資料である。



第54図　SK26～33平面・エレベーション図（S=1/40）

SK33

調査区（C区）O13グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.75 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.50 m、短径0.53 m（検出長）、深さ5㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。

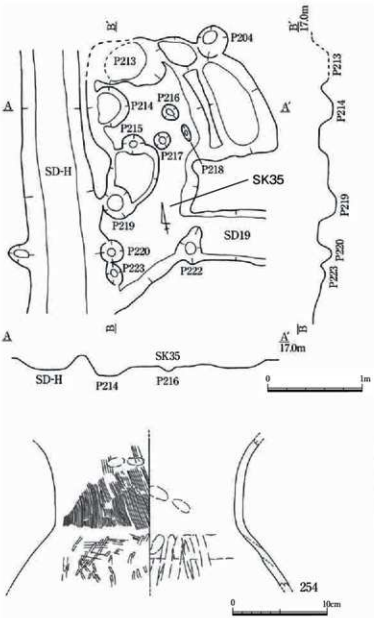
弥生土器5点が出土している。口縁部外面を拡張し刻目を施す小片、ヘラ描沈線による直線文と半裁竹管による双線による山形文を組み合わせた破片、ヘラミガキの残る平底の底部が出土している。弥生前期末～中期初頭の遺構である。

SK35

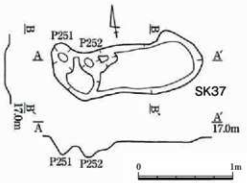
調査区（C区）N14グリッドに位置する。SD-H·19と切り合い関係にある。検出高は16.74 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径2.88 m（検出長）、短径1.13 m（検出長）、深さ7㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。床面からP213～220·222·223及び長径0.65 m、短径0.53 m、深さ7㎝を測る土坑状の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器60点が出土している。口縁部4点、底部2点を含んでいる。図示できた資料が254である。口縁部はいずれも小片で、口唇に刻目を持ち外面に微隆起帯を貼付するもの、逆L字状の形態のもの、口唇を丸く仕上げる素口縁がある。底部には、細粒砂が多量に含まれる高知県西半の薄手式土器と考えられる資料もある。図示した土器（254）は、なで肩の上胴部から頸部が直立した後開く広口の形態を持つ壺だが、口縁部形状は不明である。

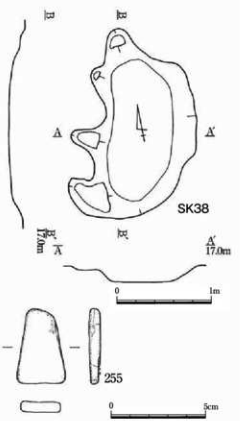
前期末～中期初頭の資料と後期前半の資料が混在するが、254の出土をもとに、後期前半の遺構だと捉えておきたい。



第55図　SK35及び周辺遺構平面・エレベーション図（S=1/40）
出土遺物　弥生土器（S=1/4）



第 56 図 SK37 平面・エレベーション図（S=1/40）



第 57 図　SK38 平面・エレベーション図（S=1/40）
出土遺物　石器類（S=1/2）

SK37

調査区（C区）N15/O15 グリッドに位置する。P251・252 と切り合い関係にある。検出高は 16.75 m を測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 1.56 m、短径 0.52 m、深さ 4 cm を測る。断面形態は皿状を呈する。弥生土器 2 点が出土している。弥生前期末～中期前半の可能性のある微隆起帯を持つ破片がある。

SK38

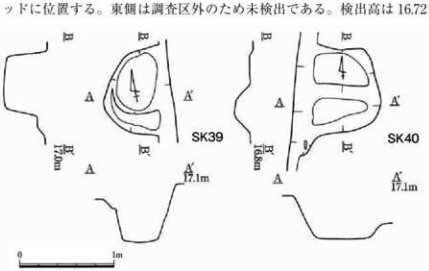
調査区（C区）N15/O15 グリッドに位置する。P251・252 と切り合い関係にある。検出高は 16.75 m を測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径 1.56 m、短径 0.52 m、深さ 4 cm を測る。断面形態は皿状を呈する。弥生土器 16 点と石器類 1 点が出土している。平底の底部が 1 点確認されている。詳細な時期を特定することはできない。図示した遺物は砂岩の平面形バチ状の扁平礫（255）で、何らかの工具として利用された可能性も考えられる。

SK39

調査区（C区）O15 グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は 16.72 m を測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径 0.98 m、短径 0.57 m、深さ 46cm を測る。断面形態は台形状を呈し、南側に段部を有する。弥生土器 6 点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。

SK40

調査区（C区）N11 グリッドに位置する。



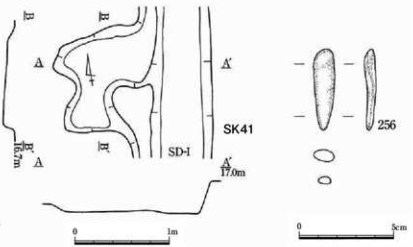
第 58 図　SK39・40 平面・エレベーション図（S=1/40）

西側は調査区外のため未検出である。検出高は 16.67 mを測る。平面形態は歪な方形状を呈し、長径 0.88 m、短径 0.70 m（検出長）、深さ 17cmを測る。断面形態は台形状を呈し、北側に段部を有する。埋土は黒褐色シルトである。

弥生土器 14 点と石器類 1 点（砂岩礫）が出土している。詳細な時期は特定できない。

SK41

調査区（C区）O17 グリッドに位置する。SD-Iと切り合い関係にある。検出高は 16.60 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径 1.12 m、短径 1.03 m（検出長）、深さ 10cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

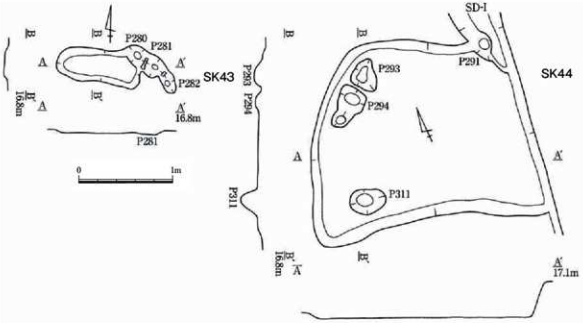


第 59 図　SK41 平面･エレベーション図（S=1/40）
出土遺物　石器類（S=1/2）

弥生土器 90 点が出土している。図示した 256 は砂岩の小型棒状礫で、加工痕はないが何らかの工具として利用された可能性がある。弥生時代の遺構だと考えられるものの、詳細な時期は特定できない。須恵器・坏蓋（宝珠あり）が 1 点混入している。

SK43

調査区（C区）N18/O18 グリッドに位置する。P280 と切り合い関係にある。検出高は 16.61 m を測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 0.94 m、短径 0.54 m、深さ 4 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はない。



第 60 図　SK43・44 及び周辺遺構平面･エレベーション図（S=1/40）

SK44

調査区（C区）N19/O19グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。SD-1/P291と切り合い関係にある。検出高は16.58 mを測る。平面形態は歪な長方形状を呈し、長径2.42 m（検出長）、短径2.12 m、深さ4 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。床面からP293・294・311を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

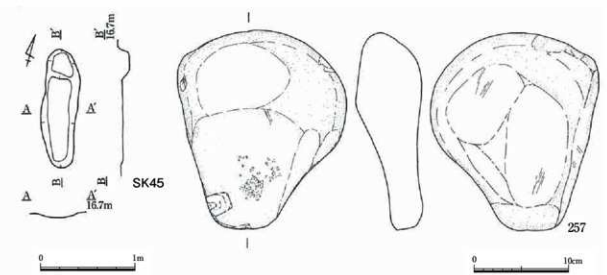
弥生土器34点が出土している。口縁部が3点出土、凹状の形態を持つ壺口縁、素口縁の鉢など、弥生時代後期前半の遺構だと考えられる。

SK45

調査区（C区）N19/O19グリッドに位置する。検出高は16.55 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.26 m、短径0.38 m、深さ4 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルトである。北側に長径32cm、短径32cm、深さ11cmを測るピット状の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器36点と砂岩被熱赤片礫、砥石が出土している。砥石（257）は、表裏面3ヶ所ずつ、側面に1ヶ所ずつ、合計8ヶ所に凹面を形成、砥石として使用されている。

出土した土器の特徴により弥生後期前半の遺構だと考えられる。



第61図　SK45平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物　石器類（S=1/4）

SK46

調査区（C区）O19グリッドに位置する。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.57 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.58 m（検出長）、短径0.63 m、深さ7 cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

弥生土器10点と炭2点が出土、口縁部と底部の小片が1点ずつ出土している。口縁は貼付口縁で、弥生中期の資料である。

SK47

調査区（C区）O22グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.50 mを測る。平面形態は長楕円形状を呈し、長径2.06 m、短径0.28 m（検出長）、深さ6 cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

SK48

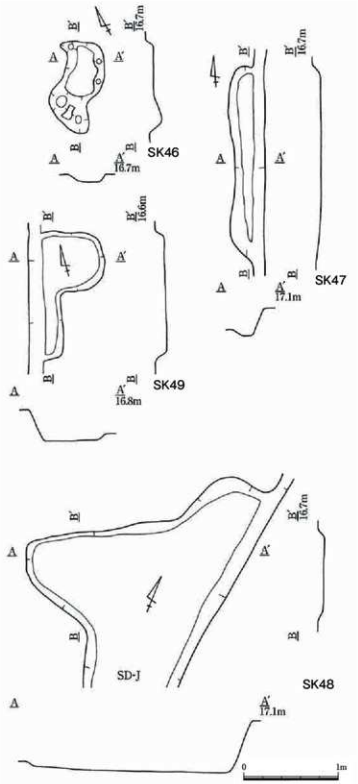
調査区（C区）O22グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。SD-Jと切り合い関係にある。検出高は16.49 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径2.19 m（検出長）、短径0.93 m、深さ6 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器86点と炭2点が出土している。うち、口縁部小片が6点と底部の小片が4点あり、出土した口縁部は弥生時代中期前半の特徴を持っている。

SK49

調査区（B区）O35グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。検出高は16.41 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.35 m、短径0.65～0.18 m（検出長）、深さ11cmを測る。断面形態は台形状を呈する。全体の形状から土坑による切り合いと考えられる。

弥生土器7点が出土しているが、詳細な時期は特定できない。



第62図　SK46～49平面・エレベーション図（S=1/40）

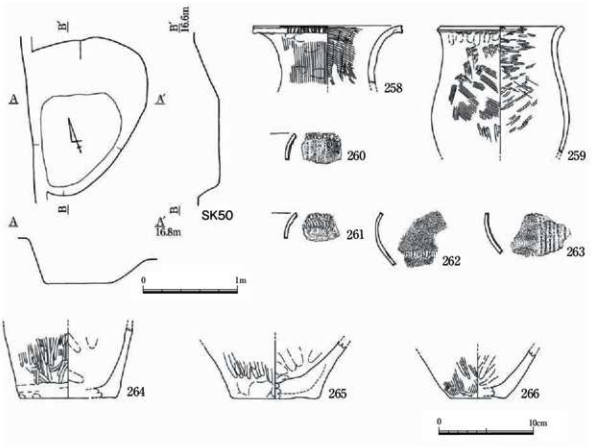
SK50

調査区（B区）O34･35/P34･35グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。検出高は16.42 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.73 m、短径1.12 m（検出長）、深さ24 cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

弥生土器57点が出土している。258は口縁がラッパ状に大きく開く広口壺で、口唇全面に刻目を施す。貼付口縁。259は遺構底面から出土している。無文で内外面にヘラミガキが残る。土佐型甕である。260～263は文様を持つ口縁部から頸部・上胴部にかけての小片で、同一個体だと考えられる。薄手式土器で、ミミズ腫れ状の微隆起帯や爪形の圧痕などで加飾されている。

また264・265は壺・底部だが、外面をヘラミガキで仕上げ、底面付近の外周をヘラナデにより、面取成形するという特徴がある。この時期の壺底部の中には、同様の特徴をもつものが一定量存在するようであり、他時期の資料と区別する基準の一つになる可能性がある。

遺構の時期は、弥生時代中期初頭～前半（中期Ⅰ－１・２期、Ⅱ様式）である。



第63図　SK50平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物　弥生土器（S=1/4）

SK51

調査区（B区）P35グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。SK52と切り合い関係にある。検出高は16.37mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.76 m（検出長）、短径0.42 m（検出長）、深さ20cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はない。

SK52

調査区（B区）P34グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。SK51と切り合い関係にある。検出高は16.35 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.70 m（検出長）、短径0.65 m、深さ11～18 cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

弥生土器2点が出土しているが、詳細な時期の特定はできない。

SK53

調査区（B区）P34グリッドに位置する。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.41 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径0.72 m、短径0.36 m、深さ11cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はない。

SK54

調査区（B区）P33･34グリッドに位置する。検出高は16.25 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.97 m、短径0.57 m、深さ7 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はない。

SK55

調査区（B区）P34グリッドに位置する。検出高は16.43 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.82 m、短径0.56 m、深さ16cmを測る。断面形態は台形状を呈し、東側に段部を有するが、全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。出土遺物はない。

SK56

調査区（B区）P33グリッドに位置する。検出高は16.45 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.75 m、短径0.35 m、深さ19cmを測る。断面形態は台形状を呈し、段部を有する。出土遺物はない。

SK57

調査区（B区）P33グリッドに位置する。検出高は16.47 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.99 m、短径0.75 m、深さ19cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はない。

SK58

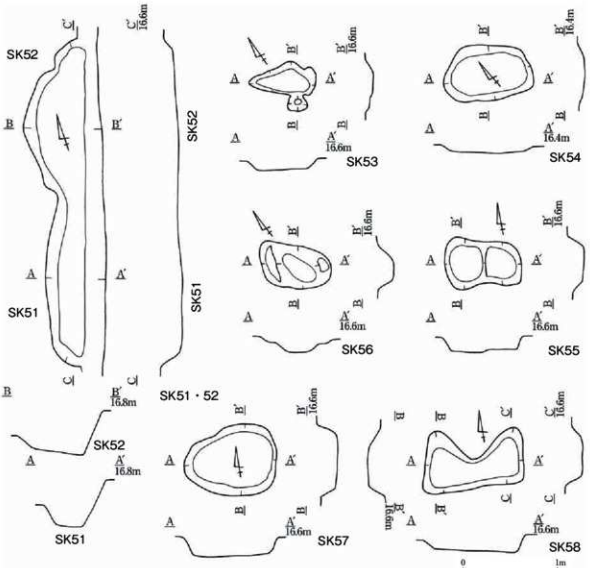
調査区（B区）P33グリッドに位置する。検出高は16.47 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.06 m、短径0.66 m、深さ10～20 cmを測る。断面形態は台形状を呈する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。出土遺物はない。

SK59

調査区（B区）P32グリッドに位置する。検出高は16.49 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.01 m、短径0.53 m、深さ22cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はない。

SK60

調査区（B区）P32グリッドに位置する。検出高は16.48 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径0.68 m、短径0.67 m、深さ24cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物なし。



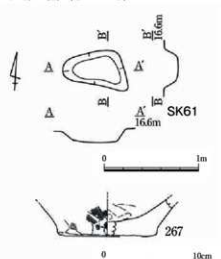
第64図　SK51～58平面･エレベーション図（S=1/40）

SK61

調査区（B区）P32グリッドに位置する。検出高は16.46 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.21 m、短径0.40 m、深さ14cmを測る。断面形態は台形状を呈する。弥生土器3点が出土している。図示した267は壺底部で平底、外縁部をヘラナデにより仕上げる。弥生後期前半。

SK62

調査区（B区）O26/P26グリッドに位置する。SD25と切り合い関係にある。検出高は16.39 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.30 m、短径0.65 m、深さ6 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。土器細片が5点出土しているが、時期の特定はできない。



第65図　SK61平面･エレベーション図（S=1/40）
出土遺物　弥生土器（S=1/4）

SK63

調査区（B区）O31/P31 グリッドに位置する。検出高は 16.47 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径 1.28 m（検出長）、短径 0.77 m、深さ 15cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

弥生土器 8 点が出土している。小片だが、ヘラ描沈線が 4 条確認できる個体がある。弥生時代前期末の遺物である。

SK64

調査区（B区）O31/P31 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。検出高は 16.47 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 0.93 m、短径 0.59 m（検出長）、深さ 13cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面から径 22cm、深さ 15cmを測るピット状の落ち込みを検出しているが、本遺構との関係は不明である。出土遺物はない。

SK65

調査区（B区）P31 グリッドに位置する。東側は近現代の攪乱により切られている。P395 と切り合い関係にある。検出高は 16.47 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 1.05 m、短径 0.76 m、深さ 15cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面から長径 18cm、短径 13cm、深さ 11cmを測るピット状遺構を検出しているが、本遺構との関係は不明である。出土遺物なし。

SK66

調査区（B区）O29･30/P29･30 グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。SD49/P402 と切り合い関係にある。検出高は 16.41 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 2.87 m、短径 0.77 m（検出長）、深さ 44 ～ 76 cmを測る。断面形態は台形状を呈し、段部を有する。出土遺物は弥生土器 10 点、貼付口縁の素口縁と平底の底部であり、弥生時代中期の遺物である。

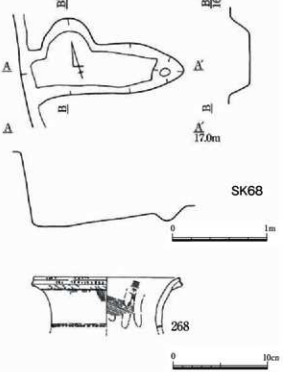
SK67

調査区（B区）O29/P29 グリッドに位置する。検出高は 16.25 mを測る。平面形態は歪な楕円形態状を呈し、長径 0.78 m、短径 0.50 m、深さ 12 ～ 31cmを測る。断面形態は台形状を呈し、段部を有する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。弥生土器 6 点と砂岩の被熱小円礫が出土している。うち、端部外面を拡張し刻目を施す口縁部小片が 2 点含まれている。

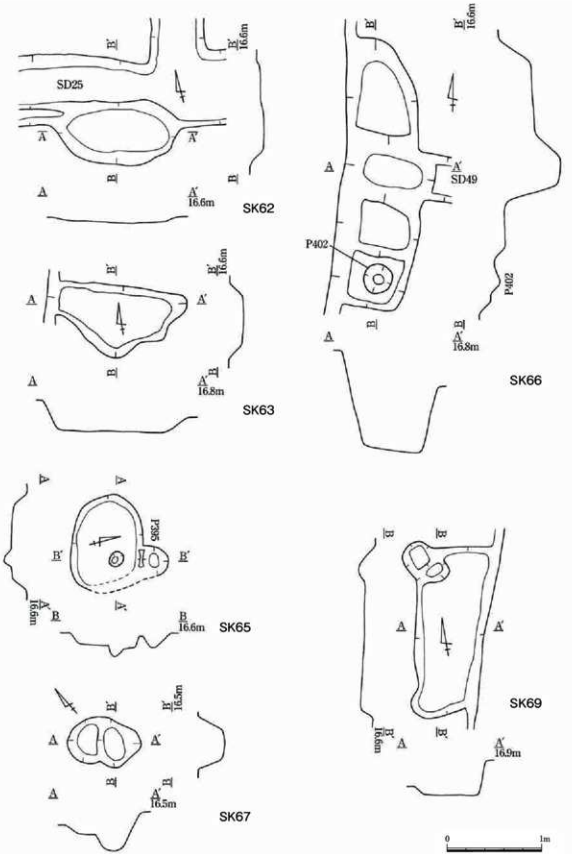
SK68

調査区（B区）O29/P29 グリッドに位置する。検出高は 16.21 mを測る。平面形態は溝状を呈し、長径 1.61 m（検出長）、短径 0.60 m、深さ 8 ～ 21cmを測る。断面形態は台形状を呈する。東端に小規模なピット状遺構を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

出土遺物は弥生土器 20 点、弥生時代中期の貼付口縁の土器（268）が 1 点出土している。



第 66 図　SK68 平面･エレベーション図（S=1/40）
出土遺物　弥生土器（S=1/4）



第67図　SK62・63・65・66・67・69平面・エレベーション図（S=1/40）

SK69

調査区（B区）Q30グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.51 mを測る。平面形態は歪な長方形状を呈し、長径1.80 m、短径0.66 m（検出高）、深さ11cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

出土遺物は弥生土器30点、すべて無文の土器であり、弥生後期前半の資料だと考えられる。

SK70

調査区（B区）P28グリッドに位置する。SD51/P423･424と切り合い関係にある。検出高は16.23 mを測る。平面形態は隅丸方形状を呈し、長径1.82 m、短径1.40 m、深さ31cmを測る。断面形態は台形状を呈し、北側を除いて段部を有する。

出土遺物は弥生土器262点と石器類3点で、図示できた遺物は（269 ～ 280）の弥生土器と（281）の敲石、（282）の軽石である。

269・270・277が壺、271 ～ 276・278 ～ 280が甕である。269・270はラッパ状に開く口縁で、貼付口縁である。269は上下に刻み目が残り、270は口唇がわずかに凹状となる。271は貼付口縁端部外面に刻目、上胴部に列点文を施す。273は内面ヘラミガキで丁寧に仕上げる。無文の甕頸部～上胴部で、外面にタタキ目の痕跡を認めることができる。この時期（中期中葉か）のタタキ目とすれば、高知平野では古い例となる。

272は器壁5 ㎜と薄く、胎土の特徴からも薄手土器だと考えられる。上胴部にミミズ腫れ状の微隆起帯と豆粒状の浮文、頸部に扁平な刻み目を持つ粘土帯を貼付する。頸部の縦位微隆起帯は13条に達する。274と275は同一個体で、外面に煤状炭化物が付着する甕だが、細かいハケ調整で丁寧に仕上げられている。胎土は精選されており1 ～ 2 ㎜大の砂粒を若干量含む以外は微細粒砂が観察されるのみで、胎土の特徴からも搬入品だと考えられる。275の底面は板ケズリにより砂粒が移動する。

遺構の所属時期は弥生時代中期中葉（中期Ⅱ－1期、Ⅲ様式古段階）である。

SK71

調査区（B区）Q28グリッドに位置する。検出高は16.24 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.93 m、短径0.73 m、深さ22cmを測る。断面形態は台形状を呈する。出土遺物はない。

SK72

調査区（B区）Q27グリッドに位置する。東側は調査区外のため未検出である。検出高は16.30 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.00 m、短径0.73 m、深さ21cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

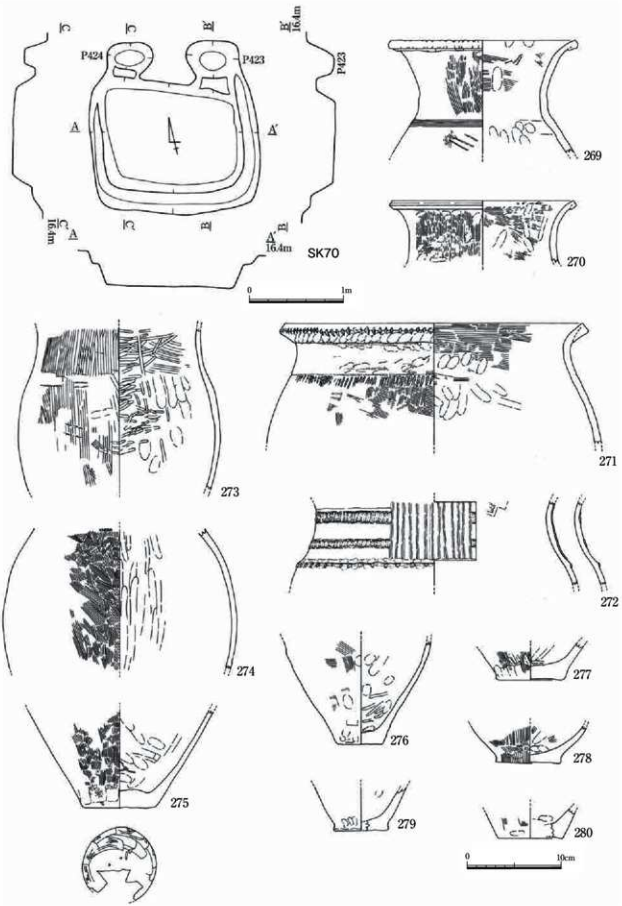
弥生土器8点が出土しているが、詳細な時期の特定はできない。

SK73－A

調査区（B区）Q27･28グリッドに位置する。検出高は16.20 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.03 m、短径0.65 m、深さ9 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物なし。

SK73－B

調査区（B区）O28グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。検出高は16.36 mを測る。平面形態は円形状を呈し、長径0.66 m、短径0.40 m、深さ9 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。出土遺物はない。



第68図　SK70平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物1　弥生土器（S=1/4）

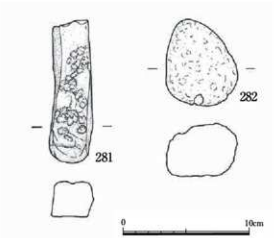
SK74

調査区（B区）P7グリッドに位置する。SD54と切り合い関係にある。検出高は16.32 mを測る。平面形態は歪な方形状を呈し、長径0.82 m、短径0.63 m（検出長）、深さ9cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器35点が出土している。うち1点は、貼付口縁で端部外面に刻目がある。

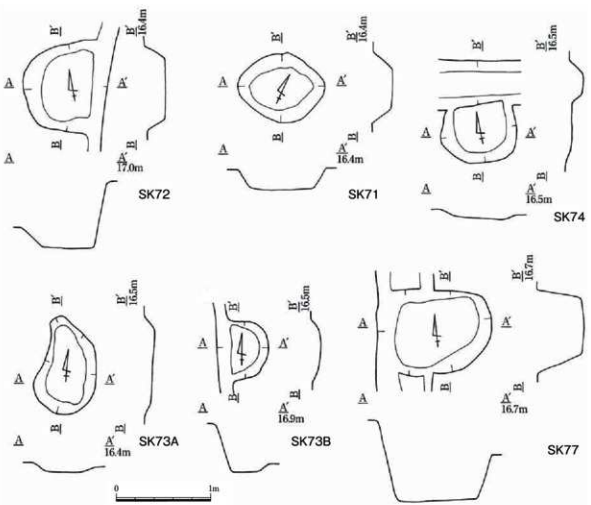
SK75

調査区（B区）O27/P27グリッドに位置する。SD54と切り合い関係にある。検出高は16.35 mを測る。西側は未検出であるが、平面形態は隅丸長方形状を呈し、長径1.69 m（検出長）、短径0.50 m（検出長）、深さ4 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。



第69図　SK70出土遺物2　石器類（S=1/3）

弥生土器3点と石器類1点（283）が出土している。283は、長さ4.7cmの小型で細長い棒状の自然礫である。詳細な時期の特定はできない。



第70図　SK71・72・73A・73B・74・77平面・エレベーション図（S=1/40）

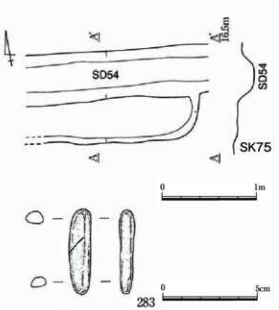
SK77（ST8の南端・切り合いあり）

調査区（C区）N23グリッドに位置する。西側は調査区外のため未検出である。ST8を切り、SD-Hに切られる。検出高は16.66 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.02 m（検出長）、短径0.87 m、深さ48cmを測る。断面形態は台形状を呈する。埋土は黒灰色シルトである。

弥生土器が6点出土しているが、時期の特定はできない。

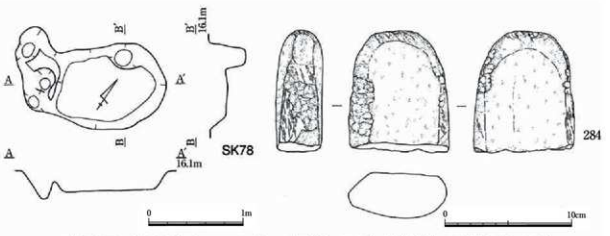
SK78

調査区（A区）J37グリッドに位置する。ST11（SD56）/ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は15.96 mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.22 m、短径0.93 m、深さ21cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面から長径47cm、短径27cm、深さ20cmを測るピットを検出しているが、本遺構との関係は不明である。



第71図　SK75平面・エレベーション図（S=1/40）
出土遺物　石器類（S=1/2）

弥生土器44点が出土している。口唇が凹状で上下端に刻目を持つ貼付口縁と無文の素口縁の口縁部小片が2点と平底の底部小片が2点出土している。284は、御荷鉾緑色岩の磨製石斧（伐採斧）基部である。側縁は研磨により面をつくり出す。時期が確認できる出土遺物は、弥生中期前半である。

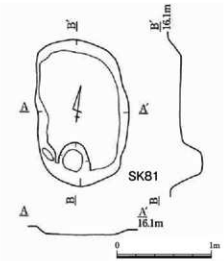


第72図　SK78平面･エレベーション図（S=1/40）出土遺物　石器類（S=1/3）

SK81

調査区（A区）J37グリッドに位置する。SD57と切り合い関係にある。検出高は15.98 mを測る。平面形態は隅丸長方形状を呈し、長径1.60 m、短径1.00 m、深さ12cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面から長径46cm、短径33cm、深さ22cmを測るピット状遺構を検出しているが、本遺構との関係は不明である。

弥生土器22点が出土している。文様があるものを2点（上胴部にミミズ腫れ状の微隆起帯を持つ個体とクシ描直線文と扁平な刻目粘土帯を貼付する個体）確認した。弥生中期初頭の遺構である。



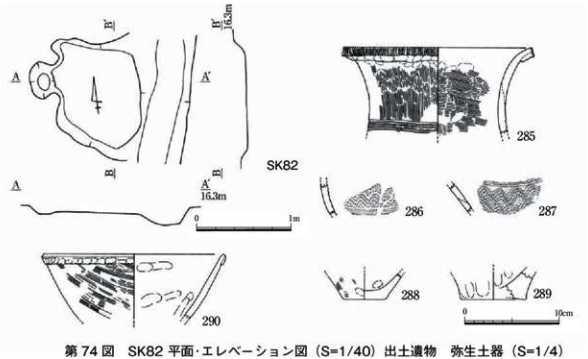
第73図　SK81 平面・エレベーション図（S=1/40）

SK82

調査区（A区）L36グリッドに位置する。SD-P/ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は16.13 mを測る。平面形態は歪な方形状を呈し、長径1.27 m、短径0.92 m（検出長）、深さ8 cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

弥生土器62点が出土、図示できたものは、285～290の6点である。285～287が壺、288・289が甕（底部）、290が鉢である。壺（285）、鉢（290）ともに貼付口縁で、285の頸部には5条のクシ描沈線が確認される。

遺構の時期は、弥生時代中期前半（中期Ⅰ－2期、Ⅱ様式新段階）である。



第74図　SK82 平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物　弥生土器（S=1/4）

SK83

調査区（A区）L36･37 グリッドに位置する。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は 16.17 mを測る。平面形態は歪な長方形状を呈し、長径 1.61 m、短径 0.90 m、深さ 11cmを測る。断面形態は台形状を呈する。床面から長径 50cm、短径 42cm、深さ 32cmを測るピットを検出しているが、本遺構との関係は不明である。弥生土器 20 点が出土している。貼付口縁が 2 点あり、弥生中期の遺構だと考えられる。291・292 の弥生土器壺底部を図示した。

SK84

調査区（A区）M37 グリッドに位置する。南側は調査区外のため未検出である。溝状遺構と切り合い関係にある。検出高は 16.13 mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径 1.07 m、短径 0.35 m（検出長）、深さ 20cmを測る。断面形態は台形状を呈する。遺物は出土していない。

SK85

調査区（A区）M35/N37 グリッドに位置する。南側は調査区外のため未検出である。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は 16.10 m を測る。平面形態は円形状を呈し、長径 2.68 m（検出長）、短径 0.75 m（検出長）、深さ 16cmを測る。断面形態は台形状を呈する。弥生土器 56 点と土師器 1 点、炭 1 点が出土している。貼付口縁や微隆起帯を持つ土器片の存在から、弥生時代中期の遺構の可能性があるが詳細は不明。土師器は 11 ～ 12 世紀代の供膳具だが、破片であり混入資料だと考えている。293・294 の弥生土器壺底部を図示した。

SK86

調査区（A区）N37 グリッドに位置する。ピット・溝状遺構と切り合い関係にある。検出高は 16.10 mを測る。平面形態は方形状を呈し、長径 0.88 m、短径 0.57 m、深さ 13cmを測る。断面形態は台形状を呈する。弥生土器 2 点が出土している。うち 1 点は、口縁部小片で素口縁である。

SK87

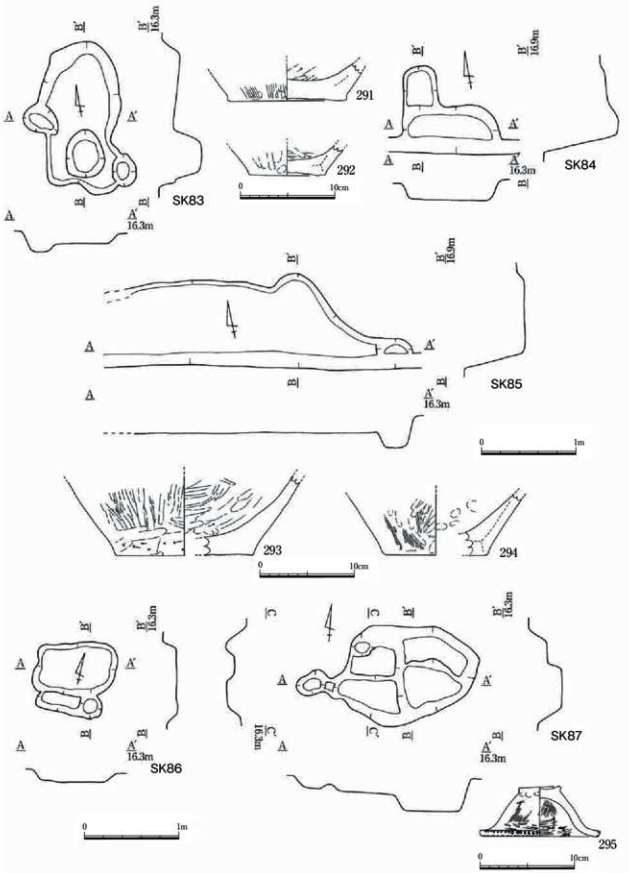
調査区（A区）K35 グリッドに位置する。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出高は 16.05 mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径 1.58 m、短径 1.07 m、深さ 37cmを測る。断面形態は台形状を呈し、段部を有する。形状から切り合いの可能性も考えられる。

弥生土器 9 点が出土している。295 は、高さ 5.2cmの蓋である。脚端部には上下に刻目を施し、内外面には環状の黒斑が残る。

遺構の時期は弥生時代中期である。

SK88

調査区（B区）P27 グリッドに位置する。検出高は 16.35 mを測る。平面形態は歪な台形状を呈し、長径 1.00 m、短径 0.95 m、深さ 30cmを測る。断面形態は台形状を呈し、浅い段部を有する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。遺物は出土していない。



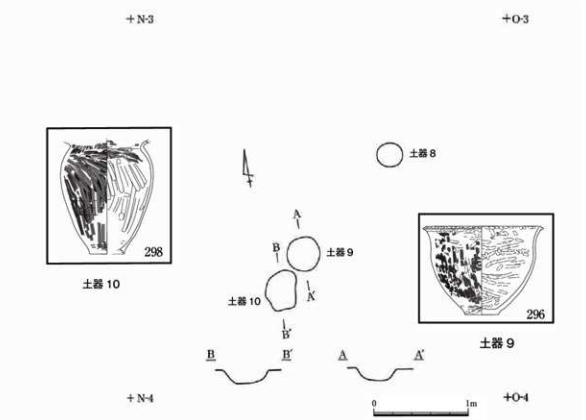
第 75 図　SK83 ～ 87 平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物　弥生土器（S=1/4）

3．土器棺（土器９・10　C区）

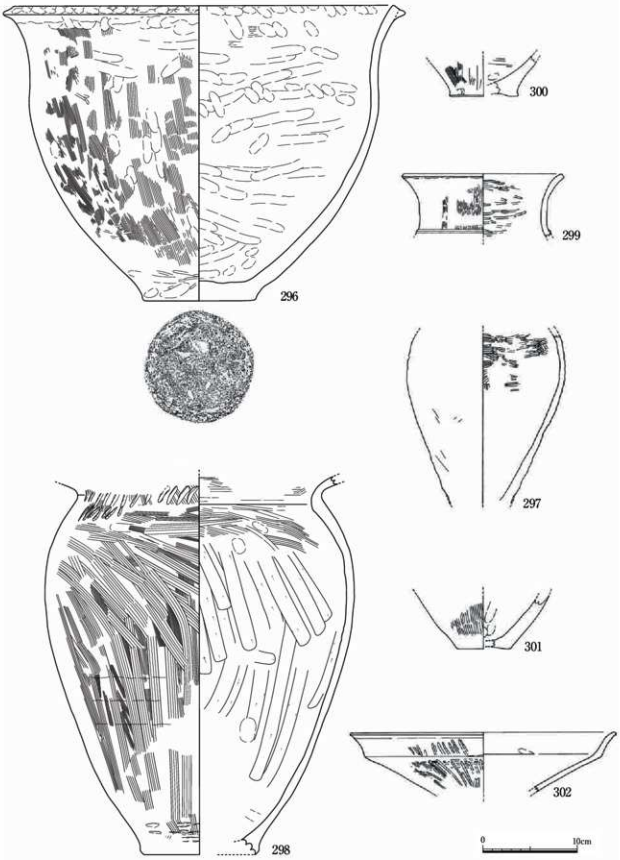
試掘調査時に「土器棺」として報告された資料がある。出土状況等について十分把握できていない点もあるが、遺物出土地点・エレベーション図（第76図）と出土遺物の実測図を提示する。調査時点では「土器１・２・３」として確認され、調査後の呼称変更により「土器８・９・10」となった資料のうち、「土器９・10」が土器棺である。調査時に一緒に取り上げられた土器片も併せて図化し報告する。

出土遺物は弥生土器95点、図示できた遺物は296～302の７点である。296は土器９として取りあげられた遺物で、口径40cm、器高31cmを超える大型の鉢である。口縁外面に粘土紐を貼付、口唇は凹状になる。外面はハケ、ナデ調整で丁寧に仕上げており、底面付近はヘラミガキで仕上げられている。297は土器９・10として取り上げられている。無文の甕で、胴部最大径は上胴部にあり、内面はヘラミガキで仕上げられる。298～301は土器10として取り上げられている。298は口縁部形状不明、頸部に列点文を施文する壺である。内面上胴部以下ヘラケズリ（下→上方向）、外面は粗いハケ調整で仕上げられ、底面付近と胴部外面にわずかにタタキ目の痕跡を残す。302は、「土器10内」として取りあげられた資料である。坏部が一旦屈曲した後外反する高坏であり、口縁外面にヨコナデによる弱い段が形成されている。

土器棺の時期は、弥生時代後期前半（後期Ⅱ期、Ⅴ－２・３期）である。



第76図　グリッドN-3土器８～10出土地点平面・エレベーション図（S=1/40）



第 77 図　土器棺墓 (土器 9・10) 出土遺物　弥生土器（S=1/4）

4．溝状遺構（ＳＤ）

弥生時代の溝だと考えられる遺構は、Ｃ区のSD3とそれに並行して検出された石列SD3-2、SD8とＡ区のSD56・57・58・59である。Ａ区のSD56とSD57はST11に付属した周溝状遺構だと捉え、ST11の項で報告した。これらの溝については、溝の走る方向と出土遺物のまとまりから弥生時代だと判断したもので、これ以外にも弥生時代の溝が存在する可能性はある。

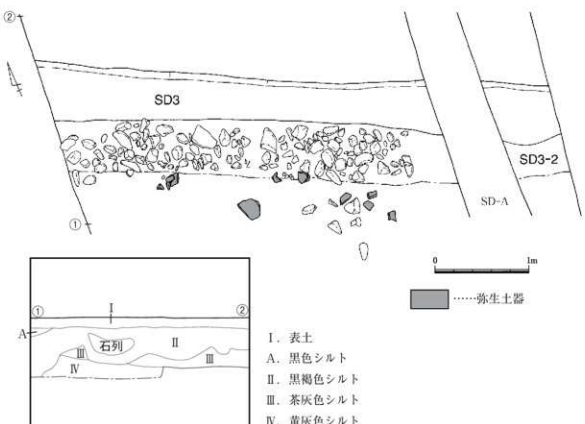
調査範囲内には規格性を持って一定の方向に走る溝が多い。これらの溝については、出土遺物以外に、方向と規格性を根拠にして古代の遺構として取り扱う。溝の中からも弥生土器が一定量出土しているが、明らかに古代の溝だと判断できる遺構から出土した弥生土器については、包含層出土弥生土器の前にまとめて提示することとする。

SD3

調査区（Ｃ区）M3/N3·4グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SD-Ａと切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-64°-Wで、ほぼ直線状に検出している。検出高は16.75 mを測る。検出規模は5.38 × 0.43 ～ 0.53 m、床面高は東端で16.73 m、西端で16.70 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは4 cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

石列状遺構と並行して検出している。

出土遺物は弥生土器33点、古代の資料も混在している。



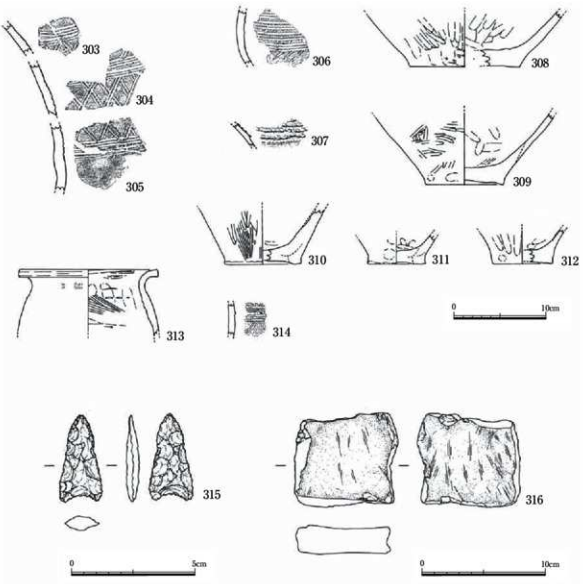
第78図　SD3・SD3-2（石列）平面·セクション図（S=1/40）

SD3-2（石列状遺構として検出された遺構）

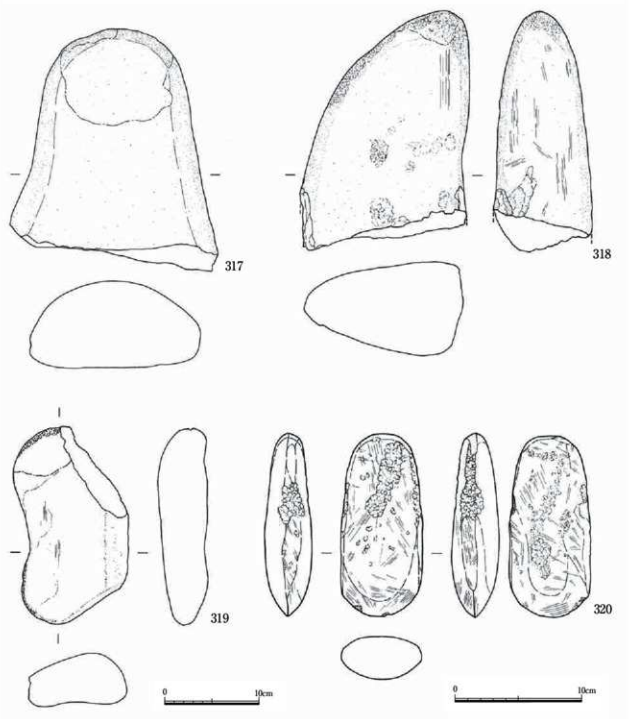
弥生時代前期末の石列状遺構として検出された遺構である。SD3に沿って石列が検出されている。東西方向の溝であり、溝の方向はSD3と同じく主軸方向はN-64°-W、堆積状況からSD3と一連の溝であり、遺構廃絶の段階で礫の投棄によって埋められたものだと判断した。

出土遺物は弥生土器102点、須恵器2点、土師器2点で、弥生土器のうち口縁部が6点、文様等時期の判断できる資料が22点含まれている。石列上層として確認された資料もここで取り扱っている。

石列の上面からは、赤彩土師器が2点確認されている。



第79図　SD3-2（石列）及び上層包含層出土遺物1　弥生土器（S=1/4）石器類（S=2/3・1/3）



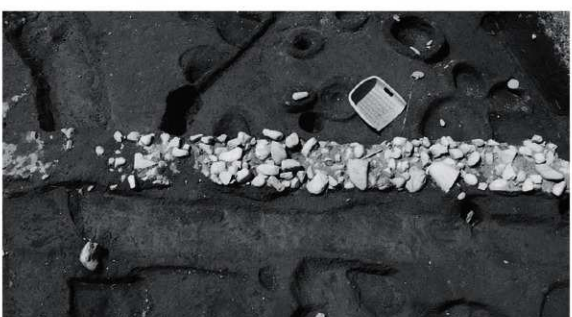
第 80 図　SD3-2（石列）及び上層包含層出土遺物２　石器類（S=1/4・1/3）

出土遺物は、303 ～ 314 の弥生土器と 315 ～ 320 の石器類である。石列上層からは、先述の古代の赤彩土師器片や 313 の後期前半の甕などが混在しているが、石列（ＳＤ３-２）中から出土する遺物は、クシ描沈線と双線による格子目文などⅡ様式古段階を特徴づける文様に限られている。307 のようなミミズ腫れ状の微隆起帯もあり、これらの出土遺物より、ＳＤ３及びＳＤ３-２の時期は、弥生時代中期初頭（中期Ⅰ－１期、Ⅱ様式古段階併行期）だと考えられる。

石列として検出した礫は砂岩礫であり、全体の細かい検討はできていないが、317 ～ 319 の敲石類と類似した砂岩円礫であったようである。端部及び表裏面に敲打痕が残るだけでなく、被熱赤変が認められるもの、擦痕の残る面が多く確認されるものなど、重要な情報が含まれている。これらの敲石類は、作業台として、あるいは磨製石器製作時の砥石として、多角的に利用されたたものである。316 は石列中出土の砥石である。

315 はサヌカイトの打製石鏃、320 は石列横の包含層中出土の緑色岩製の太型蛤刃石斧である。完形品で全面に擦痕がのこり、側面・基部ともに丁寧に仕上げられている。素材は断面がやや扁平な礫を使用しており、田村遺跡群での分類に照らすと、Ｂ１類ということになる。前期まで主に使われた古い様相だと捉えられており、それを考慮すれば、この溝の時期の遺物として大過ないものと思われる。

遺構の所属時期は、弥生時代中期初頭（Ⅱ－１期）である。

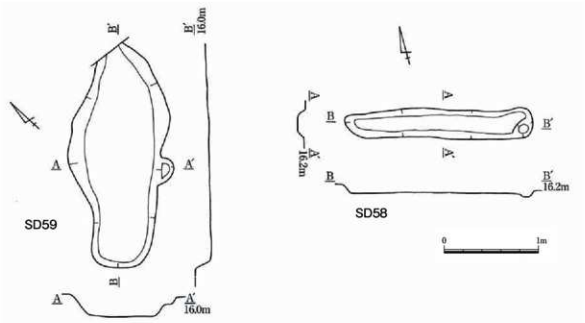


ＳＤ３とＳＤ３-２（検出された石列）

SD8

調査区（Ｃ区）N7/O7 グリッドに位置する。西側は試掘 TR により未検出である。SD7/P137 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向は N-62°-W である。検出高は 16.83 mを測る。検出規模は 2.50 × 0.63 m、床面高は東端で 16.61 m、西端で 16.71 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは 12 ～ 21㎝を測る。東端はピット状に落ち込んでいる。

出土遺物はないが、溝の方向が他の古代の溝と異なるため、弥生時代の可能性がある溝とした。他時期の可能性もある。



第 81 図　SD58・59 平面・エレベーション図（S=1/40）

SD56（A区）

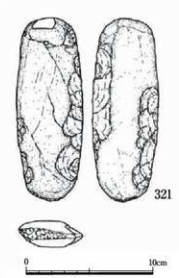
ST11 の周溝だと考えている。この場合、この周溝の時期は弥生時代中期初頭になる可能性がある。

SD57（A区）

ST11 の周溝だと考えている。後期前半だと考えている。本来 ST11 の範囲の外側につながるが、ST11 の範囲で、２時期の住居が重なっており、遺物の混在も認められる。

SD58（A区）

ST11 の東側に位置する溝状の遺構で、主軸方向は N - 75° - W である。検出高は 16.18 m、規模は 0.32 × 2.00 m、床面高は東端で 16.09 m、西端で 16.08 mである。弥生土器が１点出土しているが、詳細な時期の特定はできない。



第 82 図　SD59 出土遺物
磨製石斧未製品（S=1/3）

SD59（A区）

ST11 の北東に位置する溝状の遺構で、主軸方向は N - 47° - E である。検出高は 16.06 m、規模は 0.7 ～ 1.0 × 2.44 m、床面高は北東端で 15.88 m、南西端で 15.84 mである。321 の御荷鉾緑色岩製の磨製石斧未製品が出土している。弥生時代の遺構だと考えられるが、詳細な時期の特定はできない。

5．ピット

全域から合計 424 基のピットが確認されている。各ピットの検出面標高、規模、深さについては、巻末の遺構計測表（ピット）にまとめた。計測表中では弥生時代以外のピット、また、竪穴住居の底面遺構等も含めて、全てのピットの検出面標高および規模をまとめている。直径 10cmほどのものから、1 辺 1 m前後の古代の方形ピットまで、ピットとした遺構は規模や性格も様々である。なお、古代以降だと断定できる掘立柱建物を構成するピットについては、「古代以降の遺構と遺物」の項でも取り上げている。

検出したピットのうち 156 基から遺物が出土している。ピットから出土した遺物については、表にまとめて示す。出土遺物には細片も多く、遺物の時期が遺構の形成時期と断定することは難しい。その中で、322 ～ 363 の弥生土器と 364 ～ 366 の石器類については図化して報告することができた。

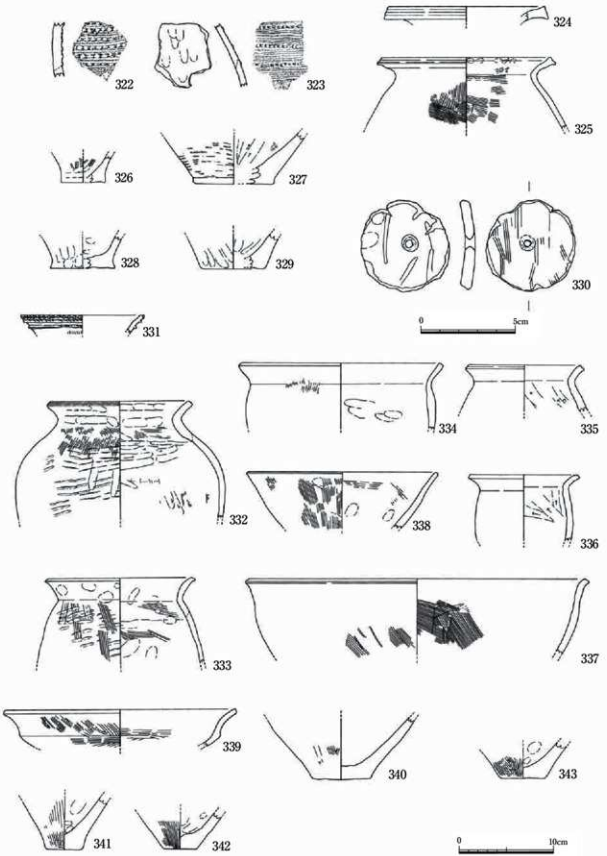
図示した遺物が出土した遺構は、322（P134）、323（P145）、324 ～ 327（P149）、328･329（P173）、330（P174）、331 ～ 343（P176）－以上第 83 図－、344･345（P254）、346･347（P305）、348（P369）、349（P377）、350 ～ 352（P402）、353（P421）、354・355（P452）、356（P442）、357（P453）、358･359（P459）、360（P460）、361（P492）、362（P494）－以上第 84 図－、363（P429）－第 85 図－の計 42 点である。また石器類で図示した資料は第 86 図に示した 364（P132）、365（P217）、366（P462）の 3 点である。

322･323 はクシ描沈線と扁平な刻目粘土帯で施文する壺胴部片（中期初頭）、324・325 は口縁に凹線文が残るが、やや退化しており、後期前半（後期Ⅱ期・Ⅴ－2 期）と考えられる資料である。326・327 の底部にはタタキ目が残る。328・329 の底部外周は弥生時代中期前半の土器にみられる特徴を持っている。330 は土器片転用の紡錘車であり、外面にヘラミガキが残る弥生時代のものだが詳細な時期特定は難しい。

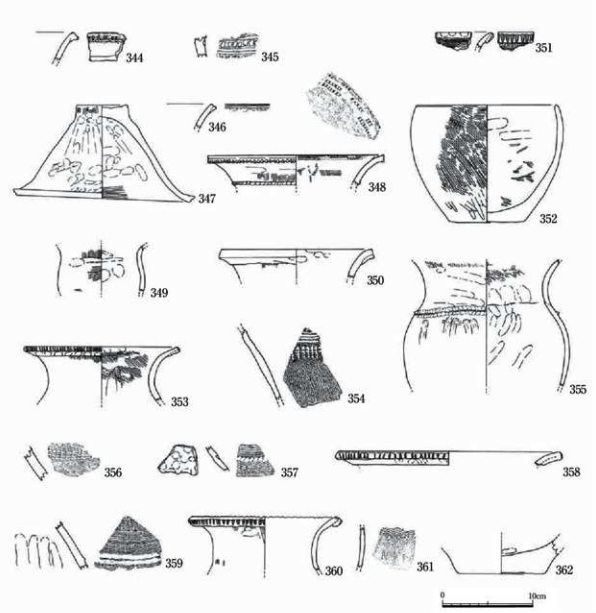
P176 からは、弥生土器が 55 点とまとまった量が出土している。うち 13 点を図化した。凹線が退化し、タタキ目が顕在化しはじめる段階であり、弥生時代後期前半（後期Ⅱ期・Ⅴ－3 期）の資料である。331 弥生時代中期の資料で、混入資料だと考えられる。

第 84 図の 344・345 はクシ描沈線を持ち、中期初頭のⅡ様式、347 の蓋も中期の資料で、断定はできないがⅡ様式併行期ではないかと考えられる。348 は幅狭の刻目粘土帯を 3 条口縁内面に貼付する中期初頭の資料である。349 は甕だが、時期は断定できない。350･351 は貼付口縁で、352 のボウル状になった鉢は中期前半の特徴を持つ。354 ～ 357 の簾状文は中期Ⅰ－2 期の特徴を持ち、358 ～ 361 は中期Ⅱ－1 期のクシ描沈線や貼付口縁の特徴を持っている。

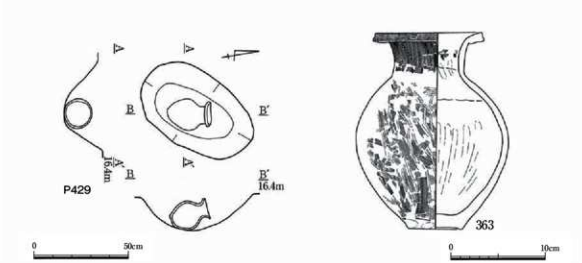
第 85 図の 363 は、P429 に横位で埋納されたもので、口縁部は北から約 12° 東へ振っており、口縁が上方へ約 10° 上がった形で埋められていた。ほぼ完形で出土している。363 は精選された胎土でガラス質鉱物を多く含みチョコレート色に発色するという特徴を持つ。外面も細かいハケ調整とヘラミガキで丁寧に仕上げられている。内面はナデで仕上げられ、ヘラケズリは確認できない。後期でもⅠ期に近い古相の資料である。他地域から持ち込まれた搬入遺物であり、胎土からは讃岐の可能性が高いが、地域の確定は今後の課題としておきたい。青銅鏡（破鏡）との関連も十分考え得る重要な資料である。



第83図　ピット出土遺物1　弥生土器（S=1/4・1/2）　※330のみ S=1/2

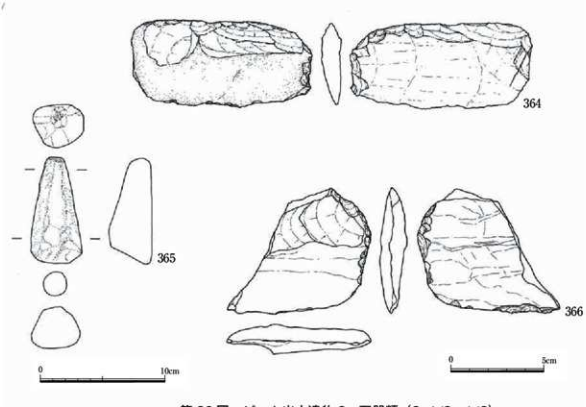


第84図　ピット出土遺物２　弥生土器（S=1/4）



第 85 図　P429 遺物出土状況平面・エレベーション図（S=1/20）出土遺物　弥生土器（S=1/4）

ピット出土石器類は、364 が打製石包丁、365 が砂岩の敲石、366 は黒い岩脈（ベイン）の入った泥質砂岩を使った打製石器で打製石包丁である可能性もある。図示していない資料を含めても、ピットから出土した石器は少ない。P44 の敲石、P149 の緑色岩の石片があるていどだが、P462 からは 362 の打製石器以外にも敲石や剥片類が出土している。



第 86 図　ピット出土遺物 3　石器類（S=1/3・1/2）

表2　ピット計測表 (1)

遺構	区	グリッド	遺物	長軸(cm)	短軸(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	段部など(m)	深さ(cm)
P1	C	M-4	○	25	24	16.774	16.673		10
P2	C	M-4	○	50	34	16.716	16.616		10
P3	C	M-4	○	44	30	16.736	16.621	16.706	12
P4	C	M-4		60	32	16.778	16.685		9
P5	C	M-4	○	45	37	16.770	16.545	16.598	22
P6	C	N-4		22	22	16.794	16.714		8
P7	C	N-4		32	30	16.791	16.705	16.759	9
P8	C	N-4	○	22	22	16.750	16.500		25
P9	C	N-4		28	24	16.766	16.688		8
P10	C	N-4		24	24	16.798	16.640		16
P11	C	N-4		40	30	16.818	16.685	16.790	13
P12	C	N-4		44	44	16.846	16.733		11
P13	C	N-4		46	44	16.845	16.708		14
P14	C	N-4	○	24	24	16.850	16.779		7
P15	C	N-4	○	30	30	16.852	16.778		7
P16	C	N-4		25	23	16.869	16.798		7
P17	C	M-4		38	24	16.878	16.791		9
P18	C	M-4		22	19	16.872	16.828		4
P19	C	N-4		40	38	16.875	16.786	16.742	9
P20	C	M-4		50	28	16.867	16.828		4
P21	C	M-5		38	25	16.877	16.843	16.720	3
P22	C	N-5		34	30	16.879	16.809		7
P23	C	N-5		44	30	16.879	16.838		4
P24	C	N-5		41	40	16.877	16.783		9
P25	C	N-4		44	40	16.888	16.833		6
P26	C	N-5	○	36	30	16.885	—		—
P27	C	N-4		84	34	16.880	16.838		4
P28	C	N-4		30	19	16.880	16.833		5
P29	C	N-5		36	36	16.876	16.820		6
P30	C	N-4	○	70	30	16.866	16.715		15
P31	C	N-4		50	32	16.834	16.723		11
P32	C	N-5		40	32	16.883	16.805		8
P33	C	N-5		44	38	16.878	16.837		4
P34	C	N-5		24	18	16.883	16.845		4
P35	C	N-5		28	25	16.898	16.837		6
P36	C	N-5	○	34	30	16.841	16.430		41
P37	C	N-5		23	15	16.743	16.628		11
P39	C	N-4		74	60	16.685	16.543		14
P40	C	M-6		40	40	16.784	16.558		23
P41	C	M-6		30	24	16.890	16.746	16.796	14
P42	C	N-6	○	40	35	16.814	16.661	16.796	15
P43	C	N-6	○	32	30	16.866	16.791		7
P44	C	N-6	○	30	26	16.875	16.509		37
P45	C	N-6	○	34	26	16.882	16.635		25
P46	C	N-6	○	26	25	16.836	16.368		47
P47	C	N-6	○	60	42	16.870	16.465		41
P48	C	N-6	○	50	36	16.848	16.520		33
P49	C	N-6	○	30	24	16.666	16.431		23
P50	C	N-6	○	42	40	16.856	16.643		21
P51	C	N-6	○	50	42	16.857	16.405		45
P53	C	M-3		30	16	16.840	16.592		25
P54	C	M-3	○	25	20	16.790	16.470		32
P55	C	M-3		40	38	16.688	16.584		10

遺構	区	グリッド	遺物	長軸(cm)	短軸(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	段部など(m)	深さ(cm)
P56	C	N-3		36	22	16.786	16.760		3
P57	C	N-3		34	32	16.770	16.631		14
P58	C	N-3		27	16	16.763	16.739		4
P59	C	N-3		74	32	16.779	16.739		6
P60	C	N-3		24	24	16.861	16.721		14
P61	C	N-3		26	23	16.860	16.712		15
P62	C	M-3		36	26	16.722	16.538		20
P63	C	N-3		26	26	16.701	16.563		14
P64	D	N-20	○	56	54	16.849	16.481	16.762	37
P67	D	O-2		40	40	16.812	16.748		6
P68	D	N-20		34	34	16.856	16.598		26
P69	D	N-1		44	44	16.772	16.598		17
P70	D	O-2		30	22	16.830	16.742		9
P71	D	O-2		32	30	16.798	16.660		14
P72	D	O-2		40	26	16.802	16.667		13
P73	D	O-2		34	34	16.781	16.706		7
P74	D	O-2	○	44	30	16.768	16.601		17
P75	D	P-2		30	25	16.774	16.688		9
P76	D	P-2	○	76	72	16.761	16.486	16.548 16.529	27
P77	D	P-2		86	86	16.788	16.338	16.434	45
P78	D	P-2	○※	72	64	16.773	16.434		34
P79	D	P-2	○※	86	64	16.770	16.311		46
P80	D	P-2	○	96	84	16.786	16.345		44
P81	D	P-1	○	72	46	16.805	16.461		34
P82	D	N-2		54	42	16.843	16.296		55
P83	C	N-2		80	50	16.858	16.656		20
P84	C	M-3		26	26	16.703	16.585		12
P85	C	M-3		34	32	16.748	16.493		26
P86	C	M-3		30	30	16.722	16.510		21
P87	C	M-3		32	15	16.807	16.374		43
P88	D	P-2		32	28	16.754	16.701		5
P89	D	P-2		16	16	16.720	16.710		1
P90	D	P-2		26	24	16.754	16.695		6
P91	D	Q-2	○	38	38	16.760	16.643		12
P92	D	R-2	○	30	20	16.746	16.709		4
P93	D	S-2		34	28	16.745	16.656		9
P94	D	S-2	○	70	66	16.714	16.527		19
P95	D	T-2		17	17	16.718	16.670		5
P96	D	T-2	○	34	34	16.675	16.517		16
P97	D	T-2		29	30	16.676	16.617		6
P98	D	T-2		42	30	16.688	16.596		9
P99	D	T-2	○	43	30	16.678	16.563		12
P100	D	T-2		50	32	16.712	16.529		18
P101	D	T-2		18	18	16.647	16.585		6
P102	D	T-2		28	27	16.663	16.619		4
P103	D	T-2		54	34	16.664	16.543		12
P104	D	T-2	○	50	36	16.663	16.580		8
P105	D	U-2		34	28	16.702	16.653		5
P106	D	U-2		48	44	16.674	16.587		9
P107	D	U-2		40	40	16.653	16.609		4
P108	D	U-2	○	15	14	16.678	16.525		15
P109	D	U-2		50	32	16.701	16.539		16
P110	D	U-2		22	22	16.709	16.657		5

表2　ピット計測表 (2)

遺構	区	グリッド	遺物	長軸(cm)	短軸(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	段部など(m)	深さ(cm)
P111	D	U-2		56	24	16.707	16.594	16.632	11
P112	D	U-2		32	28	16.707	16.573		13
P113	D	U-2		28	28	16.702	16.610		9
P114	D	V-2	○	46	34	16.707	16.665		4
P115	D	V-2		40	32	16.674	16.509		16
P116	D	V-2	○	40	40	16.705	16.463		24
P117	D	V-2	○	48	32	16.585	16.465		12
P118	D	V-2	○	44	44	16.657	16.556	16.597	10
P119	D	V-2	○	45	34	16.697	16.411		29
P120	D	V-2		38	37	16.674	16.475		20
P121	D	V-2	○	44	44	16.685	16.478		21
P122	D	V-2	○	36	32	16.672	16.593		8
P123	D	W-2		28	28	16.672	16.557		12
P124	D	V-2		32	21	16.680	16.546		13
P125	D	V-2		30	26	16.646	16.615		3
P126	D	V-2		16	16	16.617	16.585		3
P127	D	V-2		13	13	16.675	16.540		14
P128	D	W-2	○	50	25	16.653	16.551	16.591	10
P129	D	W-2		44	42	16.637	16.439		20
P130	D	W-2		40	25	16.645	16.563		8
P131	D	W-2	○	42	40	16.648	16.502		15
P132	C	N-7	○	62	60	16.827	16.334		49
P133	C	N-6	○	30	28	16.842	16.459		38
P134	C	N-6	○※	45	40	16.829	16.393		44
P135	C	N-6		38	30	16.843	16.727		12
P136	C	N-7		45	36	16.872	16.705		17
P137	C	N-7	○	54	50	16.653	16.432	16.604	22
P138	C	N-6		60	40	16.838	16.663		18
P139	C	N-6	○	40	30	16.842	16.462		38
P140	C	O-8		52	44	16.701	16.569		13
P141	C	O-8	○	46	44	16.805	16.671		13
P142	C	N-8		41	34	16.809	16.488		32
P143	C	O-8		30	30	16.704	16.530		17
P144	C	O-9		40	30	16.620	16.304		32
P145	C	O-9	○※	56	44	16.822	16.587		23
P146	C	N-9		70	34	16.826	16.777		5
P147	C	N-9		64	58	16.765	16.277	16.564	49
P148	C	N-8	○	70	64	16.841	16.612		23
P149	C	N-8	○※	50	42	16.854	16.419		43
P150	C	N-8	○	50	34	16.857	16.455		40
P151	C	N-9		50	39	16.831	16.617		21
P152	C	O-9		40	30	16.805	16.751		5
P153	C	N-9	○	26	26	16.795	16.697		10
P154	C	M-9		34	34	16.817	16.754		6
P155	C	N-9		23	20	16.718	16.662		6
P156	C	N-9		26	24	16.823	16.717		11
P157	C	N-9		46	32	16.792	16.669		12
P158	C	N-10	○	38	32	16.791	16.746		5
P159	C	N-9		30	15	16.794	16.710		8
P160	C	N-9		28	20	16.813	16.722		9
P161	C	O-9	○	24	18	16.798	16.705		9
P162	C	N-10		43	30	16.677	16.576		10
P163	C	M-10		20	20	16.682	—		—

遺構	区	グリッド	遺物	長軸(cm)	短軸(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	段部など(m)	深さ(cm)
P164	C	N-10	○	28	24	16.787	16.641		15
P165	C	N-10		22	21	16.785	16.743		4
P166	C	N-10		30	20	16.766	16.713		5
P167	C	N-10		40	28	16.781	16.647	16.725	13
P168	C	N-10	○	23	17	16.796	16.507		29
P169	C	N-10		20	20	16.753	16.664		9
P170	C	N-11	○	42	39	16.749	16.669		8
P171	C	N-11		46	32	16.749	16.684		6
P172	C	N-11		30	24	16.763	16.243		52
P173	C	N-11	○※	50	42	16.747	16.640		11
P174	C	O-11	○※	54	43	16.793	16.547		25
P175	C	O-11	○	30	23	16.749	16.435	16.704	31
P176	C	N-11	○※	36	30	16.693	16.377		32
P177	C	N-11		30	30	16.716	16.694		2
P178	C	N-11		32	26	16.748	16.415		33
P179	C	N-11	○	44	40	16.750	16.658		9
P180	C	N-11		50	38	16.759	16.713		5
P181	C	N-11	○	70	64	16.769	16.714	16.463	5
P182	C	O-12		40	30	16.748	16.401	16.706	35
P184	C	N-12		40	26	16.727	16.662		7
P185	C	N-12		36	23	16.727	16.545	16.604	18
P186	C	N-12		44	20	16.732	16.635		10
P187	C	N-12	○	40	30	16.735	16.328		41
P188	C	N-12	○	30	24	16.749	16.472		28
P189	C	N-12		32	30	16.759	16.666		9
P190	C	N-12		26	24	16.754	16.696		6
P191	C	N-12		34	26	16.750	16.588		16
P192	C	N-12		35	30	16.745	16.608		14
P193	C	N-13	○	50	42	16.738	16.581	16.670	16
P194	C	N-13		22	19	16.743	16.479		27
P195	C	N-13		32	24	16.742	—		—
P196	C	N-13		42	34	16.758	16.450		31
P197	C	N-13		38	22	16.730	16.620		11
P198	C	N-13		20	15	16.763	—		—
P199	C	N-13		34	24	16.762	16.666		10
P200	C	N-13		42	40	17.203	17.029		17
P201	C	N-13		28	25	17.171	17.065		11
P202	C	N-13		44	16	17.173	17.062		11
P203	C	N-13		34	24	17.170	17.028		14
P204	C	N-13	○	36	30	17.170	16.959		21
P205	C	N-14		64	50	17.177	17.070	17.049	11
P206	C	O-14		50	44	17.172	17.163		1
P207	C	O-14		40	29	17.160	17.107		5
P208	C	O-14	○	36	30	17.149	17.092		6
P209	C	N-14		46	30	17.156	—		—
P210	C	O-14	○	50	30	17.089	16.886		20
P211	C	O-14		26	26	17.150	—		—
P212	C	N-14	○	30	20	17.118	17.010		11
P213	C	N-14		34	16	17.154	16.971		18
P214	C	N-14	○	44	34	17.055	16.928	16.990	13
P215	C	N-14		24	24	17.082	16.985		10
P216	C	N-14		20	15	17.033	16.980		5
P217	C	N-14	○	17	17	17.061	17.014		5

表2　ピット計測表 (3)

遺構	区	グリッド	遺物	長軸(cm)	短軸(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	段部など(m)	深さ(cm)
P218	C	N-14		18	8	17.033	—		—
P219	C	N-14		32	30	17.077	16.898		18
P220	C	N-14	○	28	24	17.080	16.931		15
P221	C	N-14		25	18	17.062	16.795		27
P222	C	N-14		40	26	17.116	—		—
P223	C	N-14		30	26	17.140	16.936		20
P224	C	N-14	○	36	30	17.139	17.054		9
P225	C	N-14		40	32	17.140	16.949		19
P226	C	N-14		20	20	17.146	17.080		7
P227	C	N-13?		32	26	17.155	17.073		8
P229	C	N-13		34	32	17.185	16.935		25
P230	C	O-14		24	20	17.140	17.053		9
P231	C	O-14		26	24	17.150	17.120		3
P232	C	O-15		20	14	17.107	17.044		6
P233	C	O-15		26	18	17.107	17.050		6
P234	C	O-15		26	24	17.110	16.948		16
P245	C	N-14		16	16	17.145	17.086		6
P246	C	N-14		32	20	17.125	17.037		9
P247	C	N-14		26	20	17.125	16.975		15
P248	C	N-15		40	24	17.110	—		—
P249	C	N-15		22	20	17.090	17.000		9
P250	C	O-15		22	20	17.160	17.046		11
P251	C	N-15		36	22	17.154	16.955		20
P252	C	N-15		38	22	17.161	16.935	17.010	23
P253	C	N-15		26	22	17.083	16.866		22
P254	C	N-15	○※	30	28	17.147	16.855		29
P255	C	N-16		46	36	17.156	17.060		10
P256	C	N-16		28	28	17.100	17.007		9
P261	C	N-16		26	20	16.674	16.389		29
P262	C	N-16		34	28	16.565	16.517		5
P263	C	N-16		20	16	16.585	16.580		1
P264	C	N-16		32	30	16.649	16.362	16.466	29
P265	C	O-16		36	36	16.583	—		—
P266	C	N-17	○	30	22	16.564	16.436		13
P267	C	N-17		28	20	16.626	—		—
P268	C	N-16		34	30	16.592	16.552		4
P269	C	N-17		18	14	16.653	16.484		17
P270	C	N-17		26	18	16.639	16.383		28
P271	C	O-17		44	32	16.597	16.443		15
P272	C	N-17		42	24	16.610	16.413	16.440	20
P273	C	N-17		40	22	16.434	16.291		14
P274	C	N-17	○	26	26	16.604	16.314		29
P275	C	O-17		22	20	16.604	16.421		18
P276	C	N-18		38	26	16.592	16.366		23
P277	C	N-18		36	14	16.601	16.146		45
P278	C	N-18		22	16	16.602	16.545		6
P279	C	O-18		36	24	16.423	16.189		23
P280	C	O-18		24	20	16.608	16.529		8
P281	C	O-18		24	22	16.608	16.557		5
P282	C	O-18		22	14	16.611	16.560		5
P283	C	O-18		38	32	16.589	16.412		18
P284	C	O-18		52	36	16.620	—		—
P285	C	O-18		38	30	16.602	16.412	16.482	19
P286	C	N-18		36	32	16.590	16.549		4
P287	C	N-18		34	30	16.600	16.519		8
P288	C	N-19		50	40	16.580	16.322	16.379	26
P289	C	O-18		42	28	16.619	16.509	16.558	11
P290	C	O-18		40	24	16.469	16.329		14
P291	C	O-19		26	22	16.458	—		—
P292	C	N-19		82	40	16.583	16.484	16.494	10
P293	C	O-19		34	26	16.554	16.457		10
P294	C	O-19		46	18	16.602	16.467	16.507	14
P295	C	N-13		26	22	16.704	16.621		8
P296	C	N-13		28	26	16.711	16.614		10
P297	C	N-13	○	32	30	16.711	16.603		11
P299	C	N-14		28	26	16.708	16.656		5
P300	C	N-14		32	24	16.712	16.609		10
P301	C	N-14	○	34	26	16.682	16.483		20
P302	C	N-14		28	22	16.720	16.617	16.660	10
P303	C	O-14		48	32	16.723	16.406	16.648 16.663	32
P304	C	O-14		30	24	16.708	16.562		15
P305	C	N-15	○※	50	32	16.722	16.468		25
P306	C	N-15		24	20	16.722	16.632		9
P307	C	N-15	○	26	24	16.727	16.591		14
P308	C	N-15		26	24	16.727	16.543		18
P309	C	O-15		14	12	16.703	16.593		11
P311	C	D-19		40	28	16.497	16.317		18
P312	C	D-20		52	40	16.531	16.214		32
P313	C	N-20		48	30	16.554	16.444		11
P314	C	D-20	○	70	44	16.546	16.477		7
P315	C	D-20		40	26	16.537	16.263		27
P316	C	D-20		32	28	16.529	16.136		39
P317	C	D-21		46	30	16.538	16.477		6
P318	C	D-21		80	24	16.535	16.219	16.397	32
P319	C	D-21	○	30	20	16.538	16.435		10
P320	C	D-21		80	66	16.525	16.462		6
P321	C	D-21		46	40	16.533	16.419		11
P323	C	O-21	○	46	40	16.526	16.330		20
P324	C	O-21・22		48	28	16.518	16.381	16.476	14
P325	C	O-N-22	○	80	72	16.513	16.442		7
P326	C	O-22	○※	130	22	16.488	15.477	16.354	101
P327	C	O-22	○	124	116	16.521	15.827	16.317	69
P328	C	O-23	○※	140	96	16.503	15.569	16.205	93
P329	C	O-23	○※	166	54	16.461	15.666	16.210	79
P330	C	O-24		38	34	16.481	16.355		13
P331	C	P-25		28	22	16.282	16.126		16
P332	B	P-35		50	40	16.366	16.349		2
P333	B	P-35		32	26	16.373	16.243		13
P334	B	P-35		40	36	16.377	16.285		9
P335	B	P-35	○	28	26	16.380	16.333		5
P336	B	P-35		36	30	16.413	16.353		6
P337	B	P-35		70	40	16.381	16.349		3
P338	B	O-35		30	30	16.378	16.148	16.208	23
P339	B	P-35		28	28	16.397	16.322		7
P340	B	P-35		34	30	16.401	16.217		18
P341	B	P-35		34	28	16.368	16.257		11

表2　ピット計測表 (4)

遺構	区	グリッド	遺物	長軸(cm)	短軸(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	段部など(m)	深さ(cm)
P342	B	P-35		62	40	16.372	16.196		18
P343	B	P-35		70	32	16.393	16.217		17
P344	B	P-35		58	52	16.388	16.167		22
P345	B	P-35		34	24	16.377	16.298		8
P346	B	P-35	○	54	48	16.394	16.152	16.178	24
P347	B	P-35		74	40	16.427	16.178		25
P348	B	P-34・35		56	48	16.376	16.167		21
P349	B	P-34		44	42	16.403	16.248		15
P350	B	P-34		50	34	16.405	16.278		13
P351	B	P-34		56	46	16.400	16.205		20
P352	B	P-34		24	22	16.368	16.304		6
P353	B	P-34		36	36	16.416	16.210	16.229	21
P354	B	P-34		36	34	16.400	16.249		15
P355	B	O-34		52	44	16.403	16.240		16
P356	B	O-34		32	30	16.391	16.277		11
P357	B	P-34		44	34	16.283	16.005		28
P358	B	P-34		60	30	16.324	16.188		14
P359	B	P-33		50	34	16.404	16.277		13
P360	B	P-33		44	36	16.448	16.197	16.262	25
P361	B	P-33	○	54	48	16.439	16.119	16.359	32
P362	B	P-33		60	48	16.437	16.122		32
P363	B	P-33		48	46	16.479	16.310		17
P364	B	O-33		46	40	16.419	16.325		9
P365	B	P-33		24	22	16.277	16.153		12
P366	B	P-33		22	22	16.320	16.172		15
P367	B	P-32		32	30	16.438	16.285		15
P368	B	P-32		60	24	16.502	16.437		6
P369	B	P-32	○※	32	30	16.356	16.212		14
P370	B	P-32		34	30	16.477	16.290		19
P371	B	P-32	○	70	52	16.491	16.190	16.260	30
P372	B	P-32		52	32	16.477	16.310		17
P373	B	P-32		62	42	16.492	16.237		26
P374	B	P-31	○	32	22	16.480	16.251		23
P375	B	O・P-32		22	16	16.478	16.448		3
P376	B	O・P-32		54	52	16.478	16.434		4
P377	B	P-32	○※	40	28	16.482	16.282		20
P378	B	P-31・32	○	56	26	16.488	16.300		19
P379	B	O-31		48	30	16.477	16.328		15
P380	B	O-31	○	32	30	16.418	16.155		26
P381	B	P-31	○	30	16	16.486	16.434		5
P382	B	P-31		46	30	16.476	16.279		20
P383	B	P-31	○	48	40	16.469	16.142	16.341	33
P384	B	O-31		56	40	16.467	16.275		19
P385	B	P-31		32	18	16.471			
P386	B	P-31		22	14	16.294	16.172		12
P387	B	P-31		24	26	16.338	16.330		1
P388	B	P-31		22	20	16.325	16.190		13
P389	B	P-31		52	32	16.350	16.096	16.185	25
P390	B	P-31		42	16	16.345	16.260		8
P391	B	Q-31		32	28	16.317	16.246		7
P392	B	P-31		34	28	16.350	16.176		17
P393	B	P-31		28	28	16.443	16.202		24
P394	B	P-31	○	48	44	16.445	16.202	16.358	24
P395	B	P-30		26	26	16.476	16.320		16
P396	B	P-30		34	26	16.476	16.409		7
P397	B	P-30	○	52	42	16.484	16.103		38
P398	B	P-30		36	26	16.438	16.237		20
P399	B	P・O-30		58	42	16.438	16.442		0
P400	B	P-30	○	56	26	16.452	16.132		32
P401	B	Q-30		30	20	16.490	16.390		10
P402	B	P-30	○※	32	28	16.448	16.323		13
P403	B	P-30		24	24	16.474	16.276		20
P404	B	P-30		20	20	16.471	16.363		11
P405	B	P-30	○	24	24	16.601	16.230		37
P406	B	P-30		66	36	16.270	16.100		17
P407	B	P-30		40	20	16.347	16.251		10
P408	B	P-30		20	20	16.373	16.286		9
P409	B	P-30		36	34	16.147	16.035		11
P410	B	P-30		28	26	16.132	16.033		10
P411	B	P-29	○	40	30	16.203	16.025		18
P412	B	P-29		36	36	16.335	15.896		44
P413	B	P-29	○	30	26	16.309	16.013		30
P414	B	P-29		46	42	16.351	15.992		36
P415	B	P-29		52	48	16.341	16.100		24
P416	B	O-29		34	32	16.220	15.907		31
P417	B	P-29	○	36	26	16.540	16.241		30
P418	B	Q-29		30	20	16.186	15.961		23
P419	B	P-29		64	40	16.225	16.143		8
P420	B	P-29		66	54	16.225	16.095		13
P421	B	P-28	○※	60	54	16.298	16.077		22
P422	B	O-28	○	46	44	16.258	15.753		50
P423	B	P-28	○	98	42	16.375	16.009	16.241	37
P424	B	P-28	○	50	30	16.266	16.014		25
P425	B	O・P-28	○※	64	54	16.288	16.105		18
P426	B	P-28	○	44	32	16.298	16.175		12
P427	B	O-28		36	32	16.299	16.208		9
P428	B	P-28		32	30	16.293	16.232		6
P429	C	P-28	○※	62	40	16.339	16.285		5
P430	C	P-25		32	30	16.361	16.206		16
P431	C	P-26	○	34	28	16.491	16.374		12
P432	B	P-26	○	46	38	16.491	16.395		10
P433	B	P-27	○	68	56	16.311	16.019	16.283 16.311	29
P434	B	O・P-27		36	14	16.327	16.270		6
P435	B	O-27		34	32	16.309	16.194		12
P436	B	O-27		38	32	16.327	16.282		5
P437	B	P-28		30	24	16.214	16.101		11
P438	B	Q-28		52	46	16.154			
P439	B	Q-27		30	24	16.233	16.117		12
P440	B	Q-27		40	40	16.230	16.104		13
P441	B	Q-27		60	52	16.230	16.083	16.133	15
P442	B	Q-27	○※	32	26	16.268	16.069		20
P443	B	P-27		42	26	16.330	16.108		22
P444	B	P-27		40	24	16.351	16.249		10
P445	B	P-27	○	48	24	16.348	16.293		5
P446	B	P-27		56	28	16.868	16.270		60
P447	B	P-26	○	30	24	16.418	16.296		12

表2　ピット計測表 (5)

遺構	区	グリッド	遺物	長軸(cm)	短軸(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	段部など(m)	深さ(cm)
P448	B	P-26		34	32	16.419	16.326		9
P449	B	P-26		26	26	16.423	16.350		7
P450	C	O-26		26	20	16.246	16.023		22
P451	C	O-25	○	22	16	16.305	16.106		20
P452	C	P-25	○	24	18	16.287	15.952		33
P453	C	P-25	○※	22	20	16.301	15.834		47
P454	C	P-25		14	14	16.300	15.899		40
P456	C	P-25		72	56	16.285	16.089	16.270	20
P457	C	P-25		20	18	16.312	16.099		21
P458	C	O-25	○	38	20	16.239	15.887		35
P459	C	O-24	○※	32	26	16.278	16.039		24
P460	C	O-24	○※	20	18	16.471	16.222		25
P461	C	O-24	○	22	14	16.226	16.155		7
P462	C	O-25	○	86	42	16.259	—	16.213	—
P463	C	N-23	○	40	36	16.479	16.234		24
P464	C	N-22		38	30	16.207	15.933		27
P465	C	O-22		46	40	16.269	16.024		24
P466	C	O-22		40	30	16.294	16.002		29
P467	C	N-21		32	32	16.306	16.024		28
P468	C	N-22	○	60	40	16.291	16.129		16
P469	A	I-37	○	50	38	15.923	15.746		18
P470	A	I-37		30	26	16.003	15.905		10
P471	A	I-37		22	18	15.989	15.923		7
P472	A	I-37	○	26	20	15.989	15.823		17
P473	A	I-37	○	78	56	15.986	15.704	15.768	28
P474	A	J-37		36	26	15.979	15.718		26
P475	A	K-37	○	42	26	15.993	15.669		32
P476	A	K-37		—	—	15.982	15.905		8
P477	A	K-37	○	34	30	16.000	15.727		27
P478	A	K-37	○	34	32	16.003	15.893		11
P479	A	K-37		38	34	15.984	15.906		8
P480	A	K-37		34	30	—	—		—
P481	A	K-37		36	24	16.023	15.837	15.923	19
P482	A	K-37		46	32	16.047	15.868	15.902	18
P483	A	K-37	○	48	34	16.104	15.887	15.937	22
P484	A	L-37	○	40	30	16.103	15.934		17
P485	A	L-37	○	50	40	16.079	15.898	15.945	18
P486	A	L-37	○	34	26	16.119	15.849		27
P487	A	L-37		52	40	16.089	15.729		36
P489	A	I-37	○	58	48	15.912	15.701		21
P492	A	J-36	○※	44	36	16.109	—		—
P494	A	L-37	○※	56	26	16.114	15.803	15.993	31
P495	A	I-38	○	52	40	—	—		—
P496	A	I-38	○	30	26	15.987	15.653		33
P377-C	C	O-24		30	26	16.398	16.291		11
P378-C	C	O-24		26	24	16.446	16.382		6
P380-C	C	O-25		48	38	16.401	16.141		26
P381-C	C	O-25		58	40	16.410	16.286		12
P468-A	A	I-37		44	36	15.961	15.783		18
P495-A	A	L-37		68	40	16.089	15.871	15.933 16.063	22

○印…遺物が出土したピット

※印…図版掲載遺物あり

● 各遺構から出土した遺物の内容については104ページに示す。

表3　ピット出土遺物

ピット名	遺物点数	出土遺物（特徴）
P1	2	弥生。
P2	10	後期的な貼付なしの素口縁と貼付口縁（幅狭・厚）。
P3	3	内一点からはタタキ目が確認されている。弥生時代後期前半。
P3	8	微隆起帯2条を持つ個体あり。
P5	7	口縁は小片で貼付口縁。弥生中期。
P8	1	弥生。
P14-15	1	弥生。
P26	3	弥生。
P30	1	古代？須恵器1
P36	6	貼付口縁。タタキ目のある小片もあり。後期前半。
P42	1	弥生。
P43	5	弥生。
P44	5	弥生中期前半と後期前半の資料混在。タタキ石
P45	2	微隆起帯2条。弥生中期。
P46	12	弥生中期。貼付口縁で口唇が面をなす。底部は平底。
P47	2	古代？
P48	2	弥生。
P49	2	弥生。
P50	30	古代の遺構か。土師器供膳具
P51	12	弥生後期前半か？
P54	6	弥生中期前半か？　上胴部に微隆起帯2条を持つ。
P64	6	特記事項なし。
P74	1	特記事項なし。時期不明。
P76	12	土師器口縁小片。古代？
P78	23	古代。土器細片は土師器。須恵器1。
P79	25	律令期の長胴の甕。9世紀。
P80	19	土師器。弥生土器混在。須恵器2。
P81	3	特記事項なし。
P83	5	古代。須恵器1、土師器2。
P91	1	素口縁。
P92	1	特記事項なし。弥生土器。
P94	3	弥生中期初頭。
P96	6	特記事項なし。
P99	3	弥生土器。円形浮文のみる破片。
P108	2	特記事項なし。
P114	3	特記事項なし。弥生？
P116	2	細片。
P117	1	櫛描波線。
P118	1	細片。
P119	4	特記事項なし。弥生？
P121	1	特記事項なし。
P122	4	特記事項なし。
P128	3	古代。
P131	2	古代。赤彩土師器1。
P132	11	
P133	9	
P134	10	
P137	1	古代？
P139	8	
P141	4	
P145	9	口縁は貼付口縁。胴部文様に櫛（直）＋山形文櫛＋扁平突帯あり。弥生中期前半。
P148	2	特記事項なし。弥生。
P149	37	緑色岩。凹線が退化し、タタキ目が登場する段階。後期前半。内面ヘラケズり。凹線は3条。
P149	2	古代。須恵器高台あり。
P150	18	素口縁で直立する口縁。上胴部微隆起帯3条。弥生中期前半か。

ピット名	遺物点数	出土遺物（特徴）
P153	1	特記事項なし。
P158	6	櫛描沈線（直）＋扁平突帯。弥生時代中期初頭。
P161	6	弥生だと考えられる。詳細不明。
P164	26	一個体か。橙色で無文。弥生後期だと考えられるものの、詳細は不明。
P168	4	古代。土器片は土師器。輪高台の底部。
P170	2	弥生だと考えられる。詳細不明。
P173	3	弥生土器。底部は平底。
P174	6	弥生前期末～中期前半の可能性。結縄車実測。
P175	2	弥生。詳細不明。
P176	71	弥生時代後期前半。タタキ目のある資料で内面ヘラケズりが確認される。
P179	2	弥生。詳細不明。
P181	20	弥生時代。詳細不明。
P183	4	口縁に凹線のこる。弥生時代後期前半。
P187	5	小片。
P188	5	弥生中期初頭。
P193	6	小片。
P204	2	特記事項なし。詳細不明。
P208	4	特記事項なし。詳細不明。
P210	5	弥生中期。
P212	1	
P214	6	特記事項なし。弥生。
P217	15	文様は微隆起帯2条。底部はわずかに上げ底（少し高台状に近い）。中期前半？
P220	2	特記事項なし。弥生。
P224	6	特記事項なし。詳細不明。
P254	3	弥生時代中期初頭。櫛描直線と刺突文。口縁は逆L字状。
P257	4	弥生。
P258	1	弥生。
P259	3	弥生。
P266	8	弥生中期前半。櫛（直）。
P274	4	弥生。
P297	2	弥生。
P301	9	無文。
P305	10	口縁は素口縁2点と外面に2条の微隆起帯がある資料。
P307	6	特記事項なし。詳細不明。
P314	1	弥生。（ハケ・ナデ）
P319	5	弥生。
P323	8	弥生中期。櫛描沈線。
P325	10	特記事項なし。詳細不明。
P326	29	弥生土器は貼付口縁。櫛描波状文があり、中期前半だが、須恵器の底から、古代の遺構だと考えられる。
P327	10	特記事項なし。詳細不明。
P328	21	簾状文、須恵器（ヘラ切）混在
P329	11	
P335	3	特記事項なし。
P346	3	特記事項なし。弥生土器。
P361	4	特記事項なし。
P369	2	弥生前期末～中期初頭。
P371	11	特記事項なし。
P374	8	口縁は小片だが、貼付口縁で口唇面全体に刻み目。
P377	6	弥生中期。甕胴胴部。
P378	2	土器片にハラ調整。弥生土器。
P380	7	磨耗しているが、櫛（波＋簾）と平底の底部。弥生時代中期前半。
P381	6	弥生時代。詳細不明。

ピット名	遺物点数	出土遺物（特徴）
P383	8	特記事項なし。
P394	6	特記事項なし。
P397	20	貼付口縁。文様は櫛（簾＋波）で「様式新段階か？
P400	6	三角形の微隆起突帯を持つ
P402	13	弥生中期。口縁と底部については実測。貼付口縁で、素口縁と外面全体に刻み目のあるタイプ。
P405	4	特記事項なし。弥生。
P411	2	特記事項なし。
P413	2	特記事項なし。弥生。
P417	2	特記事項なし。
P421	3	甕1種2点と胴部器1点。
P422	7	特記事項なし。弥生。
P423	6	碗器1
P424	5	弥生ではない。
P425	3	中期前半。櫛（直＋簾）、ハケ・ミガキ。
P426	1	特記事項なし。弥生。
P429	16	口唇強い凹状の貼付口縁。外面下端刻み目。上胴部微隆起帯2条。
P431	1	弥生後期。
P432	2	弥生時代だと考えられる。
P433	6	特記事項なし。
P442	3	弥生前櫛描波状文と赤彩土師器（甕）の高台部分が混在。いずれか切り取りか？
P445	84	櫛描（直＋波）。貼付口縁（素口縁、上下に刻み目、口唇面直面に刻み目）と外面にあるの微隆起帯を持つものがある。
P447	3	特記事項なし。
P451	2	弥生。
P452	1	特記事項なし。弥生。
P453	2	特記事項なし。
P458	7	特記事項なし。
P459	22	胴部文様に三角形の突帯と細めの櫛描（直＋波）。貼付口縁。弥生中期中葉か。
P460	51	弥生中期前半～中葉。同一個体の胴部片。貼付口縁。口縁上下刻み目。
P461	2	詳細不明。
P462	62	櫛描直線文。口縁部小片、口唇面全面に細目外面下端に細目・刻み目など。細目扁平突帯を貼付。
P463	2	古代末（12世紀頃か）土師器椀1。
P468	2	弥生。
P469	4	弥生。
P472	1	弥生。
P473	13	弥生。
P475	2	弥生。
P477	3	弥生小片。
P478	5	弥生。
P483	3	弥生。
P484	3	弥生。
P485	3	弥生。
P486	3	弥生。
P488	1	古代。土師器供膳具。
P489	9	微隆起帯2条貼付確認可能。
P490	1	弥生。
P491	1	弥生　口縁外面に微隆起帯1条貼付。
P492	10	弥生。
P493	2	弥生。
P494	8	弥生。
P495	2	弥生。
P496	1	弥生。
P497	4	弥生。　微隆起帯2～3条。

表４　溝及び溝状遺構（SD）出土遺物

区	遺　構	弥生土器・土師器	須恵器	その他点数	その他	特　徴　・　時　期　・　備　考
C	SD1	7				弥生後期前半の遺物出土。
C	SD2	53	1	1	白磁1	大半は弥生だが、数点古代もある。いずれもローリングを受け、摩滅顕著。
C	SD3	36	1			弥生。古代の資料混在。底部ヘラ切り。
C	SD3-2	104	2			弥生中期前半。微隆起帯4条の側体もある。櫛描（直）3条1単位の小片、豆粒上の粘土粒貼付資料あり。
C	石列上（SD3-2 上）	30			赤彩土師器2	石列（SD3-2）の上面。弥生中期と後期、古代が混在している。太目の櫛描直線文と双線の組み合わさった資料が10点出土している。
C	SD4	24	2		輪高台	古代。輪高台の資料あり。
C	SD9	15	2			摩滅したものが多い。弥生と古代混在。土師器供膳具と羽釜の破片。古代の溝?
C	SD10	33				弥生中期の遺物出土。
C	SD13	20				詳細不明。弥生時代。
C	SD14-13	86				弥生前期（ヘラ）中期前半（櫛）、後期混在。
C	SD15	50				櫛描沈線。中期初頭。
C	SD15-SD-H バンク	17	1			須恵器底部高台。
C	SD17	8				詳細不明。弥生時代。
C	SD18	4				特記事項なし。
C	SD19	34				弥生。貼付口縁、底部。
C	SD20	8				弥生。詳細不明。
C	SD21	7				口縁は小片。上下に短みがある側体と素口縁の側体。
C	SD22	23				弥生。詳細不明。
C	SD23	128				弥生、古代の資料混在。
C	SD25	38				貼付口縁。弥生。詳細不明。
B	SD40	2				詳細不明。
B	SD41	10			石片	櫛描沈線。弥生中期中葉?
B	SD44	11				詳細不明。
B	SD45	8				詳細不明。
B	SD47	15				詳細不明。
B	SD48	15				弥生土器。
B	SD50	10				詳細不明。
B	SD51	18				詳細不明。
B	SD52	6				詳細不明。
B	SD55	42				弥生・古代混在。墨書須恵器出土。
A	SD58	1				弥生土器のみ。
C	SD-A	45	5	1		弥生中期、微隆起帯3条褒。弥生時代中期初頭。櫛（直）+双線。
D	SD-E	6	1		須恵器1	古代以降。
D	SD-F	6	2		須恵器2	古代?
D	SD-G	9	1		須恵器1	古代、8世紀前葉以降。
C	SD-H	521	12	4		弥生中期・後期・古代混在。摂津羽釜・大和型瓦質土器・土器転用紡錘車・不明小型土製品など。
C	SD-J	123		10	炭10	弥生時代中期中葉。櫛描波状文が3段にわたって施文される破片。
B	SD-K	74				詳細不明。
B	SD-M	3				詳細不明。
A	SD-O	20				弥生土器。
A	SD-P	49	1		須恵器1	詳細不明。
A	SD-Q	28				詳細不明。

6．性格不明遺構（SX）

掘り込みや形状のはっきり捉えられる竪穴状遺構・土坑・溝・柱穴等ピット以外のプランのはっきりしない落ち込みや浅い遺構などを性格不明遺構として一括した。SX1 ～ 11 まで 11 箇所確認されている。SX1 がC区の北端、SX2 ～ 9 がD区の東半、SX10・11 がC区の中央付近に位置している。

SX1

C区北端に位置する。

弥生土器8点が出土、図示できた遺物は直立する 367 の壺口縁部である。他に、タタキ目を持つ胴部破片が出土している。弥生時代後期前半の遺構である。

SX3

D区中央に位置する。

弥生土器 40 点が出土している。図示した遺物は 322 ～ 325、いずれも壺で、322 ～ 324 が頸～胴部の文様のある破片、325 が底部である。322 ～ 324 はクシ描直線文あるいはクシ描簾状文で施文されている。

遺構の時期は、弥生時代中期前半（中期Ⅰ－２期、Ⅱ様式新段階）である。

SX4

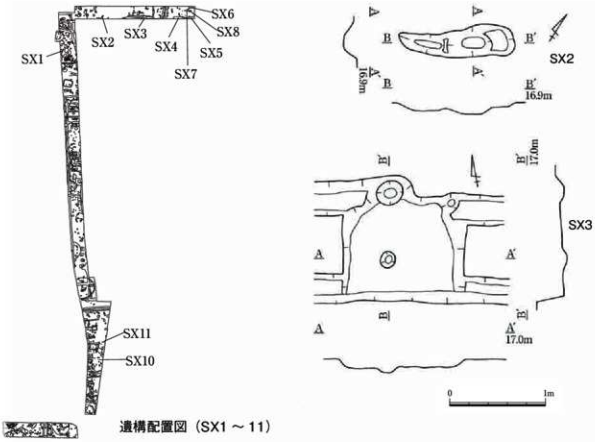
D区東に位置する。

弥生土器 40 点が出土している。図化した遺物はないが、壺口縁部片（貼付口縁で、口縁部内面に２条の扁平な刻目粘土帯を貼付）が含まれており、弥生中期初頭の遺構だと考えられる。

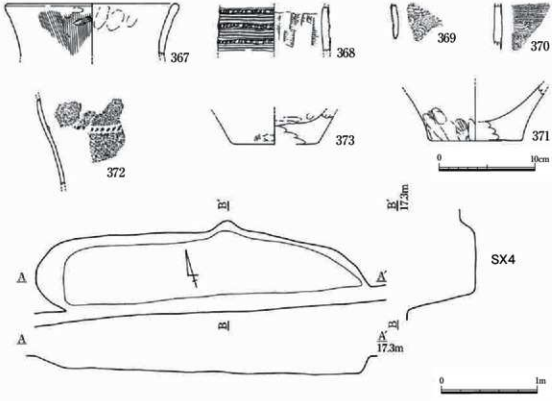
SX10

B区中央に位置する。

弥生土器 65 点が出土している。図示できた遺物は 372 の円形浮文を持つ上胴部と 373 の平底の甕底部の２点である。弥生時代中期の遺構だと考えられる。



遺構配置図（SX1 ～ 11）



第 87 図　遺構配置図（SX1 ～ 11）及び SX2 ～ 4 平面・エレベーション図（S=1/40）
出土遺物　弥生土器（S=1/4）

7．遺物集中出土地点出土遺物（土器５・６・７）

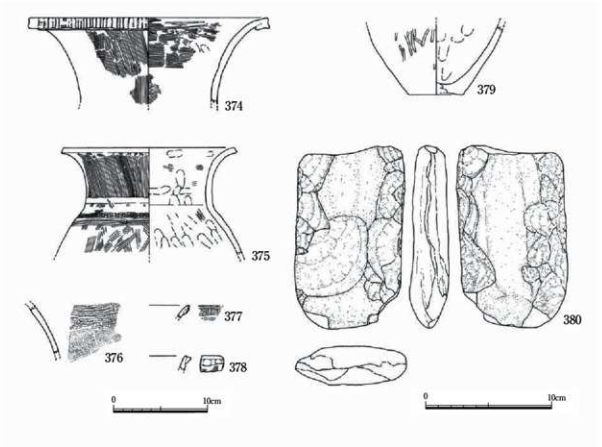
遺物が集中した地点や、土器のまとまりが捉えられるポイントから出土した土器については、土器１～10として位置を確認し、まとめて取り上げている。

A区の土器１～６、B区北端の土器７、C区北端の土器８～10、合計10箇所である。このうち土器１はP495からの出土であり、土器２・３とあわせてST11の遺構内から出土した遺物だと捉えている。また、土器８～10はST7の北東４～５m付近に位置し、土器９・10は土器棺だと考えられる資料である。これらの土器については、ST11・土器棺墓の項で報告する。

土器５・６はA区ST11の北東側に位置する。SD57・SK81とSD59・SK87の間から検出された土器である。また、土器７はSK70の北東約１mに近接した場所から出土している。

土器５

８点の弥生土器が出土、図示した遺物は374の壺口縁である。大きくラッパ状に開く口縁で、貼付口縁、口唇はわずかに凹状で面全体にハケ状原体による刻目を施し、全周に巡らせる。外面は縦方向のハケ調整の後、ナデで仕上げる。内面は横方向のハケ調整で、部分的に横方向のヘラミガキが残る。弥生後期前半。



第88図　土器集中地点（土器５～７）出土遺物　弥生土器（S=1/4）石器類（S=1/3）

土器６

32点の弥生土器が出土している。図示したものは375～378で、いずれも壺形土器である。376は上胴部（クシ描簾状文＋直線文）、377・378は貼付口縁の口縁部小片である。375はなで肩の上胴部から、頸部は直立、口縁はラッパ状に開く壺で、素口縁で口唇は面をなし、上胴部に３条１単位のクシ描簾状文と直線文を施文する。

弥生中期前半、Ⅱ様式新段階の資料である。

土器７

60点の弥生土器が出土している。無文の胴部破片が大半で、胎土・文様から弥生後期前半の資料だと考えている。

図示した379は、壺あるいは甕底部で、底面には砂粒の移動が認められる。外面はハケ・ナデの後、ヘラミガキで仕上げている。弥生時代後期前半の資料である。

8. 古代の溝から出土した弥生土器

出土遺物、あるいは方向や遺構の切り合いから判断して、古代以降の溝だと判断できる遺構から、弥生時代の遺物が一定量出土している。ここでは図示できた資料について、その特徴を確認しておきたい。

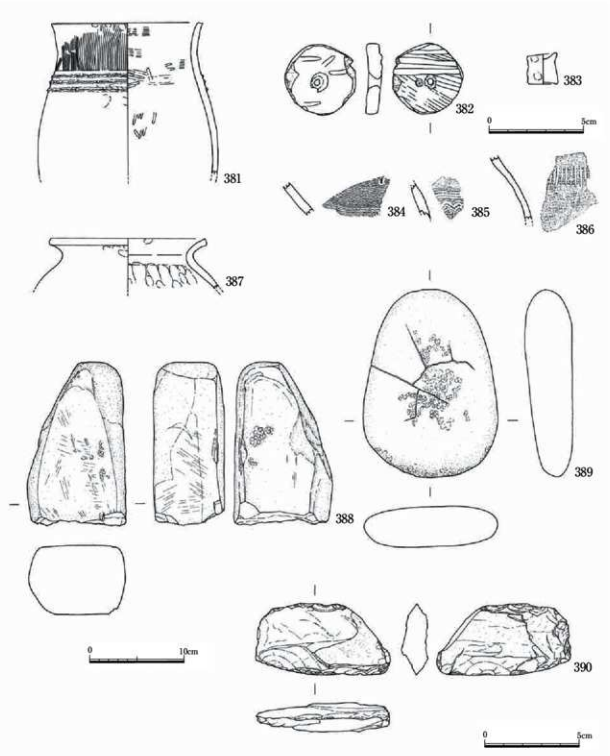
出土した遺構は、SD-A（381）、SD-H（382・383）、SD-J（384）、SD-K（385・386）、SD-14・15（387）（以上弥生土器）、SD2（388）、SD13（389）、SD23（390）（以上石器）である。

381は甕、382は土器片転用紡錘車、383は小型器台（ミニチュア土器）、384・385・は壺、386・387は甕、388は砂岩製の砥石、389は扁平な砂岩楕円礫の敲石、390は泥質砂岩の打製石器である。381は上胴部に３条の微隆起帯を持つ甕で前期末～中期初頭の資料、382の土器片転用紡錘車は、３条のヘラ描沈線が確認される前期末の資料である。383は例は少ないが、小型の器台でミニチュア土器だと考えている。クシ描沈線の特徴から、384はⅢ様式、385・386はⅡ様式の特徴を持った土器片で、386は初源的な簾状文を意識した文様である。387は後期前半の甕。溝出土の石器類は、388が砥石、389が敲石、390が頁岩の打製石包丁である。

9. 包含層出土資料（弥生時代の遺物）

表土（Ⅰ層）の下、Ⅱ・Ⅲ層が遺物包含層である。試掘調査時の包含層出土遺物も併せて、約5,000点の遺物が出土している。うち、弥生土器が4,800点、土師器90点、須恵器60点、石器類30点、磁器・陶器等その他の遺物20点（概数）であり、全体の96％が弥生土器である。（弥生土器の中には若干量土師器が混じっており、実際の割合はもう少し低い。）

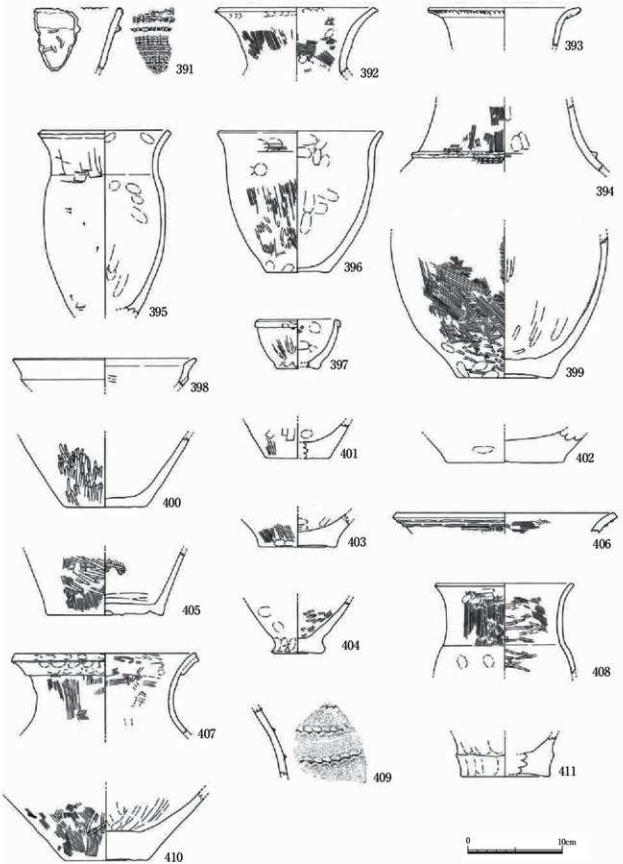
包含層出土資料の中で図化した弥生土器は、391～404がA区、405がB区、406～411がC区からの出土で、D区包含層出土弥生土器の中に図化した遺物はない。また、包含層出土の石器類は412～428である。包含層出土石器類については器種ごとにまとめて提示する。



第 89 図　古代以降の溝から出土した弥生時代の遺物

弥生土器（S=1/4・1/2）石器類（S=1/2・1/4）

※382・383・390 が S=1/2



第90図　包含層出土遺物－弥生時代－1　弥生土器（S=1/4）

①弥生土器

391は壺だと考えているが、類例のほとんどない形状の口縁部で、外面に刻目突帯を貼付し、クシ描簾状文、直線文、波状文を連続して施文している。Ⅱ様式新段階である。394は頸胴界に断面三角形の突帯を貼付する。その下にクシ描簾状文を施文する。391～394が壺、395が甕、396・397が鉢だが、397は小型土器（ミニチュア土器）か。398が後期前半の高坏、399～404が壺及び甕の底部で、以上がA区出土の土器だが、底部には前期末～中期前半の特徴を持つ土器が多い。

B区包含層出土土器は405のみ図化した。底面に特徴があり、溝状（周状に）底面が凹み、少しだけ高台状になっている。

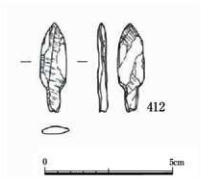
406～411がC区包含層出土弥生土器で、408以外は壺、408のみ甕である。408は無文の土佐型甕で、内面横方向のヘラミガキ、頸部外面縦方向のハケ調整という同じ調整をする例はSK50・70出土資料にある。中期前半～中葉の資料である。

②石器類

石器類については、器種ごとにまとめて提示する。Sで始まる番号は石器計測表用の整理番号で、今回図示しなかった資料も通し番号で整理しておく。矢印で示した番号が図版番号である。

磨製石鏃（S84）→412

C区から1点だけ出土している。田村遺跡群で大量に出土、大陸系の磨製石器として注目された。田村分類に当てはめると、前期中葉から後半に多い有茎式Ⅰ群B類にあたる。古い特徴を持つ有茎式磨製石鏃として、注意しておく必要がある。



第91図　包含層出土遺物
－弥生時代－2　磨製石鏃（S=2/3）

磨製石包丁（S85～89）→413～417

形態の特徴から時期の特定を行うことは難しい。田村遺跡の例でも、前期にも後期にも同様の丁寧な全面研磨した形態のものも、打製で粗雑な作りのものも存在する。石材は頁岩や泥質砂岩、極細粒砂岩など近在で入手可能で最適な石材を利用しているものと思われる。414は酸性凝灰岩である。417は極微細粒砂岩（頁岩に近い）だが、擦痕は残るものの、刃部は仕上げず成形加工の剥離をそのまま残している。

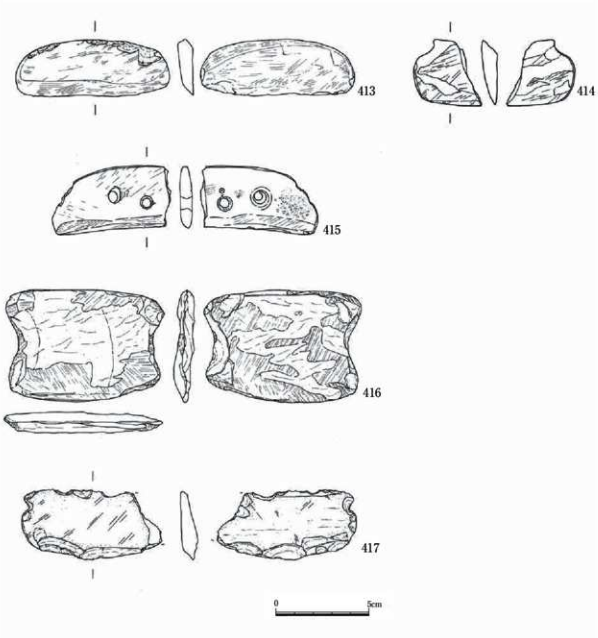
磨製石斧・基部（S90～94　図版掲載S90・91・94）→418～420

5点出土した。C区以外の調査区の包含層中から出土している点は興味深い。大半が御荷鉾緑色岩で緑色岩系の石材に限定される。破損品だが、419のように再利用の意図の見えるものもある。

選択した石材は、断面がやや扁平な礫を選んでおり、田村遺跡群の太型蛤刃分類に当てはめると、やや古相、前期に近い時期の様相を示している。

スクレイパー（削器）（S95～97）→421～423

サヌカイトが選択されている。421と422は片方の端部を側縁の両方向から加撃、抉入部を形成している。この抉入部分を上部にして石器の実測方向を決定した。421は横長剥片素材のスクレイパー（削器）である。



第92図　包含層出土遺物－弥生時代－3　石包丁（S=1/2）

打製石器（S98～101　図版掲載 S99）→ 424

土掘り具の可能性のある打製石器、あるいはその用途だと考えられる剥片類が何点か確認された。図示した 424 は片理の発達した泥質片岩で、A区から出土したものである。他の土掘り具と想定できる石器類もすべてA区からの出土である。

使用痕のある剥片（S102）→図化せず。計測値のみ提示。

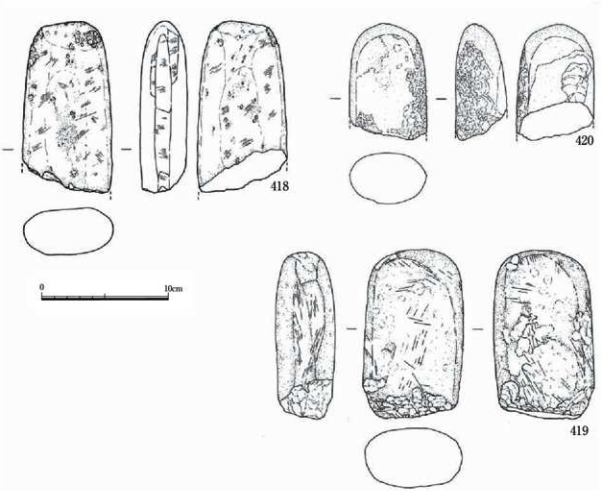
周縁に使用痕と考えられる微細剥離が連続して認められた。今回は図化していない。

敲石（S103）→ 425

棒状の砂岩で、割れており、元来の形状はよくわからない。

両極打法の確認される石器あるいは磨製石斧の未製品（S104）→ 426

実測段階で両極打法による対向剥離が認められたため、パンチの可能性を検討したが、緑色岩系



第 93 図　包含層出土遺物－弥生時代－4　磨製石斧基部（S=1/3）

の石材は、当遺跡において全て伐採斧である太型蛤刃石斧と結びついているため、このやや扁平な棒状礫も磨製石斧の未製品という位置づけが妥当である、と考えている。

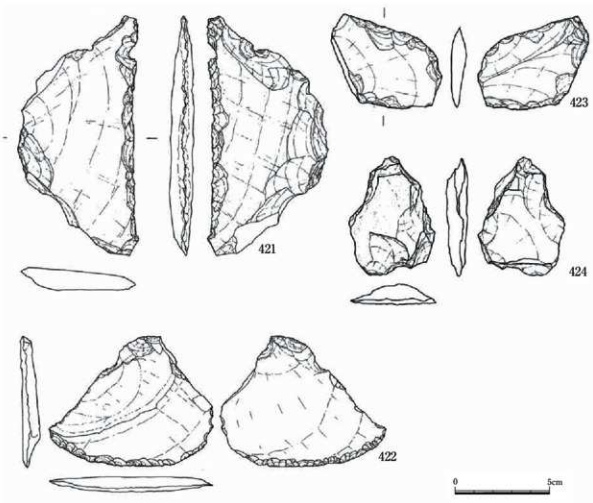
敲石類（S105・106）→ 427

扁平な円礫を利用、表裏面にしっかりした敲打痕が残り、凹状となる。堅果類など植物食のため使用された敲石である可能性がある。

剥片（S107 ～ 116）→図化せず

サヌカイトが３点、頁岩が１点、砂岩が３点、泥質片岩が１点、緑色岩が２点出土している。包含層出土の剥片類はすべてＡ区から出土したものである。

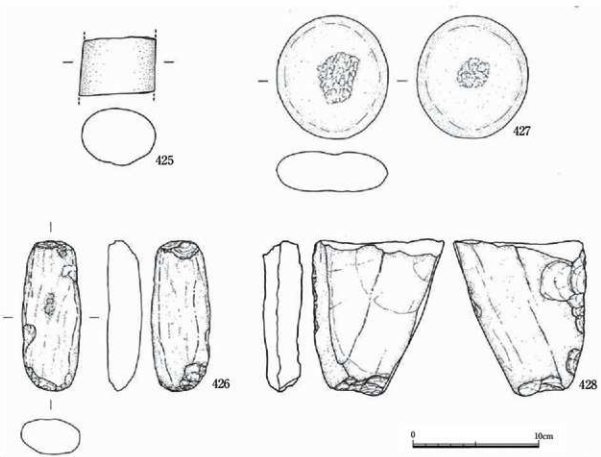
被熱赤変円礫（S117）・円礫（S118）も出土したが、図化していない。



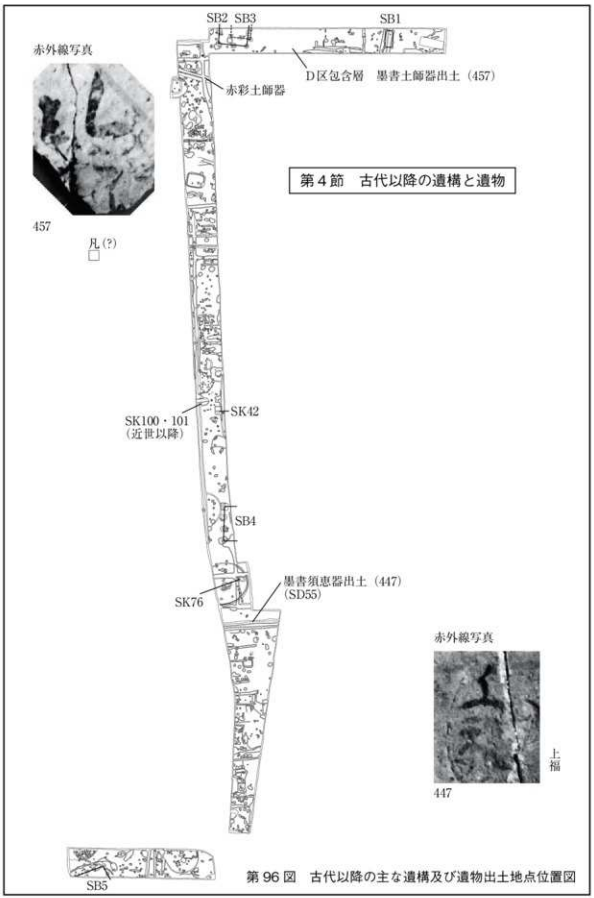
第 94 図　包含層出土遺物－弥生時代－5　スクレイパー類（S=1/2）

石器素材（S119・120）→428

緑色片岩の板状の素材に加撃が加えられている。石斧の素材に成形する途上の可能性もあるが、断定はできない。



第95図　包含層出土遺物－弥生時代－6　敲石・磨製石斧未製品（S=1/3）



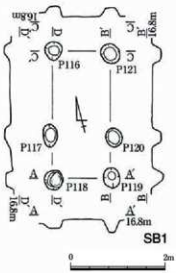
第 96 図　古代以降の主な遺構及び遺物出土地点位置図

1　掘立柱建物（SB）

SB1

調査区（D区）V1･2グリッドに位置する。北側は調査区端に接し、延伸の有無は不明である。軸方向はN-16°-Eである。検出高は16.69 mを測る。検出規模は梁間1×桁行2、梁間1.3 m、桁行2.7～2.8 mを測る。柱間寸法は梁間1.3 m、桁行0.9～1.8 mを測る。柱穴の規模は径43cm、深さ18～28cmを測る。

掘立柱建物を構成する柱穴（P116～121）からそれぞれ数点の土器片が出土しているが、いずれも時期決定の決め手にはならない。



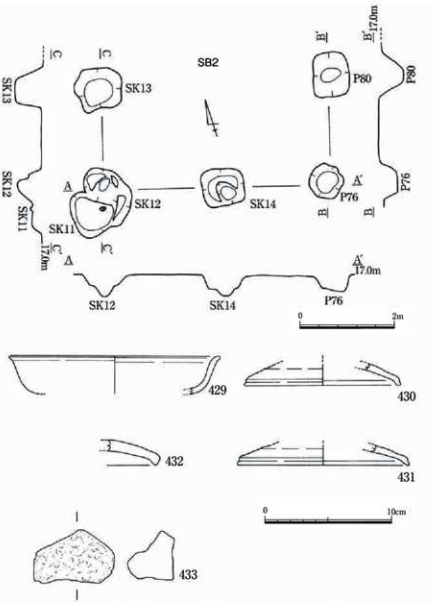
第97図　SB1平面・エレベーション図（S=1/80）

SB2

調査区（D区）O1･2/P2グリッドに位置する。北側は調査区外のため未検出であり、全体の規模は不明である。検出状態での軸方向はN-17°-Eである。検出高は16.80 mを測る。検出規模は梁間2×桁行1、梁間4.8 m×桁行2.0 mを測る。柱間寸法は梁間2.7 m、桁行2.0 mを測る。南東隅の柱穴は未検出と考えられる。柱穴の規模は径約1.0 m、深さ45～58cmを測る。

構成する柱穴はSK13・12・14、P76・80である。

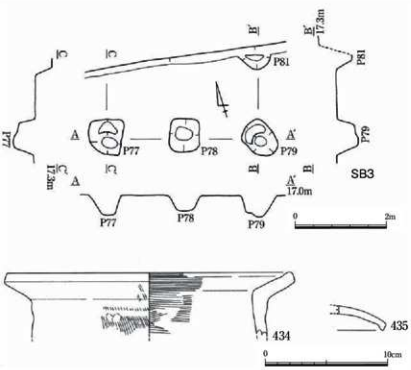
SK13からは土師器片が14点、赤彩土師器片が3点、須恵器が3点、軽石が1点出土し、SK12からは遺構底面から円礫が確認されている。SK14からは土器片が16点、P76からは土師器口縁を含む破



第98図　SB2平面・エレベーション図（S=1/80）
出土遺物　土師器・須恵器・軽石（S=1/3）

片 12 点と須恵器 1 点が、P80 からは土器片 12 点（土師器・弥生土器混在）と須恵器 2 点が出土している。

これらの遺物の中で図示できたものは、429 の土師器坏と 430 ～ 432 の須恵器蓋、そして軽石であり、いずれも SK13 から出土している。429 は口縁内面に沈線が残り、内面に口縁方向に上がる斜め方向のナデが観察される。畿内産の土師器で搬入遺物であり、8 世紀中葉の遺物である。



第 99 図　SB3 平面･エレベーション図（S=1/80）
出土遺物　土師器・須恵器（S=1/3）

SB3

調査区（D 区）O2/P1･2 グリッドに位置する。北側は調査区外のため未検出であり、全体の規模は不明である。検出状態での軸方向は N - 18° - E である。検出高は 16.79 m を測る。検出規模は梁間 2 × 桁行 1 、梁間 3.3 m × 桁行 1.8 m を測る。柱間寸法は梁間 1.7 m、桁行 1.8 m を測る。柱穴の規模は径 0.76 m、深さ 34 ～ 47㎝を測る。

構成する柱穴は P77・78・79・81 である。P77 からは遺物は出土していない。P78 からは土師器 22 点と須恵器 1 点（435）、P79 からは土師器 25 点で、うち 1 点は律令期の長胴の甕（434）が出土、P81 からは土師器 3 点が出土している。435 は 8 世紀中葉から後半にかけての時期であり、SB3 は SB2 に後続する時期だと考えられる。

SB4

調査区（C区）O21・22・23グリッドに位置する。東（西）側は調査区外のため未検出であり、全体の規模は不明である。検出状態での軸方向はN-12°-Eである。検出高は16.50 m を測る。検出規模は桁行（梁間）3、桁行（梁間）5.8 mを測る。柱間寸法は桁行（梁間）1.8 ～ 2.0 mを測る。P326の平面形態は隅丸方形状を呈し、長径1.24 m、短径1.22 m、深さ1.03 mを測る。断面形態は台形状を呈し、西側に段部を有する。

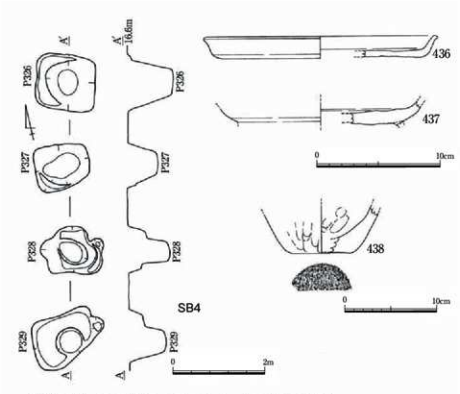
P327の平面形態は隅丸長方形状を呈し、長径1.23 m、短径1.02 m、深さ0.66 mを測る。断面形態は台形状を呈し、南西側に小規模な段部を有する。

P328の平面形態は不整形状を呈し、長径1.42 m、短径1.03 m、深さ0.91 mを測る。ピット状遺構と切り合い関係にある。断面形態は台形状を呈し、周囲に段部を有する。

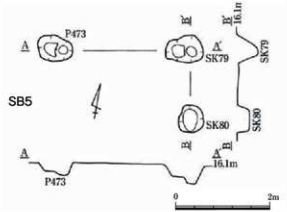
P329の平面形態は歪な隅丸長方形状を呈し、長径1.50 m、短径0.97 m、深さ0.78 mを測る。断面形態は台形状を呈し、周囲に段部を有する。

P326からは土器片26点が出土したが、弥生中期と土師器が混在する。須恵器皿（436）が出土している。P327からは土器細片10点が、P328からは土器片20点、底部ヘラ切の須恵器が1点、P329からは土器片10点が出土している。

時期が判断できる資料は、436の須恵器皿で9世紀のはじめの資料である。



第100図　SB4平面・エレベーション図（S=1/80）
出土遺物　須恵器（S=1/3）弥生土器（S=1/4）



第101図　SB5平面・エレベーション図（S=1/80）

SB5

調査区（A区）I37/J37グリッドに位置する。南側は調査区外のため未検出であり、全体の規模は不明である。検出状態での軸方向はN-11°-Wである。検出高は15.95 mを測る。検出規模は梁間1×桁行1、梁間2.9 m、桁行1.5 mを測り、柱間寸法も同寸である。

SK79の平面形態は不整形な楕円形状を呈し、長径0.87 m、短径0.60 m、深さ45cmを測る。断面形態は台形状を呈し、西側に段部を有する。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。SK80の平面形態は歪な円形状を呈し、長径0.63 m、短径0.59 m、深さ30cmを測る。断面形態は台形状を呈する。

P473の平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.79 m、短径0.58 m、深さ21cmを測る。断面形態は台形状を呈し、西側に段部を有する。

SK79からは10点、SK80からは12点、P473からは13点の土器片が出土しているものの、時期決定できる資料がなく、古代の遺構の可能性が高いといえるのみである。

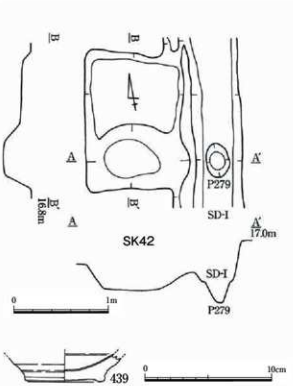
2　土坑（SK）

SK42

調査区（C区）O17･18グリッドに位置する。検出高は16.61 mを測る。平面形態は方形状を呈し、長径1.44 m、短径1.09 m、深さ29cmを測る。断面形態は台形状を呈し、北側に段部を有する。

弥生土器14点と須恵器3点、白磁碗Ⅳ類の底部（439）が出土している。

遺構の平面形態（方形）からも、古代の遺構である可能性が高く、11世紀後半～12世紀の遺構だと捉えておきたい。



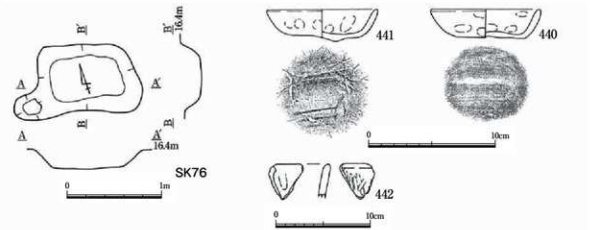
第102図　SK42平面・エレベーション図（S=1/40）
出土遺物　白磁（S=1/3）

SK76（ST6の上面遺構）

調査区（C区）P25グリッドに位置する。P456と切り合い関係にある。検出高は16.29 mを測る。平面形態は隅丸長方形状を呈し、長径1.17 m、短径0.73 m、深さ20cmを測る。断面形態は台形状を呈する。ST6の床面から検出しているが、竪穴住居跡との関係は不明である。

土師器の小皿が2点（440・441）出土している。いずれも、口径9㎝、器高2.5㎝前後であり、底面に平行圧痕が残る。手づくねの皿で、中世前期の資料である。

442は弥生土器の可能性のある口縁部である。

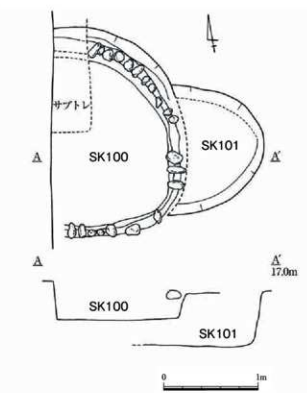


第103図　SK76平面・エレベーション図（S=1/40）出土遺物　土師器（S=1/3）弥生土器（S=1/4）

SK100・101

調査区（C区）N17グリッドに位置する。SK101をSK100が切っている。SK100は直径2.2mの円形で、遺構の西側1m弱が調査区外となる。外側をハンダ状の赤土で固められ、内側に円礫が詰め込まれた形で検出されている。検出面からの深さは30㎝。SK101は幅1.4mの楕円形の土坑だが、SK100に切られているため、長さは不明。検出面からの深さは60㎝である。

出土遺物は、陶磁器5点、磁器3点、陶器1点、備前擂り鉢1点、瓦6点、砥石1点（443）。遺物の時期は近世～近代で、砥石が遺構中から確認されたことからも、近代以降の便所だった可能性が高い。



第104図　SK100・101平面･エレベーション図（S=1/40）

第105図　SK100出土遺物
砥石（S=1/3）

3　溝（SD）

古代以降で図示可能な遺物が出土した溝は、SD2・23・55・H と少ないが、出土遺物が確認できない溝でも、流路の方向や他遺構との切り合い関係から同時期だと考えられる溝がある。

SD1

調査区（C区）M2/N2 グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。北端は SD - A と接続するが、本遺構との関係は不明である。検出状態での主軸方向は N - 80° - W で、ほぼ直線状に検出している。検出高は 16.85 m を測る。検出規模は 3.87 × 0.62 m、床面高は東端で 16.67 m、西端で 16.65 m を測る。断面形態は台形状を呈し、深さは 19cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

本遺構の 2.8 m ほど南側に SD2 をほぼ並行して検出している。

SD2

調査区（C区）M3/N3 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SD - A と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向は N - 80° - W で、ほぼ直線状に検出している。検出高は 16.83 m を測る。検出規模は 5.05 × 0.65 m、床面高は東端で 16.79 m、西端で 16.69 m を測る。断面形態は台形状を呈し、深さは 13cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

本遺構の 2.8 m ほど北側に SD1 をほぼ並行して検出している。

SD4

調査区（C区）M6/N6/O6 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向は N - 81° - W で、ほぼ直線状に検出している。検出高は 16.88 m を測る。検出規模は 5.06 × 0.38 ～ 0.46 m、床面高は東端で 16.74 m、西端で 16.78 m を測る。断面形態は皿状を呈し、深さは 9 cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。床面から掘削痕を検出している。

SD5

調査区（A区）S2/T2/U2 グリッドに位置する。西端は SD - B と接続するが、本遺構との関係は不明である。SD - C/P102・105/SX3 と切り合い関係にある。主軸方向は N - 78° - W で、ほぼ直線状に検出している。検出高は 16.72 m を測る。検出規模は 7.85 × 0.36 ～ 0.51 m、床面高は東端で 16.69 m、西端で 16.71 m を測る。断面形態は皿状を呈し、深さは 4 cmを測る。

SD6

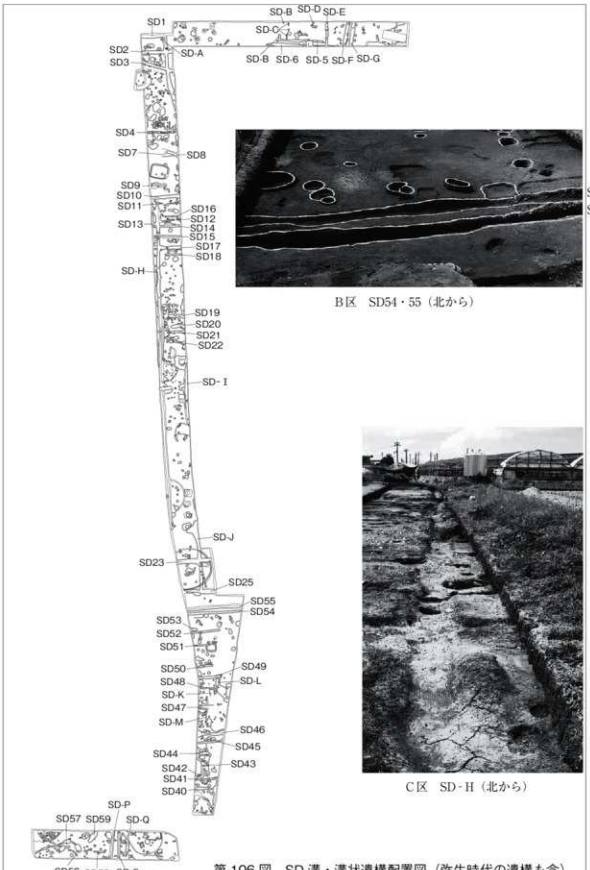
調査区（A区）R2/S2/T2/U2 グリッドに位置する。南側は調査区外へ続いている。SD - E/P100・107/SX3 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向は N - 79° - W で、ほぼ直線状に検出している。検出高は 16.72 m を測る。検出規模は 11.53 × 0.12 ～ 0.53 m、床面高は東端で 16.68 m、西端で 16.71 m を測る。断面形態は皿状を呈し、深さは 6 cmを測る。

SD7

調査区（C区）N7 グリッドに位置する。東側は調査区外へ続いている。西側は試掘 TR により未検出である。SD8 と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向は N - 85° - W である。検出高は 16.82 m を測る。検出規模は 1.65 × 0.55 m、床面高は東端で 16.78 m、西端で 16.75 m を測る。断面形態は皿状を呈し、深さは 5 cmを測る。

SD9

調査区（C区）M8・9/N8・9 グリッドに位置する。西側は調査区外へ続いている。P148 と切り合



第 106 図　SD 溝・溝状遺構配置図（弥生時代の遺構も含）

い関係にある。検出状態での主軸方向はN-81°-Wである。検出高は16.83 mを測る。検出規模は2.77 × 0.60 ～ 1.05 m、床面高は東端で16.70 m、西端で16.54 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは14 ～ 28㎝を測る。

SD10

調査区（C区）M9/N9/O9グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-82°-Wである。検出高は16.83 mを測る。検出規模は4.92 × 0.57 m、床面高は東端で16.75 m、西端で16.78 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5㎝を測る。

SD11

調査区（C区）N9/O9グリッドに位置する。部分的に検出し、西端はSD-Hと接続するが、本遺構との関係は不明である。検出状態での主軸方向はN-81°-Wである。検出規模は4.07 × 0.18 ～ 0.47 m、床面高は東端で16.78 m、西端で16.71 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは8㎝を測る。

SD12

調査区（C区）N10グリッドに位置する。西端はSD-Hと切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-88°-Wである。検出高は16.78 mを測る。検出規模は2.30 × 0.29 m、床面高は16.74 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは4㎝を測る。

SD13

調査区（C区）N10グリッドに位置する。部分的に検出し、西端は調査区外へ続いている。SD-H･14と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-80°-Wである。検出高は16.75 mを測る。検出規模は3.41 × 0.51 m、床面高は東端で16.62 m、西端で16.69 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは11㎝を測る。

SD14

調査区（C区）N10/O10グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SD-H･13と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-82°-Wである。検出高は16.77 mを測る。検出規模は4.73 × 0.22 ～ 0.47 m、床面高は東端で16.66 m、西端で16.71 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは11㎝を測る。

SD15

調査区（C区）N11/O11グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SD-Hと切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-79°-Wである。検出高は16.75 mを測る。検出規模は4.73 × 0.29 ～ 0.59 m、床面高は東端で16.52 m、西端で16.57 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは18㎝を測る。

SD16

調査区（C区）N10/O10グリッドに位置する。主軸方向はN-80°-Wである。検出高は16.79 mを測る。規模は2.15 × 0.28 m、床面高は東端で16.77 m、西端で16.76 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは3㎝を測る。

SD17

調査区（C区）N11/O11グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。SD-H/P176 ～ 178･180･181と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-81°-Wである。検出高は16.76

mを測る。検出規模は3.61 × 0.58 m、床面高は東端で16.69 m、西端で16.70 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは7㎝を測る。

SD18

調査区（C区）N11/O11グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-81°-Wである。検出高は16.77 mを測る。検出規模は2.85 × 0.30 m、床面高は東端で16.70 m、西端で16.69 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは7㎝を測る。

SD19

調査区（C区）N14/O14グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。SK35/P210･222と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-79°-Wである。検出高は16.75 mを測る。検出規模は2.77 × 0.50 ～ 0.70 m、床面高は東端で16.68 m、西端で16.72 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5㎝を測る。

SD20

調査区（C区）N14･15/O14･15グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。P231 ～ 234と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-80°-Wである。検出高は16.75 mを測る。検出規模は2.40 × 0.53 ～ 1.06 m、床面高は東端で16.70 m、西端で16.72 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5㎝を測る。

SD21

調査区（C区）N15/O15グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。P248 ～ 250と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-80°-Wである。検出高は16.76 mを測る。検出規模は3.10 × 0.41 m、床面高は東端で16.71 m、西端で16.74 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5㎝を測る。

SD22

調査区（C区）N15/O15グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いている。土坑状遺構と切り合い関係にある。検出状態での主軸状態はN-74°-Wである。検出高は16.73 mを測る。検出規模は2.15 × 0.33 m、床面高は東端で16.70 m、西端で16.68 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは4㎝を測る。

SD23

調査区（C区）O24･25/P24･25グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。ST6を切り、SD-Jと切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-84°-Wである。検出高は16.41 mを測る。検出規模は5.90 × 0.82 m、床面高は東端で16.36 m、西端で16.28 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは10㎝を測る。

SD25

調査区（C区）O26/P26グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。ST6を切り、SK62/SD-Jと切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-79°-Wである。検出高は16.40 mを測る。検出規模は5.15 × 0.74 ～ 1.00 m、床面高は東端で16.30 m、西端で16.32 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは10㎝を測る。

SD40

調査区（B区）O34/P34グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。検出状態での主

軸方向はN-80°-Wである。検出高は16.40 mを測る。検出規模は2.94 × 0.62 m、床面高は東端で16.35 m、西端で16.34 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは6㎝を測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD41

調査区（B区）O34/P34グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。P357と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-82°-Wである。検出高は16.39 mを測る。検出規模は3.75 × 0.33 m、床面高は東端で16.28 m、西端で16.32 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは11㎝を測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD42

調査区（B区）O34/P34グリッドに位置する。ST4を切っている。検出状態での主軸方向はN-90°-Wである。検出高は16.40 mを測る。検出規模は1.80 × 0.28 m、床面高は東端で16.31 m、西端で16.27 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは7㎝を測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD43

調査区（B区）P 33グリッドに位置する。ST 4･5を切っている。検出状態での主軸方向はN-83°-Wである。検出高は16.44 mを測る。検出規模は1.03 × 0.27 m、床面高は東端で16.31 m、西端で16.26 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは15㎝を測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD44

調査区（B区）O33/P33グリッドに位置する。ST4を切っている。検出状態での主軸方向はN-86°-Wである。検出高は16.49 mを測る。検出規模は1.42 × 0.57 m、床面高は東端で16.43 m、西端で16.42 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さ6㎝を測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD45

調査区（B区）O32/P32グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-85°-Wである。検出高は16.48 mを測る。検出規模は4.44 × 0.40 m、床面高は東端で16.40 m、西端で16.37 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは11㎝を測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD46

調査区（B区）O32/P32/Q32グリッドに位置する。不整形な溝状を呈し、両端は調査区外へ続いている。P369と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-83°-Wである。検出高は16.48 mを測る。検出規模は4.51 × 0.33 ～ 1.47 m、床面高は東端で16.35 m、西端で16.37 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは14㎝を測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD47

調査区（B区）O31/P31グリッドに位置する。SD-M/SX10と切り合い関係にあり、東端は未検出である。検出状態での主軸方向はN-85°-Wである。検出高は16.47 mを測る。検出規模は2.33 × 0.40 ～ 0.60 m、床面高は東端で16.28 m、西端で16.36 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは15㎝を測る。

SD48

調査区（B区）P30グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。SD-K･Lと切り合い関係にある。検出規模は3.45 × 0.30 m、床面高は東端で16.42 m、西端で16.45 mを測る。断面形

態は皿状を呈し、深さは6㎝を測る。

SD49

調査区（B区）P29･30グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。SK66と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-83°-Wである。検出高は16.54 mを測る。検出規模は3.91 × 0.48 m、床面高は東端で16.34 m、西端で16.31 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは27㎝を測る。

SD50

調査区（B区）O29/P29グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。P411と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-87°-Wである。検出高は16.34 mを測る。検出規模は2.80 × 0.42 m、床面高は東端で16.25 m、西端で16.28 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは8㎝を測る。

SD51

調査区（B区）O28/P28グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。SK70を切っている。検出状態での主軸方向はN-83°-Wである。検出高は16.36 mを測る。検出規模は2.82 × 0.27 m、床面高は東端で16.21 m、西端で16.27 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは11㎝を測る。

SD52

調査区（B区）O28/P27･28グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。P429と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-86°-Wである。検出高は16.35 mを測る。検出規模は4.88 × 0.38 m、床面高は東端で16.26 m、西端で16.32 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは6㎝を測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD53

調査区（B区）O27･28グリッドに位置する。西端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-82°-Wである。検出高は16.36 mを測る。検出規模は1.13 × 0.52 m、床面高は東端で16.30 m、西端で16.29 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは6㎝を測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD54

調査区（B区）O27/P27/Q27グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SK74･75と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-83°-Wである。検出高は16.29 mを測る。検出規模は9.13 × 0.42 ～ 0.54 m、床面高は東端で16.19 m、西端で16.17 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは13㎝を測る。埋土は濃い黒色シルトである。

SD55

調査区（B区）O27/P26･27/Q26･27グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-84°-Wである。検出高は16.31 mを測る。検出規模は9.48 × 0.50 ～ 0.72 m、床面高は東端で16.02 m、西端で16.05 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは31㎝を測る。埋土は濃い黒色シルトである。

SD-A

調査区（C区）N2 ～ 5グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SD1 ～ 3/P37･39･51･83と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-5°-Eである。検出高は16.83

mを測る。検出規模は13.40 × 0.47 ～ 0.88 m、床面高は南端で16.77 m、北端で16.54 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは6 ～ 30cmを測る。

SD-B

調査区（D区）S2グリッドに位置する。南端はSD5と接続するが、本遺構との関係は不明である。主軸方向はN-12°-Eである。検出高は16.72 mを測る。検出規模は1.15 × 0.39 m、床面高は16.69 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは3cmを測る。

SD-C

調査区（D区）S2グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いている。部分的に検出し、南端はSD5と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-16°-Eである。検出高は16.72 mを測る。検出規模は3.00 × 0.18 m、床面高は南端で16.70 m、北端で16.69 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは3cmを測る。

SD-D

調査区（D区）T1･2グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-11°-Wである。検出高は16.69 mを測る。検出規模は1.32 × 0.22 m、床面高は16.65 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5cmを測る。

SD-E

調査区（D区）U1･2グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。P106･114･115と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-10°-Wである。検出高は16.71 mを測る。検出規模は3.98 × 0.42 m、床面高は南端で16.68 m、北端で16.63 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは4cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD-F

調査区（D区）V1･2グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SB4（P116 ～ 118）と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-21°-Wである。検出高は16.68 mを測る。検出規模は4.20 × 0.62 m、床面高は南端で16.60 m、北端で16.62 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは8cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD-G

調査区（D区）V1･2グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SB4（P119 ～ 121）と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-18°-Wである。検出高は16.68 mを測る。検出規模は4.13 × 0.62 ～ 0.85 m、床面高は南端で16.57 m、北端で16.64 mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは8cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。

SD-H

調査区（C区）N9 ～ 23グリッドに位置する。西側は調査区外へかかる。SK100･101（近代土坑）に切られ、ST3･8を切っている。SD12 ～ 15･17/SK35･40･45と切り合い関係にある。主軸方向はN-7°-Eである。検出高は南端で16.56 m、北端で16.83 mを測る。検出規模は55.9 × 0.52 ～ 0.91 m、床面高は南端で16.19 m、北端で16.72 mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは11 ～ 37cmを測る。

東側に位置するSD-Iとほぼ並行して検出し、現況地割りに沿った道路状遺構の可能性が考えられる。

SD-I

調査区（C区）O16～19グリッドに位置する。東側は調査区外へかかる。ST2を切り、SK41･42･44/P279･290･291と切り合い関係にある。主軸方向はN-8°-Eである。検出高は16.59mを測る。検出規模は11.0×0.47m、床面高は南端で16.35m、北端で16.48mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは16cmを測る。

西側に位置するSD-Hとほぼ並行して検出し、現況地割りに沿った道路状遺構の可能性が考えられ、南側に位置するSD-J（SK47）と同一遺構の可能性が検討される。

SD-J

調査区（C区）O23～25/P24～26グリッドに位置する。北端東側は調査区外へかかる。ST6を切り、SK48/SD23･25/P331･457･454･453と切り合い関係にある。主軸方向はN-4°-Eである。検出高は南端で16.36m、北端で16.48mを測る。検出規模は11.93×0.72m、床面高は南端で16.30m、北端で16.44mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5cmを測る。

現況地割りに沿った道路状遺構の可能性が考えられ、北側に位置するSD-Iと同一遺構の可能性が検討される。

SD-K

調査区（B区）P30グリッドに位置する。南側は近現代の攪乱により切られている。検出状態での主軸方向はN-2°-Eである。検出高は16.43mを測る。検出規模は0.97×1.35m、床面高は南端で16.24m、北端で16.34mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは14cmを測る。

SD-L

調査区（B区）P30グリッドに位置する。検出状態からSD48･49と切り合い関係にあると考えられる。検出状態での主軸方向はN-13°-Eである。検出高は16.55mを測る。検出規模は1.34×0.54m、床面高は南端で16.47m、北端で16.46mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5cmを測る。

SD-O

調査区（A区）L36･37グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。検出状態での主軸方向はN-11°-Eである。検出高は南端で16.10m、北端で16.16mを測る。検出規模は4.80×0.50m、床面高は南端で15.94m、北端で16.01mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは15cmを測る。埋土は黒褐色シルトで、下層は黄灰色シルトである。

SD-P

調査区（A区）L36･37グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いている。SK82と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-14°-Eである。検出高は16.11mを測る。検出規模は4.70×0.58m、床面高は南端で15.89m、北端で15.91mを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは22cmを測る。

SD-Q

調査区（A区）L36･37/M37グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いている。ST10を切り、P487と切り合い関係にある。検出状態での主軸方向はN-15°-Eである。検出高は南端で16.12m、北端で16.18mを測る。検出規模は2.70×0.58m、床面高は南端で16.09m、北端で16.02mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは9cmを測る。埋土は茶灰シルトである。

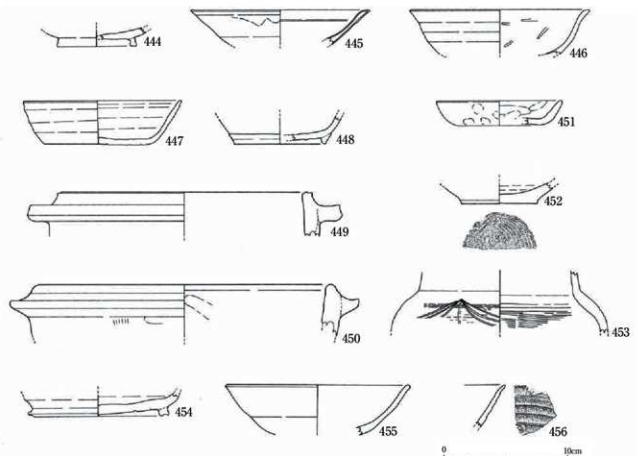
4　溝、ピットから出土した古代以降の遺物（第107図）

溝出土遺物

SD2から444の土師器椀と445の白磁皿が出土している。444は輪高台の土師器、445は白磁皿Ⅳ類で、いずれも11世紀後半～12世紀の遺物である。SD23から出土した土師器椀もほぼ同じ時期の資料である。SD55から出土した須恵器坏（447）は、底面に墨書がある墨書土器で、文字は「上福」と読み取れる吉祥句である。8世紀後半で下ノ坪遺跡SK30とほぼ同時期の資料である。南北に56mの長さを持つSD-Hからは、448の須恵器坏（9世紀）、449･450の摂津羽釜、451の土師器皿、452の須恵器椀、453の瓦質土器・風炉（火舎）など古代から中世前期にかけての遺物が出土している。中でも、453の大和型瓦質土器は、香南市内でははじめて確認された遺物である。

ピット出土遺物

図示できた遺物は3点のみ、P149出土の土師器坏（454）、P463出土の土師器椀（455）、P488出土の土師器坏（456）である。454は8世紀、455は12世紀、456は中世前期の資料である。



第107図　遺構（SD・P）出土遺物－古代以降－　土師器・須恵器・白磁・瓦質土器（S=1/3）

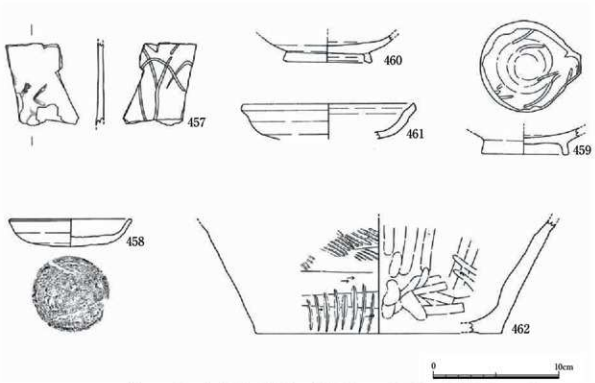
5　包含層出土遺物（弥生時代以外・第 108 図）

包含層出土遺物の中で、弥生時代以外の遺物だと断定できるものは、合計 150 点足らずと、遺物全体の 3 パーセント程度である。調査区全域から、古代以降の遺物が確認されているものの、A 区、B 区など南側には遺物が少なく、C 区の北端から D 区にかけて古代の遺物が集中している。

462 が A 区から出土した以外は、全て D 区からの出土である。

457 は土師器皿で内面に暗文、底面に墨書が確認される。墨書の文字は 2 文字残っている。一文字目は「凡（オホシ）」と読むことができるものの、断定できるものではない。文字は「凡？□」とし、今後の課題としたい。

458 は 10 世紀中葉の土師器皿、459 は 10 世紀後半～末の土師器椀、460 は 10 世紀の土師器椀、461 は須恵器供膳具、462 は須恵器貯蔵具で古代の資料なのだが、所属時期など詳細は不明である。



第 108 図　包含層出土遺物－古代以降－　土師器・須恵器（S=1/3）

遺 物 観 察 表

表5　遺物観察表（土器）1

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
2	C	ST1 パンク	弥生土器	壺（長頸壺）	口縁～頸部	13.7	(11.0)	–	–	胎土は精選されており、1mm大の砂粒を少量含むのみ。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇は丸みを帯びる。頸部が直立する長頸壺で、口縁は開き気味。	
3	C	ST1	弥生土器	壺	口縁～上胴部	10.4	(12.7)	–	–	1mm前後の砂粒をやや多く含む。	2.5Y 3/2 黒褐色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	タタキ、ハケ、ナデ	ハケとナデによりタタキ目の痕跡を丁寧に消している。口唇はわずかに凹状の面をなす。	
4	C	ST1 ①パンク	弥生土器	壺	頸部	–	(11.7)	–	–	1～2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 5/4 にぶい褐色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ユビナデ、ナデ	口縁部形状不明。頸部は大きく外へ開く。	
5	C	ST1 上層	弥生土器	壺	口縁～上胴部	14.0	(6.4)	–	–	1～2mm前後のチャート砂粒を多量に含む。	10YR 4/2 灰黄褐色	10YR 4/2 褐灰色	ハケ、ナデ	ナデ	口縁は大きくラッパ状に開き、口唇は凹状の面をなす。上胴部に列点文。	
6	C	ST1 ②	弥生土器	壺	口縁部	–	(2.0)	–	–	1～2mm大の砂粒を多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ナデ	ナデ	口唇は凹状の面をなし、下端を拡張する。	残存率1/12 以下。
7	C	ST1 ②	弥生土器	甕	口縁～上胴部	(17.4)	(6.0)	–	–	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 5/3 にぶい褐色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	ナデ、ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	口唇はわずかに凹状の面をなす。頸部はくの字状に強く屈曲する。	外面に煤状炭化物付着。
8	C	ST1	弥生土器	甕	口縁部	(22.8)	(2.2)	–	–	1mm前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 5/3 にぶい黄褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	口唇は面をなし、口縁端部下端が肥厚する。	外面に煤状炭化物付着。
9	C	ST1	弥生土器	甕	口縁～頸部	(18.2)	(3.0)	–	–	1～2mm大の砂粒を多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	不明	ハケ	摩耗調著で調整不明。口唇は面をなす。	
10	C	ST1 ③上層パンク	弥生土器	壺	胴部	–	(19.4)	30.4	–	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 6/3 にぶい黄褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	胴部は大きく球状に張り出し、最大径は上胴部にある。頸胴界に列点文。	
11	C	ST1 ③上層	弥生土器	壺	下胴部～底部	–	(12.2)	–	8.4	1～2mm大のチャート砂粒を多く含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	タタキ、ハケ、ナデ	平底。胴部は外方へ大きく開いて立ち上がる。	
12	C	ST1 ③上層パンク	弥生土器	壺	下胴部～底部	–	(6.9)	–	6.6	1～2mm大の砂粒を多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	平底。胴部は外方へ大きく開いて立ち上がる。	
13	C	ST1 ③上層	弥生土器	甕	下胴部～底部	–	(4.7)	–	6.0	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 4/1 褐灰色	10YR 4/2 灰黄褐色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	タタキ、ナデ	平底。	
14	C	ST1	弥生土器	甕	下胴部～底部	–	(7.9)	–	3.5	1mm前後の砂粒、2～3mm大の赤粒砂を多く含む。	10YR 6/3 にぶい黄褐色	10YR 6/4 にぶい黄褐色	ヘラケズリ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ	上げ底で、一旦くびれた後、外上方へたちあがる。	
15	C	ST1	弥生土器	甕	底部	–	(6.7)	–	5.4	1mm前後の砂粒、微細粒砂を多く含む。	10YR 4/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ナデ	ハケ、ヘラミガキ	内底は調整のため器表面が残っていない。	
16	C	ST1 パンク	弥生土器	甕	底部	–	(3.8)	–	8.6	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 3/2 黒褐色	10YR 6/4 にぶい黄褐色	ユビナデ、ユビオサエ	ユビナデ、ユビオサエ	平底、底部外端は外方へ拡張。	
17	C	ST1 ③上層 ～⑤～⑧	弥生土器	台付鉢	脚部	–	(4.8)	–	8.5	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	脚端部は丸く仕上げる。外面は強いナデに沿う砂粒が移動する。（上→下）	
18	C	ST1 ①	弥生土器	壺	胴部	–	(1.9)	–	–	砂粒の含有量は少ない。	7.5YR 5/3 にぶい褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	剥突を連続させる。	
22	C	ST2 床面	弥生土器	鉢	口縁～上胴部	–	(8.0)	–	–	2～3mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、板ナデ	貼付口縁。口縁下端肥厚。口唇は面を成し、凹線状に浅い沈線を巡らせる。外面は板ナデによって砂粒が移動する。（上→下）	
23	C	ST2 床面	弥生土器	壺	下胴部～底部	–	(12.3)	(30.8)	9.5	1～2mm大雲母のチャート砂粒をやや多く含む	10YR 3/1 黒褐色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、板ナデ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	わずかに上げ底気味。底面付近にタテ目が残る。胴部外面はヘラミガキで仕上げる。	
25	C	ST3 床面	弥生土器	壺（広口壺）	口縁～頸部	17.8	(7.7)	–	–	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	口縁は大きくラッパ状に開き、口唇は面をなす。頸部外面に5条1単位のタ字状直線文を重ねて施文。福平な粘土帯を全粘付し、粘土帯上に刻目を施す。	
26	C	ST3 床面	弥生土器	壺	胴部	–	(5.4)	–	–	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	ヘラ状沈線による直線文と平凡竹管による格子目文。	
27	C	ST3 床面	弥生土器	壺	口縁部	(29.3)	(5.3)	–	–	1～2mm大の砂粒を少量含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ナデ	板ナデ、ユビオサエ	口唇はわずかに凹状の面をなし、下端を拡張する。口縁部外面に断面三角形の微隆起帯を貼付する。微隆起帯貼付の際についたと考えられる爪形の圧痕が残る。	28と同一個体。

表5　遺物観察表（土器）2

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
28	C	ST3 床面	弥生土器	壺	頸部～胴部	－	（16.7）	－	－	2～4mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/4 に赤い橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ	板ナデ、ユビオサエ、ユビナデ	上胴部に3条の微隆起帯を貼付する。微隆起帯の上下に高の圧痕が連続してのこされており、ユビオサエによる押圧で引き延ばしたと考えられる。胴部外面は板ナデに2D程くけ上げられている。	
29	C	ST3 床面	弥生土器	壺	胴部～底部	－	（25.5）	35.6	9.6	1～5mm前後の砂粒を多量に含む。特に内底面には2～3mm大の砂粒が集中。	7.5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	平底。胴部は大きく張り出す。胴部中位以下は無文である。	
30	B	ST4	弥生土器	壺	口縁部	（24.4）	（2.2）	－	－	精選された粘土。1mm前後の砂粒を少量含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/4 に赤い橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	貼付口縁。口唇は面をなし、下端に刻目。	
31	B	ST4	弥生土器	甕	口縁～上胴部	19.1	（12.8）	－	－	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口唇は凹状の面をなし、頸胴部に断面三角形の突帯を貼付する。中間中葉。	
32	B	ST4	弥生土器	鉢	口縁～胴部	19.1	（5.8）	－	－	0.5～1mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 に赤い黄橙色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ、ユビナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	貼付口縁。粘土紐を折り曲げ、玉縁状の口縁を形成する。粗やかな橙色に発色。	
33	B	ST4	弥生土器	無頸壺あるいは鉢	口縁～胴部	14.0	（5.5）	17.8	－	1mm大以下の細粒砂、微細粒砂を多量に含む。	7.5YR 5/3 に赤い褐色	7.5YR 5/3 に赤い褐色	ナデ	ナデ	口唇は内傾する面をなす。口縁部外面に3条の微隆起帯、その下に以粒状の浮文を貼付する。摩耗調著で調整不明瞭。胎例はタタン状無頸壺だと考えている。	
34	B	ST4	弥生土器	壺	上胴部	－	（15.5）	（28.4）	－	胎土は精選されており、砂粒をほとんど含まない。	5Y 4/1 灰色	7.5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	頸部に大きく張り出した由の上胴部。ヘラミガキで丁寧に仕上げられており、無文である。	
35	B	ST4	弥生土器	甕	底部	－	（3.9）	－	5.3	0.5～1mm大のチャート細粒砂を多量に含む。	2.5Y 3/1 黒褐色	2.5Y 6/3 に赤い黄色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、ユビオサエ、ナデ	上げ底。	
36	B	ST4	弥生土器	蓋	天井部～体部	4.6	（8.0）	－	－	1mm大の砂粒を多く含む。	10YR 6/3 に赤い黄橙色	10YR 6/3 に赤い黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ、ユビナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	端部形状不明。	
43	B	ST5	弥生土器	壺	口縁～頸部	17.8	（5.0）	－	－	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	2.5Y 7/3 浅黄色	2.5Y 7/3 浅黄色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	貼付口縁で、口唇は丸みを帯びた面をなす。外面にハケ状原体による圧痕あり。	
44	B	ST5	弥生土器	甕	口縁～頸部	12.3	（5.6）	－	－	精選された粘土。1mm前後の砂粒を少量含む。	10YR 3/2 黒褐色	10YR 3/2 黒褐色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなし、下端に刻目。	
45	B	ST5	弥生土器	甕	口縁～頸部	17.9	（4.8）	－	－	0.5mm前後の微細粒砂を多く含む。	7.5YR 7/4 に赤い橙色	10YR 6/3 に赤い黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	貼付口縁。	雲部に煤状炭化物付着。
46	B	ST5	弥生土器	壺	口縁～頸部	14.4	（5.1）	－	－	1～2mm大の砂粒を多く含む。	7.5YR 6/4 に赤い橙色	5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなし、上端は稜をなして下端は若干拡張する。	
47	B	ST5	弥生土器	壺	底部	－	（2.3）	－	（4.6）	1～2mm大の砂粒を多く含む。	10YR 8/3 浅黄橙色	7.5YR 6/3 に赤い橙色	ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	わずかに高台状になる。	
48	B	ST5	弥生土器	甕	頸部～底部	－	（14.0）	－	5.9	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/3 に赤い橙色	10YR 3/3 暗褐色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	わずかに上げ底気味。底面に強いユビナデによる移動の移動が確認される。	
49	B	ST5	弥生土器	甕	底部	－	（3.4）	－	4.0	1mm大の砂粒を少し含む。	10YR 4/1 褐灰色	10YR 5/3 に赤い黄褐色	ユビオサエ	ナデ、ユビオサエ	平底。	
50	B	ST5	弥生土器	壺	底部	－	（4.0）	－	8.0	1mm大の砂粒を含むが、量は少ない。	2.5Y 4/1 黄灰色	10YR 7/3 に赤い黄色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	わずかに上げ底気味。	
51	B	ST5	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	（10.1）	（19.4）	（7.2）	1～3mm大前後のチャート砂粒をやや多く含む。5mm大の小礫あり。	10YR 6/1 褐灰色	5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	平底。	
54	C	ST6	弥生土器	壺	口縁部	22.8	（6.5）	－	－	0.5～1mm大の砂粒、微細粒砂を多く含む。	2.5Y 7/3 浅黄色	10YR 7/4 に赤い黄色	ハケ、ユビナデ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなす。摩耗調著。	
55	C	ST6	弥生土器	壺	口縁～頸部	19.0	（7.8）	－	－	1～2mm大の砂粒を多く含む。	2.5Y 5/2 暗灰黄色	7.5YR 7/6 橙色	ユビオサエ、ナデ	ナデ、ユビオサエ	口唇は面をなす。摩耗調著。	
56	C	ST6	弥生土器	壺	口縁～頸部	8.2	（4.4）	－	－	1mm前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 に赤い黄橙色	7.5YR 6/6 橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	若干外方へ開く口縁。口唇は稜を成す部分もあるが、全体に丸みを帯びた印象である。貼付口縁。	
57	C	ST6 墓壙	弥生土器	壺	口縁～頸部	16.8	（6.2）	－	－	精選された粘土。1mm大のチャート砂粒を少量含む。	10YR 6/3 に赤い黄橙色	10YR 7/4 に赤い黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなし、下端に刻目。頸部に3条1単位のクシ描直線文が残る。	

表5　遺物観察表（土器）3

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
58	C	ST6	弥生土器	壺	口縁～頸部	17.0	(5.0)	－	－	微細砂粒を多く含む。	2.5Y 6/4 にぶい黄色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	器壁の厚さ5mm前後と薄い。貼付口縁。口唇は面をなし、下端に刻目。口縁部外面に微隆起帯状に粘土棒を貼付する。ハケ状原体による縦方向のハケ調整により、縦位の沈線状のラインを施文。頸部を加飾する。	
59	C	ST6	弥生土器	壺	口縁部	－	(4.6)	－	－	1mm前後のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5YR 8/4 浅黄色	2.5YR 6/3 にぶい黄色	不明	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁部外面に刻目あり。	
60	C	ST6	弥生土器	壺	頸部	－	(5.3)	－	－	1mm前後の砂粒を多量に含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙色			上胴部にタタキ痕直線文を施文、直上の頸部に縦位の沈線を連続して加飾する。	
61	C	ST6	弥生土器	壺	頸部・小片	－	(4.5)	－	－	精選された胎土。2mm大の砂粒を少量含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 7/6 橙色			タタキ痕直線文を施文、直線文の間に刺突による刻目を巡らせる。	
62	C	ST6	弥生土器	壺	胴部・小片	－	(4.2)	－	－	精選された胎土。1mm大の砂粒を少量含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/6 明黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	5条1単位のタタキ痕文。鋸状文と直線文を交互に施文する。	
63	C	ST6	弥生土器	壺	胴部片	－	(5.3)	－	－	精選された胎土。砂粒をほとんど含まない。	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 7/6 明黄褐色	ナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	13条1単位のタタキ痕直線文を施文。タタキ痕直線文の間はヘラミガキで仕上げる。	
64	C	ST6	弥生土器	壺	上胴部～底部	－	(15.5)	14.1	5.8	胎土は精選されており、1mm大の砂粒をごく少量含む。微細砂粒あり。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ヘラミガキ	平底、卵形の胴部であり、内外面とも丁寧に仕上げる。口縁部形状は不明。	
65	C	ST6	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(10.3)	－	7.2	胎土は精選されており、1mm大の砂粒を少量含む。微細砂粒多い。	2.5Y 4/1 黄褐色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ナデ、ユビオサエ、板ナデ	ハケ、ヘラミガキ	わずかに上げ底気味。外面は全面にヘラミガキが残り、丁寧に仕上げられている。	
66	C	ST6	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(7.5)	－	9.6	1mm大の砂粒をやや多く含む。微細砂粒多い。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ、ヘラミガキ	底部は高台状で、1～1.3cm幅の溝が底面に周状に巡っている。	
67	C	ST6（TR6）	弥生土器	壺	底部	－	(7.1)	－	10.6	2～3mm大のチャート砂粒やや多く含む。	7.5YR 8/2 灰白色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	不明	タタキ、ハケ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	内面は摩耗調著で調整不明。外面にタタキ目の痕跡がわずかに残る。	
68	C	ST6	弥生土器	壺	底部	－	(3.9)	－	11.3	1～2mm前後のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/6 明黄褐色	ユビナデ、ユビオサエ	ナデ、ヘラミガキ	平底。底面に圧痕あり。外面はヘラミガキで丁寧に仕上げられている。	
69	C	ST6	弥生土器	壺	底部	－	(3.8)	－	6.7	1mm大以下の細粒砂少量、微細砂粒を多く含む。	2.5Y 4/1 黄灰色	5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ヘラミガキ	平底。	
70	C	ST6（TR）	弥生土器	壺	底部	－	(3.9)	－	(8.2)	0.5～1mm前後の細粒砂を多く含む。	10YR 7/2 にぶい黄橙色	10YR 8/4 浅黄橙色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	平底。底面に繊維圧痕あり。器表面の調整が調著である。	
71	C	ST6（TR）	弥生土器	壺?甕?	底部	－	(4.5)	－	7.3	0.5～1mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 6/1 褐灰色	10YR 8/3 浅黄橙色	ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラナデ	平底。	
72	C	ST6	弥生土器	壺	底部	－	(2.6)	－	5.2	1mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	2.5Y 5/2 暗灰黄色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	上げ底。	
73	C	ST6	弥生土器	壺	底部	－	(3.5)	－	(8.2)	1mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/2 灰黄褐色	不明	ハケ	平底。内面は摩耗調著で調整不明。	外面に煤状炭化物付着。
74	C	ST6	弥生土器	壺	底部	－	(3.4)	－	(10.4)	1～2mm大の砂粒を少し含む。	5Y 4/1 灰色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ユビナデ	ハケ、ユビオサエ	底面は外周があつく高台状になる。摩耗調著。	底面から外面にかけて煤状炭化物が付着する。
75	C	ST6	弥生土器	鉢	口縁部	－	(5.4)	－	－	胎土は精選されており、1mm大の砂粒を少量含むのみ。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ、ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。	
76	C	ST6	弥生土器	蓋	天井部付近のみ	4.3	(3.1)	－	－	1mm前後の砂粒を多く含む。	2.5Y 5/2 暗灰黄色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ユビナデ	ユビオサエ、ナデ	天井部外周は外方へ若干拡張する。	上端の径を口径として記録。
77	C	ST6	弥生土器	鉢状土製品	ほぼ完形。一部が欠けている。	－	(8.0)	－	2.2	微細砂粒を多く含む。	2.5Y 7/3 浅黄色	2.5Y 7/3 浅黄色	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	「鉢状土製品」として報告するが、器種不明。断面円形の鉢状で内部は空洞になっている。片側のみ閉じており、鉢状になった端部の厚さは1cm弱。	
82	C	ST7	弥生土器	壺（長頸壺）	完形	14.7	30.3	23.5	7.4	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ナデ、板ナデ、ユビナデ、ユビオサエ	タタキ、ハケ、ナデ、ヘラミガキ	大きく張った球形の胴部から頸部は直立し、開き気味の口縁に至る。口唇は面をなす。頸部から上胴部にかけてはタタキ目の痕跡を残す。口縁外面は器表の調整著しく、調整不明瞭。無文。	

表5　遺物観察表（土器）4

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
83	C	ST7	弥生土器	壺（長頸壺）	口縁～下胴部	14.5	（25.5）	19.2	–	1～3mm大のチャート砂粒を中や多く含む。	2.5YR 7/2 灰黄色	2.5YR 7/3 浅黄色	ハケ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	大きく張った球形の胴部から強部には直立し、開き気味の口縁に至る。口縁は丸みを帯びた面をなす。口縁部はコテナで強部～胴部はハケで仕上げる。無文。胴部中位から下胴部にかけて煤状炭化物付着。	煤状炭化物付着。
					底部	–	（5.2）	–	5.8	1～3mm大のチャート砂粒を中や多く含む。	7.5Y 3/1 オリーブ黒色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ	平底。底面に微成痕の黒斑あり。	
84	C	ST7	弥生土器	壺（長頸壺）	口縁～上胴部	11.5	（11.4）	–	–	2～3mm大のチャート砂粒を中や多く含む。	2.5YR 6/2 灰黄色	2.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビオサエ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	なで肩の上胴部。強部は直立し、開き気味の口縁に至る。	上胴部に煤付着。
85	C	ST7	弥生土器	壺（長頸壺）	口縁～強部	12.1	（9.1）	–	–	精選された粒1.2mm大のチャート砂粒を少量含む。	5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	ユビオサエ、ナデ	ナデ、ユビオサエ	強部は直立し、開き気味の口縁に至る。口縁は面をなす。器表面の摩滅著で調整不明瞭。	
86	C	ST7	弥生土器	壺（長頸壺）	口縁～強部	14.3	（11.5）	–	–	1～2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 8/6 浅黄橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	強部は直立し、開き気味の口縁に至る。口縁は面をなし、端部下端がやずかに肥厚する。	
87	C	ST7	弥生土器	壺（長頸壺）	口縁～強部	13.8	（6.2）	–	–	2～5mm大のチャート砂粒・小礫をやや多く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	強部は直立し、開き気味の口縁に至る。口縁は面をなし、端部下端がやずかに肥厚する。	
88	C	ST7	弥生土器	壺（長頸壺）	口縁～強部	12.6	（8.2）	–	–	2mm大前後の砂粒を少し含む。	7.5YR 6/3 にぶい褐色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	強部は直立し、口縁はわずかに外反する。口唇は面をなす。	
89	C	ST7	弥生土器	壺（長頸壺）	強部	–　（7.9）	–	–	–	1～3mm大の砂粒を少し含む。	5YR 7/4 にぶい橙色	5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ	ハケ、ナデ	強部下方に紐状状のシワが確認できる。	
90	C	ST7 底	弥生土器	壺（長頸壺）	強部～上胴部	–	（7.7）	–	–	胎土は精選されており、1～2mmスのチャート砂粒を少量含む。	10YR 4/2 灰黄褐色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	強部は直立する。強胴部に羽状列点文。	
91	C	ST7	弥生土器	壺（長頸壺）	口縁～強部	19.9	（18.2）	–	–	胎土は精選されており、1mm前後のチャート細砂砂を少量含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ナデ、ユビオサエ、ユビナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	強部は直立し、開き気味の口縁に至る。口縁は面をなし、端部下端がやずかに肥厚する。口縁部内面と口縁～強部外面はヘラミガキで仕上げられる。内面は横方向、外面は縦方向で、外面は口縁と強部に2段に暗文状に施文されている。	
92	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～強部	（10.0）	（8.9）	–	–	2mm大前後の粗砂砂を含む。雲母（赤色）チャートが目立つ。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ	ハケ、ナデ	強部は直立し、口縁はわずかに外反する。口唇は面をなす。口縁下端が肥厚し丸みを帯びる。	
93	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～強部	11.8	（8.3）	–	–	2mm前後の砂粒を含む。砂粒含有量は少なめ。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	強部は直立し、口縁はわずかに外反する。口唇は丸みを帯びる。外面にタタキ目が胴整される。	
94	C	ST7	弥生土器	甕?	完形	16.8	32.4	26.4	10.0	1～3mm大のチャート砂粒を多く含む。	2.5Y 6/1 黄灰色	2.5YR 7/4 浅黄色	ナデ、ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ、板ケズリ、ヘラミガキ	口唇は凹状の面をなす。口縁部内面は強いヨコナデにより稜をなす。胴部最大径は胴部中位にある。内面胴部下半ヘラケズリ、外面胴下半により砂粒が移動する。	
95	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～上胴部	17.1	（1.9）	–	–	2mm前後のチャート砂粒を少し含む。	7.5YR 5/4 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁部は大き外反、口唇は面をなす。口縁部下端は丸みを帯びる。	
96	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～強部	19.4	（5.8）	–	–	2～3mm大前後のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁部は大き外反、口唇は面をなす。口縁部下端は肥厚する。	
97	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～強部	14.0	（6.9）	–	–	精選された粒1.1～2mm大の砂粒を少量含む。	7.5YR 8/4 浅黄橙色	5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁部は大き外反、口唇は面をなす。口縁部下端は肥厚する。	
98	C	ST7 土器集中	弥生土器	壺	口縁～強部	14.0	（5.9）	–	–	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	口縁はわずかに凹状の面をなし、上下端を拡張する。	
99	C	ST7	弥生土器	壺	口縁部	23.0	（3.7）	–	–	精選された粒1.2mm大のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	10YR 4/1 褐灰色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	口唇は上下に拡張し、3条の浅い凹線が認められる。凹線に直交し、3条1単位で棒状原体により施文。外面は縦方向のヘラミガキ。内面は不定方向のヘラミガキで仕上げる。	
100	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～強部	20.0	（7.0）	–	–	精選された粒1.2mm大のチャート砂粒を少量含むのみ。	5YR 6/6 橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナデ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇は面をなし、2～3条の浅い凹線が残る。凹線に直交し2条1単位で棒状原体を使って施文する。強部にクシ描直状文（原体の単位は3条）、波状文の下に2条の棒状原体により沈線が入る。	
101	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～下胴部	18.6	（28.0）	29.8	–	1～5mm大のチャート砂粒を多量に含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	口唇に3条の凹線。強部にクシ描波状文、強胴部に列点文を施し、上胴部から強部中位にかけて、クシ描直線文と波状文を交互に施文する。クシ描の単位は5条1単位。強部は球状にあり強の出す。底部は確認できていないが、最大径は胴部中位にあるとみられる。	
102	C	ST7	弥生土器	壺	胴部	–	（11.2）	–	–	1～2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	上胴部破片。強胴部に列点文をめぐらせ、5条1単位のクシ描波状文を3段に分けて施文する。	

表5　遺物観察表（土器）5

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
103	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～上胴部	17.6	(19.0)	29.2	–	2～6mm大のチャート砂粒・小礫をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ、板ナデ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	明形の胴部から頸部は直立し、口縁部は大きく開く。口形は強いヨコナデにより、四状の面となる。上胴部内面に板ナデによる砂粒の移動が認められる。外面はハケ調整とナデ調整により仕上げるが、最後はヘラミガキ（単位は不明瞭）により仕上げている。頸胴形に列点文を巡らせる。	
104	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～頸部	(12.9)	(5.4)	–	–	1～5mm大の砂粒・小礫をやや多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁端部は上方へ拡張、下端も肥厚する。口形は面をなし、3条の浅い凹線（摩耗のため敏確はわずか。）	
105	C	ST7	弥生土器	壺	口縁～頸部	(15.0)	(7.5)	–	–	2～4mm大前後の粗砂砂を多く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁は面をなし、下端を拡張する。口形は条の凹線。	
106	C	ST7	弥生土器	壺	頸縁～上胴部	–	(9.0)	–	–	2～3mm大の粗砂砂をやや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ヘラケズリ、ハケ、ユビナデ、ナデ	ハケ	頸胴形に列点文を巡らせる。頸部下内面にヘラケズり。	
107	C	ST7	弥生土器	壺	上胴部	–	(3.5)	–	–	胎土は精選されており、1mm大の砂粒を少量含む。	2.5Y 4/1 黄灰色	2.5Y 5/3 黄褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	クシ描直線文・波状文、竹管文で施文。	
108	C	ST7 主器集中	弥生土器	壺	胴部	–	(12.6)	21.6	–	胎土は精選されており、1～2mm大のチャート砂粒を少量含むのみ。	2.5Y 5/1 黄灰色	5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	ソロバン玉状に胴部中位から上胴部にかけて大きく張り出している。外面ハケで仕上げ、張り出し部以下に煤状炭化物が付着している。	
109	C	ST7	弥生土器	壺	上胴部～底部	–	(16.1)	17.4	6.4	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5Y 3/1 黒褐色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ケタキ、ハケ、ナデ、ユビオサエ	上げ底。上胴部が大きく張り出し、屈曲した後内傾する。	
110	C	ST7	弥生土器	甕	完形	20.0	32.6	21.7	7.1	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビナデ、ナデ、板ナデ	ハケ、板ナデ、ナデ	最大径は胴部上半にある。無文の甕。頸部で短く屈曲、口縁は面をなす。平底。外面は板ナデにより底形痕を消す。胴部下半底部付近にケタキ目の痕跡がわずかに残る。内面には板状工具による底部調整の痕跡が認められる。	外面胴部中央下に煤状炭化物付着。
111	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～下胴部	14.7	(18.5)	18.7	–	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/6 明黄褐色	5YR 6/6 橙色	ナデ、ユビオサエ	板ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	頸部で強く屈曲、口縁は外反する。口形は丸みを帯びる。胴部最大径は、上胴部1/2ほどの位置にある。下端部にケタキ目の痕跡はあるものの、丁寧な板ナデにより仕上げられており、ほとんど残っていない。	口縁部外面上胴部中位以下に部分的に煤付着。
112	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～下胴部	12.1	(12.2)	15.3	–	1～2mm大のチャート砂粒を多く含む。	5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ナデ、ユビナデ、ユビオサエ、ヘラケズリ	ナデ、ユビオサエ	頸部でくの字状に強く屈曲、口形は丸みのある面をなす。外面上胴部以下器表面の調溝調整。内面胴部下半ヘラケズり。	
113	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～下胴部	(13.8)	(8.7)	–	–	微細砂が多い、火山ガラスなどのガラス質鉱物や角閃石を含む。	10YR 7/2 にぶい黄橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ヘラケズり、ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁は外反し、口形は面をなす。内面にヘラケズり。	上胴部に煤状炭化物付着。胎土が他産とは異なる。搬入土器。
114	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	15.0	(10.0)	–	–	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ	ケタキ、ナデ、ユビオサエ	頸部はゆるやかに屈曲し、短く外反して口縁に至る。口形は面をなす。胴部外面全面にケタキ目が残る。	上胴部以下に煤状炭化物付着。
115	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	16.0	(15.6)	24.0	–	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	頸部はゆるやかに屈曲し、短く外反して口縁に至る。口形は横いハケ調整により面をなす。	口縁部外面に煤状炭化物付着。胎土がユビオサエ。
116	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～頸部	(17.8)	(4.8)	–	–	胎土は精選されているが、3～5mm大の小礫を少量含む。	5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	口縁は大きく外反し、口形は面をなす。	口縁部外面に煤状炭化物付着。吹きこぼれの痕跡あり。
117	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	20.0	(12.0)	19.1	–	2～3mm大前後のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁は大きく外反し、口形は面をなす。口縁端部下端がやや肥厚する。	上胴部に煤状炭化物付着。吹きこぼれの痕跡あり。
118	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	21.2	(11.5)	20.2	–	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。7mm大の小礫あり。	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁は大きく外反し、口形は面をなす。口縁端部下端がやや肥厚する。	上胴部に煤状炭化物付着。
119	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～頸部	(14.6)	(5.0)	–	–	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁は外反し、口形は面をなす。口縁端部外面に肥厚する部分がある。	
120	C	ST7 主器集中	弥生土器	甕	口縁部	(22.6)	(4.7)	–	–	2～3mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ	ハケ	口形はわずかに凹状の面をなし、上下端が若干肥厚する。	
121	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～上胴部	(16.5)	(9.7)	(20.0)	–	1mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/2 にぶい黄橙色	7.5YR 7/3 にぶい橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁は外反し、口形は面をなす。	上胴部に煤状炭化物付着。

表5　遺物観察表（土器）6

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
122	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	18.4	(9.1)	–	–	2～4mm大の砂粒を少量含む。	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 7/6 明黄褐色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁部は上方へわずかに拡張、下端も肥厚する。	
123	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～上胴部	16.0	(8.5)	–	–	精選された胎土、1～2mm大の砂粒を少量含む。	2.5YR 7/3 浅黄色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	頸部で屈曲し、口縁部は外反する。口唇は面をなす。	吹きこぼれ跡あり。
124	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	18.4	(15.3)	19.9	–	1～2mm大の砂粒を含むが、含有量は少ない。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、ナデ、ユビオサエ	頸部で屈曲し、口縁部は外反する。口唇はわずかに凹状の面をなし、下端が若干肥厚する。	吹きこぼれ跡あり。上胴部には部分的に、上胴部以下には全面に煤状炭化物が付着する。
125	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	15.2	(10.0)	17.2	–	1～4mm大のチャート砂粒を多く含む。特に3mm前後の砂粒が多い。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ、板ナデ	タタキ、ユビオサエ、ナデ	頸部で屈曲し、口縁部は外反する。口唇は面をなす。頸部下はナデにより平タドを消すが、頸部にはタタキ目がその名残る。内面にハケと同種の工具を用いた板ナデ。	
126	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	13.8	(8.9)	(16.0)	–	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、ユビオサエ、ナデ	タタキ目の痕跡をハケとナデにより丁寧に消している。	吹きこぼれ跡あり。口頸部に部分的に煤状炭化物付着。
127	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	22.5	(14.2)	25.2	–	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/3 にぶい橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ユビオサエ、ナデ	タタキ、ナデ、ユビオサエ	内面に板状工具による条痕が残っている。外面にタタキ目がその名残る。口唇は面をなす。	胴部中位に煤状炭化物付着。
128	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～上胴部	–	(5.5)	–	–	1～2mm大の砂粒を少し含む。	10YR 5/3 にぶい黄褐色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇は面をなす。頸胴部に列点文。	
129	C	ST7 上層集中	弥生土器	甕	口縁～胴部	(15.6)	(12.1)	(28.4)	–	2mm前後のチャート砂粒を少し含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ユビオサエ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口唇は面をなし、下端を拡張する。口縁部は強いヨコナデのため、内面に稜をなす。頸部～上胴部に列点文。	口縁部外面と胴部中位に部分的に煤状炭化物付着。
130	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～上胴部	18.1	(8.3)	–	–	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ	タタキ、ハケ、ナデ	頸部で緩やかに屈曲し、口縁部は外反する。口唇はごくわずかに上方へ拡張、凹状の面をなす。頸胴部に列点文。上胴部に残るタタキ目の痕跡をハケで消している。	外面に煤状炭化物付着。
131	C	ST7 上層集中	弥生土器	甕	口縁～上胴部	(18.0)	(5.4)	–	–	2mm大の粗粒砂をやや多く含む。5～6mm大の小礫も数見られる。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇はわずかに凹状の面をなし、1条の凹線が認められる。	
132	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	19.4	(9.7)	20.0	–	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ヘラケズリ、ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇はわずかに凹状の面をなし、端部上下端わずかに拡張。頸部下に列点文を施文、列点文の施文原体の方向は縦位である。頸部下すぐ～ヘラケズリ。	
133	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～上胴部	(19.0)	(6.3)	–	–	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇はわずかに凹状の面をなし、端部上下端わずかに拡張。頸部下に列点文を施文、列点文の施文原体の方向は縦位である。	
134	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～上胴部	(16.2)	(5.7)	–	–	0.5～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	7.5YR 7/6 橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口唇は上下に拡張、3条の強い凹線が認められる。口縁～頸部で厚5.25～5.0mmとわりと薄いつくりである。	
135	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～上胴部	15.4	(6.8)	–	–	1mm大以下の微細砂粒を多量に含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	頸部で稜をなしてその字状に強く屈曲、口縁は外反する。口唇は面をなし、端部が上方へわずかに拡張する。	
136	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～上胴部	(14.8)	(5.2)	–	–	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ナデ、ヘラケズリ	ハケ、ナデ	口縁は外反し、口唇は面をなす。頸部は内面で稜をなし、頸部下まですべてヘラケズリ（右下→左上）が確認できる。	
137	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	(14.0)	(8.6)	(13.2)	–	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ユビナデ	ハケ、ナデ	口縁は外反し、口唇は面をなす。	
138	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～胴部	(15.0)	(8.2)	(14.9)	–	2～5mm大の粗砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁は外反し、口唇は面をなす。器表面の調整著しい。	
139	C	ST7	弥生土器	甕	口縁～下胴部	(11.8)	(9.9)	(11.1)	–	1～2mm大の砂粒を少し含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ナデ、ユビオサエ、ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	頸部で緩やかに屈曲し、口縁部は外反する。口唇は丸く仕上げる。砂粒の移動が確認されるほどの強いナデ。	
140	C	ST7 上層集中	弥生土器	壺（小型壺）	完形	10.0	12.6	9.6	5.0	1～2mm大の砂粒を少し含む。	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁は外反し、内面稜をなす。口唇は丸く仕上げる。	胴部中位下半に煤状炭化物付着。
141	C	ST7	弥生土器	壺	下胴部～底部	–	(9.6)	–	8.2	2～3mm大のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 8/6 浅黄橙色	5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	外面は器表の調整のため部分的に確認できるのみ。	
142	C	ST7 上層集中	弥生土器	壺	底部	–	(4.4)	–	8.3	1～4mm大のチャート砂粒を多量に含む。胴色チャートが目立って多い。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	不明	外面は摩耗顕著で調整を観察できない。	

表5　遺物観察表（土器）7

図版番号	区	遺構 層位	器種	器形	部位	法量（cm） 口径	器高	胴径	底径	胎土	色調 内面	色調 外面	調整 内面	調整 外面	特徴 文様・形態・製作技法他	備考
143	C	ST7	弥生土器	壺	底部	－	(4.0)	－	7.5	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 5/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ	ハケ、ナデ	上げ底気味。底面にもハケ、ナデが観察される。	
144	C	ST7 上器集中	弥生土器	壺	底部	－	(5.0)	－	7.2	1～3mm大前後の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ナタキ、ハケ、ナデ、ヘラミガキ	平底。外面にタテ目がわずかに痕跡をとどめる。	
145	C	ST6	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(14.8)	(25.8)	10.0	1～2mm大前後のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5Y 6/1 黄灰色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ナデ、ユビオサエ、板ナデ	ナタキ、ハケ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ナタキ目はハケ調整で丁寧に消されており、器表面の凹凸でタテ目の存在を確認できる。内面は板ナデにより指紋が下から上方向に動く。	
146	C	ST6	弥生土器	壺	底部	－	(7.2)	－	(8.6)	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ヘラミガキ	平底。外面全面ヘラミガキ。	
147	C	ST6	弥生土器	壺	底部	－	(6.0)	－	(6.4)	2～3mm大の粗砂粒を多く含む。	2.5Y 2/1 黒色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ヘラミガキ	平底。底面にヘラミガキが残る。	
148	C	ST6	弥生土器	壺？甕？	底部	－	(4.9)	－	(7.8)	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 4/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ	ユビナデ、ユビオサエ	平底。	
149	C	ST7	弥生土器	壺	底部	－	(5.8)	－	(8.1)	1mm前後の砂粒を少し含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 8/3 浅黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ナタキ、ナデ、ユビオサエ	底面に織維痕。底部は外縁が丸みを帯びる。ナタキ目はナデにより、丁寧に消されている。	
150	C	ST7	弥生土器	壺	底部	－	(3.5)	－	(7.6)	1～2mm大の砂粒を多く含む。	10YR 8/3 浅黄橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ	ハケ、ヘラナデ、ユビオサエ	上げ底。外周は工具を使ったナデ。	
151	C	ST7	弥生土器	壺	底部	－	(5.3)	－	7.8	1～2mm大の砂粒を多く含む。	10YR 4/2 灰黄褐色	5YR 6/8 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ナタキ、ハケ、ユビオサエ、ナデ	底面は中央が凹み、高台状となる。	
152	C	ST7 上器集中	弥生土器	壺	底部	－	(3.1)	－	10.0	1～2mm大のチャート砂粒を少量含む。	10YR 8/4 浅黄橙色	10YR 8/4 浅黄橙色	ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ユビナデ、ユビオサエ	外周は板状の原体を使ったナデ、ミガキ。	
153	C	ST6	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(10.2)	－	8.8	1～2mm前後の砂粒を多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5Y 3/1 オリーブ黒色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	平底。底部外周は外方へ拡張。	
154	C	ST7 底	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(6.3)	－	7.1	1～2mm大のチャート砂粒を少量含む。	10YR 1.7/1 黒色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ナデ、ユビオサエ	平底。丁寧にナデで仕上げている。	
155	C	ST7 上器集中	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(8.9)	－	6.2	2～3mm大の砂粒をやや多く含む。	5YR 4/2 褐灰色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	平底。ヘラミガキで仕上げる。	
156	C	ST6	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(8.1)	－	7.4	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ナタキ、ハケ、ナデ	平底。わずかにタテ目の痕跡が残る。	
157	C	ST7 上器集中	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(9.1)	－	(8.3)	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	平底。	
158	C	ST7	弥生土器	甕	底部	－	(5.1)	－	4.5	1～3mm大の砂粒を多く含む。	2.5Y 4/1 黄灰色	2.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ、ナデ	ハケ、ナデ	平底。底面にナデ調整。摩耗顕著で、器表面の大半が調落する。	
159	C	ST7	弥生土器	甕	底部	－	(6.2)	－	5.5	2～3mm大の砂粒を多く含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 8/3 浅黄橙色	ヘラケズリ、ユビナデ、ナデ	ハケ、板ケズリ	外面は工具を使った調整で砂粒が移動する。平底。	
160	C	ST7	弥生土器	壺	底部	－	(7.6)	－	(6.4)	2～3mm大の粗砂粒を多く含む。	10YR 6/1 褐灰色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ユビナデ	ナタキ、ハケ、ナデ	外面に格状原体の圧痕と不明圧痕がある。底面は調落している。	
161	C	ST7	弥生土器	甕	胴部～底部	－	(16.2)	－	6.8	1～2mm大のチャート砂粒を多く含む。	2.5YR 7/3 浅黄色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	ナタキ、ハケ、ナデ	平底。タテ調整で成形後、ハケ、ナデによりタテ目を消す。ハケは下→上へ放射状に入る。	
162	C	ST7	弥生土器	甕	下胴部～底部	－	(15.7)	－	7.2	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/6 明黄褐色	2.5YR 5/2 暗灰黄色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ナタキ、ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	平底。外面底部付近にタテ目が残る。	外面に煤状炭化物付着。
163	C	ST7	弥生土器	甕	下胴部～底部	－	(9.7)	－	6.0	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	5YR 5/6 明赤褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	上げ底気味の底部。ヘラミガキで仕上げる。	煤状炭化物付着。
164	C	ST7	弥生土器	甕	下胴部～底部	－	(11.0)	(17.2)	5.4	1～2mm前後のチャート砂粒を含む。含有量は少ない。	7.5YR 7/6 橙色	7.5Y 5/1 褐灰色	ハケ、ユビオサエ	ナタキ、ハケ、ナデ、ユビオサエ	平底。胴部内面は器表面の調落顕著で、調整不明。外面は丁寧に仕上げられ、タテ目の痕跡はほとんど残っていない。	
165	C	ST7	弥生土器	甕	下胴部～底部	－	(8.1)	－	6.5	2～4mm前後のチャート砂粒を多く含む。	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 6/4 にぶい黄褐色	ハケ、ユビオサエ	ナタキ、ハケ、ナデ	平底。底面に織維圧痕あり。ハケとナデにより丁寧に仕上げ、タテ目の痕跡をほとんど残さない。	胴部下半に部分的に煤状炭化物付着。
166	C	ST7	弥生土器	甕	底部	－	(5.4)	－	6.2	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 5/4 にぶい褐色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ユビオサエ、ナデ	ナデ	上げ底で、一旦くびれた後、外上方へたちあがる。	
167	C	ST7	弥生土器	甕	底部	－	(2.5)	－	4.3	2～3mm大の粗砂粒を多く含む。	10YR 4/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ナデ	平底。底面に織維圧痕あり。	

表5　遺物観察表（土器）8

図版番号	区	遺構	層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
							口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
168	C	ST7		弥生土器	甕	底部	－	(3.8)	－	5.2	2～3mm大の砂粒を やや多く含む。	2.5Y 5/1 黄灰色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ	不明	平底。底面に磨耗圧痕あり。外面は器表面の大半が剥離している。	
169	C	ST7		弥生土器	甕	底部	－	(4.5)	－	7.8	1～3mm大のチャート砂粒を多く含む。	10YR 5/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ヘラケズリ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	平底。中央部が若干凹む。	底部外周に煤状炭化物付着。
170	C	ST7		弥生土器	甕	底部	－	(4.3)	－	(8.6)	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。	5Y 3/1 オリーブ黒色	5YR 7/4 にぶい橙色	不明	ハケ、ユビオサエ、ナデ	平底。外周は大部分が剥落している。	
171	C	ST7		弥生土器	甕	底部	－	(2.2)	－	6.2	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5Y 3/1 黒褐色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビオサエ	ハケ、ナデ	外縁部の内側に幅1～1.2cmの周状に凹んだ部分がある。	
172	C	ST7		弥生土器	甕	底部	－	(4.2)	－	8.7	2mm大のチャート砂粒を少し含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	10YR 3/1 黒褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	平底。底面にハケ調整あり。	
173	C	ST7	ST7土器集中	弥生土器	甕	底部	－	(2.7)	－	(4.6)	3mm大前後の粗砂砂を やや多く含む。	7.5YR 4/1 褐灰色	7.5YR 5/2 灰褐色	ハケ、ユビナデ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、ユビオサエ、ナデ 上げ底。内面は強いナデにより移動する。	
174	C	ST7		弥生土器	甕?	底部	－	(3.9)	－	(5.6)	2～3mm大の砂粒を多量含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	5Y 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	底面の中央部が凹む。外面は丁寧に仕上げ、タタキの痕跡をとどめない。	
175	C	ST7	高坏	弥生土器	高坏	脚部	27.6	(6.8)	(25.1)	－	胎土は精選されており、1～2mm大のチャート砂粒を少量含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	坏部で接ぎなしで一旦成働した後、口縁は大きく外反する。口唇は丸く仕上げる。内面にヘラミガキが放射状に施される。	坏部の接痕を側径として計測。
176	C	ST7	高坏	弥生土器	高坏	脚部	27.2	(4.9)	24.3	－	胎土は精選されており、1mm大の砂粒を少量含むのみ。	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	坏部で接ぎなしで一旦成働した後、口縁は外反する。口唇は面をなす。内面にヘラミガキが放射状に施される。内底部分はヘラミガキが密である。	
177	C	ST7	高坏	弥生土器	高坏	脚部	23.0	(4.8)	(20.6)	－	胎土は精選されており、1～3mmスのチャート砂粒を少量含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	坏部で接ぎなしで一旦成働した後、口縁は外反する。口唇は面をなす。内外面ヘラミガキで仕上げる。口縁部外面は横方向のヘラミガキ。	
178	C	ST7	高坏	弥生土器	高坏	脚部	－	(3.5)	－	－	2mm大のチャート砂粒を少量含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 4/1 褐灰色	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	口縁端部外面わずかに肥厚する。	
179	C	ST7	高坏	弥生土器	高坏	脚部口縁	(14.8)	(4.8)	－	－	1mm大の砂粒をやや多く含む。	2.5Y 6/8 橙色	5Y 7/6 橙色	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	坏部は椀状の形態で、ごくわずかに段を形成する。口唇は丸く仕上げる。内面にヘラミガキが放射状に施される。	
180	C	ST7	高坏	弥生土器	高坏	脚部	16.6	(3.8)	－	－	胎土は精選されている。1mm大の砂粒を少し含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	内外面ともヘラミガキが放射状に施される。坏部は椀状の形態である。口唇は丸く仕上げ、外面がわずかに肥厚する。	残存1/8程度。
181	C	ST7	高坏	弥生土器	高坏	脚部	16.8	5.0	－	－	2～3mm大の砂粒を少量含む。	5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	内面に工具による圧痕が残る。坏部は椀状の形態である。口唇は丸く、内外面ともヘラミガキで仕上げる。	
182	C	ST7		弥生土器	高坏あるいは鉢	坏部あるいは鉢の口縁	－	(3.7)	－	－	精選された胎土。2mm大の砂粒を少量含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/6 明黄褐色	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	坏部は椀状の形態である。口唇は丸く仕上げる。	
183	C	ST7		弥生土器	高坏	脚部	－	(4.9)	－	－	精選された胎土。微細砂粒を含むが、砂粒はほとんど含まない。	2.5Y 4/1 黄灰色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ハケ、ユビナデ	ハケ、ヘラミガキ	椀状の坏部。内面は放射状にユビナデ、外面は全面ヘラミガキ。坏部下脚部外面に沈線を巡らせる。（3条確認できる。）	
184	C	ST7	高坏	弥生土器	高坏	脚部	－	(9.8)	－	(13.4)	1～2mm大のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	坏部下（脚部上端）に泳ぎの沈線が巡る。沈線は全域平滑利用を原体による。器表面の摩耗調査だが、部分的にヘラミガキが残る。透孔は4孔。脚端部は面をなし、上方にわずかに肥厚する。	
185	C	ST7	高坏	弥生土器	高坏	脚部	－	(5.1)	－	14.3	1mm前後のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ヘラミガキ	外面は摩耗のため、単位をはっきり捉えられないものの、ヘラミガキが確認できる。脚端部は面をなし、上方へ拡張。透孔は4孔だと推定される。	
186	C	ST7	高坏	弥生土器	高坏	脚部	－	(8.9)	－	12.7	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	ナデ、ユビナデ	ナデ、ヘラミガキ	脚端部は面をなし、上方へ拡張する。透孔は4孔だと推定される。	高坏は、脚端部の径を底径として計測する。以下同様。
187	C	ST7	高坏	弥生土器	高坏	脚部	－	(4.7)	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ヨコナデにより、脚端部は凹状の面をなし、端部は上方に拡張する。	
188	C	ST7底	高坏	弥生土器	高坏	脚部	－	(7.1)	－	－	精選されている。1～3mm大の粗砂粒をやや多く含む。	5YR 6/6 橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	内面にもヘラミガキ。脚部内面、ナデにより、砂粒が上一下方向に移動。外面は全面に縦方向のヘラミガキ。透孔は3孔、孔径は9mm前後。	

表5　遺物観察表（土器）9

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm） 口径	器高	胴径	底径	胎土	色調 内面	色調 外面	調整 内面	調整 外面	特徴 文様・形態・製作技法他	備考
189	C	ST7	弥生土器	高坏	脚部	－	(10.1)	－	－	1～2mm前後のチャート砂粒を多量に含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	器表面の摩耗が著しく、ミガキの痕跡をほとんど確認できない。脚端部は欠けており、形状不明。絞り目あり。	摩耗顕著でヘラミガキは痕跡が確認できるのみである。
190	C	ST7	弥生土器	高坏	脚部	－	(8.4)	－	9.9	1～2mm大のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ、ユビナデ	ナデ、ヘラミガキ	坏部は掩状で、内底にも全面にヘラミガキが残る。脚部外面に縦方向のヘラミガキ、脚端部は面を仕上げるかどうかは不明確である。内面に絞り目、透孔は6孔。脚部上端にヘラ様沈線による円錐状の文様（偽円錐）施文。	
191	C	ST7	弥生土器	高坏	脚部	－	(6.2)	－	9.3	1～2mm大のチャート砂粒を少量含む	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	脚部は下手で短歪した後、大きく開く。脚端部は面をなす。ハケおよびナデにより仕上げる。絞り目あり。透孔は認められない。	
192	C	ST7 床面	弥生土器	鉢	口縁～胴部	30.0	(9.4)	(28.8)	－	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。5mm大の小礫あり。	7.5YR 5/6 明褐色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	口唇は面をなし、下端が肥厚する。口唇面には多の沈線（偽円線）が認められる。外面にタタキ目の痕跡、ハケ調整も確認される。調整痕は上とも不明瞭なし。	部分的だが、煤状炭化物付着。
193	C	ST7	弥生土器	鉢	口縁部	－	(3.9)	－	－	胎土は精選されており、微細砂粒を含むのみ。	7.5YR 5/3 にぶい褐色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	胎土口縁は円状の面をなす。外面にヘラミガキが認められる。胎土は微細砂粒含むのみで含め、火山ガラスは含むも角閃石は認められない。在地の土器とは明らかに異なる。	搬入品。
194	C	ST7	弥生土器	鉢あるいは台付鉢	口縁部	10.4	(4.6)	－	－	精選された胎土。1～3mm大のチャート砂粒を少量含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	掩状の形態であり、口唇は丸く仕上げる。内面にヘラミガキ。底部形状は不明だが、短い脚部が付く台付鉢の可能性もある。	
195	C	ST7	弥生土器	台付鉢	脚部	－	(3.0)	－	6.2	精選された胎土で、砂粒をほとんど含まない。	7.5YR 5/4 にぶい褐色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	タタキ?、ナデ、ユビオサエ	台付鉢の脚部。内面にヘラミガキ。	
196	C	ST7	弥生土器	蓋	天井部～体部	6.1	9.7	－	－	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	外面摩耗顕著で器表が剥落する部分あり天井部のみ、内面をつまみ部分まで、外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキで仕上げる。	胴部内外面に煤状炭化物付着。
197	C	ST7 土器集中	弥生土器	小型土器（甕）	完形	2.0	2.6	1.9	2.0	1mm大の砂粒を少量含む。	10YR 4/2 灰黄褐色	10YR 4/2 灰黄褐色	ナデ、ユビオサエ	ナデ、ユビオサエ	手づくねで成形したミニチュアと思。内部の空洞をあえてつくり出そうとしていない。	
198	C	ST7	弥生土器	小型土器（壺）	完形	6.9	9.3	6.4	3.2	1～2mm大のチャート砂粒を多く含む。	5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	器表面の摩耗が著しく、調整は部分的にわかるのみ。ヘラミガキを観察することができる。	
199	C	ST7	弥生土器	小型土器	底部	－	(2.2)	－	2.6	1～2mm大の砂粒を若干量含む。	10YR 6/1 褐灰色	7.5YR 7/6 橙色	ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	わずかに上げ底の小型土器底部。	
202	C	ST8	弥生土器	壺	口縁部	16.4	(1.8)	－	－	精選された胎土。1～2mm大の砂粒を少し含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、ユビオサエ	口縁部内面に断面三角形の微隆起帯を貼付。口唇上端に刻目。	
203	C	ST8	弥生土器	壺	口縁部	－	(2.6)	－	－	1mm前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/6 明黄褐色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ	ハケ、ユビオサエ	貼付口縁。摩耗顕著、ヘラ状原体により内面に斜状に施文。口縁部外面に刻目あり。	
204	C	ST8	弥生土器	壺	口縁部	－	(5.0)	－	－	精選された胎土。微細砂粒を含む。	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 7/6 明黄褐色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなす。	
205	C	ST8	弥生土器	壺	口縁部	－	(3.0)	－	－	精選された胎土。1～2mm大の砂粒を少し含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	貼付口縁。口唇はわずかに凹状の面をなす。端部外面肥厚。	
206	C	ST8	弥生土器	壺	底部	－	(4.7)	－	9.6	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5Y 8/3 淡黄色	2.5Y 8/3 淡黄色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ	ナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	上げ底。外周はヘラナデ、ヘラミガキで仕上げる。	
207	C	ST8	弥生土器	壺	底部	－	(7.0)	－	9.1	1～3mm大のチャート砂粒を多く含む。	5Y 6/1 灰色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ	不明	平底。底面に繊維圧痕あり。外面は摩耗顕著で調整を観察できない。	
208	C	ST8	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(13.5)	－	7.8	胎土は精選されており、1mm前後のチャート細砂粒、微細砂粒を含む。	5YR 7/4 にぶい橙色	5YR 7/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	わずかに上げ底気味。外周はヘラナデで成形、内外面にヘラミガキ。	
209	C	ST8	弥生土器	小型土器（鉢）	完形	6.5	6.2	－	3.4	精選された胎土。砂粒はほとんど含まない。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ユビナデで成形・仕上げを行う。短い脚部が付いた小型鉢（小型土器）	
210	C	ST8 床面	弥生土器	甕	底部	－	(4.7)	－	4.8	1mm前後の砂粒を多量に含む。	10YR 4/1 褐灰色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	不明	不明	底面に直径8mmの孔を穿つ。焼成前穿孔。転じて利用されたと推定される。摩耗顕著で調整不明。	

表5　遺物観察表（土器）10

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
213	A	ST9	弥生土器	壺	頸部	－	(3.4)	－	－	精選された胎土。	2.5Y 4/2 明灰黄色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ユビオサエ、ナデ	ナデ	竹管文と7条1単位のクシ描波線。	
214	A	ST9	弥生土器	壺	上胴部	－	(4.9)	18.0	－	微細砂粒および1mm以下の砂粒を多く含む。	2.5Y 6/1 黄灰色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	ソロバン玉状の大きく張り出した壺の上胴部。	
215	A	ST9	弥生土器	壺	底部	－	(2.9)	－	9.3	1～2mm大の砂粒を多量に含む。	7.5YR 7/2 明褐灰色	7.5YR 6/2 灰褐色	ハケ、ユビオサエ	不明	平底。	
216	A	ST10 P1	弥生土器	壺	胴部	－	(4.3)	－	－	1mm前後の砂粒をやや多く含む。	2.5Y 7/3 浅黄色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ユビオサエ、ナデ	クシ描文（櫛状文・直線文）を施文。クシ描の単位は61単位で、櫛状文は波状に重ね。扁平な頭付を持つ粘土帯を張っける。この扁平な頭付突帯の上に断面三角形の突帯を貼付する。この三角形の突帯は全周に巡らず、上下方向の穿孔により加撫する。	
217	A	ST10	弥生土器	壺	頸部小片	－	(2.3)	－	－	精選された胎土。1～2mm大の砂粒を少量含む。	10Y R 4/2 暗黄灰色	5Y R 6/6 橙色			ヘラ描文線。扁平な断面四角形の頭付突帯貼付。	
218	A	ST10	弥生土器	壺	頸部小片	－	(3.1)	－	－	精選された胎土。1mm大のチャート砂粒を少量含む。	10Y R 3/1 黒褐色	10Y R 6/3 にぶい黄橙色	ユビオサエ、ナデ	ナデ	細状の細い粘土帯を貼付し頭付施文。色の異なる粘土帯を貼付。クシ描直線文。	
219	A	ST10	弥生土器	壺	胴部小片	－	(2.5)	－	－	1mm大のチャート砂粒を少量含む。	7.5Y R 6/4 にぶい橙色	5Y R 6/4 にぶい橙色			クシ描櫛状文。	
220	A	ST10	弥生土器	壺	胴部	－	(5.5)	－	－	胎土は精選されており、砂粒はわずかに含むのみ。	7.5Y R 7/4 にぶい橙色	7.5Y R 7/4 にぶい橙色	ユビオサエ、ナデ	ナデ	クシ描文、直線＋波状＋直線＋櫛状＋直線＋波状＋直線。	
221	A	ST10	弥生土器	甕	胴部	－	(4.3)	－	－	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	5Y 6/6 橙色	7.5Y R 6/6 橙色	不明	不明	縦位と横位の微隆起帯を組み合わせて施文する。	
222	A	ST10 P2	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(10.4)	－	7.5	微細砂粒を多量に含む。	10Y R 4/1 褐灰色	7.5Y R 6/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ、ヘラミガキ	平底。外面はヘラミガキで仕上げる。	
228	A	ST11 土器1	弥生土器	壺	口縁～上胴部	20.2	(30.6)	－	－	1～2mm前後のチャート砂粒を多量に含む。褐色（赤色）チャートが目立っている。	2.5Y R 7/3 浅黄色	7.5Y R 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	貼付口縁。口唇は面を仮し、上下に刻目。頭部に2条1単位のクシ描波線を6段重ね。12条の直線文である。直線文の下、上胴部には2クシ描波状文と3条1単位で2段重ね。4条とする。	
229	A	ST11 土器4	弥生土器	壺	完形	22.5	49.0	32.6	9.0	1～2mm大前後の砂粒をやや多く含む。	7.5Y R 7/4 にぶい橙色	7.5Y R 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	平底、摩耗の胴部から屈曲した後、頸部は直立、ラッパ状に開く口縁部に至る。貼付口縁。口唇は凹状で、上下端に刻目を施す。口縁部内面に3条の色の異なる粘土を持つ扁平粘土帯を貼付する。口唇上端の刻目と内面粘土帯の刻目は同時に施したものである。頸部から胴部にかけてクシ描波線による直線文・波状文を施文。クシ描直線文の間に扁平な断面四角形のクシ描突帯貼付する。クシ描直線文と波状文は2条1単位のクシ描。櫛状文は4条1単位。	
230	A	ST11 SD56	弥生土器	壺	下胴部	－	(8.4)	17.4	－	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	5Y R 4/1 褐灰色	5Y R 6/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	胴部は球形に大きく張る。中位が最大径で、扁平な断面逆台形状の粘土帯を貼付し刻目を施す。粘土帯の下方に3条のヘラ描沈線による直線文、ヘラ描沈線より下位は外面全体に横方向のヘラミガキが確認される。器表面調整のため底部形状不明。	
231	A	ST11 土器2	弥生土器	壺	底部	－	(6.2)	－	14.5	1～5mm大のチャート砂粒を多量に含む。	10Y R 7/3 にぶい黄橙色	10Y R 7/4 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ	底面に小礫や植物繊維の圧痕が残る	
232	A	ST11 土器3	弥生土器	甕	口縁～上胴部	19.5	(11.9)	(10.6)	－	1～3mm大のチャート砂粒を多量に含む。	10Y 6/4 にぶい黄橙色	7.5Y R 6/6 橙色	ナデ	ユビオサエ、ナデ	摩耗調著で調整不明瞭。	
233	A	ST11 土器4	弥生土器	甕	口縁～胴部	24.4	(18.5)	－	－	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10Y R 6/4 にぶい黄橙色	10Y R 7/4 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	摩耗調著で調整は全体に不明瞭。	
234	A	ST11 土器4	弥生土器	甕	下胴部～底部	－	(7.9)	－	8.4	1～2mm大のチャート砂粒を多く含む。	10Y R 5/2 灰黄褐色	7.5Y R 6/3 にぶい褐色	不明	不明	平底。器表面の摩耗調著で、調整不明。	
235	A	ST11	弥生土器	壺	口縁～頸部	11.0	(9.4)	－	－	1mm大の砂粒をやや多く含む。	5Y 6/6 橙色	5Y 6/6 橙色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	貼付口縁。口唇は面をなし、端部外面肥厚。ハケ状原体の角を抑いて、口唇面には斜行文を、口縁内面には斜状文を施文。内外面ともヘラミガキで各わめて丁寧に仕上げる。	

表5　遺物観察表（土器）11

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
236	A	ST11	弥生土器	甕	口縁部	－	(3.7)	－	－	砂粒をほとんど含まず、微細粒砂および1mm大の砂粒を少量認められるのみである。	2.5Y 5/2 暗灰黄色	2.5Y 5/2 暗灰黄色	ナデ	ナデ、ハケ	口縁端部外面に刻目、口縁外面に微隆起帯を1条巡らせる。	搬入品・薄手土器。
237	A	ST11	弥生土器	壺	底部	－	(2.8)	－	(6.2)	1mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/1 灰白色	7.5YR 6/6 橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	摩耗調著。	
238	A	ST11	弥生土器	壺	底部	－	(7.7)	－	(7.8)	1mm大のチャート砂粒、微細粒砂を多量に含む。	5YR 6/6 橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ヘラミガキ	外面は摩耗のため調整痕は1ヵ所しか残らず、ごく一部観察できるのみ。	
239	A	ST11	弥生土器	甕	底部	－	(5.1)	－	5.0	1～2mm大の砂粒を多く含む。	2.5Y 4/1 黄灰色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ユビナデ	ユビオサエ、ナデ	上げ底。底部外縁は外方へ肥厚する。	
240	A	ST11	弥生土器	壺	底部	－	(4.2)	－	(8.0)	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	2.5Y 6/1 黄灰色	5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	平底。	
241	A	ST11	土師器	椀	底部	－	(1.8)	－	6.2	胎土は精選されており、砂粒はほとんど含まない。	2.5Y 7/3 浅黄色	5YR 6/4 にぶい橙色			ハの字状に開く断面逆台形の輪高台。	鬼時期の混入資料。
246	C	SK4	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(14.3)	－	(7.9)	1～2mm大のチャート砂粒を多く含む。	2.5Y 4/1 黄灰色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、板ナデ、ナデ	タタキ、ナデ	内面は工具を使ったナデにより砂粒が移動する。外面全面にタタキ目が残る。平底。	
247	C	SK4	弥生土器	甕	底部	－	(5.5)	－	5.4	2～4mm大の砂粒を多く含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビナデ、ヘラナデ	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	底面もヘラナデ（工具を使ったナデ）により仕上げる。	
248	C	SK8	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(13.2)	－	8.7	1～8mm大のチャート砂粒、小礫を多量に含む。褐色チャートが多い。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	5Y 6/6 橙色	ナデ、ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	上げ底。底面に纒維圧痕。摩耗による器表面の剥落のため、調整は部分的に確認できるのみ。	
249	D	SK11	弥生土器	壺	口縁～底部	16.0	43.8	30.0	10.6	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。微細粒砂多量に含む。褐色チャートも目立つ。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	最大径が胴部中位にある卵形の胴部から、頸部は直立しT字状に短く外反する。口コナデにより口縁は肥厚を呈し、上下端に刻目を巡らせる。貼付口縁。上胴部に6条1単位のクシ描文を施し、上から縦状文、小さい振幅の波状文（2段）、大きい振幅の波状文の順に文様を構成する。	
250	D	SK11	弥生土器	甕	完形	15.1	23.1	15.5	6.2	1～2mm前後のチャート砂粒を多量に含む	7.5YR 5/4 にぶい褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	貼付口縁。口唇は面をなす。頸胴界にくさび形の列点文を施す。平底。	
251	D	SK11	弥生土器	甕	口縁部	27.2	(5.0)	－	－	1mm以下のチャート細砂粒を多量に含む。	7.5YR 8/6 浅黄橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビオサエ、ナデ	ナデ	口縁部外面に粘土帯を貼付、粘土帯上に刻目を施文する。器壁は5～6mm前後と薄い。	
252	D	SK19	弥生土器	甕	底部	－	(3.9)	－	6.2	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	2.5Y 3/1 黒褐色	ナデ	ケズリ?ミガキ?	底面も外縁部と同じ調整。砂粒が下→上方向に移動する。	
253	C	SK25	弥生土器	壺	口縁～頸部	26.6	(7.1)	－	－	1mm以下の砂粒、微細粒砂を多量に含む。	5Y 6/6 橙色	5Y 6/6 橙色	ナデ	ユビオサエ、ナデ	摩耗調著で調整不明瞭。口縁部内面に4条1単位のクシ描波状文。口唇はヨコナデとユビオサエにより、わずかに凹状の面をなす。	
254	C	SK35	弥生土器	壺	頸部～上胴部	－	(15.8)	－	－	1mm大の砂粒をやや多く含む。褐色チャートが目立つ。微細粒砂が多く、精選された印象である。	2.5Y 7/3 浅黄色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	上胴部はなで肩で頸部は直立する。口縁部は開く分形状不明。	
258	B	SK50	弥生土器	壺	口縁～頸部	16.0	(6.4)	－	－	精選された粘土、1mm前後の砂粒を少量含む。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	貼付口縁。口唇は凹状の面をなし、口唇面全面にハケ状原体による刻目を巡らせる。	
259	B	SK50 底	弥生土器	甕	口縁～下胴部	13.2	(13.7)	(14.8)	－	精選された粘土、1mm前後の砂粒を少量含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ユビオサエ、ヘラミガキ	膨らんだ胴部から、わずかに内傾してさも上がった後、口縁は外反。口縁端部外面がわずかに拡張。	
260	B	SK50	弥生土器	甕	口縁部	－	(5.0)	－	－	0.5～1mm大の細粒砂を多量に含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ナデ	ナデ	口唇は面をなし、外端が丸みを帯びる。口縁端部外面に刻目、その下に爪圧痕状の刻目を施文する。爪圧痕状の刻目は、上胴部に施文する。口胴部外面には縦位のみみず腫れ状の微隆起帯を有する。	
261	B	SK50	弥生土器	甕	口縁部	－	(5.0)	－	－	0.5～1mm大の細粒砂を多量に含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ナデ	ナデ	口縁部、端部外面の刻目と爪圧痕状の刻目が確認できる。	
262	B	SK50	弥生土器	甕	頸部～上胴部文様	－	(5.7)	－	－	0.5～1mm大の細粒砂を多量に含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ナデ	ナデ	上胴部の爪圧痕状の刻目あり。	

表5　遺物観察表（土器）12

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面	文様・形態・製作技法他	
263	B	SK50	弥生土器	甕	頸部～上胴部	－	（4.6）	－	－	0.5～1mm大の雲母粒を多量に含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ナデ	ナデ	縦位のみみず腫れ状の微隆起帯と上胴部の爪圧痕状の刻目が確認できる。	
264	B	SK50	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	（7.6）	－	（10.4）	1mm大の砂粒を少し含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ナデ、ユビオサエ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	平底。底部外周部は強い横方向のナデによって仕上げる。外面には強いナデによる砂粒の移動が確認され、底面にもナデの跡が残る。	
265	B	SK50	弥生土器	壺	底部	－	（6.3）	－	9.0	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	2.5Y 6/1 黄灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ナデ、ユビオサエ、ユビオサエ	ヘラナデ、ナデ、ヘラミガキ	平底。底面にケズリ調整あり。	
266	B	SK50	弥生土器	甕	底部	－	（5.2）	－	6.0	1mm大の砂粒を少し含む。	2.5Y 4/1 黄灰色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	上げ底気味の底部。	
267	B	SK61	弥生土器	壺	底部	－	（4.0）	－	10.0	精選された胎土、微細砂粒を含み、5～7mm大の礫も認められる。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラナデ	平底。底部外周ヘラナデにより面を形成する。	
268	B	SK68	弥生土器	壺	口縁～頸部	15.5	－	－	－	1mm大の砂粒を少量含む。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	貼付口縁。口唇は凹状の面をなし、上下端に刻目。頸胴部わずかに隆起し刺突文を巡らせる。	
269	B	SK70	弥生土器	壺	口縁～上胴部	19.8	（12.0）	－	－	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 4/1 褐灰色	10YR 8/2 灰白色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、工具による圧痕	頸胴界に3条のクシ描直線文。口縁は貼付口縁で上下端に刻目を施す。	
270	B	SK70	弥生土器	壺	口縁～頸部	（19.4）	（6.8）	－	－	1～2mm大の砂粒を少量含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/6 明黄褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ユビナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	貼付口縁。口唇はわずかに凹状の面をなす。器表面の摩耗顕著。	
271	B	SK70	弥生土器	甕	口縁～上胴部	31.8	（12.9）	－	－	1mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ（ごく一部に煤跡あり）	貼付口縁。口唇はわずかに凹状の面をなす。上胴部にハケ状原体による列点文。口唇部上端に刻目あり。	
272	B	SK70	弥生土器	甕	頸部～上胴部	－	（9.1）	（31.0）	－	1mm大の砂粒を少し含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ハケ、ナデ	ナデ	頸部に縦位のミミズ腫れ状の微隆起帯（13条）と横位の扁平な刻目を持つ粘土帯による。上胴部に断面三角形の微隆起帯とその下に反復状の粘土を貼付し、押文として加飾する。胴部外面の器面は粗い状態であり、ナデにより仕上げられてはいない。	器壁は5mm前後と薄い。
273	B	SK70	弥生土器	甕	頸部～胴部	－	（17.3）	（21.6）	－	1～3mm大の砂粒を少量含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/2 灰黄褐色	ハケ、ユビオサエ、ナデ、ユビナデ、ヘラミガキ	タタキ、ハケ、ナデ	無文で、口縁形状は不明。膨らんだ胴部から、頸部は直立する。	胴部外面に煤状炭化物付着。
274	B	SK70	弥生土器	甕	上胴部～胴部	－	（15.0）	24.9	－	精選された胎土、1～2mm大の砂粒を若干量と微細砂粒を含むのみ。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 4/1 褐灰色	ユビナデ	ハケ	上胴部に列点文がわずかに残る。外面は全面をものの細かいハケ調整で仕上げる。	外面に煤状炭化物付着。
275	B	SK70	弥生土器	甕	下胴部～底部	－	（10.5）	－	8.0	精選された胎土、1～2mm大の砂粒を若干量と微細砂粒を含むのみ。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 4/1 褐灰色	ユビナデ、ユビオサエ、板ナデ、ヘラミガキ	板ケズリ、ハケ、ヘラミガキ	底面は板ケズリにより砂粒が移動。ヘラミガキで仕上げる。外面はものの細かいハケ調整で仕上げる。	外面に煤状炭化物付着。
276	B	SK70	弥生土器	甕	胴部～底部	－	（11.1）	－	4.7	0.5～1mm大のチャート砂粒を少量含む。	10YR 7/3 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ハケ、ユビオサエ、ナデ、板ケズリ（ナデ）	平底。底面にケズリ調整あり。外面板ケズリにより砂粒が左→右方向に移動する。	
277	B	SK70	弥生土器	壺	底部	－	（3.5）	－	7.3	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	平底。	
278	B	SK70	弥生土器	甕	底部	－	（4.0）	－	6.7	1mm大の砂粒を少し含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	平底。	
279	B	SK70	弥生土器	甕	底部	－	（4.7）	－	5.7	1mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ユビオサエ	ユビオサエ	摩耗顕著で調整不明瞭。確認できるのは内外面のユビオサエのみ。底部外周外舞へ起張。平底。	
280	B	SK70	弥生土器	甕	底部	－	（3.2）	－	6.9	1mm大の砂粒を少し含む。	5Y 3/1 オリーブ黒色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	外面は摩耗顕著。	
285	A	SK82	弥生土器	壺	口縁～頸部	20.4	（9.3）	－	－	精選された胎土、1mm前後の砂粒を少量含む。4mm大の小礫も認められる。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなし、全面に刻目。頸部にクシ描文を施文する。ための直線文に波状文が一部重なっている。残95条が確認できる。	
286	A	SK82	弥生土器	壺	頸部～上胴部	－	（3.5）	－	－	精選された胎土、微細砂粒を含むのみ。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ハケ、ナデ	ハケ	クシ描波状文と直線文。	

表5　遺物観察表（土器）13

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
287	A	SK82	弥生土器	壺	胴部	－	（3.2）	－	－	精選された粘土。微細砂粒を含むが少。	2.5Y 7/4 浅黄色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ナデ	クシ描波状文と直線文。波状文は4条1単位。	
288	A	SK82	弥生土器	甕	底部	－	（2.9）	－	（4.3）	1mm前後のチャート砂粒を少量含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	平底。外周に炭化物付着。摩耗顕著。	炭化物付着。
289	A	SK82	弥生土器	壺	底部	－	（3.0）	－	（7.1）	精選された粘土。1mm前後の砂粒を少量含む。	7.5YR 8/4 浅黄橙色	5YR 6/6 橙色	ユビナデ	工具を使ったナデ（ヘラナデ?）	平底。	
290	A	SK82	弥生土器	鉢	口縁部	（19.4）	（7.1）	－	－	1mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 8/4 浅黄橙色	7.5YR 8/4 浅黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	始付口縁。口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付する。ハケ調整は、右下→左上方向。	
291	A	SK83	弥生土器	壺	底部	－	（3.9）	－	12.5	1～3mm大のチャート砂粒を多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ヘラケズリ、ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	丁寧なナデで仕上げる。	
292	A	SK83	弥生土器	壺	底部	－	（3.2）	－	（8.3）	1mm大の砂粒をやや多く含む。	10Y R 6/3 にぶい黄褐色	10YR 4/3 にぶい黄褐色	ナデ	ナデ、ヘラミガキ	内面は強いナデにより砂粒が移動。底面にも砂粒の移動が認められる。	
293	A	SK85	弥生土器	壺	底部	－	（8.4）	－	（14.6）	1mm大の砂粒を少量含む。	10YR 6/2 灰黄褐色	10YR 4/1 褐灰色	ナデ、ユビナデ、ヘラミガキ	板ナデ（ケズリ）、ヘラミガキ	内面は強いナデにより砂粒が移動。底面にも砂粒の移動が認められる。底部付近の外周も板ケズリによって砂粒が移動する。	
294	A	SK85	弥生土器	壺	底部	－	（6.6）	－	（11.0）	1mm前後の砂粒を少し含む。	2.5Y 7/3 浅黄色	10YR 7/2 にぶい黄橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	平底。	
295	A	SK87	弥生土器	蓋	天井部～脚部	4.4	（5.3）	－	12.4	精選された粘土。1mm前後の砂粒を少量含む。	2.5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	遺部上下に屈曲。天井部は凹み、外縁を拡張する。内外面に環状の黒斑が残る。	
296	C	土器9	弥生土器	鉢	完形	30.8	31.2	18.0	11.8	1～3mm大のチャート砂粒を多く含む。円礫が多い。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	始付口縁。口縁は凹状の面をなす。底面は直径9.5cm前後の粘土盤をベースに周囲に粘土帯を積み上げて成形する。外面底部付近に一部ヘラミガキが残る。底面に織維圧痕。	土器棺
297	C	土器9-10	弥生土器	甕	胴部	－	（18.0）	－	－	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 3/2 黒褐色	2.5YR 6/6 橙色	ナデ、ヘラミガキ	不明	最大径は胴部上半にある。無文の甕胴部。外面は摩耗顕著で調整不明。	後期前半。
298	C	土器10	弥生土器	壺	頸部～底部	－	（40.0）	32.8	－	2～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 1/4 褐灰色	7.5YR 2/4 灰褐色	ヘラケズリ、ハケ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ナタキ、ハケ、ナデ	頸部で強く屈曲し、口縁は外反する。口縁部形状は不明。頸部に列点文。外面は縦かいハケ調整の後、粗いハケ調整で仕上げ。上胴部のムラヘラミガキで仕上げている。内面上胴部以下、下→上方向のヘラケズリ。上胴部より上は、横方向の細かいハケ調整の後、粗いハケ調整で仕上げる。底部付近の外面にタタキ目が残る。	
299	C	土器10	弥生土器	甕	口縁～頸部	16.8	（6.8）	－	－	2～4mm大の粗砂粒をやや多く含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ	口縁部は外反。口縁は面をなす。頸部に1条微隆起帯が残る。	口頸部外面に炭化物付着。
300	C	土器10	弥生土器	甕	底部	－	（4.3）	－	（7.4）	2～3mm大の砂粒をやや多く含む。	10Y R 5/3 にぶい黄褐色	7.5YR 5/3 にぶい褐色	ハケ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	底面中央部が凹状で高台状の形状を呈する。	
301	C	土器10	弥生土器	壺? 甕?	底部	－	（5.7）	－	5.8	1～2mm大の砂粒を多く含む。	10YR 2/1 黒色	10YR 7/3 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	わずかに上げ底気味。	底面に穿孔があった可能性が指摘されているが、確認はない。
302	C	土器10内	弥生土器	高杯	口縁～坏部部	28.1	（6.4）	－	－	1～2mm大のチャート砂粒を多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	口縁部外面にコナデによる幅い段部が形成される。内面は摩耗のため、調整痕はほとんど残らない。	
303	C	SD3-2石列	弥生土器	壺	胴部	－	（3.3）	－	－	1～2mm大前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ	ナデ	双線による格子目文と太めのクシ描原体によるクシ描直線文。	
304	C	SD3-2石列	弥生土器	壺	胴部	－	（5.5）	－	－	1～2mm大前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ	ナデ	双線による格子目文と太めのクシ描原体によるクシ描直線文。	
305	C	SD3-2石列	弥生土器	壺	胴部	－	（7.1）	－	－	1～2mm大前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ	ナデ	双線による格子目文と太めのクシ描原体によるクシ描直線文。	
306	C	SD3-2石列	弥生土器	壺	胴部	－	（6.0）	－	－	精選された粘土。2～4mm大の粗砂粒を若干含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ナデ	3条1単位のクシ描直線文と列点文。	
307	C	SD3-2石列	弥生土器	壺	胴部	－	（2.4）	－	－	2mm大前後の砂粒を少量含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ユビオサエ	ミミズ腫れ状の微隆起帯4条をユビオサエで圧着する。その際に爪形の圧痕が残る。	

表5　遺物観察表（土器）14

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
308	C	SD3/2石列	弥生土器	壺	底部	－	(6.1)	－	12.1	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3に赤い黄橙色	10YR 3/1黒褐色	エビナデ、ヘラナデ、ナデ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	平底。底面にケズリ調整とナデ調整。底部外周にヘラケズリ。砂粒は左→右に移動する。	
309	C	SD3/2石列（サブトレ）	弥生土器	壺	底部	－	(7.8)	－	8.4	2～5mm大の粗砂粒を多量に含む。	10YR 5/4に赤い黄褐色	7.5YR 6/6橙色	ハケ、エビナデ、エビオサエ	ハケ、ナデ、エビオサエ、ヘラミガキ	上げ底気味。	
310	C	SD3/2石列	弥生土器	壺	底部	－	(5.9)	－	8.4	1～3mm大の砂粒を多く含む。5～6mm大の粗砂粒も混ざり込む。	5YR 7/6橙色	7.5YR 8/4淺黄橙色	ナデ、エビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	底部は高台状で胴部が高くなる。底面にナデが残る。内面は器表面が剥落する部分が多い。	
311	C	SD3/2石列	弥生土器	甕	底部	－	(3.4)	－	6.4	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 6/3に赤い黄橙色	7.5YR 6/3に赤い褐色	エビオサエ、ナデ	エビオサエ、ナデ	上げ底気味。	
312	C	SD3/2石列	弥生土器	甕	底部	－	(3.7)	－	(6.4)	2～3mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4に赤い黄橙色	7.5YR 6/4に赤い橙色	エビオサエ、エビオサエ	エビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	上げ底。器表面の剥落顕著。	
313	C	SD3/2石列上	弥生土器	甕	口縁～上胴部	15.1	(7.2)	－	－	2～5mm大の粗砂粒をやや多く含む。	5YR 6/6橙色	5YR 6/4に赤い橙色	ハケ、エビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇は面をなし、下端を拡張する。	
314	C	SD3/2石列上	弥生土器	壺	胴部	－	(3.5)	－	－	1mm大前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3に赤い黄橙色	10YR 7/3に赤い黄橙色	エビナデ、エビオサエ	ナデ	双線による亜弧文、クシ描直線文と縦平行刺目突帯。	
322	C	P134	弥生土器	壺	胴部	－	(5.8)	－	－	粘土帯の色が異なる。10YR 6/2・灰白色	7.5YR 7/4に赤い橙色	7.5YR 7/4に赤い橙色	エビナデ	不明	クシ描直線文、クシ描直線上に色の異なる縦平行刺目を持つ粘土帯を貼付する。	
323	C	P145	弥生土器	壺	胴部	－	(6.6)	－	－	2～3mm大の砂粒を若干量含む。	7.5YR 7/6橙色	7.5YR 6/4に赤い橙色	エビナデ	ナデ	双線による格子目文、クシ描直線文、縦平刺目粘土帯。	
324	C	P149	弥生土器	壺	口縁部	(16.4)	(1.6)	－	－	0.5～1mm前後の細粒砂を多く含む。	10YR 7/4に赤い黄橙色	7.5YR 7/6橙色	ナデ	ナデ	口唇は上下に拡張し、3条の凹線を施す。	
325	C	P149	弥生土器	甕	口縁～上胴部	(17.8)	(7.6)	－	－	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6橙色	7.5YR 6/4に赤い橙色	ハケ、エビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	頸部でやや字状に強く屈曲。口唇は上下に拡張、2条の凹線を持つ。	上胴部外面に煤状炭化物付着。
326	C	P149	弥生土器	甕	底部	－	(2.8)	－	4.7	1～4mm大の砂粒・小礫をやや多く含む。	7.5YR 6/4に赤い橙色	7.5YR 6/4に赤い橙色	エビナデ、ナデ	ハケ、ナデ	平底で底面は胴縁に沿ったナデが確認される。	
327	C	P149	弥生土器	壺	底部	－	(5.2)	－	8.5	2～5mm大の粗砂粒を多く含む。	10YR 6/4に赤い黄橙色	5YR 6/4に赤い橙色	ハケ、ヘラケズリ	タタキ、ナデ	平底。内面は板状の工具を使ったナデまたはケズリのため移動が移動（下→上）。	
328	C	P173	弥生土器	甕	底部	－	(3.5)	－	(6.8)	1mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 4/1褐灰色	7.5YR 7/4に赤い橙色	エビオサエ	エビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	平底。底面に圧痕あり。	
329	C	P173	弥生土器	甕	底部	－	(3.8)	－	6.9	2～5mm大の粗砂粒を多く含む。	10YR 7/4に赤い黄橙色	10YR 6/4に赤い黄橙色	ナデ、エビオサエ	ナデ、ヘラナデ	わずかに上げ底気味。	
330	C	P174	弥生土器	土器転用紡錘車	完形	4.9（長径）	4.7（短径）	－（厚）	0.35（孔径）	1mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/3に赤い黄橙色	10YR 4/2灰黃褐色	エビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ	直径4.7～4.9cmの円盤、孔径3.5mm。	
331	C	P176	弥生土器	壺	口縁部	13.0	(2.0)	－	－	粘土は精選されており、1mm大の砂粒を若干含むのみ。	5YR 6/6橙色	5YR 6/6橙色	ナデ	ハケ、ナデ	口唇に刻目、口縁部外面に断面三角形の微隆起帯を2条貼付する。	
332	C	P176	弥生土器	甕	口縁～胴部	14.8	(12.5)	－	－	2～3mm大のチャート砂粒を含む。砂粒の含有量は多くはない。	10YR 7/6明黃褐色	7.5YR 7/6橙色	ハケ、ナデ、ヘラケズリ	タタキ、ハケ、ナデ	口唇は面をなし、強いヨコナデにより条線が認められる。（凹線ではない。）内面ヘラケズリ、砂粒は左→右、上→下に移動する。	外面に煤状炭化物付着。吹きこぼれの痕跡が認められる。
333	C	P176	弥生土器	甕	口縁～上胴部	15.2	(9.1)	(18.0)	－	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 6/4に赤い黄橙色	5Y 6/6橙色	ハケ、エビナデ、エビオサエ、ナデ	タタキ、ハケ、エビオサエ、ナデ	頸部でゆるやかに屈曲し、口縁は外反する。口唇は面をなし、端部が外方へわずかに肥厚する。	頸部以下外面に煤状炭化物付着。
334	C	P176	弥生土器	甕	口縁～上胴部	21.0	(7.0)	－	－	2～3mm大のチャート砂粒を多く含む。	10YR 5/3に赤い黄褐色	10YR 5/3に赤い黄褐色	エビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ	頸部はゆるやかに屈曲、口唇は面をなす。胴部外面は器表面が剥落、調整不明。	頸部外面に炭化物付着。
335	C	P176	弥生土器	甕	口縁～上胴部	(12.0)	(4.9)	－	－	1～2mm大のチャート砂粒を多く含む。3～4mm大の粗砂粒も認められる。	7.5YR 6/4に赤い橙色	7.5YR 6/3に赤い褐色	ヘラケズリ、ナデ	ナデ	頸部でこの字状に強く屈曲。口縁はヨコナデにより凹状の面をなす。内面頸部以下ヘラケズリ、砂粒は下→上方向に移動。	後期歯半～中葉。
336	C	P176	弥生土器	甕	口縁～上胴部	11.4	(7.0)	(10.5)	－	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 5/4に赤い褐色	7.5YR 6/3に赤い褐色	ヘラケズリ、エビオサエ、ナデ	ナデ	頸部以下内面ヘラケズリ。口縁は外反し、口唇は面をなす。	外面頸部以下に部分的に煤状炭化物付着
337	C	P176	弥生土器	鉢	口縁～上胴部	(35.5)	(8.1)	－	－	1～3mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6橙色	10YR 6/3に赤い黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	梅状で口縁は短く外反、口唇は面をなす。胴部外面中位に炭化物付着。	残存率1/12程度。

表5　遺物観察表（土器）15

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面	文様・形態・製作技法他	
338	C	P176	弥生土器	鉢	口縁～体部	20.0	(6.0)	－	－	2～3mm大の粗粒砂をやや多く含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 6/2 灰黄褐色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ナデ	ナタキ目は斜線をとどめるのみ。口唇は丸み帯びる。	
339	C	P176	弥生土器	高杯	坏部	24.5	(4.0)	21.4	－	胎土は精選されている。1mm前後の砂粒を少量含む。5mm大の小礫も認められる。	5Y 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁は緩やなしていったん屈曲した後外反、端部は丸みを持つ面をなす。	
340	C	P176	弥生土器	壺	底部	－	(6.5)	－	6.2	3～5mm大前後の礫粒砂を多く含む。	7.5YR 3/4 黒褐色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	不明	ハケ、ナデ	擦痕調著。平底。無文の土器底部。	
341	C	P176	弥生土器	壺	底部	－	(5.6)	－	4.0	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ナタキ、ハケ、ナデ	平底。底面に圧痕あり。	
342	C	P176	弥生土器	壺	底部	－	(3.9)	－	3.6	1mm前後の砂粒を少し含む。	2.5YR 6/6 橙色	5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	平底。	
343	C	P176	弥生土器	壺	底部	－	(3.8)	－	4.6	1～2mm大の砂粒を少し含む。	7.5YR 3/1 黒褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ユビナデ、ユビオサエ	ナタキ、ハケ	平底。	
344	C	P254	弥生土器	壺	口縁部	－	(3.1)	－	－	1～2mm大の砂粒を少量含む。	10YR 7/6 明黄褐色	7.5YR 7/6 橙色	ナデ	ハケ、ナデ	口唇はわずかに凹状の面をなし、上下端に細目を施す。	
345	C	P254	弥生土器	壺	胴部	－	(2.5)	－	－	1mm大の砂粒を少し含む。	2.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ナデ	ナデ	クシ描直線文と刺突文、クシ描の1条の幅は広い下約2.8mmとでみる。	中期前半。
346	C	P305	弥生土器	壺	口縁部	－	(2.8)	－	－	1～2mm大の砂粒を少し含む。	7.5YR 7/6 橙色	10YR 3/2 黒褐色	ナデ	ナデ、ユビオサエ	ユビオサエで、口縁部外面に粘土帯を貼付する。口唇には深5mmの溝が巡る。	
347	C	P305	弥生土器	蓋	完形	20.2	10.8	－	5.8	1～2mm前後のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	10YR 7/6 明黄褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ、板ナデ	内面はナデにより、外面は板ナデにより丁寧に仕上げる。外面の板ナデは、上半が縦方向、下半が横方向。胴部端部はわずかに凹状を呈する面をなす。	胴部内面から胴部外端にかけて、煤状化物が付着する。
348	B	P369	弥生土器	壺	口縁部	19.6	(3.4)	－	－	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ	口唇は凹状の面をなし、下端を肥張して刻目を施す。胴部に縦平な刻目を持つ粘土帯（残1条）を貼付する。口縁部内面に3条の縦平な刻目を持つ粘土帯を貼付する。	
349	B	P377	弥生土器	壺（小型）	頸部～上胴部	－	(5.1)	(9.8)	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を若干含むのみ。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	頸部でゆるやかに屈曲する。口縁部形状不明。	胴部以下に煤状炭化物付着。
350	B	P402	弥生土器	壺	口縁部	16.8	(3.3)	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	5YR 6/4 にぶい橙色	5YR 6/6 橙色	ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	貼付口縁。口唇はヨコナデにより砂粒が移動する。（右→左）	
351	B	P402	弥生土器	壺？甕？	口縁部・小片	－	(1.8)	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	貼付口縁。ハケ状原体を使って口縁部外面に刻目を巡らせる。	
352	B	P402	弥生土器	鉢	完形	15.4	13.0	－	8.6	1mm大前後の砂粒を多く含む。	7.5YR 5/1 褐灰色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ナデ、ヘラミガキ	ケズリ、ハケ、ヘラミガキ	底部外周に板ケズリ、砂粒の移動あり。平底で底面にも板ケズリが認められる。ボール状の鉢で、口唇は丸みを帯びる。	
353	B	P421	弥生土器	壺	口縁～頸部	16.9	(5.9)	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を若干量含むのみ。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	丁寧に仕上げる。貼付口縁。口縁は面をなし、口唇全面に刻目を施す。	
354	B	P425	弥生土器	壺	胴部	－	(7.0)	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒をやや多く含む。	10YR 7/2 にぶい黄橙色	10YR 8/3 浅黄橙色	ナデ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	クシ描文（櫛状文・直線文）を施文、クシ描の単位は4条1単位である。	
355	B	P425	弥生土器	壺	頸部～胴部	－	(14.0)	(18.5)	－	1～2mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ユビナデ、ナデ、板ナデ	上胴部にユビオサエにより、微隆起帯を貼付する。胴部外面は丸みを使った縦方向のナデにより仕上げる。	胴部外面に炭化物と微細砂粒付着。内面にコゲ状の炭化物付着。
363	B	P429	弥生土器	壺（長頸壺）	完形	11.2	20.8	16.1	5.6	0.5～1mm大の砂粒、微細砂粒を多く含む。チョコレート色を呈し、ガワ三層剥離を多く含んでいる。	10YR 5/4 にぶい黄褐色	10YR 5/4 にぶい黄褐色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	胴部中位に最大径がある。胴部は直立し、口縁はラッパ状に大きく開く。貼付口縁。口唇は横方向のハケ調整の後、ユビオサエにより仕上げ、凹状の面をなす。底面はヘラケズリにより砂粒が移動、外縁部に粘土が残り、上げ底状となる。	

表5　遺物観察表（土器）16

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
356	B	P442	弥生土器	壺	胴部	－	(4.0)	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を若干含むのみ。	7.5YR 5/2 褐灰色	7.5YR 6/6 橙色	ハケ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	クシ描文（櫛状文）を施文。クシ描の単位は4本1単位である。	
357	C	P453	弥生土器	壺	胴部	－	(2.8)	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	10YR 8/3 浅黄橙色	10YR 8/3 浅黄橙色	ユビオサエ	ハケ	クシ描直線文・波状文、連続した刺突文で加飾する。	
358	C	P459	弥生土器	壺	口縁部	(24.5)	(1.5)	－	－	1mm大の砂粒を少量含む。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/8 橙色	ハケ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口唇全面に刻目を施す。摩耗、調著で調整不明瞭。	残存1/10程度。
359	C	P459	弥生土器	壺	胴部	－	(5.0)	－	－	1mm前後の砂粒を少量含む。	2.5Y 6/2 灰黄色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ユビナデ	ナデ	胴部小片。断面三角形の微隆起帯。その上方にクシ描直状文と直線文を交互に施文。クシ描は8本1単位。	
360	C	P460	弥生土器	甕	口縁～頸部	16.0	(5.9)	－	－	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	貼付口縁。口唇は面をなし、上下端に刻目を施す。	
361	A	P492	弥生土器	甕	胴部	－	(4.5)	－	－	精選された胎土。砂粒はほとんど含まない。	2.5Y 6/3 にぶい黄色	2.5Y 6/3 にぶい黄色	ユビオサエ、ナデ	ハケ	クシ描波状文の下に楕形の刺突文を巡らせる。	
362	A	P494	弥生土器	壺	底部	－	(3.8)	－	9.8	1mm大前後の砂粒をやや多く含む。	5Y 4/1 黄灰色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ユビオサエ、ナデ	不明	平底で底面に圧痕あり。外周から底面にかけて炭化物付着。摩耗調著。	炭化物付着。
367	C	SX1	弥生土器	壺	口縁～頸部	(17.6)	(5.5)	－	－	2mm大前後の砂粒を少し含む。	10YR 7/2 にぶい黄橙色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ナデ、ユビオデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	やや開き気味に直立する口縁。口唇は丸く仕上げる。	
368	D	SX3	弥生土器	壺	頸部	－	(4.7)	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	色の異なる扁平な刻目突帯を貼付し、突帯間には幅広のクシ描直線文。	
369	D	SX3	弥生土器	壺	胴部	－	(3.2)	－	－	1mm大の砂粒をやや多く含む。	10YR 4/1 褐灰色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	不明	不明	摩耗調著で調整不明。クシ描櫛状文・未端凝色文。	
370	D	SX3	弥生土器	壺	胴部	－	(4.0)	－	－	1～3mm大の砂粒を少量含む。	7.5YR 6/4 にぶい橙色	7.5YR 6/6 橙色	ナデ	ハケ、ナデ	クシ描直線文。粘土塊貼付。	
371	D	SX3	弥生土器	壺	底部	－	(5.7)	－	9.9	0.5～2mm前後の砂粒を多量に含む。	2.5Y 5/2 暗灰黄色	7.5YR 7/6 橙色	不明	不明	平底。器表面の摩耗調著で、調整不明。	
372	B	SX10	弥生土器	甕	上胴部	－	(9.3)	－	－	0.5～2mm前後の細砂粒を多量に含む。	10YR 4/1 褐灰色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	摩耗のため調整は不明瞭。外面のヘラミガキは部分的に残っていることがわかる。器壁は3mm前後とかわの薄い。	
373	B	SX10	弥生土器	壺	底部	－	(3.2)	－	(9.2)	0.5～1mm大の微細砂粒を多く含む。	10YR 6/1 褐灰色	10YR 7/6 明黄褐色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ	平底。外周は大部分が調著している。	
374	A	土器5	弥生土器	壺	口縁～頸部	26.6	(9.6)	－	－	胎土は精選されており、チャートの微細砂粒を若干含むのみ。	10YR 8/3 浅黄橙色	10YR 8/3 浅黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ヘラミガキ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	大きくラッパ状に開く口縁。貼付口縁で、口唇は凹状の面をなす。口唇にハケ状原体の押圧による刻目を施し、全周に巡らせる。	
375	A	土器6	弥生土器	壺	口縁～上胴部	19.2	(11.9)	－	－	1～2mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	上胴部にクシ描櫛状文とクシ描直線文を施文する。クシ描の単位は3条。口縁は素口縁で、口唇はコナデによりわずかに凹状の面をなす。	
376	A	土器6	弥生土器	壺	胴部	－	(5.7)	－	－	精選された胎土。2mm前後の砂粒を少量含む。	10YR 6/4 にぶい黄橙色	5YR 7/6 橙色	ナデ	ハケ、ナデ	クシ描文。櫛状文＋直線文＋巻状文。	
377	A	土器6	弥生土器	甕	口縁部・小片	－	(1.5)	－	－	精選された胎土。	10YR 6/3 にぶい黄橙色	10YR 7/3 にぶい黄橙色		ハケ	貼付口縁。口縁部小片。	
378	A	土器6	弥生土器	甕	口縁部・小片	－	(1.6)	－	－	精選された胎土。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	5Y 6/6 橙色		ハケ、ユビオサエ	貼付口縁。口縁部小片。	
379	B	土器11	弥生土器	甕	下胴部～底部	－	(7.9)	－	(6.1)	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	5YR 6/4 にぶい橙色	5YR 6/6 橙色	ナデ、ユビオデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	底面は強いナデあるいはケズリにより砂粒が移動する。	
381	C	SD-A	弥生土器	甕	口縁～胴部	(15.7)	(16.1)	(19.2)	－	1mm大の砂粒および3mm大の小礫を少し含む。	5YR 4/6 赤褐色	7.5YR 5/4 にぶい褐色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	上胴部に3条の微隆起帯。胴部は縦方向のハケ、上胴部は縦方向の粗いナデ。口唇はわずかに凹状の水平面をなす。	口縁内面と胴部中位に煤状炭化物付着。
382	C	SD-H	弥生土器	土器転用紡錘車	完形	3.8（長径）	3.6（短径）	－（厚）	0.3（孔径）	1～2mm大の砂粒を少量含む。4mm大の小礫も認められる。	7.5YR 6/6 橙色	2.5Y 4/1 黄灰色	ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ	土器転用紡錘車。直径3.6～3.8cmの円盤。孔径3mm。	
383	C	SD-H	弥生土器	小型土器・器台	完形	1.6	1.7	－	1.6	1mm前後の砂粒を少量含む。	10YR 6/3 にぶい黄橙色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ユビオサエ	ユビオサエ	上底、下底ともに凹状を呈する。	器台のミニチュア土器。
384	C	SD-J	弥生土器	壺	胴部	－	(3.5)	－	－	胎土は精選されている。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/6 橙色	ユビナデ	ヘラミガキ	13条1単位のクシ描波状文。小破片だが、二段に分けて施文されている。	

表5　遺物観察表（土器）17

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
385	B	SD-K	弥生土器	壺	胴部	－	(3.5)	－	－	1mm大の砂粒を少量含む。	10YR 7/2 に ぶい黄橙色	7.5YR 7/4 に ぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ナデ	胴部小片。クシ描簾状文・波状文・直線文。	
386	B	SD-K	弥生土器	甕	胴部	－	(7.0)	－	－	1mm大の砂粒をやや多く含む。ザラス質の微細砂粒も認められる。	7.5YR 7/6 橙色	10YR 6/4 に ぶい黄橙色	ナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	2条1単位の双線による直線文を2段に配し、その上にハケ状原体による縦位の押圧文を連続させる。	簾状文を意識した文様か。
387	C	SD 14-15	弥生土器	甕	口縁～上胴部	16.4	(5.2)	－	－	2～5mm大の粗砂粒をやや多く含む。	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/4 に ぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	口容は丸みを帯びた面をなし、口縁端部は上方に若干拡張する。	
391	A	第Ⅱ層	弥生土器	壺	口縁部	－	6.6	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	5Y 6/6 橙色	7.5YR 6/4 に ぶい橙色	ヘラミガキ	ナデ	口縁部内面に1.5cm幅で色調が異なる部分がある。粘土帯等が貼付されていた可能性もある。口縁端部は面をなし、上下端に刻目を施す。外面に断面三角形の刻目を持つ突帯を貼付する。外面には1単位のクシ描による簾状文、直線文、波状文を連続して施文する。	類似例なし。
392	A	第Ⅱ層下	弥生土器	壺	口縁～頸部	(16.2)	(7.2)	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	7.5YR 7/4 に ぶい橙色	7.5YR 6/4 に ぶい橙色	ハケ、ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、工具による圧痕、ナデ	ナデには弓単に仕上げる。	
393	A	Ⅱ層	弥生土器	壺	口縁～頸部	16.1	(4.1)	－	－	1mm大のチャート砂粒をやや多く含む。	10YR 8/4 浅黄橙色	10YR 7/4 に ぶい黄橙色	不明	不明	摩耗調著で調整不明。貼付口縁で、口縁外面に刻目。	
394	A	Ⅱ層	弥生土器	壺	頸部～上胴部	－	(7.2)	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を少量含む。	10YR 7/6 明黄褐色	10YR 7/4 に ぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	頸胴界に断面三角形の突帯をユビオサエにより貼付する。突帯の下方にクシ描簾状文がわずかに確認できる。	
395	A	第Ⅱ層	弥生土器	甕	口縁～下胴部	13.4	(19.5)	13.0	－	1～2mm前後のチャート砂粒をやや多く含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、板ナデ、ナデ	口容は門状の面をなす。胴部外面は強いナデによる砂粒が移動する。	
396	A	第Ⅱ層	弥生土器	鉢	完形	17.2	15.0	15.7	6.6	1～2mm前後のチャート砂粒を多量に含む。	10YR 6/3 に ぶい黄橙色	10YR 6/2 灰黄褐色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	平底、上胴部は上方へ立ち上がった後、頸部で短面して口縁に至る。無文。	
397	A	Ⅱ～第Ⅲ層	弥生土器	小型土器	完形	8.2	5.2	－	4.8	胎土は精選されており、少量の微細砂粒を含むのみ。	7.5YR 7/4 に ぶい橙色	7.5YR 7/4 に ぶい橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	口縁下に帯孔。上げ底。鉢形土器の小型土器であり、貼付口縁も表現されている。	
398	A	第Ⅱ層	弥生土器	鉢環	口縁部（環部）	19.2	(3.0)	(17.8)	－	0.5～1mm大前後のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5Y 8/2 灰白色	10YR 7/2 に ぶい黄橙色	ハケ、ナデ	ナデ	環部で一旦屈曲した後、口縁は外反する。口容は丸く仕上げる。	残1／8程度から復元。
399	A	第Ⅱ層	弥生土器	壺	胴部～底部	－	(15.0)	22.0	9.8	0.5～1mm大の砂粒、微細砂粒を多く含む。2～3mm大の小礫も認められる。	10YR 7/4 に ぶい黄橙色	10YR 7/6 明黄褐色	ナデ、板ナデ、ユビナデ、ユビオサエ	ケズリ、ハケ、ナデ、ヘラミガキ	上げ底気味。底部に纖維・種子・小礫等の圧痕が残る。外面のヘラミガキは底部付近のみ。内面は器表の調整調著。	
400	A	第Ⅱ層	弥生土器	壺	下胴部～底部	－	(7.4)	－	8.5	微細砂粒および1mm大の砂粒を多量に含む。	7.5YR 6/6 橙色	7.5YR 7/4 に ぶい橙色	不明	ヘラミガキ	摩耗調著。平底。	
401	A	第Ⅱ層	弥生土器	壺	底部	－	(3.7)	－	(6.6)	1mm前後のチャート砂粒を少量含む。	2.5Y 6/2 灰黄色	7.5YR 7/4 に ぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ	平底。	
402	A	第Ⅱ層	弥生土器	壺	底部	－	(3.3)	－	(12.3)	1～2mm前後のチャート砂粒を多量に含む。	N 4/ 灰色	5YR 7/6 橙色	調品のため不明	ユビオサエ	平底。内面は摩耗調著で器表面が調落する部分が多い。	
403	A	第Ⅱ層下	弥生土器	壺	底部	－	(3.6)	－	8.2	2mm前後のチャート砂粒を多く含む。	2.5Y 7/2 灰黄色	10YR 7/3 に ぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ユビオサエ	わずかに上げ底気味の底部。	
404	A	Ⅱ層	弥生土器	甕	底部	－	(5.5)	－	5.6	1～2mm大の砂粒を少し含む。	10YR 7/4 に ぶい黄橙色	10YR 7/4 に ぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	平底。底部周縁は外方へ拡張。底部で一旦屈曲した後、胴部は立ち上がる。底部付近内面はヘラミガキで仕上げる。	
405	B	第Ⅱ層	弥生土器	壺	底部	－	(6.8)	－	12.2	1mm大前後のチャート砂粒を少し含む。	10YR 6/3 に ぶい黄橙色	10YR 5/3 に ぶい黄褐色	ユビナデ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	底面には凸凹があり、周縁は高台状に高まっている。内外面ともヘラミガキで仕上げる。	
406	C	第Ⅱ層	弥生土器	壺	口縁部	(23.1)	(2.2)	－	－	1～2mm大の砂粒を少量含む。	10YR 5/2 灰黄褐色	10YR 5/2 灰黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	口縁外面に断面三角形の微隆起帯を2条貼付する。口容は面をなす。外面にヘラ先状工具によるナデのため武線状の圧痕が残る。	

表5　遺物観察表（土器）18

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面	文様・形態・製作技法他	
407	C	第9	弥生土器	壺	口縁～頸部	19.2	(8.7)	－	－	0.5～1mm前後の砂粒を少量含む。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ハケ、ユビオサエ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ、ヘラミガキ	貼付口縁。口唇は面をなす。素口縁。	
408	C	第9	弥生土器	甕	口縁～上胴部	－	14.3	－	－	1～3mm大のナマコ砂粒をやや多く含む。	10YR 6/6 明黄褐色	10YR 6/4 にぶい黄橙色	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	頸部～上胴部内面全面にヘラミガキ。頸部は直立し、口縁はゆるやかに外反。口唇は丸みを帯びた面をなす。	外面に煤状炭化物付着。
409	C	第9 紅1	弥生土器	壺	上胴部	－	(7.3)	－	－	0.5mm前後の微細砂粒を多量に含む。1～2mm大の砂粒も少量あり。	10YR 3/3 暗褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	ユビナデ	ハケ、ユビオサエ、ナデ	認に微隆起帯をユビオサエで圧着。その際に爪形の圧痕をのこす。	
410	C	第9	弥生土器	壺	底部	－	(7.4)	－	8.7	1～3mm大の砂粒をやや多く含む。5～7mm大の小礫も混められる。	5YR 6/6 橙色	7.5YR 6/4 にぶい橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ヘラミガキ	底部の厚さは30mmを超え、内底中央部がへそ状に盛り上がる。平底で底面がナデによりシワ状になる。	
411	C	第9 上	弥生土器	壺	底部	－	(4.3)	－	9.5	1～2mm大前後の砂粒をやや多く含む。	2.5Y 5/1 黄灰色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ナデ、ユビオサエ	ユビオサエ、ユビナデ、ナデ	上げ底。底面にナデ、底部外面に穀を形成する。	
429	D	SB2（SK13）	土師器	坏	口縁～体部	（16.5）	(3.0)	－	－	胎土は精選されており、砂粒を1ミリ以上含まない。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ナデ	ナデ	口縁を強く外方へ折り曲げ、端部は丸く仕上げられる。口縁部内面に沈線が残る。内面のナデは底部付近より口縁部へ斜め方向に施される。	畿内産。8世紀中葉。
430	D	SB2（SK13）	須恵器	坏蓋	頂部	－	(1.7)	－	12.3	精選された胎土。微細砂粒を含むのみ。	5Y 7/1 灰白色	5Y 7/1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	頂部外面が凹状になる。	8世紀
431	D	SB2（SK13）	須恵器	坏蓋	頂部	－	(1.6)	－	13.6	精選された胎土。微細砂粒を含むのみ。	5Y 7/1 灰白色	5Y 7/1 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	頂部外面が凹状になる。	8世紀
432	D	SB2（SK13）	須恵器	坏蓋	頂部	－	(2.0)	－	－	精選された胎土。微細砂粒を含むのみ。	5Y 4/1 灰色	5Y 5/2 灰オリーブ色	ロクロナデ	ロクロナデ	頂端部下方へ拡張。	8世紀
434	D	SB3（P79）	土師器（長頸壺）	口縁部	（23.1）	(5.2)	－	－	0.5～3mm前後の砂粒を多く含む。	7.5YR 3/4 暗褐色	7.5YR 3/3 暗褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	頸部で接合なして屈曲。口縁は外上方へ立ちとがる。内面は横方向のハケ。頸部外面は縦方向のハケ。口縁はロクロナデで仕上げる。	摂令期の長頸壺。外面に煤状炭化物付着。
435	D	SB3（P78）	須恵器	坏蓋	頂部	－	(2.0)	－	－	精選された胎土。微細砂粒を含むのみ。	5Y 6/1 灰色	5Y 6/1 灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	頂部は下方へ拡張、外面は凹状を呈する。	8世紀中葉～後半
436	C	SB4（P326）	須恵器	甕	口縁～底部	（19.0）	1.8	－	（18.1）	1～2mm大の砂粒を若干含む。	2.5Y 6/2 灰黄色	2.5Y 6/2 灰黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	底部へラ切。口縁端部外方へわずかに拡張。	
437	C	SB4（P328）	須恵器	坏	底部	－	(2.0)	－	－	1～2mm大の砂粒を少量含む。	2.5Y 6/1 黄灰色	2.5Y 6/1 黄灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	ハの字状に開く高台の痕跡が確認できる。	
438	C	SB4（P329）	弥生土器	壺	底部	－	(5.4)	－	7.2	微細砂粒および1mm大の砂粒を少量含む。	2.5Y 5/2 暗灰黄色	10YR 6/3 にぶい黄橙色	ユビナデ、ユビオサエ	ヘラミガキ	底面に平行圧痕と指頭圧痕（ユビオサエ）残る。	弥生時代後期前半。SBを構成するピット・弥生時代遺物混入。
439	C	SK42	白磁	椀	底部	－	(2.2)	－	6.3	胎土 5Y 7/1 灰白色	5Y 7/2 灰白色	5Y 7/1 灰白色			高台は削りだして作出。断面逆台形でハの字に開く。内面見込みに胎土目。内面に施釉。圏線が残る。	12世紀 白磁椀B類。
440	C	SK76	土師器	甕（小甕）	完形	8.9	2.4	－	5.5	胎土は精選されており、砂粒を1ミリ以上含まない。	5YR 6/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	手づくねの甕。底面に平行圧痕残る。	中世前期
441	C	SK76	土師器	甕（小甕）	完形	9.0	3.1	－	6.0	胎土は精選されており、砂粒を1ミリ以上含まない。	5YR 7/6 橙色	5YR 7/6 橙色	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	手づくねの甕。底面に平行圧痕残る。	中世前期
442	C	SK76	弥生土器	壺	口縁部	－	(3.7)	－	－	1mm大の砂粒をやや多く含む。	5YR 7/6 橙色	5YR 6/6 橙色	ユビナデ、ナデ	ナデ、ヘラミガキ	直立した口縁部。口唇は丸く収める。	SBを構成するピット・弥生時代遺物混入。
444	C	SD2	土師器	椀	底部	－	(1.5)	－	(6.6)	胎土は精選されている。	10YR 8/3 浅黄橙色	10YR 8/3 浅黄橙色	不明	不明	高台は八の字状にわずかに開く。摩耗顕著で調整不明瞭。	11～12世紀。
445	C	SD2	白磁	皿	口縁部	（14.6）	(2.8)	－	－	胎土 5Y 7/1 灰白色	5Y 7/2 灰白色	5Y 7/2 灰白色			白磁の皿B類。端部は細く仕上げ、稜を受す。内外面に圏線。内面にハケ目。	12世紀 白磁皿B類。
446	C	SD23 相	土師器	椀	口縁～体部	14.8	(3.6)	－	－	胎土は精選されており、砂粒を1ミリ以上含まない。	10YR 7/4 にぶい黄橙色	10YR 7/4 にぶい黄橙色	ロクロナデ、ヘラミガキ	ロクロナデ	口縁はわずかに外反し、端部を丸く仕上げる。ロクロ目あり。	11～12世紀。

表5　遺物観察表（土器）19

図版番号	区	遺構層位	器種	器形	部位	法量（cm）				胎土	色調		調整		特徴 文様・形態・製作技法他	備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	内面	外面		
447	B	SD55	須恵器	坏	完形	12.8	3.8	－	9.0	胎土は精選されており、砂粒をほとんど含まない。	2.5Y 6/3 にぶい黄色	2.5Y 6/3 にぶい黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	底部ヘラ切。須恵器で還元炎焼成だが、軟質であり、一部酸化炎焼成のため黄橙色に発色する部分がある。	8世紀後半
448	C	SD-H	須恵器	坏	底部	－	(2.3)	－	7.6	胎土は精選されている。	10Y R 6/1 褐灰色	2.5Y 6/1 黄灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	断面逆台形の高台を貼付する。	9世紀
449	C	SD-H	土師器	羽釜	口縁部	(20.0)	(3.6)	－	－	褐色チャート砂粒を多く含む。砂粒の径は0.5～1mm前後。	10Y R 7/3 にぶい黄橙色	10Y R 7/3 にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁部は強いヨコナデによって仕上げる。口縁部外面に断面四角形で長さ2cmほどの鍔をもつ。チャート砂粒は多いが、角閃石や火山ガラスなど火山由来の鉱物は含まない。	10世紀。拠点型であるが在地産の可能性。
450	C	SD-H	土師器	羽釜	口縁部	(23.7)	(4.2)	－	－	微細砂粒を多量に含む。チャートを伴だが、ガラス質鉱物も確認される。3～5mm大の粗粒砂もある。	7.5Y R 5/3 にぶい褐色	7.5Y R 5/3 にぶい褐色	ユビナデ、ナデ	ハケ、ナデ	口唇は丸く仕上げる。口縁部外面に断面台形の鍔（長さ1.5cm）を貼付する。	10世紀。搬入品。拠点型
451	C	SD-H	土師器	甕	口縁～底部	10.0	2.0	－	7.0	胎土は精選されており、砂粒をほとんど含まない。	5Y R 7/6 橙色	Y R 7/6 橙色	ナデ、ユビオサエ	ナデ、ユビオサエ	手づくねの甕。	中世
452	C	SD-H	須恵器	椀	底部	－	(1.7)	－	6.0	精選された胎土。	10Y R 7/3 にぶい黄橙色	10Y R 7/3 にぶい黄橙色	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転糸切り痕。摩耗調著だが、ロクロ目は観察可能。軟質だが還元炎焼成だと考えられる。	12世紀?
453	C	SD-H	瓦質土器	風炉	脚部～上胴部	－	(6.8)	(13.8)	－	2mm大の粗粒砂を少量含む。0.2mmほどの微細砂粒を多く含み、ガラス質の微細砂粒も多い。	5Y 3/1 オリーブ黒色	5Y 3/1 オリーブ黒色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	胴部は大きく張り出す。張出は強く屈曲した後、若干内傾気味に立ち上がる。胴部外面に沈線により3重の弧文を施文。	中世・大和型瓦質土器
454	C	P149	土師器	坏?	底部	－	(1.8)	－	11.6	微細砂粒を若干量含む。	2.5Y 7/2 灰黄色	2.5Y 7/2 灰黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	内面不定方向のナデ。高台形状は断面四角形。底部ヘラ切。	8世紀
455	C	P463	土師器	椀	口縁～体部	(14.9)	(4.1)	－	－	精選された胎土。1mm前後の砂粒を若干量含むのみ。	7.5Y R 8/4 浅黄橙色	10Y R 8/4 浅黄橙色	ナデ	ナデ	椀状の体部。口縁はわずかに外反し、端部を丸く仕上げる。体部中位に稜あり。	12世紀
456	A	P488	土師器	坏	口縁部	－	(3.5)	－	－	精選された胎土。砂粒はほとんど含まない。	7.5Y R 8/4 浅黄橙色	10Y R 7/4 にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	ロクロ目がっきり残る。	中世前期
457	D	黒色シルト	土師器	甕	底面・墨書。焼文	－	－	－	－	精選された胎土。微細砂粒以外、砂粒はほとんど含まない。	2.5Y 5/6 明赤褐色	2.5Y 5/6 明赤褐色	ナデ、ヘラミガキ	ナデ	土師器甕の底面で、内面にヘラミガキによる焼文。外面に墨書文字が確認される。	8世紀。6cm×5cmの破片（底面）。
458	D	I-Ⅱ層	土師器	甕	完形	9.4	(2.3)	－	6.0	精選された胎土。	7.5Y R 7/4 にぶい橙色	7.5Y R 7/6 橙色	ロクロナデ	ロクロナデ	底部ヘラ切。口縁端部は丸く仕上げる。	10世紀中葉
459	D	I-Ⅱ層	土師器	椀	底部	－	(2.1)	－	6.8	精選された胎土。5mm大の小礫も認められる。	7.5Y R 7/4 にぶい橙色	7.5Y R 7/4 にぶい橙色	ナデ、ヘラミガキ	ナデ	断面四角形の高台。内面見込みに暗文状のヘラミガキ。	10世紀後半～末
460	D	I-Ⅱ層	須恵器	椀	底部	－	(2.2)	－	7.0	精選された胎土。	2.5Y 8/2 灰白色	2.5Y 8/2 灰白色	ナデ	ナデ	軟質の須恵器。高台は内面が肥厚する。	10世紀
461	D	TK3 包含層	須恵器	甕?	口縁～底部	(13.4)	(2.8)	－	(8.0)	0.5～1mm大前後のチャート砂粒をやや多く含む。	2.5Y 5/1 黄灰色	2.5Y 5/1 黄灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁はいったん外反した後、上方へ立ち上がる。	古代末?
462	A	第層	須恵器	貯蔵具（壺）	底部	－	(8.9)	－	(19.2)	精選された胎土。微細砂粒をやや多く、1～2mm大の砂粒を少量含む。	2.5Y 6/1 灰色	5Y R 5/2 灰オリーブ色	ユビナデ、ヘラナデ	ケタキ、ヘラナデ、ケズリ	須恵器の貯蔵具。外面にケタキ目が残り、底部外周にはケズリに伴う工具の圧痕が残る。	古代

表6　遺物観察表（石器）1

図版番号	整理番号	器種	石材	調査区	遺構・層名	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	特徴・備考
19	S 1	打製石包丁	頁岩	C	ST1ー①	11.7	5.1	1.4	(98.4)	平坦剥離により側縁に刃部を作出。左右両端には抉りを入れる。
－	S 2	敲石	砂岩	C	ST1　床面	19.4	7.2	5.2	1323.0	不整形の棒状楕円礫。端部・表裏面に敲打痕。
20	S 3	砥石・磨石・敲石・石石	砂岩	C	ST1　床面	21.3	15.2	3.5	－	うすく扁平な大型の砂岩円礫を素材とする。表面には擦痕が残り、わずかに凹状になる。裏面には中央部に敲打痕が残る。また、縁辺は敲打による剥離が認められる。
－	S 4	剥片	頁岩	C	ST1	6.2	0.6	0.4	5.2	使用に際して破損したものだと考えられる。
－	S 5	剥片	サヌカイト	C	ST1	3.3	2.2	0.1	2.9	サヌカイトの剥片。
21	S 6	石剣か	泥岩質の堆積岩が変成を受け扇状になっている	C	ST1	(4.8)	4.5	1.1	43.3	全面に擦痕が残る。先端・基部とも折損し、全体形状は不明。弥生時代の石剣の一部だと考えられる。
24	S 7	打製石包丁	緑色片岩	C	ST2　床面	(6.7)	5.1	0.6	46.0	板状の礫を素材とし、両側縁と端部を直接打撃により成形、一側縁を刃部とする。中央部で折損し、全体形状は不明。端部には抉りが入る。刃部、背部ともに直線的。
－	S 8	被熱赤変砂岩礫	砂岩	C	ST3　床面	6.9	5.4	5.2	197.0	被熱赤変部あり。
37	S 9	石鏃	サヌカイト	B	ST4	2.9	1.8	0.2	2.3	板状の剥片を素材とし、押圧剥離により刃縁を全周に作出する。刃縁を形成する剥離は縁辺にとどまる。素材剥片の剥離軸は、剥片の背面・腹面ではほぼ直交する。凹基であり、脚長は左右で異なっている。
38	S 10	剥片	サヌカイト	B	ST4	3.0	3.5	0.2	0.5	風化した微面を打面とした剥片で、背面と腹面で剥片剥離軸はほぼ直交している。剥片末端部は階段状。左辺・右辺ともに面をなす。石鏃の素材とすることを意図した目的的剥片である
39	S 11	剥片	サヌカイト	B	ST4	2.8	2.4	0.5	8.4	背面と腹面で剥片剥離軸は異なり、背面では2方向が確認できる。打面転移を繰り返したことがわかる。剥片末端部は階段状。左辺・右辺ともに面をなす。石鏃の素材とすることを意図した目的的剥片である。
40	S 12	剥片	サヌカイト	B	ST4	4.1	1.7	0.5	6.7	縦長剥片。
－	S 13	剥片	サヌカイト	B	ST4	3.2	4.5	0.6	11.1	横長剥片。
41	S 14	敲石	砂岩	B	ST4	11.3	2.4	1.6	86.6	棒状の円礫で両端にわずかに敲打痕が認められる。
42	S 15	軽石	軽石	B	ST4	8.4	5.2	5.0	35.8	使用痕等は観察できない。
52	S 16	磨製石斧（加工具）	酸性凝灰質頁岩	B	ST5	(5.1)	2.1	0.7	12.1	石材は白っぽく、粒子は細かい。酸性凝灰岩だと考えている。岩脈が入る。刃部周辺のみの研磨で刃部を作出する加工斧。刃部に接する側縁にも、研磨により面をつくり出す。
－	S 17	使用痕のある剥片	泥質片岩	B	ST5	5.9	4.3	1.0	26.0	不規則な微細剥離が認められる。
53	S 18	剥片	サヌカイト	B	ST5	2.9	2.1	0.7	3.6	石鏃の素材薄片。両側縁に対向する剥離が認められる。

表６　遺物観察表（石器）２

図版番号	整理番号	器種	石材	調査区	遺構・層名	全長（cm）	全幅（cm）	全厚（cm）	重量（g）	特徴・備考
78	S 19	磨製石斧	蛇紋岩（超塩基性岩）	C	ST6（ⅢSD24）	(6.1)	3.8	1.4	50.4	両刃の磨製石斧。研磨は刃部に限定される。側縁は通常の剥離および平坦剥離によって作出する。
79	S 20	磨製石斧素材	御荷鉾緑色岩	C	ST6（ⅢSD24）	17.6	6.2	3.9	811.0	敲石または磨製石斧の素材。厚みのある棒状礫を素材とする。
81	S 21	石核	珪質緑色片岩?	C	ST6　床面	8.2	6.0	2.3	168.0	扁平な分割礫を素材とし、打面を分割面に設定、周縁から剥片を剥離する。目的的剥片は小型の横長剥片である。
80	S 22	敲石	御荷鉾緑色岩	C	ST6（ⅢSD24）	12.7	5.2	2.0	216.8	2cmほどの厚みを持つ扁平な棒状礫を素材として選択。磨製石斧の製作を意図して、直接打撃により両側縁および端部を敲打、成形する。321など、同様な礫を選択、剥離箇所も同じものもある。
－	S 23	打製石器	砂岩	C	ST6（ⅢSD24）	8.5	5.1	1.7	125.0	周縁に剥離痕がめぐる。長方形の平面形状。
－	S 24	剥片	砂岩・泥岩が圧力変成を受け、層状の構造（片理）を持つ	C	ST6	11.0	7.7	1.0	115.0	土掘り具として使われた可能性もある。
－	S 25	棒状自然礫	層状の構造を持つ緑色岩系の堆積岩	C	ST6　肩	6.5	2.0	1.9	17.7	黒い岩脈（ベイン）の入った自然石。
－	S 26	端部に微細剥離の連続する礫	チャート	C	ST6Ⅲ層	11.5	5.4	3.2	234.0	使用された可能性もあるが、定形的な石器ではない。
－	S 27	砥面（擦痕のこる）がある砂岩剥片	砂岩	C	ST6　床面	2.8	1.1	1.0	3.7	砥石の剥片。
－	S 28	円礫	泥岩もしくはより硬質	C	ST6	5.4	4.3	0.4	10.6	きめの細かい砂岩である。
－	S 29	石片	結晶片岩	C	ST6　床面	5.5	3.2	1.1	27.3	剥片ではない。
－	S 30	石片	砂岩	C	ST6	5.3	4.1	1.6	31.9	褐色に発色する砂岩。
－	S 31	石片	頁岩	C	ST6	5.7	1.6	0.5	3.8	剥片ではない。
－	S 32	石片	砂岩?	C	ST6	4.7	2.0	0.4	4.2	剥片ではない。
200	S 33	磨製石包丁	頁岩	C	ST7（ⅢSK1）	(5.6)	5.3	0.5	(26.8)	両端が欠ける。全面に擦痕がのこる。紐孔は2孔。刃部は両刃で、背部にも研磨による面を作出。
201	S 34	台石	砂岩	C	ST7（ⅢSK1）	17.5	15.8	4.4	1843.6	中央部が皿状にわずかに凹み、敲打痕ものこるものの、明瞭ではない。作業台として使われた台石だと考えられる。
－	S 35	棒状円礫	砂岩	C	ST7	3.9	1.6	1.1	6.6	自然石。
211	S 36	磨製石斧（基部）	御荷鉾緑色岩	C	ST8	(13.2)	7.2	4.6	(945.2)	太型蛤刃石斧の基部か。刃部は折損のため形状不明。全面を研磨し、丁寧に仕上げられる。側縁および表裏面の境界には稜は確認できない。

表6　遺物観察表（石器）3

図版番号	整理番号	器種	石材	調査区	遺構・層名	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	特徴・備考
－	S 37	剥片	泥質片岩	C	ST8	3.9	2.4	0.5	6.1	片理が発達する。
－	S 38	剥片（敲石の使用に伴う）	砂岩	A	ST9	4.4	4.5	1.3	19.8	扁平な円形の剥片で、周縁に微細剥離がのこる。
212	S 39	軽石		C	ST8　床面	6.3	4.2	3.0	20.9	使用痕等は観察できない。
223	S 40	磨製石包丁	緑色岩系の層理が発達した石材が風化し、表面が白くなったものか？	A	ST10	8.1	3.8	0.6	(26.6)	扁平で薄いへラ状の素材から作り出す。風化により白っぽく発色する。片理の発達した緑色片岩系の石材である。紐孔は中央部に3孔のみ。片刃である。
224	S 41	磨製石器	泥質片岩	A	ST10　床面	(9.3)	(3.7)	1.3	45.8	破痕が確認される。磨製石器であり、石斧の可能性がある。折損のため全体形状は不明。側縁は剥離により検を形成する。また、その検には使用痕とみられるイレギュラーな剥離ものこる。
225	S 42	打製石器	結晶片岩	A	ST10　床面	(6.0)	(3.4)	0.9	14.1	一側縁に剥離を連続、刃緣を形成する。不規則な剥離であり、定型的な石器でない可能性もある。
226	S 43	（陰陽石－陰部形(自然石)	砂岩	A	ST10	13.8	11.0	7.3	1126.3	硬質の砂岩で、構成する砂粒の粒径は比較的大きく、粗い。自然石であり、加工の痕跡は全く認められない。ただし、住居(ST10)内には意図的に持ち込まれたものであり、同じ住居内から出土した自然石(227)とセットとなる陰陽石だと捉えている。ゴロッとした印象の不整円礫であり、割れ目部分（加工なし）を陰部とみたての陰石として祭祀行為に使用された可能性はあるものの、断定はできない。
227	S 44	（陰陽石－陽茎形(自然石)	砂岩	A	ST10	14.9	3.7	1.8	112.0	自然石であり、全く加工の痕跡は認められない。226（陰石）とセットで竪穴住居内から出土した陰陽石の可能性がある。
－	S 45	剥片	砂岩	A	ST10　P2	(6.7)	(5.1)	(1.4)	74.8	褐色に発色する。
242	S 47	使用痕の剥片	サヌカ仆	A	ST11(土キ4)	3.4	2.7	0.5	5.4	剥片の末端辺に、不規則に微細剥離が連続する。
－	S 48	自然石	砂岩	A	ST11(土キ4)	3.8	3.4	0.5	8.6	扁平な板状で、平面は不整円形。
243	S 50	磨製石包丁	砂岩	C	SK2	10.7	4.2	0.9	63.6	刃部は両刃で、直刃・直背、刃部の摩滅顕著。使用によるものと考えられる。側縁と背部に研磨により面を形成する部分がある。
244	S 49 S 51	磨製石包丁	極細粒砂岩	C	SK2	11.1	4.2	0.9	61.6	泥岩と細粒砂岩の中間、極細粒砂岩。黒い岩脈（ベイン）が入る。両刃の石包丁で、直刃・弧背。紐孔は2孔。
245	S 52	敲石	砂岩	C	SK3	10.2	(5.8)	3.7	413.0	扁平円礫を素材とする。被熱赤変部を持つ。表裏面及び周縁全周に敲打痕が認められる。中央で割れ、半分ほどが欠けている。
255	S 53	バチ状扁平円礫	砂岩	C	SK38	4.7	2.1	1.6	8.7	平面形バチ状で、厚25mm前後と薄く扁平な礫。側縁の一部が赤変している。明確な使用痕等は確認できない。土器づくり等何らかの用途で使用された工具の可能性があるが、いかなる用途に用いられたものか、はっきりと断定することはできない。
－	S 54	円礫（四角形）	砂岩	C	SK40	8.7	5.0	1.9	118.0	長方形の平面形を呈している。
256	S 55	扁平な棒状礫	砂岩?	C	SK41	4.3	1.1	0.6	2.6	長さ4.3cmの小型で細長い棒状扁平礫。明確な使用痕等は確認できない。土器づくりの際のヘラ状や牛等の作業のための原体ではないかと考えているが、断定はできない。

表6　遺物観察表（石器）4

図版番号	整理番号	器種	石材	調査区	遺構・層名	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	特徴・備考
257	S 56	砥石	砂岩	C	SK45	20.8	18.7	7.0	3428.3	定形で見事な砥石。表裏面3筒所ずつ、側面1筒所ずつ、計8筒所にわずかに凹状の砥面を形成する。また、端部と表面には敲打痕が残る。
－	S 57	剥片	砂岩	B	SK66	9.0	5.8	1.0	97.0	敲石として使用の際、生じた剥片か。
－	S 58	敲石	砂岩	C	SK70	16.1	6.4	4.5	613.0	棒状の礫素材・赤変・端部に敲打痕・炭化物付着
281	S 59	敲石	砂岩	C	SK70	11.5	2.8	2.6	159.9	断面四角形の角棒状礫素材の敲石。一面に敲打による凹状の痕跡多数。
282	S 60	軽石	軽石	B	SK70	7.3	6.0	4.1	34.4	使用痕等は観察できない。
283	S 61	小型棒状礫（自然礫）	砂岩	B	SK75	4.6	1.1	0.8	5.5	長さ4.6cmの小型で細長い棒状の自然礫。明確な使用痕は確認できない。土器・天目の磨のべラ状の道具か等の作業のための原体ではないかと考えているが、断定はできない。
284	S 62	磨製石斧（基部）	御荷鉾緑色岩	A	SK78	(9.8)	8.2	3.7	(604.2)	磨製石斧（大型伐採斧）の基部。刃部形状および全体形は折損のため不明。側縁と基部には成形のための敲打痕がのこり。側縁は研磨により面を作出する。
315	S 63	打製石鏃	サヌカイト	C	SD3	3.6	1.7	0.5	2.31	押圧剥離により刃縁を形成し、加工はほぼ全周を覆う。剥離は中央幾付近までのびる。左右対称で、短軸と長軸の比率がほぼ1対2の細長い形態。
316	S 65	砥石	砂岩	C	SD3-2（石列）	(8.3)	(7.1)	2.1	(255.7)	厚みのある板状の砂岩。砥石であり、表裏面と側面の3筒所に擦痕が残る。表裏面ともに凹状を呈している。一部、被熱による赤変が観察される。
317	S 67	台石	砂岩	C	SD3-2（石列）	24.0	21.8	8.5	6800.0	部分的に敲打痕がのこる。被熱赤変が認められる。作業台として利用された台石か？
318	S 66	砥石・敲石・台石	砂岩	C	SD3-2（石列）	24.0	13.0	9.4	5500.0	端部に敲打痕あり。全体的に被熱赤変。擦痕が観察される面があり、砥面が形成される。砥石・敲石・台石として利用されたものか。
319	S 82	敲石	砂岩（灰色で硬質）	C	石列	20.7	12.0	6.2	1995.0	不整形の砂岩。表面に擦痕、両端に敲打痕あり。片方の端部のみ被熱赤変
320	S 68	太型蛤刃石斧	緑色岩	C	石列横・黒シルト	14.4	6.5	6.6	605.6	太型蛤刃石斧。表裏面および側縁の一部に成形時の敲打痕があり、全面に擦痕が残る。基部と側縁には研磨により面を形成する。刃部は使用による摩滅のため、鈍くなっている。
321	S 46	敲石	御荷鉾緑色岩	A	ST11（SD59）	13.5	5.0	2.0	253.1	粒度は細かい御荷鉾緑色岩である。白い岩脈（ペイン）が入る。端部に敲打痕がある。端部に続く両側縁には直接打撃により生じた調整が認められる。扁平な棒状礫を素材とした石斧の素材。
－	S 69	自然石	砂岩	B	SD41	3.8	1.7	0.8	5.5	粗い粒子で、加工の痕跡なし。
－	S 70	剥片	泥質片岩	B	SD51	16.8	4.5	0.9	112.0	うすく、細長い長楕円形の平面形。周縁に微細剥離がのこる。
－	S 71	敲石	砂岩	C	P44	8.0	2.8	3.6	87.7	不整形の円礫の破片。敲打痕がのこる。
364	S 72	打製石包丁	頁岩	C	P132	9.8	4.5	1.0	70.0	石材は頁岩あるいは泥質砂岩。礫分割により形成された剥片の縁辺を刃部として利用した打製石包丁。刃縁には微細剥離（使用痕）が観察される。また背部と両側縁は通常の剥離および平坦剥離によって成形される。

表6　遺物観察表（石器）5

図版番号	整理番号	器種	石材	調査区	遺構・層名	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	特徴・備考
－	S 73	石片（破損の際に生じたかけらか?）	緑色岩系の石材	C	P149	4.2	4.1	1.3	21.4	破損の際に生じたかけらか?
365	S 74	敲石	砂岩	C	P217	8.9	3.9	3.4	106.0	粗い粒子の砂岩。端部に敲打痕あり。全体に赤変しており、被熱によるものだと考えられる。
366	S 75	打製石器（打製石包丁）	泥質砂岩	C	P462	(6.7)	6.4	0.9	61.9	黒い岩脈（ベイン）の入った砂岩と泥岩の中間のような片理の発達した堆積岩。泥質砂岩。直接打撃により刃縁を形成。
－	S 76	敲石	砂岩（きめの細かい）	C	P462	7.6	5.8	1.3	91.7	不整楕丸四角扁平円礫素材
－	S 77	磨製石器（破片）	頁岩	C	P462	5.9	1.1	1.1	7.0	磨製石包丁の可能性はあるが、破片のため詳細は不明。
－	S 78	石片	泥質片岩系	C	P462	7.0	2.1	1.6	35.9	片理が発達する。
－	S 79	円礫	砂岩	A	土器　5(F)	5.4	5.0	1.5	83.2	小型の扁平な砂岩円礫。使用痕等は確認できない。
380	S 80	（平坦調整で成形し刃部も作出するが、器種は不明）	砂岩	A	土器　6(G)	15.6	8.9	2.9	(453.1)	きめの粗い砂岩製の石器。平坦調整あるいは通常の調整により側縁を成形する。
388	S 81	礫石	砂岩	C	SD2	(17.7)	10.0	7.3	2299.0	断面四角形の、4面で研磨が確認される礫石。きめの細かい砂岩。被熱赤変し、黒化部分がある。
389	S 64	敲石	砂岩（褐色）	C	SD13	19.6	14.0	4.1	1990.0	扁平な楕円形の円礫素材。両端に敲打痕が残る。
390	S 83	打製石器	泥質砂岩	C	SD23	7.1	3.8	1.5	44.3	片理の発達した泥質砂岩（わずかに黒い岩脈が入る）。直背・直刃の打製石包丁。
412	S 84	磨製石鏃	泥質片岩	C	黒シルト	3.2	1.0	0.3	1.25	泥質砂岩あるいは頁岩の磨製石鏃。両側縁は面をなす。全面に擦痕が残る。
413	S 85	磨製石包丁	頁岩	A	北壁サブトレ	8.3	3.0	0.8	31.9	極細粒砂岩（近い石材（安井ラムの指摘）、硬質の砂岩（泥岩に近い）。背部に面を形成する。全面に擦痕が認められる。片刃の石包丁である。直刃・弧背。
414	S 86	磨製石包丁	酸性凝灰質頁岩	A	盛土	(3.2)	3.3	0.7	11.3	刃部はわずかに外湾する。両刃。折損のため全体形状は不明。石材は片理が発達し、白っぽい、酸性凝灰岩か?
415	S 87	磨製石包丁	泥質片岩?	B	試掘TR10	(6.1)	3.1	0.4	20.5	刃部はわずかに内湾する。両刃で、刃部以外も全面を整き、丁寧に仕上げている。片理の発達した泥岩質の石材。背部は少しだけ弧状であり、面を形成する。表面に敲打痕が残り、穿孔途上で中断した深さ1mmの孔が残る。紐孔は2孔。
416	S 88	磨製石包丁	泥質片岩	A	盛土	8.5	6.1	1.1	82.7	表裏面、側縁の抉入部ともに擦痕が認められる。刃部は弧状（外湾）で、背部は直線的。背部は部分的に面が形成される。両刃の磨製石包丁で、紐孔はない。片理の発達した泥質砂岩。
417	S 89	磨製石包丁	頁岩	C	黒シルト	(7.5)	3.8	0.9	(30.9)	3分の1程度欠ける。413と同じ石材で、片理の発達した極微細粒砂岩。表裏面に擦痕が残る。素材とする扁平な板状礫の形を整える過程で成形に失敗、部分的に割った後、放棄したものか、あら仕上げの製品として使用した後、破損したものかいずれか。
418	S 90	磨製石斧（基部）	御荷鉾緑色岩	B	黒シルト	(13.3)	6.7	3.3	(633.8)	磨製石斧の基部。厚みのある扁平な棒状の礫を素材とする。折損のため、刃部形状不明。全面に擦痕が観察され、側縁は面をなす。

表6　遺物観察表（石器）6

図版番号	整理番号	器種	石材	調査区	遺構・層名	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	特徴・備考
419	S 91	磨製石斧(基部)	御荷鉾緑色岩	A	Ⅲ層	(13.2)	7.2	4.6	(936.8)	磨製石斧の基部。厚みのある扁平な棒状の礫を素材とする。折損のため、刃部形状不明。全面に擦痕が観察され、側縁は面をなす。
－	S 92	磨製石斧(基部)	御荷鉾緑色岩	D	試掘TR2 Ⅱ･Ⅲ層	(9.9)	(7.4)	(3.9)	354.0	磨製石斧の基部だと考えられる。擦痕が観察される。割れており、全体形状不明。
－	S 93	磨製石斧(基部)	御荷鉾緑色岩	B	赤Ⅲ層	(10.5)	(6.0)	(3.4)	204.0	磨製石斧の基部。擦痕が残る。敲打痕もあり、敲石として利用された可能性もある。
420	S 94	磨製石斧(基部)	緑色岩	B	赤Ⅲ層	(9.0)	(6.1)	(4.1)	342.0	一部被熱赤変筒所あり。磨製石斧の基部か、側縁に敲打痕があり、敲石として利用された際の使用痕か、石斧成形時の加工痕か、いずれかだと考えられる。
421	S 95	削器(スクレイパー)	サヌカイト	A	Ⅲ層	12.8	5.4	1.2	(95.7)	一端に石鏃と同様の抉入部を持つ。抉入部分を基にすると、縦長の石鏃状石器(抉入石器)と見ることができる。素材剥片の剥離軸は背腹同一方向である。
422	S 96	削器(スクレイパー)	サヌカイト	A	Ⅲ層	6.9	8.7	0.7	42.3	剥片の末端近に、剥離を連続させ刃部とする。刃縁は弧状である。素材剥片の剥離軸は同方向である。
423	S 97	削器(スクレイパー)	サヌカイト	B･C	表採	6.1	4.0	0.9	27.0	サヌカイトのスクレイパー。両側縁を刃部として成形する。
－	S 98	使用痕のある剥片	泥質片岩	A	Ⅲ層	7.0	9.5	1.1	115.0	剥片末端2分の1の範囲に使用痕と考えられる剥離が連続する。土掘り用に使われた可能性あり。
424	S 99	打製石器	泥質片岩	A	Ⅱ･Ⅲ層	6.2	4.5	0.9	23.7	土掘り具の可能性あり。
－	S 100	打製石器･周縁加工あり	泥質片岩	A	Ⅲ層･ST10の上	8.1	8.8	0.7	131.0	円盤状。周縁に剥離痕あり。2次加工?使用痕?
－	S 101	打製石器	泥質片岩?	A	Ⅲ層	7.4	4.1	0.7	45.80	石材に片理発達。土掘り具の可能性。
－	S 102	使用痕のある剥片	砂岩	A	Ⅲ層	7.1	4.3	0.8	45.1	周縁に使用痕と考えられる剥片が連続する。
425	S 103	敲石	砂岩	A	Ⅲ層	(4.3)	5.9	4.7	260.9	硬質砂岩の敲石。割れて、楕円の円柱状となる。
426	S 104	磨製石斧未製品	緑色岩	A	Ⅲ層	12.2	4.5	2.8	307.7	両極打法による対向剥離が認められる。磨製石斧の未製品。
427	S 105	敲石	砂岩	C	Ⅰ･Ⅱ層	9.8	9.0	3.2	445.4	表裏面と側縁全周に敲打痕。表面は敲打により凹状になる。
－	S 106	敲石	砂岩	B	Ⅲ層	(6.7)	(4.6)	(1.7)	87.0	一部に敲打痕が残るが、明瞭ではない。
－	S 107	剥片	サヌカイト	A	Ⅲ層	(6.9)	3.3	1.3	37.8	厚さ1cm以上の剥片。
－	S 108	剥片	サヌカイト	A	Ⅱ･Ⅲ層	3.0	3.3	0.6	3.3	剥離方向は背腹同方向。縦長剥片。

表6　遺物観察表（石器）7

図版番号	整理番号	器種	石材	調査区	遺構・層名	全長（cm）	全幅（cm）	全厚（cm）	重量（g）	特徴・備考
－	S 109	剥片	サヌカイト	A	Ⅲ層	3.0	2.1	0.1	4.0	縦長剥片。
－	S 110	剥片	頁岩	A	Ⅲ層	—	—	—	2.1	特記事項なし。
－	S 111	剥片	砂岩	A	Ⅲ層	—	—	—	37.7	特記事項なし。
－	S 112	剥片	砂岩	A	Ⅲ層	8.1	4.4	1.7	53.8	使用に際して生じた剥片。
－	S 113	剥片	砂岩	A	Ⅲ層	9.4	6.8	2.0	148.0	円礫素材の敲石使用時に剥離したもの。
－	S 114	剥片	泥質片岩	A	Ⅱ-Ⅲ層	8.5	5.6	0.9	92.6	片理発達。うすい板状の剥片。
－	S 115	剥片	御荷鉾緑色岩	A	Ⅱ層	—	—	—	14.1	石器製作の際生じた剥片か。
－	S 116	剥片	緑色岩	A	Ⅲ層	7.0	3.8	0.8	33.3	使用に際して破損したものだと考えられる。
－	S 117	被熱赤変円礫	砂岩	B	Ⅲ-Ⅳ層	8.3	5.8	3.8	143.0	被熱した円礫。使用の痕跡は不明。
－	S 118	扁平	緑色片岩	B	Ⅲ層	(7.1)	(4.7)	(1.7)	63.7	扁平な棒状礫だったと考えられるが割れており、全体形状不明。石器素材として持ち込まれた可能性がある。
－	S 119	石器素材	泥質片岩	A	Ⅱ-Ⅲ層	7.9	3.6	1.3	50.5	板状に割れている。
428	S 120	石器素材	緑色片岩	A	Ⅲ層・ST10の上	(13.9)	10.4	3.9	(615.8)	板状の緑色片岩で、端部と側縁に敲打による剥離が認められる。
－	S 121	板状自然石	泥質片岩	D	SB(SK13)	5.1	3.7	0.5	13.9	古代の掘立柱建物から出土。
433	S 122	軽石	軽石	D	SB(SK13)	6.6	4.3	4.0	10.6	古代の掘立柱建物から出土。
443	S 123	砥石	砂岩	C	SK100・101	8.8	5.1	3.2	177.0	砂粒を含む泥岩。4面を砥面として利用する砥石。鉄製品の研磨等金属に利用したと考えられる。

体験学習

体験学習

現地説明会

北地遺跡とその周辺の地形（航空写真）

第Ⅳ章　自然科学分析

野市町北地遺跡出土金属製品の成分分析結果

（株）吉田生物研究所

1．はじめに

野市町に所在する北地遺跡から出土した金属製品１点について、以下の通り成分分析を行ったのでその結果を報告する。

2．資料

調査した資料は表１に示す金属製品１点である。

表１　調査資料一覧

No.	遺物名
1	銅鏡

3．方法

資料本体に蛍光Ｘ線を照射して分析した。分析装置は、理学電機工業（株）製の全自動蛍光Ｘ線分析装置 3270E（検出元素範囲Ｂ～Ｕ）を用いた。

4．分析結果

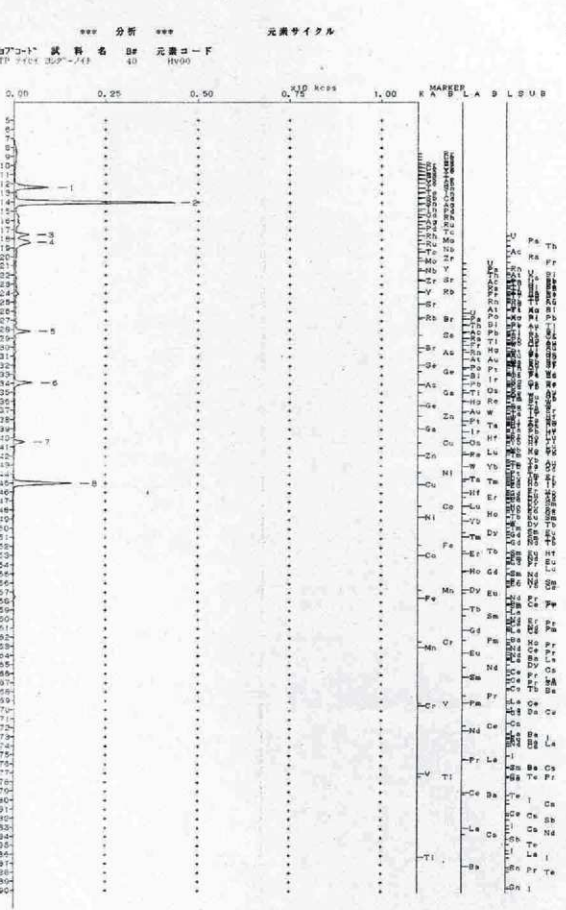
成分分析結果のスペクトルを付す。金属成分としては Sn,Cu,Pb が検出されている。Al,Si,P,S などは土壌に由来する成分と思われる。よって表２に分析結果一覧を示すが、その数値はあくまで参考にすぎない。

表２　成分分析結果表（単位は含有%）

元素	No.1
Al	3.9
Si	3.0
P	0.67
S	0.53
Cu	18
Sn	66
Pb	8.1

*** 分析 *** 元素サイクル 2005-03-02 1

T# ｼｮｯﾄｺｰﾄﾞ 試料名 B# 元素コード
1 STP ﾌｨｸｽ ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞ 40 Hv00



第Ⅴ章　まとめ　－北地遺跡　集落の変遷－

北地遺跡の今回の調査範囲からは弥生時代から近世にかけての遺構と遺物が確認された。遺物により特定できた主な時期は、⑴弥生時代前期末～中期初頭、⑵弥生時代中期前半、⑶弥生時代中期中葉、⑷弥生時代後期前半～中葉、⑸古代（奈良～平安時代前期・８～10世紀）⑹古代から中世への移行期（平安時代後期･10～11世紀）、⑺中世前期（平安時代後期～鎌倉時代･12～13世紀）、⑻中世後期（室町時代・14～15世紀）、⑼近世（江戸時代後期・19世紀）の各期である。これ以外の時期の遺物は確認されていない。ただし、上述の⑹以降の時期は、遺構･遺物とも大きく減少、⑻⑼の時期には、ほとんど認められなくなる。

これらの９時期をまとめ、

Ⅰ期　⑴～⑶の弥生時代前期末から中期前半にかけて

Ⅱ期　⑷弥生時代後期前半～中葉

Ⅲ期　⑸～⑺の古代から中世前期にかけて

の大きく３つの時期に分けて、調査成果をまとめる。

なお、今回の調査で空白の時期あるいは出土遺物の極めて少ない時期は、①弥生時代前期後半以前（前期末よりも古い時期及び旧石器・縄文時代）、②弥生時代中期後半から後期初頭の時期、③弥生時代後期後半から７世紀にかけての時期、④14世紀以降の４時期である。遺跡の調査対象地は調査前までは水田として耕作されていた。

Ⅰ期　弥生時代前期末～中期中葉

⑴ 遺構

弥生時代前期末の特徴である多条化したヘラ描沈線を持つ土器は出土しているものの、Ⅱ様式古段階･中期初頭のクシ描沈線を持つ土器と共伴する例が多く、確実に前期末といえる遺構は少ない。遺構は大きく前期末～中期初頭（中期Ⅰ－１期・Ⅱ様式古段階併行）、中期前半（中期Ⅰ－２期・Ⅱ様式新段階併行）、中期中葉（中期Ⅱ－１期・Ⅲ様式古段階併行）の３時期に分けられる。[1]

前期末の遺物のみが出土した遺構　　土坑 SK63

中期初頭の遺構　　竪穴住居 ST3･11、土坑 SK11、溝 SD3/SD3-2

中期前半の遺構　　竪穴住居 ST10、土坑 SK2･31･50･82、

中期中葉の遺構　　竪穴住居 ST4･5･6、土坑 SK70、

中期前半から中葉にかけての遺構　　竪穴住居 ST8、土坑 SK25･66･68･83･85･87

⑵ 遺物　　弥生土器（中期前半の良好な遺構出土資料）

弥生土器の良好な遺構一括資料が得られた。特にⅡ様式古段階の ST11･SK11、Ⅱ様式新段階の SK50、Ⅲ様式古段階の SK70 など一括性が高く、まとまった資料である。ヘラ描沈線も一部残り、竹管状原体による双線や扁平な刻目粘土帯での加飾、簾状文登場以前のクシ描沈線の段階（中期初頭）から、クシ描簾状文が登場し直線文・波状文などを組み合わせたクシ描沈線による加飾が進む

第109図　物部川下流左岸段丘上の遺跡

段階（中期前半）、クシ描簾状文が細かく繊細になり、壺の頸部が伸びてくる段階（中期中葉）への変化を確認することができる。器種構成は、壺・甕・鉢・蓋であり、壺の比率が高くなっていく。主な器種は壺と甕で、鉢・蓋は認められるものの少量である。

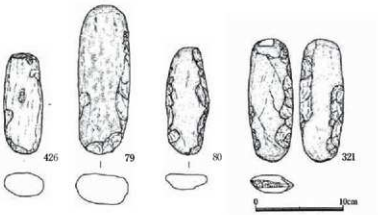
２点出土した糸を紡ぐために使われた土器片転用紡錘車もこの時期の所産である。うち１点からは４条のヘラ描沈線が確認されている。

(3) 北地遺跡での石器製作と弥生時代中期前半の祭祀（陰陽石）

また、出土した石器類から遺跡の性格に関わる重要な知見も得られた。一つは当遺跡で石器製作が行われたことを示す石器類の出土であり、もう一つは中期前半の竪穴住居内床面から出土した祭祀の可能性を示唆する石器類の出土である。

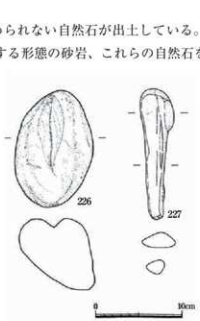
石器製作については、ST4 出土のサヌカイトの石鏃及び剥片の存在から推定できる。ST4 は竪穴住居ではなく竪穴建物あるいは竪穴状遺構ではないかとも考え得る遺構で、規模・形態について十分把握し切れていない。ST4 は、同時期の竪穴住居 ST5 に隣接している。出土したサヌカイト剥片は、背面・腹面の剥片剥離軸（方向）が異なっており、打面転移を繰り返しながら目的的剥片を獲得したことがわかる。共伴する石鏃の剥離軸も同様であり、これらサヌカイト剥片は石鏃の目的的剥片だと考えられる。この空間で石鏃製作が行われていた可能性が高い。[2]

中期初頭の SD3-2（石列状遺構として検出）周辺や中期中葉の竪穴住居 ST6 さらには包含層中からも磨製石斧（太型蛤刃石斧）が出土している。御荷鉾緑色岩および緑色片岩（緑泥石片岩）を素材としており、完形品・刃部破損品・刃部破損品の再加工品・未製品など様々な工程の資料が出土した。磨製石斧の生産に関わる遺跡については、各地で調査事例が蓄積され、まとめて生産する遺跡の例も報告されている。[3] 当遺跡では、緑色岩系の石材が全て磨製石斧しかも太型蛤刃石斧に限定して選択されている。緑色岩系の石片も出土している。磨製石斧関連の遺物は図示していないものも含め、総数 20 点に達する。棒状の原礫の基部や側縁に敲打痕が残るものについては、磨製石斧未製品と捉えて間違いないだろう。当遺跡での石斧の流通は製品(完成品)の形をとった場合もあるかもしれないが、遺跡内からの未製品の出土を根拠に、原礫の状態で採取してきたものを遺跡内で加工し、製品化したものだと考えている。北地遺跡では太型蛤刃石斧の製作が行われていた。



第 110 図　磨製石斧未製品
（弥生中期　79・80-ST6、321-SD59、426－包含層）

ST10（Ⅱ様式新段階）からは加工の痕跡の全く認められない自然石が出土している。ごろっとした砂岩円礫で割れ目を持つ石と、棒状で一端が肥厚する形態の砂岩、これらの自然石を陰陽石だと考えている。前者が陰部を象ったもので、後者が男根を象ったもの、竪穴住居の床面から出土したものであり、縄文伝統の石棒を使った祭祀に通ずる何らかの祭祀行為が行われたのではないかと考えている。弥生時代の住居内で陰陽石がセットになった事例については、現段階で確認できていない。この２点の自然石が陰陽石であるかどうかについては、さらに慎重に検討していかなければならない。もしそうであれば、注目すべき祭祀事例といえるのではないだろうか。[4]



第 111 図　祭祀に用いられたと考えられる陰陽石
（弥生時代中期前半の竪穴住居跡 ST10 出土）

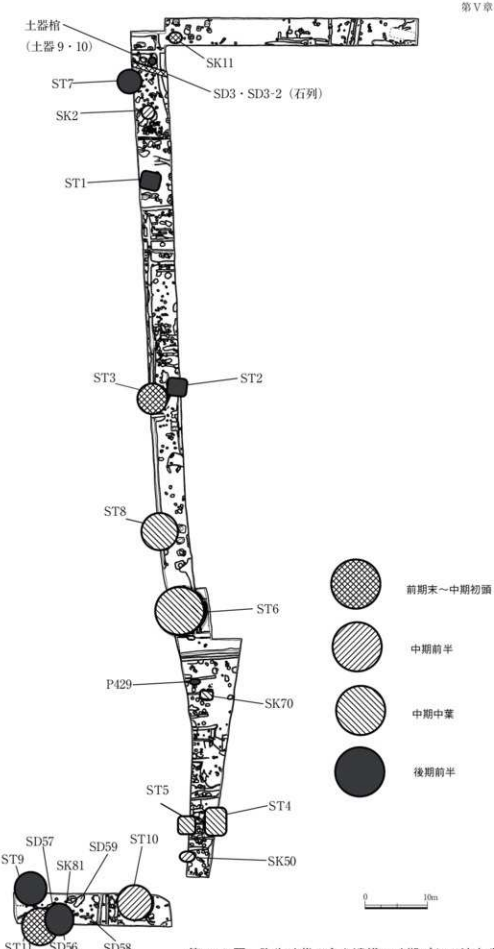
包含層出土だが、１点磨製石鏃が出土している。有茎式であり、田村遺跡群２次調査の際に出土した遺構出土資料の報告によれば、前期末の段階ではほとんどなくなるタイプの磨製石族であり、田村遺跡以外ではほとんど出土例のない遺物である。田村遺跡との関連が推察される。

(4) 弥生時代前期末～中期中葉の北地遺跡の様相

土器が確認できるのは前期末（田村編年前期Ⅱ－ｂ期・大篠式新段階・Ⅰ様式新段階併行期）からであり、少ないながらも遺構の形成も認められるなど、当遺跡の領域が集落の活動範囲となっていたことがわかる。前期末の段階では集落の中心とはなっておらず、当該期の土器片が大量に出土した、遺跡南隣の上岡遺跡や北隣の西野遺跡群などに集落本体は形成されていたと考えられる。

中期初頭から中葉にかけて、特にⅡ様式併行期の遺構は畿内・中四国周辺でも少なくなる。高知平野では、当該期の遺構が確認されることも今まではほとんどなく、高知平野の拠点的集落田村遺跡群においてさえ遺構も僅少、竪穴住居など集落の実態は把握されていない。県内でⅡ様式段階の竪穴住居の例は、田村遺跡群第１次調査の際に検出された１例（Loc.34A ST1）のみ、しかもこの例は中期中葉の可能性があると指摘されており、Ⅱ様式古段階から新段階にかけての竪穴住居の確実な例は、県内にはほとんどない。[5]（香南市香我美町下分遠崎遺跡は例外で、大量の土器や豊富な自然遺物等貴重な調査成果が得られている。ただし、下分遠崎遺跡においても竪穴住居は確認されておらず、集落内の居住域はよくわかっていない。）そういう状況下において、今回、竪穴住居６棟をはじめ、この時期の遺構がまとまって確認され、遺跡内で居住域の変遷をたどることが可能な資料が得られたことは、特筆に値する。

遺跡内の居住域は、調査範囲の南、Ａ区からＢ区にかけての範囲とＣ区北半からＤ区西端にかけての２箇所にある。ＡＢ区ではST11 → ST10 → ST4･5･6 と南西から北東方向へ竪穴住居を移している。Ｄ区西端やＣ区北半では中期初頭の竪穴住居とともに土坑（SK11）や溝（SD3･SD3-2）が検出されている。今回の調査範囲から集落の全貌を把握することは困難だが、同一時期の住居密度



第112図　弥生時代の主な遺構の時期ごとの地点分布

から、前期末～中期中葉の北地遺跡は小規模な集団が生活するムラであり、少数の竪穴住居が点在する集落景観を想定することができる。

この時期（中期中葉）、兎田八幡宮の絵画銅剣（重要文化財・細形銅剣a類）が青銅祭器として中部瀬戸内経由で、この地域に持ち込まれたと考えられている。北地遺跡あるいは下分遠崎遺跡の集団が絵画銅剣に関わっていた可能性もある。

周辺の遺跡で出土する同時期の遺物、中でもⅡ様式新段階の指標としている「クシ描簾状文」の分布範囲を考慮すれば、集落は北方向ではなく、南方向（上岡遺跡や南国バイパス・国道55号線周辺）に広がっていた可能性が考えられる。[6] また、遺跡の東隣は旧野市町による試掘調査の結果、遺構・遺物とも確認されておらず、集落の東側への広がりは北地遺跡の範囲までに限定される。ただし、周辺の出土遺物は僅少であり、当該期集落の様相解明には今後の発掘調査を待たなければならない。

Ⅱ期　弥生時代後期前半～中葉

⑴ **遺構**　遺構の時期はほぼ全てがⅤ－２・３期である。

竪穴住居　ST1･2･7･9

土坑　SK6

土器棺墓　土器9･10

その他の遺構　P429

小型の竪穴住居ST1･2と中型の住居ST7、床面が乱れ実態が不明瞭なST9がある。ST1からは青銅鏡の破鏡が出土し注目される。小型の竪穴住居の性格については、検討を要する。周溝も検出されており竪穴建物であることは間違いないが、「住居」であったかどうか、また、どういう性格の建物であったのか、今後の検討課題である。

⑵ **遺物**　Ⅴ－２・３期の土器がまとまって出土した竪穴住居ST7出土遺物は注目される。

器種組成の中で、壺、特に長頸壺の占める割合が高いことが特徴で、タタキ目を丁寧に消す土器群とタタキ目を多く残す土器群とに分けて捉えることができる。壺は、長頸壺以外に首の短い広口壺がある。後続するⅤ－４期の深渕遺跡ST3の土器やタタキ目が顕在化するヒビノキ式（Ⅰ･Ⅱ式）土器と較べると、タタキ目の残存は少ない。

土器棺墓は壺と大型の鉢によって構成され、中には高坏が入っていた。下ノ坪遺跡の土器棺墓と類似、終末期に盛行する土器棺とは様相が異なっている。

ST1床面から青銅鏡の破鏡が出土している。直径は復元すると10.2㎝、外区の厚さは0.6㎝、内区の厚さは0.2㎝、内区は僅かしか残っていないが、獅目文が確認される。青銅鏡の正確な鏡式は不明だが、鋳あがりや色調から中国鏡であり、漢代に属することがわかっている。

⑶ 弥生時代後期前半の北地遺跡の様相

この時期に下ノ坪遺跡はじめ北地遺跡周辺の弥生時代集落は最盛期を迎える。しかし、直後の時期（後期後半）に集落本体は北方（深渕遺跡・西野遺跡群）へ移動、下ノ坪遺跡・北地遺跡・上岡

第113図　高知県出土の弥生時代の鏡（『野市町　北地遺跡　記者発表・現地説明会資料』より転載）

遺跡・上岡北遺跡の領域には、遺物や遺構の痕跡が全くなくなる。

後期前半は出原編年の後期Ⅱ期・Ⅴ－２・３期である。弥生時代後期をⅠ・Ⅱ・Ⅲ期の３区分し、後期初頭がⅠ期（Ⅴ－１期）、前半～中葉がⅡ期（Ⅴ－２～４期）、後半がⅢ期（Ⅴ－５～７期）である。Ⅱ期はさらに３区分され、Ⅱ－１期、Ⅱ－２期、Ⅱ－３期とされ、各期にⅤ－２～４期が対応する。Ⅴ－５はヒビノキⅠ式土器、Ⅴ－６･７にはヒビノキⅡ式土器が対応する。

遺構から出土するⅤ－２期とⅤ－３期の遺物を弁別することが困難な場合もあり、本報告中ではⅤ－２・３期という表現を多用している。

今回の調査では、後期に該当する土器は、ほぼ全てⅤ－２・３期にあたり、前後の時期Ⅴ－１期やⅤ－４期の遺物は、ほとんど含まれていない。Ⅴ－４期は、深渕遺跡ST3を標識遺跡とする時期であり、銘々器としての小型の鉢が、器種組成の中で一定の割合を占めはじめる時期である。北地遺跡の東隣の下ノ坪遺跡では、このⅤ－４期の竪穴住居が存在するが、北地遺跡には全くなくなる。

この時期の集落内での遺構配置は、Ｃ区北端に土器の集中するベッド状遺構を持つ竪穴住居(ST7）が１棟、Ｃ区中央付近に小型の竪穴住居（ST1・2）が２棟、南端のＡ区に床面形状が乱れた竪穴住居(ST9)が１棟、全域で４棟の竪穴住居と完形の壺が出土したP429、そしてST7の近く(約４ｍ離れた地点）には土器棺墓が形成される。ST7出土土器は合計1,500点以上、今回の調査で出土した土器の10パーセント近くの土器が、この遺構から出土したことになる。

田村遺跡群や下ノ坪遺跡の報告書中には、この時期南四国を襲った大洪水に関する記述が認められる。[7] 遺構が砂層やシルト層で覆われるという所見を元に、洪水についての推察が進められている。北地遺跡の発掘調査を担当した更谷大介も同様のことに言及、遺跡の居住地点変更の大きなインパクトになったのではないか、と論述している。[8] きわめて重要な視点であり、集落の水没が集落移動の契機となった点は十分考えられることである。居住域の選定には環境変化は一定の役割を果たす。ただ、下ノ坪遺跡から北地遺跡への集落移動はなかったのではないか、ということが出土遺物整理作業を通じて得られた結論である。下ノ坪→北地という出土遺物の先後関係は認められず、逆に北地遺跡から遺物がほとんど確認されなくなったⅤ－４期になっても、下ノ坪遺跡には竪穴住居が残る。このエリアの後期前半（Ⅴ－２・３期）においては、同時期に上段と下段の段丘面に双方に竪穴住居が点在する集落景観だったのだろう。洪水をきっかけにした集落移動があったとすれば、より北方の深渕・西野遺跡群が、その移転先だったのではないかと考えている。

竪穴住居（あるいは竪穴建物）ST1は１辺２～３ｍの小型の住居で、床面から青銅鏡の破鏡が出土している。青銅鏡は田村遺跡群の過去２回の大規模調査の際に３点、仁淀川下流域の西分増井遺跡の調査時に２点、高知市介良遺跡から出土している。[9] この時期の威信財として青銅鏡の「破鏡」は重要な意味を持っていた。この破鏡の正確な鏡式は不明だが、舶載鏡（中国鏡）である。また、この青銅鏡には表裏面ともに赤色顔料が付着している。断面や裏面の剥離痕にも、赤色顔料は付着しており、割れた後、破鏡となってから付着したことがわかる。その点にも注意が必要である。

西野遺跡群（ルノ丸南Ａ地区）からは銅矛の再加工品など、特異な青銅製品も確認されている。ST1出土破鏡（漢鏡）は、青銅祭祀最終段階にあった高知平野弥生社会の様相の一端を示す重要な資料である。

Ⅲ期　古代～中世

全体の遺物出土量の中では、３％以下だが、個々の遺物には重要な情報が含まれている。古代の掘立柱建物を中心に遺構も確認されている。先述の、⑸古代（奈良～平安時代前期・８～10世紀）、⑹古代から中世への移行期（平安時代後期・10～11世紀）、⑺中世前期（平安時代後期～鎌倉時代・12～13世紀）の３時期については、量的には少ないが、まとまった資料が得られている。

古代（奈良～平安時代前期）８世紀～９世紀

⑴ **遺構**　掘立柱建物 SB2･3･4

SB3（８世紀中葉）→ SB2（８世紀中葉～後半）→ SB4（９世紀前半）

⑵ **遺物**　８世紀代の遺物としては、土師器の煮炊具（甕）、供膳具（坏･皿）、須恵器の貯蔵具（甕）、供膳具（坏･蓋）が出土している（429 ～ 435）。９世紀の遺物は須恵器の坏･皿（436･437）である。

SB2 出土の土師器坏（429）は、畿内からの搬入品である。[30] 口縁内面に沈線を持ち、体部内面に口縁部方向へ逃げるナデが観察される。内面沈線が退化する段階の畿内産土師器であり、８世紀中葉から後半にかけての遺物である。SB3 出土の須恵器蓋は、下ノ坪遺跡 SK30 段階の資料であり、SB3 は SB2 にわずかに先行する。SB4 出土須恵器皿は、９世紀の初めに比定される遺物である。

土師器・皿底面（457）「凡（?）□」

447「上福」

剥落部分

457「凡？□」

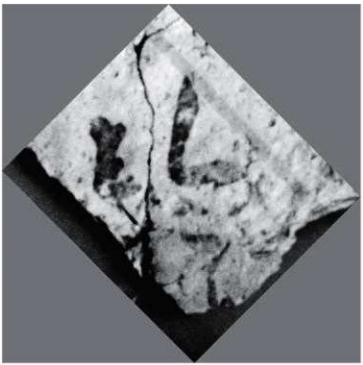
剥落部分

読み取り例１　読み取り例２

第 114 図　墨書実測図（S＝1/1）

須恵器・坏底面（447）「上福」

赤外線で確認した墨書



土師器・皿底面（457）「凡（?）□」

須恵器・坏底面（447）　原寸大

第 115 図　墨書赤外線写真と墨書須恵器底面画像

※墨書土器

墨書土器が2点確認されている。いずれも8世紀の遺物で、8世紀中葉前後の時期に位置づけられる。高知県内で出土した墨書土器は類例が少なく、特に8世紀代の資料はほとんどないという点においても注目される資料である。

墨書が確認された遺物は須恵器坏（447）と土師器皿（457）で、いずれも墨書は底面に認められる。447は東西方向の溝（SD55）から出土したもので、底面の墨書は「上福」と読み取ることができる。「上福」という言葉は吉祥句であるというご指摘をいただいた。457はD区の包含層から出土した。内面に暗文が施されている。墨書文字の正確な特定はできない。2文字あることは確認でき、1文字目は「凡」（オホシ）である可能性がある。文字の左右が大きく離れるのは、8世紀よりやや古い時期に多いようだが、「凡」の特徴が現われている。「凡（オホシ）の場合、続く文字が「直」（アタイ）である場合が多いが、2番目の文字を直と読み取ることはできず、「凡？□」としておきたい。[31]

⑶ 奈良～平安時代かけての北地遺跡の様相

この時期の北地遺跡には、段丘下段の下ノ坪遺跡[32]の機能を補完する役割があったのではないか、と考えられている。下ノ坪遺跡は官衙関連だと考えられるコの字型配置の倉庫群が見つかった遺跡であり、「郡津あるいは郡司物部連氏の私的な津」など遺跡の性格について検討が加えられている[32-2]。今回の調査では、下ノ坪遺跡と同様の一辺1m前後の方形ピットを持つ掘立柱建物が3箇所（SB2～4）から確認されている。掘立柱建物は一部のみの検出にとどまり、全体像はわからない。

小破片で図示はできていないが、製塩土器と赤彩土師器も出土している。出土遺物の量は少ないものの、搬入品である畿内産土師器や墨書土器の存在も併せて、これらの遺物と方形ピットを持つ掘立柱建物の存在からも、隣接する段丘下段の下ノ坪遺跡と同じ性格を持つ一連の遺跡だったことが分かる。

この地点での遺構と出土遺物から、8世紀中ごろから9世紀前半ごろまでの存続は確認できるが、それ以降、連続する時期の遺物はほとんど出土していない。

なお、今回の調査で、東西方向と南北方向に走る規格性を持った溝が検出されている。調査された溝の大半が同じ方向に走り、ほぼ直行する。遺跡周辺において行われた計画的な地割りによる溝で、現在の土地区画にも痕跡をとどめている。溝の方向は香長条里と比較すると方向が5～7°ほど西に傾いている。調査担当者は、条里制に関連する溝である可能性について指摘している。[33] 本報告では十分な検討ができなかったが、重要な指摘であり、今後検証していかなければならない課題である。

古代から中世へ（10～11世紀）

律令制の崩壊過程において、調査地点から遺物は減少、9世紀の後半から10世紀の中葉にかけての遺物はほとんどなくなる。458や459は10世紀後半の皿と椀であり、包含層出土遺物である。10世紀後半から続く11･12世紀にかけては、遺物が少量ではあるが確認されている。

中世前期（12～13世紀）

SK42から、11世紀後半から12世紀にかけての時期に比定される白磁Ⅳ類が出土している。白

磁は包含層からも出土しており、当該期の建物の存在も予想されるが、復元することはできなかった。

12 世紀の土師器小皿が方形の遺構（SK76）から出土している。同時期の遺物として、包含層や遺構中から、糸切り底の底部、輪高台の底部など土師器の底部小片が出土している。

中世後期以降（14 世紀以降）

ほとんど出土遺物がなくなり、集落内の居住域ではなくなった段階である。その中で、19 世紀の備前・陶磁器類、砥石、瓦が確認された SK100･101 については報告した。これ以外に 14 世紀以降だと確認できる遺構はない。

出土遺物の中で注目されるものは、包含層出土の大和型瓦質土器（第 107 図－ 453）である。上胴部に重弧文を持つタイプで、県内では、四万十川下流域の坂本遺跡[34]や仁淀川下流域の上ノ村遺跡からの出土例が知られている。一般の中世遺跡から普遍的に出土する遺物ではないが、特別な役割を持つ遺跡から出土することは珍しくないようだ。[35] 坂本遺跡は四万十川と中筋川の合流点近く、上ノ村遺跡は仁淀川と波介川の合流点近くに立地する遺跡で、遺跡の性格自体は異なるが河川交通の上から似通った場所にある遺跡だといえる。中世の北地遺跡も物部川下流域で特異な役割を担っていたのかもしれない。

上空から見た北地遺跡（平成 15 年）

おわりに　～北地遺跡周辺　弥生時代集落の変遷～

北地遺跡の調査成果は、高知平野の弥生時代社会復元へ向けて、いくつかの新たな事実を検討材料として提供した。また、従来考えられてきた通説を追認・補強する資料も数多い。中期前半から中葉にかけての集落は、資料の少ない時期にデータとして貴重なものだし、後期前半の竪穴住居出土の後漢鏡（破鏡）は、新たに発掘調査で確認された青銅器として注目を集めた。古代以降についても、８世紀の墨書土器をはじめ、大型の掘立柱建物など、奈良～平安時代の下ノ坪遺跡の官衙機能が、段丘上段でも確認できたことは大きな成果である。

弥生時代については、周辺の遺跡と比較により、遺跡の様相をある程度までは追求できるようになってきている。一つの遺跡の調査結果だけではわかり得ないダイナミックな集落の変遷が、仁淀川から物部川にかけての「高知平野」という小地域をフィールドとして詳細に描き得る状況になってきたことに、昔日の念を禁じ得ない。昭和50年代後半の第１次田村遺跡群の調査以来蓄積されてきた1000棟に近い竪穴住居の調査事例が、それを可能にした。田村遺跡群では合計600棟におよぶ竪穴住居はじめとする遺構群の分析により、集落内での構造・変遷が見事に描き出されている。[16]

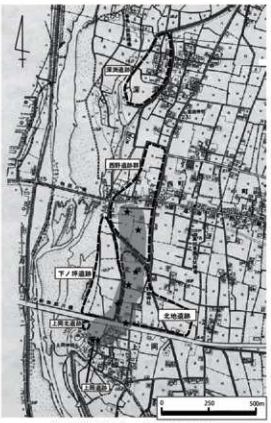
しかし、1000棟に達しようかという住居調査例の中でさえ、第Ⅱ様式併行期の住居は、可能性を持つものを含めても４棟のみ（いずれも田村遺跡群）、しかも、簾状文登場以前のⅡ様式古段階併行期の住居は１棟も確認されていないのである。[17] その意味で、Ⅱ様式併行期の竪穴住居３棟（うち古段階２棟）を検出した今回の北地遺跡の調査成果は、貴重である。

直前の弥生前期末に遺跡数は急増し、拡大し地域性を色濃く打ち出し新たな段階を迎えた高知平野弥生社会は急速に縮小・衰退したのか？しかし、この前期末～中期初頭から中期前半への時期には、画期は認められるものの、次の段階へと続くいくつかの遺跡を確認することができる。香南市下分遠崎遺跡[18]、高知市柳田遺跡[19]、そして北地遺跡など。ただし、これらの遺跡は、例外なく中期中葉で終焉を迎え、次の段階（中期後半）へは続かない。連続して集落の継続が認められるのは、田村遺跡群のみである。この簾状文が消える中期中葉にも一つの画期がある。

中期後半は県内各地に高地性集落が形成されるが、いずれも後期はじめまでの短期間で廃絶、後期初頭～前半には平野部に新たに集落が形成されはじめる。この時期（後期はじめ）に集落が成立し盛期を迎えるのが、下ノ坪遺跡であり、隣接する北地遺跡である。下ノ坪遺跡からはガラス玉80点が集中する高知平野最大級（８ｍ大）の住居（ST11）が確認されているし[20]、北地遺跡ST1から出土した青銅鏡（破鏡）は、青銅祭祀最終段階の高知平野の様相を示すものとして注目される。下ノ坪、北地、田村遺跡群とも後期中葉までに終焉を迎え、後期後半以降古墳時代の初めにかけて、集落は今まで開発できなかった洪積台地など、新たな場所へ一斉に進出する。

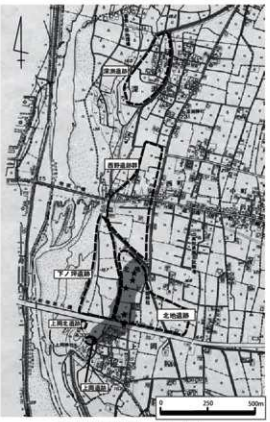
もう一つの大きな画期は、弥生時代が終わりを告げ、古墳時代に入った古式土師器Ⅰ期とⅡ期との間の画期である。古式土師器Ⅰ期からⅡ期へと続く遺跡は、高知平野周辺では、全くといっていい程見いだすことができない。絶対年代は正確ではないかもしれないが、３世紀の後半～末の段階が想定される。何らかの大きなインパクトがあったのだろうか。弥生終末期から古墳時代初頭にかけての遺跡数急増に続き、急減、これ以降高知平野ではほとんど遺跡が確認できなくなる。

それにしても、高知平野での集落の存続、廃絶が一斉に起こるいくつかの画期は、何を原因としているのであろうか。

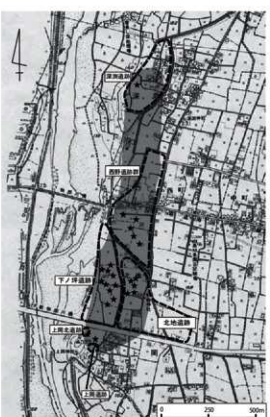


弥生時代前期末～中期初頭の集落

→

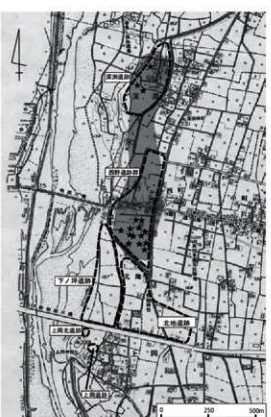


弥生時代中期前半～中葉の集落



弥生時代後期初頭～中葉の集落

→



弥生後期後半～古墳時代初頭の集落

第116図　北地遺跡周辺の弥生時代集落居住域（推定）の変遷

社会的要因、自然環境要因、様々な側面からのアプローチがされてきたようだが、決定的な決め手はまだないようである。近年の、年輪年代、放射性炭素年代など、自然科学的年代測定法の進展により、従来の年代観が大きく見直され、定着してきたかの観がある。新たな年代観を元に、過去の地球環境の変化と歴史事象との照応により、過去の人類活動と環境変動との因果関係が再整理されている。地球が温暖化した時期には安定した活動が継続、寒冷化した時期には気候の変動幅が大きく（暴風雨などの回数増加）、人類活動に影響を与えることが多いということが指摘されている。太陽の黒点観測により、太陽活動の停滞期には寒冷化が起こり、環境が大きく変化、紀元前 800 年頃のオランダの例（浸水による居住可能域の変化）、フン族の移動、縄文晩期から弥生前期にかけての大陸から日本列島への人口圧、など各地で太陽の黒点活動の停滞期・寒冷化による環境変化が引き金となった歴史上の出来事が紹介されている。[21]

もとより、環境決定論に陥ってしまう危険は戒めなければならないが、自然環境が人間活動に与える影響の大きさは考慮されなければならない。出原恵三[22]や更谷大介[23]が指摘し、遺跡の調査成果から読み取った洪水の痕跡などは、より深く注意を払われるべきであり、考古学の側からの事例の蓄積をしていく必要がある。

あらためて、北地遺跡に目を向けた時、残された課題は多い。ただ、現在までの調査事例の蓄積により、そして今回、高知平野でも極めて例の少なかった弥生時代中期初頭から中葉にかけての竪穴住居を含む集落の事例が加わったことにより、この地域での集落の生活領域の変遷をある程度辿ることができるようになった。当時の集落はどういう範囲に広がっていたのか、遺構や土器の出土地点を手掛かりに推定することで、当時の歴史的景観の復元につながる。北地遺跡という便宜的に設定された遺跡範囲ではなく、有効な集落範囲が見えてくる。

第 116 図に示した地図は、時期ごとの集落居住域の推定範囲である。星印で示したのは遺構や遺物の散布が確認された地点で、上岡山の北側に展開していた集落が、弥生時代後期には深渕地区まで範囲を拡大する。遺構密度・出土する遺物量からも人口増による集落景観の変化が読み取れる。古墳時代初頭に北へ中心が移動した集落は、その直後、廃絶する。この時期以降、北地遺跡周辺では遺物の痕跡を全く確認することができなくなる。次に、遺物の出土が確認できるのは 6 世紀後半になってからであり、北地遺跡周辺には約 250 年間の空白が生じるのである。

常に意識し続けた「田村遺跡群」との比較においても、弥生前期末以降の集落の盛衰の画期は、間違いなく高知平野の弥生集落全体が連動しており、「社会」と無関係ということはあり得なかった。

高知平野の弥生～古墳時代にかけての集団の変化を考える上でも、物部川左岸下流域遺跡群（仮称）という集落範囲の捉え方は有効性を持ち得るのではないか。下ノ坪・上岡・上岡北・北地遺跡、西野遺跡群そして深渕遺跡まで、南北長約 1.5 キロメートル、幅 200 ～ 300 m の田村遺跡群よりも狭い範囲内で、居住域の変化をダイナミックに追うことが可能になってきた。そして周辺地域の遺跡の様相と比較することで、弥生・古墳社会の変化の一端が見えてくる。

物部川下流左岸の、このエリアで調査された竪穴住居の合計は 98 棟。地域の歴史を明らかにできるのは、地道な作業の積み重ねだけである。

脚注　参考文献・引用文献

(1)　弥生土器編年には、出原恵三「土佐地域」『弥生土器の様式と編年　四国編』木耳社　2000年を参考にした。

(2)　遺構出土の剥片類は、報告されることの少ない資料である。県内の竪穴住居出土剥片類は畠中宏一によって集成されている。

畠中宏一「26. 剥片が出土する竪穴住居跡について」『田村遺跡群Ⅱ　第9分冊　総論』㈶高知県埋蔵文化財センター　2006年

また、石器全般について同報告書の器種ごとの分類を参考にしている。

小野由香・小島恵子・畠中宏一・前田光雄「Ⅷ　石器・石製品」(前出　田村遺跡群Ⅱ　第9分冊)

(3)　磨製石斧の石材・流通・製作工程などについては、各地の調査事例をもとに研究が進んでいる。

『季刊考古学111号　石器生産と流通にみる弥生文化』雄山閣　2010年

加島次郎「西部瀬戸内」(同書)には、原材から成品に至る細かい工程ごとの資料が示されている。

(4)「除陽石」の可能性を持つ弥生中期前半の資料に関しては、『儀礼と習俗の考古学』(春成秀爾著 塙書房 2007年)を参考にした。以下、「性象徴の考古学」と「男茎形の習俗」は、春成秀爾による同書所収の論考である。

「3性象徴の考古学」(1995年稿　2003年補追)では、男根をオハゼ、女陰をホトとし、オハゼ・ホトに関連する縄文・弥生期の出土資料を中心に、国内外の考古資料が集成されている。県内の事例では、中世の芳原城跡出土資料がオハゼ形木製品として紹介されている。論考中では、考古資料のみならず民俗例も含めて検討され、オハゼ・ホトの象徴性や背景にある社会との関連が、時代背景や地域性の分析を通じて示されている。「性象徴と社会」に正面から取り組まれた力作である。

「9男茎形の習俗」(1999年稿　2005年改稿)では、冒頭で1970年の池上曽根遺跡から出土した弥生時代中期はじめ(Ⅱ期)の「男茎形木製品」とそれに対するアプローチについて取りあげられ、「呪具の中で最も歴史の長い男茎形」について民俗例も含めて整理し、その意味を考えていこうとしている。民俗例が丹念に採録され、時代ごとにまとめられている。縄文伝統の中にも、そして現在の民俗例の中にも、除部を模した石製品あるいは木製品、土製品と男茎形の同様の製品が対になって、さまざまな祭祀に供されてきた例があることがわかる。

この論考中で谷口康浩の石棒と石皿が対になった例(縄文中期末～晩期)が紹介されている。(同書418ページ)谷口は「生殖行為が死や祖先をめぐる信仰・祭儀と結びついている」と指摘、「死者に祖霊の強力な力を付与して困難な死の過程を通過させ、祖先たちの世界に再統合するというような信仰が背景になっていた。」と考えている。

また、弥生時代にも池上曽根遺跡の例など様々な性儀礼があることが紹介されている。高知県内の弥生時代の竪穴住居発掘調査件数は、2002年の段階で242棟(出原恵三集成・この時点で未報告の田村遺跡群2次調査分を除く)、田村遺跡群の2次調査で411棟、さらに近年介良野遺跡、西野々遺跡、伏原遺跡、西分増井遺跡、西野遺跡群(55棟)、祈年遺跡、東野土居遺跡(80棟以上)など年々調査例が増加、すでに800棟を大きく超え、近い将来には1000棟に達する勢いである。それでも、竪穴住居から性象徴の儀礼を想起させる資料の報告例はない。弥生時代中期前半のST10出土資料は非常に珍しい例には違いない。

『介良野遺跡』㈶高知県埋蔵文化財センター　2007年
『西野々遺跡Ⅰ』㈶高知県埋蔵文化財センター　2008年
『伏原遺跡Ⅰ』・『伏原遺跡Ⅱ』㈶高知県埋蔵文化財センター　2010年
『西分増井遺跡Ⅱ』㈶高知県埋蔵文化財センター　2004年
『東野土居遺跡　記者発表及び現地説明会資料』㈶高知県埋蔵文化財センター　2010年

(5)　出原恵三「南四国の竪穴住居」(『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会2002年)その後、Ⅱ様式併行期の住居は、田村遺跡群第2次調査で合計3棟報告されているが、3棟はいずれもⅡ－2期の竪穴住居で、「可能性がある」住居だと報告されており、確実ではない。北地遺跡のST3とST11はⅡ－1期であり、当該期の住居は県内で初めての検出例となる。

(6)　廣田典夫「原始編　第二章弥生時代」『野市町史　上巻』野市町史編纂委員会　1992年

(7)　出原恵三「第Ⅴ章考察1.下ノ坪遺跡の弥生後期土器と集落」『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会　1998年

(8)　更谷大介『北地遺跡試掘調査概要報告書』野市町教育委員会　2003年

(9)　出原恵三「第Ⅲ章考察2.青銅器」『西分増井遺跡Ⅱ』㈶高知県埋蔵文化財センター　2004年

(10)　以下、古代の遺物については、池澤俊幸氏（高知県埋蔵文化財センター）の御教示を受けた。

(11)　墨書土器の文字解読については、古市晃氏（神戸大学）に赤外線写真と遺物を実見して頂き、御教示を受けた。また、土器の赤外線写真撮影の際には、岡本桂典氏（高知県歴史民俗資料館）、池澤俊幸氏・島内洋二氏（高知県埋蔵文化財センター）にお世話になった。

(12)　『下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会　1998年
『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会　1998年
『下ノ坪遺跡Ⅲ』野市町教育委員会　1998年

(12)－2　森公章「律令体制下の土佐国」『高知県の歴史』山川出版社　2001年

(13)　『野市町　北地遺跡　記者発表・現地説明会資料』野市町教育委員会　2003年

(14)　『坂本遺跡』㈶高知県埋蔵文化財センター　2008年

(15)　池澤俊幸氏の御教示による。

⒃ 出原恵三『南国土佐から問う弥生時代像　田村遺跡』新泉社　2009 年
『田村遺跡群Ⅱ　第 1 分冊～第 8 分冊』㈶高知県埋蔵文化財センター　2004 年
『田村遺跡群Ⅱ　第 9 分冊』㈶高知県埋蔵文化財センター　2006 年

⒄ 弥生時代中期初頭～前半であるⅡ期の竪穴住居については「可能性を持つ」ものも含めて報告されており、明確に捉えられるものはほとんどない。『田村遺跡群Ⅱ　第 9 分冊』の中にも、Ⅱ期の竪穴住居の可能性のある遺構の報告もある一方で「Ⅱ期の遺構はなかった」という記述もある。当該期の遺構が極めて少ないことは間違いない。

⒅ 『下分遠崎遺跡発掘調査報告書(1)』香我美町教育委員会　1989 年
『下分遠崎遺跡』㈶高知県埋蔵文化財センター　1993 年
『下分遠崎遺跡Ⅳ』香南市文化財センター　2010 年

⒆ 『柳田遺跡』高知市教育委員会　1994 年

⒇ 同 ⑿

㉑ 今村峯雄・藤尾慎一郎「③炭素 14 の記録から見た自然環境変動－弥生文化成立期－」『弥生時代の考古学 2　弥生文化誕生』同成社　2009 年

㉒ 同 (7)

㉓ 同 (8)

写　真　図　版

上空から・2005年撮影

図版 2　北地遺跡　調査前の景観と調査風景

A区調査前（東から）

D区試掘調査時の景観
（西から）

C区調査前（北から）

B区南端の調査　調査風景（南から）

太型蛤刃石斧（320）出土状況

磨製石包丁（415）出土状況

試掘調査で確認された溝状遺構と石包丁（試掘TR10）

石列セクション

C区北端　検出された石列と土器棺墓（土器 9・10）

C区北半の遺構（北から）

SK2　遺物出土状況

SK11　遺物出土状況（東から）

弥生土器・甕（250）

弥生土器・壺（249）

SK11・12　遺構完掘（西から）

図版 6　D区の景観　遺構完掘状況

D区遺構完掘状況
（東から）

SB2・SB3
（東から）

D区遺構完掘状況（西から）

C区　ST1

ST1　バンクセクション

ST1　検出状況

青銅鏡（破鏡）出土状況

C区　ST1　遺物出土状況

遺跡から西北方向をのぞむ

南からみたC区と周辺の集落景観

C区　弥生土器出土状況

弥生土器出土状況（363）
P429

C区　P429　弥生土器（313）出土状況と周辺の遺構

SD23

SD-H

SB4

SB4

SK70

SK70　遺物出土状況

SK70　遺物出土状況

SK50完掘状況　　SK50

ST11

ST9

A区西端　調査風景
検出遺構はST9・11

ST11　遺物出土状況（P425）

ST9　完掘

壺　228
（弥生時代中期）

ST11（P425）出土遺物

ST9・11と周辺遺構

ST10　底面遺構検出状況

ST10　完掘

B区遺構完掘状況（北から）

B区南端遺構完掘状況（北から）

B区遺構完掘（北から）

C区　ST8　完掘　　手前のピットはSB4

C区　ST3とST2（北から）
（手前）

ST7

ST7と検出された石列

遺物出土状況

C区遺構完掘状況（北から）

1
青銅鏡

20

3

4

21

6
7
8
9

14

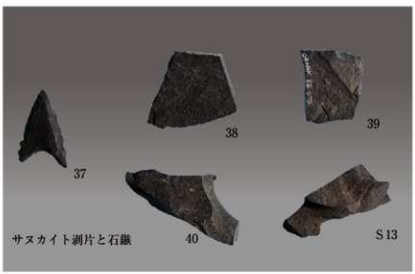
5

17

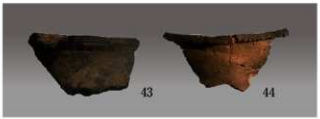
22

23

24



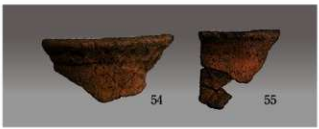
サヌカイト剥片と石鏃

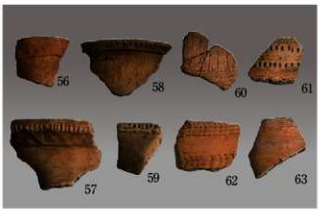

43
44

48

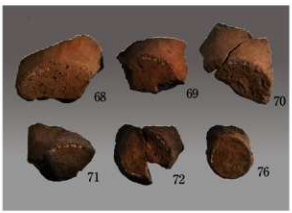
46
45
47
50
49

51


54
55


56
58
60
61
57
59
62
63

64


68
69
70
71
72
76

75

77

82

83

85
88
92

86

84

90

91

93

97

99

106

107

108

94

100

111

103

124

117

101

115

125

114

110

112

130

133

126

134
136
137
138

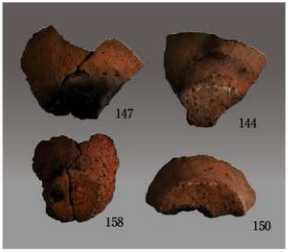
140

141

143

146

145


147
144
158
150

163

161

162

164

165

163

132

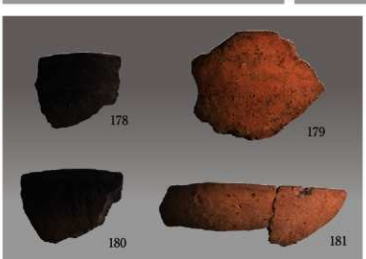
139

174

176

175

177


178
179
180
181

183

184

185

186

188

189

190

192

193

194

195

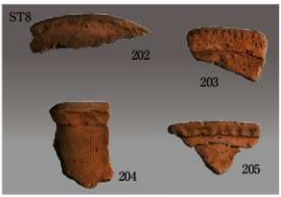
196

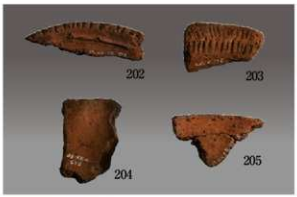
197

198

200

201


ST8
202
203
204
205


202
203
204
205

206

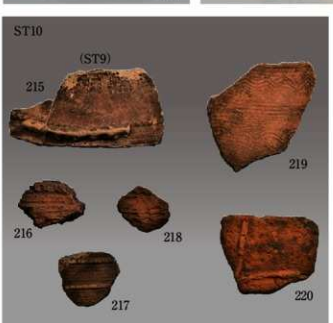
207

208

小型鉢
209

甕
210

210 底面


ST10
(ST9)
215
219
216
218
217
220

221

※215のみST9

233

223

211

226

227

235

236

242

228

229

232

230

231

246

253

248

247

254

249

251

250

258

259

269

266　264

271

265

270

268

272

273

274

275

276

278

277

285
285
286

287

290

293

295

284

245

296

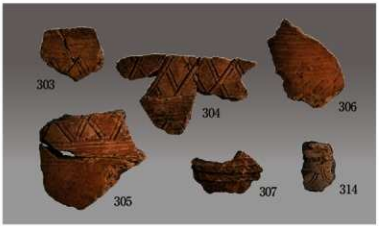
300
301

299

298

297

302


303
304
306
305
307
314

309

313

311
310
308
312

316

315

320

317

325

318

332

333

335

336

337

338

339

348

347

353

352

355

363

359

361

360

375

374

364

365

379

366

395

396

404

399

405

411

380

388

390

412

413 414 415 416 417

420

426

418 419

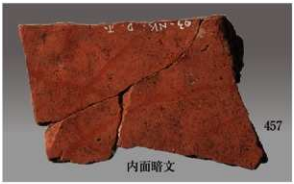
422

424

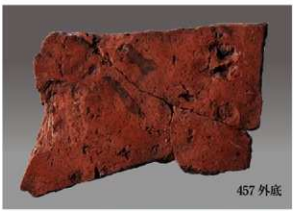
428

421

447


457
内面暗文

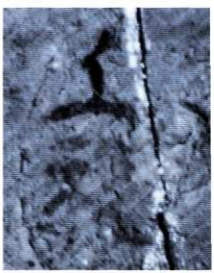
477 底面


457 外底

447

墨書拡大

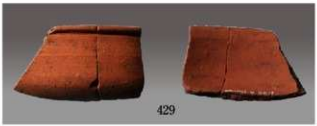
457


447

赤外線写真

457

440


429

441

458

432
430
431
435
436
437

434

446

445
439

459
454
460

462

453

報 告 書 抄 録

ふりがな	きた じ い せき
書名	北地遺跡
副書名	北地南線農道整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高知県香南市発掘調査報告書
シリーズ番号	第5集
編著者名	松村信博・宮地啓介
編集機関	高知県香南市文化財センター
所在地	〒781-5453　高知県香南市香我美町山北1553-1　TEL.0887-54-2296
発行年月日	西暦　2011年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きた じ い せき 北地遺跡	こうちけんこうなんし 高知県香南市 のいちょうしもい 野市町下井 555－1番地他	39211	200025	33度 33分 41秒	133度 41分 10秒	試掘調査 H.15.4.21 ～5.30 本発掘調査 H.15.7.1 ～9.30	100 1,000	農道整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北地遺跡	集落遺跡 古代官衙関連集落	弥生時代 ・前期末～中期中葉 ・後期前半 古代 (8～10世紀) 中世 (12～13世紀)	竪穴住居 土坑 土器棺墓 溝 ピット 掘立柱建物	青銅鏡（破鏡） 弥生土器 石器類（磨製石鏃・石包丁・磨製石斧・剥器・敲石類・除陽石他） 土師器 須恵器 瓦質土器（大和型） 貿易陶磁（白磁）	・弥生時代中期初頭～中葉の竪穴住居と土坑確認 ・弥生中期前半住居出土の除陽石（祭祀関連遺物） ・弥生時代後期前半ST1出土青銅鏡（漢鏡・破鏡） ・磨製石鏃、石包丁、磨製石斧未製品など弥生石器類 ・８世紀の墨書土器２点

高知県香南市発掘調査報告書　第５集

北　地　遺　跡

－北地南線農道整備事業に伴う発掘調査報告書－

2011 年 3 月

発行　高知県香南市教育委員会
香南市文化財センター
〒781-5453　高知県香南市香我美町山北 1553-1
電話　0887-54-2296

印刷　株式会社　飛　鳥